

イナズマイレブン ～熱  
き太陽の導き～

チェリブロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

サッカーの世界大会、FFIで円堂守率いるイナズマジャパンが優勝。その頃小学生だった者は、皆がその姿に憧れた。自分もサッカーをしたい、あのように活躍したいと練習を始め、日本中に中学サッカーブームが巻き起こった。

それから時は流れ、雷門中で円堂守の間近でサッカーを見て、共に戦ってきた1年。その後に入部し、世界大会で共に戦った宇都宮虎丸も卒業し、世代は交代する。

しかし、世代が交代してもあの頃に勝るとも劣らない熱いサッカーを繰り広げ、サッカー少年達はFFを目指す。そして、舞台は大阪。そこにいる一人の少年を中心に、新たなサッカー旋風が・・・

「誰もいないんだけど!？」

・・・巻き起こるかもしれない？

# 目次

動き始める物語 | 1

狐面の少女とせつかつち関西人 | 11

折れた翼と気楽な残念系男子 | 22

絶望的なまでに勧誘に向かない男

32

始まりの戦士達 | 51

優勝（ロマン）を掴み取るために

61

捨てた夢をもう一度 | 71

折れた翼、再生の時 | 86

個性溢れる自己紹介（前編） | 101

個性溢れる自己紹介（後編） | 110

必殺技、完成への道 | 120

初試合！輪成中学！① | 130

初試合！輪成中学！② | 153

試合後の反省会 | 168

ポジションの意味 | 178

フットボールフロンティアルール

188

v s 双輝中学① | 199

v s 双輝中学② | 210

v s 双輝中学③ | 220

予想外の奥の手 | 234

より強くなるため | 255

そこに山があったから | 264

荒央中学降臨!!	—	279	まだ見ぬ仲間達	—	512
完成!ナニワ地下修練場改!!	—	303	ナニワ修練所 ver3.0	—	527
ハード・トレーニング	—	318	決起集会	—	547
花の女子会 団子の男子会	—	329	V S 準決勝 双輝中学 前編	—	561
嵐の前の静けさ	—	348	V S 準決勝 双輝中学 中盤	—	578
V S 非宋中学 前編	—	362	V S 準決勝 双輝中学 終盤	—	594
V S 非宋中学 後編	—	378			
情報を制する者は・・・	—	399			
V S 鉢美中学 前編	—	415			
V S 鉢美中学 後編	—	448			
主将のあるべき姿	—	471			
V S 杜来中学 前編	—	482			
V S 杜来中学 後編	—	497			



## 動き始める物語

サッカー、細かいルールは知らないという者はいるだろうが、まったく知らないという者は少ないだろう。誰しもが一度は学校の授業でやったことはある。また、少なくとも見たことぐらいはあるだろう。

しかし、この世界のサッカーは少し違う。アニメやゲームでしか見ることのない必殺技、これを使うことができるのだ。いわゆる超次元サッカーと呼ばれるものであり、どれだけ技術が優れていても、この世界で戦うには必殺技が必要不可欠。これは、そんな超次元サッカーのあり得たかもしれない物語である。

城翔<sup>じょうしゅう</sup>中学。大阪にある中学校だ。偏差値が高いわけでもなく、目立つような実績を残したような部活もない、ごく普通の中学校である。

「やっとな授業終わったなー。これから何する?」

「俺の家に寄ってかへんか? 最近新しいゲーム買ったんや」

「マジで!?!じゃあ一緒にやろうぜ!!」

「あー、すまんけど俺はパスするわ。今日部活あんねん」

「なら俺が代わりに行くぜ! それ面白って噂だからな!」

何気ない日常的な会話が、そこから中から聞こえてくる。学生からすれば楽しい放課後の時間、これから帰って何をしようかと友人と話をしたり、部活動に力を入れる者もある。

「やった!!放課後だあ!!サツカーをやるぞおおおお!!」

そんな楽しげな時間に、どこからか場違いな大声が響いてきた。まだ学校に残っていた生徒は何事かと驚いた。

「な、なに!?!不審者でも入ってきたの!?!」

掃除しながら廊下で話していた数人の内の一人がおろおろと狼狽える。しかし、残りの掃除していたメンバーはすぐに落ち着いた。

「ちやうちやう。いつものアレやろ?」

「ふえ?・・・ああ、あの子か・・・びっくりしたあ・・・」

近くのほうきを持って掃除をしていた少年が、冷静に指摘する。アレと聞いて慌てて



いた女の子はようやく落ち着いた。

「たしか一年前もサッカー部を作るって張り切ってたよね。……全然集まっていけど」

先程ごく普通の中学校だと言ったが、一つだけ他とは違う珍しいところがあった。今時には珍しく、最近までサッカー部が存在していなかったのだ。イナズマジャパンが世界を制覇するなり、中学サッカーの需要は上昇。それためこの中学校にも、サッカー部が創設された。それにも関わらず、この学校にはサッカー部がなかったのだ。だが、それも一年前までの話。ようやくこの中学校にもサッカー部ができたのだ。

「俺はああいうバカっぽい嫌いじゃないけどな。……なんだっけ？ たしか、名前は……」  
「えーつとな、赤城太陽やな。去年同じクラスやったけど、名前からして熱いやつや。その熱さと同じくらいアホでもあるけどな！」

それを聞いて、掃除をしていたメンバーはいっせいに吹き出す。そして、その噂の少年。アホ呼ばわりされた赤城太陽はというと……

「……おおい!! 誰もいない!？」

部室で愕然とした表情を作っていた。いつもならば、自分含めて二人いる。それなの

に今日はそのもう一人が——

「・・・うーん、むにやむにや」

「と思つたらいたあ!!斧街先輩!起きてくださいよ!練習してフットボールフロンティアに出しましょうよ!!」

誰もいないかと思つていたら、机に顔を伏せて爆睡していた。教科書を壁のように積み上げているせいで、角度的に見えなかつたようだ。・・・といひかなぜ枕を学校に持つてきているのだ。怒られるぞ。

「ううん・・・おつ、やつほー。今日も早いねえ」

手入れをしていないのか、ボサボサの長い青髪を揺らしながら顔を上げる。彼女の名は斧街雨海、これでも一応サッカー部の部員なのだが・・・なかなか練習をしてくれないうサボり魔だ。

「やつほーじゃないですよ!?!なんで寝てるんですか!?!」

「だって暇だったし」

終学活が終わつてすぐ来たので、そんなに待たせていないと思うのだが・・・まあ起きてくれたのでこれでよしとする。

「それじゃあ練習頑張れー。おやすみー」

「あつ、はいお疲れさ——じゃないですよ!?!先輩も練習するんですよ!?!」

また寝ようとしたのを見て、むりやり揺さぶって起こした。まだ寝ぼけているのか、眠たげな目でポリポリと頭を掻いている。

「うーん。．．いやー、練習はやだねえ。というより、フットボールフロンティア出場だなんて無謀だよ」

「なっ、なんでそんなこと言うんですか!!」

「起きたと思つたら、次はマイナス発言。赤城はその発言を真つ向から否定する。」

「たしかに俺達は下手くそかもしれないけど．．．でも！努力すれば俺達だつて!! 円堂さんみたいに!!」

努力すれば、夢は叶う。よく言われることだが、実際は絶対に叶うとは限らない。だからほとんどの者は、だいたい途中でやめてしまう。しかし、夢を叶えているものは必ず努力している。諦めずにと努力をしていけば、それがどこかで思わぬ力になる時がある。

有名な例を挙げるとするならば、円堂守だろう。才能もあつたのかもしれないが、それだけではない。彼だつて最初から強かつたわけではない。なんなら一番最初の試合はボコボコにされていたのは有名な話だ。

その試合は相手の棄権という形で勝利したことになったが、普通なら心が折れるような内容の試合だった。それでも、そこから這い上がってきた。何度バカにされても、負

けても、技を破られても、諦めずに努力を続けた。そうして最終的には、世界大会で優勝するに至ったのだ。単純な才能だけが勝負を決めない、その事を証明したのだ。

「俺達も努力すれば、絶対に夢は叶えら——」

「いや、実力以前に人数揃ってないじゃん。それとも二人で目指すのかい?」

「うぐっ……」

冷静に痛いところを突かれてしまった。そう、このチームはそもそも十一人揃っていない。メンバーは自分とサボマイスター先輩しかいない。実力以前の問題だった。

「いや、でも……これから集まりますって!」

「そのセリフ聞いてかれこれ一年は経つねえ?……そもそも、この地区は結構強豪が多いから、やるだけムダって考えて入ってこないと思うよ」

「そ、そこは反骨精神の強いやつが……」

「それなら弱小のサッカー部に行くんじゃない?わざわざサッカー部がないとこに入学しないと思うけどねえ」

たしかにサッカーをしたいなら、サッカー部がないところに入学しないだろう。上を目指す者なら強豪に、単純にサッカーをやりたいという者なら、強くなくてもとりあえずサッカー部があるところに入学するだろう。あえてないところに入って、一から作るうなんてことを考える者はなかなかいない。そう考える者はよっぽどの挑戦者か、生粋

のドMか……

「い、いや……わかりませんよ？もしかしたら俺みたいに……」

「下調べもせずに入學した人がいるかもしれないって？あんたの他にもいたら傑作だねえ」

「グハア!!？」

……調べてこなかったかの三択だ。全て反論の余地もなく、的確に指摘されて綺麗にKOされた。返す言葉もなく、しばらく燃え尽きたように真っ白になる。

「おい、生きてるか？……あらら、言いすぎたかねえ？」

それから数分、なんとか燃え尽きた状態から回復し、フラフラになりながらも立ち上がる。

「……十一人集まったら、ちゃんと練習にしてくださいますか？」

「んー？集まったらいいよ。それじゃあ集まるまでは寝ていいってことだもんねえ」

「なんとということでしょう。合法的にサボる口実を与えてしまった」

急いで撤回しようとするも、さすがはサボマイスター先輩、すでに眠りに落ちていた。がーがーイビキを掻くその姿には、色気のいの字もない。まあ部員を集めたら練習してくれるということなので、おとなしく探しに行くことになった。

「サッカーやりませんかー!!今なら無料でお好きなポジション!しかもレギュラーになりますよー!!」

というわけで、学校の屋上に上がってひたすら叫ぶ。これが彼の勧誘方法だ。だが、これは勧誘とは呼べない。ただの奇行である。部員が入ってこないのも納得だ。

「・・・な、なんやあれ?」

「屋上で誰か叫んでる・・・関わらないようにしましょう・・・」

そんな奇行を見て、まだ入学したばかりで慣れていない一年生は何も見なかったことにして歩くスピードを上げた。制服を着ていなければ、確実に通報案件だ。

「先輩、あれなんすか?」

「あれか?一年前にできたサッカー部の勧誘だな。そうだ、お前もやってみたらどうだ?モテるかもよ?」

そんな中、後輩と帰っていた男グループの先輩が、入ってみたらどうだと茶化している。

「アホか、この辺りけっこうな魔境やぞ。大阪三強と戦うとか考えられんわ。一年に変なこと吹き込むなや」

冗談混じりに適当なことを言ったら、同級生に真顔でやめるように言われた。それもそのはず、この辺りには大阪三強と呼ばれる強豪がいる。

それぞれが各々の役割を果たし、毎年安定した強さを誇る古くからの強豪、せいざん静山中学。ここ数年で強くなり、その爆発力は計り知れない。天城真矢と千刃梨遠のコンビが特に光る、そうぎ双輝中学。

タレント揃いの強豪。特に今年は主力が残っており、去年のフットボールフロンティアを経験したメンバーが多くいる、こうちゅう荒央中学。

「そんなことわかってるって、ちよつとふざけたんだよ・・・それに、たとえ三強に勝ったとしても全国大会があるし、本気で優勝目指すなら休む暇ないだろうな」

たとえそれらに勝ったとしても、まだ終わりではない。立ち塞がるのは全国の壁。むしろそこからが本番なのだ。

忍者のごとく素早い動きで相手を攪乱し、わずかな隙を逃さない、戦国伊賀島中学。いったんペースを握られると、その荒波はもう誰にも止めることはできない、大海原中学。

鉄壁の守備を誇り、相手に付け入る隙を与えない難攻不落の城塞、千羽山中学。

荒れ狂う吹雪のごとく、フィールドを駆け抜けるスピード集団、白恋中学。

元絶対王者、そして現最強の挑戦者。狙うは王者奪還、帝国学園。

そして・・・もはやその名を知らぬものはいない。伝説の絶対王者、雷門中学。

軽く例を挙げてもこれだけあるのだ。三強でさえそれらを突破するのは容易ではないのに、素人が全国を勝ち上がるなど、夢のまた夢だ。

「そ、そうなんですか・・・さすがにやめといた方がいいですね・・・」

「せやせや、必死のパッチでやっても厳しいで・・・まあ、応援ぐらいはしたつてもええかもな」

いくらむちやくちやな挑戦とはいえ、必死で頑張っている姿は好感が持てる。応援するぐらいはいいだろうと、手を振ってあげる。それを見つけた赤城はとうとう・・・

「ふふふ、俺に手を振っている。つまり俺は期待されているということ！そしてこれは未来のサッカーを担うのは俺だというメッセージだな！」

期待というより、どっちかといえば・・・同情である。もちろん本人はそんなこと知るよしもなく、勝手に自分の将来像を思い描いていた。

もちろんこんな雑な方法で部員が入ってくるはずもなく、結局その日もサッカー部に入りたいたいという者はゼロだった。

「・・・ほんとに大丈夫、だよな？」

おおかたの生徒が帰ったあと、一人だけになった赤城は不安そうに呟くのだった。



## 狐面の少女とせっかち関西人

二年二組の教室、そこで赤城で悩んでいた。サッカー部ができて一年経過したにも関わらず、部員はたった二人しかいないこの現状。しかも二人のうち一人は三年で、このままでは卒業してしまい、一人だけになってしまう。さすがに危機感を感じ始めていた。

「あー、授業終わって部室行ったら部員が集まってるのかないかな〜?」

あり得るわけがない独り言を呟き、深いため息を吐く。別にサボっているわけではない。ちゃんと毎日欠かさず勧誘活動をしているのに……どうして誰も来ないのか。

「……もしかして声か小さくて聞こえてないのか? もつと大声でアピールしないとダメなのかな?」

もはやふざけているようにしか見えないが、念のために言っておこう。本人は至って真剣である。

「いや、いつそのこと拡声器でも借りてくるべきか? でもそんなものどこに……」

「もう! 辛気くさい顔しちゃって、そんなんじやあ幸せが逃げちゃうヨ!」

そんなことを考えていると、誰かが後ろから声をかけてくる。振り向くと、頭に狐の

お面を着け、八重歯をキラリと輝かせた、小柄な少女がいた。

「んん？お前は・・・三日月だったよな？」

今年から同じクラスになった、三日月帝瑠。その人懐っこい笑みからして、人懐っこい印象を感じた。

「うん、うちは三日月帝瑠だよ！それで、何を悩んでるんヨ？」

目の前に移動し、ニコニコとした笑顔で相談に乗ってくれる。口調が少し気になるが、そんな細かいことはいいだろう。それよりも今はサッカー部のことだ。

「実は・・・サッカー部に誰も入ってくれないんだよ・・・」

「そっかあ、それは大へ・・・え？この学校にサッカー部あったの？」

三日月の記憶では、この学校にサッカー部はなかったはず。実際活動しているところを一度も見なかったことなかったの、思わず首を傾げた。

「何言ってるんだ！俺が毎日屋上から勧誘してるじゃないか！」

「ええ!!放課後のやつキミだったの!!というかあれサッカー部の勧誘だったの!!・・・てつきり応援団の練習か、新卒の儀式か何かかと思ってたんヨ・・・」

「ば、ばかな!!俺の完璧な勧誘が訳のわからん儀式だと・・・」

応援団ならまだしも、学校の屋上に上がり、ひたすら叫ぶ謎の儀式だったとしたら迷惑きわまりない。ご近所さんからの苦情待ったなしである。・・・とはいえ、そのよう

に勘違いされても仕方のないところはある。

「俺が・・・間違っていたのか・・・」

まるでこの世の終わりかといわんばかりに暗く沈む。そんな姿を見て、三日月が慌ててフォローを入れる。

「ま、まあまあ！原因がわかったんだしこれからこれから！なんなら私もサッカーをやってたし、一緒に入って手伝うんヨ！」

「そっかー、三日月もサッカーやってたのかあ・・・」

サッカー部に入ってください!!!」

これがジャパニーズ土下座。頭を地面につけ、綺麗なフォームの土下座で必死に頼み込む。

「いやそう言ったんヨ!？」

「本当に入ってくれるのか!? やったああああ!! 女神が舞い降りたぞおおおお!!」

大声で叫び、手を握って上下にぶんぶん動かす。ホントにそんなに喜ぶかというぐらいい喜んでいる。

もちろん喜んでもらえるのは嬉しいのだが、周りから注目を集めてしまって、ものす

ごく恥ずかしい。

「な、なんだ？あれ？」

「赤城君と三日月ちゃんだよね・・・？」

「これはスクープだッ!!メモしておかなければ!!」

「ちよつと!?!一回止めて!ストップ!!ストップッ!!」

このままではあることないことを書かれてしまう。尾ヒレ、加えて背ヒレも付けられ、明日の朝に誤った情報が全クラスに広まってしまう。それだけは阻止しなければと時間はかかりつつ、なんとか赤城を止め、クラスの誤解を解くこともできた。・・・一部は懐疑の目で見ていたが、気にしてはいけない。

そんな朝の一騒動から時間は過ぎ、学生ならみんな大好きな時間。そう、お昼休みとなった。というわけで、赤城は三日月と共にサッカー部のことについて話しながら、購買で買い物を買ませた。

「しまった・・・買いきすぎた・・・」

「だからやめておいた方がいいって言ったんヨ？」

あるある・・・なのかはわからないが、購買に行くとき、どれも美味しそうに見えてついつい多く買ってしまおう。近くのベンチに座って食べていたが、買いきりたせいでいくつか食べきれなかった。とはいえ今すぐに食べきらなければいけないというルールはない。家に帰ってからのんびり食べればいいので、教室に持って帰ろうとしたその時だった。

「あああああああ!!!家に財布忘れてしまったあああああ!!!」

やたらデカい声が購買の方から聞こえてくる。あまりの大声に思わず二人は耳を塞いだ。

「誰だ・・・?こんなところで大声出すのはよくないよな。場所を考えた方がいいぞ」

「赤城君、人のこと言えないヨ」

なぜか三日月につっこまれてしまった。どういうことだと頭をかしげるのを見て、これはダメだと三日月は深くため息を吐いた。

「ワイの・・・ワイの飯が・・・二つしかないワイの幸せの時間が無惨に消えてしもたで・・・」  
「(絶対もう一つは体育の時間なんヨ・・・)」

見た目で判断しただろという意見はさておき、名札の色を見るに同学年だろう。少し大袈裟な気もするが、育ち盛りの中学生が、昼食縛りをするのはなかなかキツイ。・・・次第に気の毒に思えてきた。

「・・・なあ、ちよつといいかな？」

「なんや？すまんけどワイはいま機嫌悪いねん。話しかけん方がええで」

わかつてはいたが、かなり機嫌が悪そうだ。それに見た目とコテコテの関西弁が拍車をかけ、すごくガラが悪く見える。それでも赤城は用件を伝えた。

「いや、さつきパン買ったけど余ったからよかつたら——」

「マジかいな!?ほな遠慮なくもらうで!!」

こちらが最後まで言い切る前にパンを奪い取り、ものすごい勢いで食べ進める。

「す、すごい食べっぷりだね・・・」

よつぽどお腹が空いていたのか、その食べっぷりは気持ちが悪かった。そして一分と前から、三つのパンをすべて食べきった。

「ごつそうさん。いやー、お前のおかげで助かったわ!危うく午後の授業で死ぬところ

やったで!」

「いやいや、そんな大袈裟な——」

「メシを嘗めとつたらアカンで!ちゃんと食わんかつたらぶつ倒れてまうわ!・・・せや!なんか手伝えることないか?」

こつちの話の聞き終わる前に向こうが話し始める。どうにもせつかちなようだ。しかし急に手伝えることと言われても・・・と、そこで閃いた。

「・・・そうだ！だったらサッカー部に入ってくれないかな！人数が足りなくて困ってるんだ！」

せっかく恩を返したいというのだから、ここはサッカー部に入ってもらおうと交渉を試みる。

「サッカー？うーん・・・すまん、ワイは野球派なんや。野球おもしろいで。特に京阪トラーズの選手はみんなカッコええで！」

だが、当の本人は野球派らしく、残念ながらサッカーには興味がないようだ。

「そっかー、俺は野球の方はあんまり詳しくないからなあ・・・ごめん」

「いやいやこつちこそパンをもちろたのにすまん！この借りはまた別の機会に返すことにするわ！」

さっきの機嫌の悪さはどこへやら、笑顔で手を振りそのまま走って行ってしまった。

「なんだか嵐みたいだなだね」

たしかになんというか、豪快な人だった。そしてその後ろ姿が見えなくなったところで、赤城が思い出したかのような声をあげる。

「あつ、そういえば名前聞いてなかった・・・」

気づいた頃にはもう遅く、もうどこにも姿はない。まあ別に無理してまで聞く必要はないし、同じ学校かつ、同じ学年なのだからいずれまた会うだろうとその日は教室に

戻っていった。

「くかー……くかー……」

「斧街先輩！起きてください!!新入部員が来ましたから!!」

放課後、新たに加わってくれた三日月の紹介をするために部室まで来たのだが……案の定眠っていた。

「話は聞いてたけど本当に寝てるんだね……」

嘘だと思ってきたのか、本当に眠っている斧街の姿を見て、三日月は呆れていた。しばらく攻防が続き、ようやく目を覚ました。

「うーん、おはよー……ん？増えてるねえ。もしかして新入部員？」

目を擦りながら三日月の方に視線を向ける。

「はい！うちは三日月帝瑠です！よろしくお願います！」

「おー、礼儀正しいねえ。あたいは斧街雨海、よろしく頼むよ」

自己紹介を終えたところで、また斧街は眠ろうと顔を伏せた。それを赤城が起こそうとするいつものやり取り……と同時に――



「おう！邪魔すんで！」

——サッカー部の扉が勢いよく開けられた。

「うお?!なに!?!」

「アカンなあ、そこは邪魔すんねやったら帰ってって言わな。こつちもボケられへんで」  
　　いったいそれは何の決まりなのだどツツコミたくなつたが、いちいちそんなことをしてはキリがない。それよりも……いったい何をしに来たのか、そつち方が気になつた。

「ええつと……何しに来たんヨ?」

赤城の心の声を代返するかのように、三日月が質問する。そして、その質問がきた瞬間、それを待っていたと言わんばかりに男はニヤリと笑つてみせた。

「入部希望や!サッカー部志望、淀屋マサキ言います!これからよろしゆうたのんますで!」

「え……ええええええええ!?!」

遡ること数時間前、お腹が膨れた彼は笑顔で教室まで戻っていった。

「ねえ、マサキ君。機嫌いいけど何かあったの？」

淀屋マサキ。生まれも育ちも大阪、まさしく生粋の大阪人だ。趣味は地元のプロ野球チーム、京阪トラーズの応援をすること。サッカーへの興味は微塵もない。そんな彼に、クラスメイトの女子が話しかける。

「おう！なんやサッカー部のやつが空腹のワイにパンを恵んでくれたんや！あいつは絶対ええやつやで」

赤城が淀屋の名前を聞いてなかったことに気づいたのと同様に、彼もまた赤城の名前を聞いてなかったことに気づく。まあ同学年なら会うことは多いだろうと気にしないでいた。

「ふーん、サッカー部かあ．．．えへへ、憧れちゃうなあ」

「．．．なんやて？」

憧れる。女の子がニヤケ気味に発したその言葉を聞いた瞬間、彼の目付きが変わった。

「だって、豪炎寺君とか風丸君とかみんなカッコいいもん！憧れちゃうのは当たり前だよー」

「なん．．．やと．．．ッ!!」

その時、彼の心は強い覚悟で満たされた。もつとも、今挙げられた選手がイケメンであるという事実を彼は知らない。

「まあ色々あつたんや！何はともあれこれからは仲間やで！」

「ああ、もちろん!!よろしく!!」

そんな事情を知らない赤城は素直に喜ぶ。もつとも理由を知っていたとしても、人数が人数なので素直に喜んでいただろう。

「赤城君よかつたね！サッカー部仲間が増えたんヨ！」

同じく部員が増えるとピョンピョン跳ね回って喜ぶ三日月。対して眠ろうとしていた斧街はというと、目を丸くして驚いていた。

「まさか一年がかりで一人しかスカウトできなかつたのが一日で二人もスカウトしてくるなんて・・・明日は傘を持っていった方がいいかねえ」

「何が言いたいんですか!?!」

この日だけで部員が二人増える。少しずつではあるが物語は動き始めていた。

## 折れた翼と気楽な残念系男子

スポーツには、怪我がつきものだ。油断から起こるミス、過度な練習、相手との接触事故など、思わぬところで怪我をしてしまう。

怪我の度合いにもよるが、酷いものだど怪我のせいで、続けることを断念せざるを得なくなったり、回復したとしても以前のように動けず、それで挫折してしまう者もいる。

だが、その逆境を乗り越えることができれば・・・その者は、より上の領域に立つことかできるだろう。

城翔中学のクラスは、一学年につき四クラスある。その中で一緒にいる時間が多いのは、当然同じクラスにいる者だ。つまり二組に所属している赤城は、二年の間は二組の者と長く付き合うことになる。

しかし、体育の時間は二クラス合同で授業が行われる。そのため赤城が自分のクラス

メイト以外で長く一緒に行動するのは、一組の人達である。

「……うむむむ」

現在は体育の授業中。この日の体育は体力測定であり、種目は50m走とソフトボール投げだ。

「なんや、他のやつとの記録がそんなに気になるんかいな？」

一人で難しげに唸っていると、同じクラスの友人が声をかけてくる。たしかに記録は気になるが、友人が思っている理由とは違う。

「いや、他のクラスに運動できそうなやつがいたらスカウトしようと思ってたんだよ」

「あー、なるほどなあ。それで足の速いやつをスカウトするんか」

先に二組がソフトボール投げをしている間に、一組が50m走のタイムを測る。その様子を見ていたのだが……今のところこれといった人は見つからない。

もちろんまったくいないというわけではないのだが、そういった人はすでに他の部活に入っているため、参加してくれそうにない。

「……うーん、やっぱり他のクラスの記録も見たいよなあ……」

三組と四組にも友人はいる。なんなら最近会った淀屋もいる。その辺りから話を聞いて、そつちに良さそうな人がいたら交渉してみようかとも考え始めた。

「うむむ……ん？なあなあ、あいつのこと知ってる？」

ふと、赤城が指を差す。その先にいたのは、中学生とは思えないほどの筋肉を持つ、大柄な男。便利な日本語のフィルタを解除して言うと、場違いなマツチヨマンがいた。

「ああ、黒鉄のことかいな。．．．けど、あいつはそんな速ないで?」

見たところ、決して足が速いというわけではなさそうだ。いや、むしろ遅い方に入るだろう。赤城の友人は、彼をスカウトする理由がわからなかった。

「いや、ガタイがいいしキーパーとかディフェンダーならいけそうかなーって思ったんだ。あとで声かけようかな?」

足が遅いからといって、サッカーに向いていないとは限らない。その大きな体を活かしてくれるば、きつと活躍してくれるだろう。

「でもあいつ怖ないか?デカいし筋肉すごいで」

中学生とは思えないほどの巨体で、ガツチリとした身体つき。さらに三白眼の目が拍車をかけて、なかなか話しかけるには勇気がいるオーラが見える。はつきり言うところだ。

「そうかな?．．．そうかも。まあ普通に話しかければなんとかなる、はず」

そう言われるとそんな気もするが、メンバーが足りてない以上そんなことを言つてられない。それに人のことを見た目で判断してはいけない。怖いのは事実だが。

「よーし、計測し終えたな?それじゃあ交代するぞ」

それ以降は特に大きな収穫もなく、いつの間にか自分達が走る番になっていた。

「赤城、お前出席番号一番だろ。準備しろよ」

「あつ、すみません！すぐに行きまーす」

急いで列から抜けて、走るために軽く体を動かす。一方女子の列からも出席番号番号一番の子が出てきて、走る準備をしていた。

「おつ、麻宮か！よろしく……って包帯巻いてるけど大丈夫なのか？」

彼女は一年の終わり頃に転校してした生徒、麻宮涼華。凛々しいボーイッシュな顔立ちと、足に巻いた包帯が印象的な少女であり、席が近いのでよく喋る。

「ああ、問題ない。怪我自体は完治しているからな」

「へえー、そうなのか。しっかしあ行だと出番早いよなあ」

「たしかに。出席番号順だとあ行の人は出番が早くなるな。あまり気にしたことはないが……」

準備しながら軽く雑談をしていると、記録員の準備ができたようなので、お互いスタートラインに立つ。

「それじゃあ位置について、よーい……スタートッ!!」

パンツ！という乾いた音がなると同時に、走り出す。赤城は内心なかなかいいスタートを切れたと感じていた。

スピードに極端に自信があるというわけではないが、少なくとも一般の生徒には負けないと自負している。実際、赤城の走るスピードは、一般人の速さよりも上だ。

．．．にも関わらず、麻宮が視界に入った。

「．．．えっ！嘘!？」

二人は同じ直線のコースを走っている。相手の方が遅いなら、視界に入るということはあり得ない。振り向きでもすれば話は別だが、もちろん赤城はそんなことしていない。

なのに自分より前にいる。これはどういうことか。簡単なことだ。．．．単純に、向こうの方が速い、ということだ。

「ま、負けないぞ!!」

活動は全然していないが、仮にもサッカー部。負けられないと必死に追いかける。だが、差は縮まるどころかさらに広がり、結局向こうの方が先にゴールした。

「ふう、今回はこんなものか．．．」

あれだけ圧倒的なスピードで走っていたというのに、首を傾けている。まだまだ本調子ではなかったのかもしれない。



・・・その様子を見て、赤城のスカウトセンサーがこれでもかと反応する。

「麻宮! すごいな!! 何か部活やってたのか? これから入るのか? もし予定がないならサッカー部に入らないか!! 絶対活躍できるぞ!!」

目をこれでもかとキラキラと輝かせ、怒濤の勢いで話しかける。その勢いに気圧されて、麻宮は思わず一歩後ろに引いた。

「す、すまない。サッカーは・・・その、興味がないんだ・・・」

少し気まずそうに目をそらしながら答えた。その瞳は悲しそうで・・・どこか申し訳なさそうだった。

「そうか・・・でも、気が変わったらいつでも来ていいからな! それじゃあ!」

だが、赤城はその事に気がつかない。興味がないなら仕方ないと、素直に引き、他に良い人がいないか探すことにした。

「・・・本当にすまない。私は、もう・・・」

列の後ろに戻る赤城の後ろ姿を、麻宮は申し訳なさそうに眺めていた。

その日の放課後、部室で三人・・・実質二人で今後の方針を話していた。

「——で、もつとビラとかポスターを作ったり、もつと個人に声をかけていった方がいいと思うんヨ」

「なるほど……そんな革命的な方法があつたのか。よし、これを勧誘革命と呼ぶことにしよう」

「なんで!?!他にどんな方法があるんヨ!?!」

むしろこれ以外に何があるというのか。大声出していけばうまくいくと思つていたのでらうか。そりや集まるわけがない。三日月はそう言いたいのを、グツとこらえて心の奥底にしまい込んだ。

「よし、それなら早速チラシを作ろう!……ところで淀屋はどうしたんだ?」

もう放課後なのだが、まだ来ていない。まさか呼び出されたりしていないだろうな……などと思つてしていると、部室の扉が開いた。

「おう!遅れてすまん!」

噂をすればとはまさにこのこと。遅れているものの、淀屋はちゃんとやってきた。

「おおう、ここがサッカー部の部室か。意外と広いんだな!」

さらに、聞き覚えのない声が聞こえてくる。かと思うと淀屋の後ろから一人の少年が現れた。

「……え?」

何が起こったのかわからず、赤城は哑然とした表情になる。少年はそんなことを気にせず部室内を見て回る。何があったのか……話は少し前に遡る。

「おーい、東条！おるかー！」

放課後になってすぐ、淀屋は四組の教室に駆け込みある人物を呼ぶ。もしかしたら帰ってしまったかもしれないとも思ったが、目的の人物は、まだ帰っていないかった。

「おつ？淀屋じゃねえか。どうした？」

出てきたのは、片目に包帯を巻いた茶髪のドレッドヘアーの少年。彼こそが淀屋の言う東条。そう、東条斬である。

「おう！実はサッカー部に入ることになってな、それでお前も誘おかな思たんや」

サッカー部に入らないか？と淀屋は手っ取り早く用件を告げる。その言葉を聞いて、東条は思わず首をかしげた。

「サッカー部？ああ、あの面白そうなのがいるやつか。……でもお前野球派だったよな。どういう風の吹き回しだ？」

淀屋は野球派。暇さえあれば彼の応援するチーム、京阪トラーズのことを延々と話す

ほどの野球好きだ。そんな彼がいきなりサッカー部に入部することを不自然に思ったのだ。

「おう！実は昨日助けてもらってな、その恩返しも込めて入ることになったんや！」

「・・・本当に、それだけか？」

含みのある笑みを浮かべて、真意を探る。淀屋もそれを聞くのを待っていたのか、同じように含みのある笑みを返した。

「・・・さすがやな、東条。なら教えたろうやないか。ええか東条。聞いて驚くな。サッカー部はなあ・・・」

「モテモテになれるらしいんや!!」

ただしちゃんと活躍しているか、イケメンに限るということを、彼は知らない。

「な、なんだって!!それはマジなのか!」

無論、東条も知るはずがない。サッカーをすればモテモテになれると聞いて、すぐに話に食いつく。心なしか耳も大きくなったように見える。

「マジも本気もガチやで!!ファンからモテモテ、うまくいけばそのままお付き合!!しかも部員にも女子がおるからそこから始まるサクセスストーリーまで完備しとるで!!」

「なら行かないって選択肢はねえよな！よっしや行こうぜ！！」

ということがあり、新たなる部員を獲得してきた。またしても動機が不純だが、ちゃんと頑張ってくれるのならばそんなことは問題ではない。

・・・そもそも人数が人数なので、贅沢を言っつてられない。

「俺は東条斬つてんだ！斬るって書いてザンな！ともかくこれからよろしく頼むぜ！」  
「もちろん！こちらこそよろしく！！」

赤城と東条がガツチリと握手を交わし、無事に部員として加入する。

「よーし、それじゃあ今日はポスターとかビラを作って、終わったら手分けしてポスターを貼ってこうー！」

おーっ！と中学生らしい元気な声が部室内に響く。これでようやく五人。試合をするには最低でもあと六人は必要だ。まだまだ先は長い。

## 絶望的なまでに勧誘に向かない男

たった二人だけしかいなかったサッカー部だが、この数日でなんとか五人にまで増えた。

「よし、今日も勧誘するぞー！」

しかし、まだまだ足りない。最低でもあと六人はいる。それに、守備固め、疲労、怪我等が起こることを想定すると、もっと必要になってくるだろう。

「うちもやる時はやるってことを見せるんヨ！」

「わいに任しとき！大阪流マシンガントークでガンガン勧誘したるわ！」

「おつと俺のことを忘れてもらつちや困るな！俺だつて一人や二人すぐに仲間にしてやる！あつ、一人勧誘につき購買のパン一個な！」

「・・・では、僕も頑張ります」

大会が始まるまでに、より多くのメンバーを揃えるためにも今日も今日とて城翔中学サッカー部は、元氣よく勧誘活動に――

「・・・ん？」

――行こうとしたのだが、突然赤城が首を傾けた。

「・・・なあ、なんかおかしくないか？」

現在サッカー部は赤城、斧街、三日月、淀屋、東条の五名で活動している。そして現在斧街は寝ているので、声を出したのは四人のはず。だとするなら・・・一人分多い。

「・・・？すみません。ここです、ホワイトボードの前です」

やはり勘違いではないらしく、どこからか声が聞こえてくる。ホワイトボードの前、そう聞こえてきたので、そちらに注目してみる。たしかにそこには見慣れない人がいた。

「ひゃ!? 誰がいるんヨー！」

「な、なんや!? 幽霊か」

話しかけ、姿を見られるやいなやいきなり幽霊扱いにされる。そんなことをされれば、あまり気分はよくないだろう。

だが、鼻辺りまで伸ばしている長い髪、そのせいで目元が見えず、少し不気味に感じる。そんな少年がいきなり姿を現したのだから、驚くのも無理はない。

「おお! もしかして入部希望か! 早速名前を教えてくださいるか?」

・・・最も赤城は入部してくれる人が来たと喜んで、驚くことは全くなかった。

「千景消一、これからよろしくお願いします。・・・本当は前からいましたけど」

「そうかそうか! これから・・・うん?」

あまりの嬉しさに危うく聞き逃すところだったが、今間違はなく、前からいたと彼は言った。

だが、彼から入部届けを受け取った記憶はない。なおかつこの部室には二人しかいなかった・・・はず。

「・・・始業式の次の日に入部届けを出しに来たんですが、気づいてもらえなくて」

「ホントか!? えっと、その・・・すまん!! 気づかなかったんだ!!」

別に気づいていたのに無視していたというわけではない。本当にいることに気がつかなかったのだ。

悪意はまったくなかったのだが、向こうもいい気分ではなかっただろう。せめて頭を下げて、こちらの誠意を見せる。しかし千景は特に気にした様子を見せなかった。

「いえ、よくあることなので気にしてないです。前にもボールを使つて練習していたら、都市伝説みたいに言われましたので」

「・・・そういえば聞いたことあるな。そんな話」

ここ数日、グラウンドで勝手にサッカーボールが動いているという話があった。特に気にしていなかったのだが、その正体はもしかすると・・・いや、考えるのはよしておこう。

「と、とにかく一人増えたわけだし、この調子でどんどん増やすぞー!」



思わぬ形ではあったとはいえ、部員が増えた。忘れないうちに千景の入部手続きを行い、今度こそ勧誘活動を開始する。

方法としては赤城、三日月、東条の三人が外で勧誘をする。残りの千景と淀屋、斧街の三人にはサッカー部に残ってもらい、部室に誰か来たときの対応を任せた。

この三人を残した理由としては、前提として斧街はサボって参加しない。なので部室組になったのだが、基本寝ているので、誰か来たとしても対応してくれないかもしれない。いい。

そこで新入りの千景も残すことを考えたのだが・・・さっきのことを考えると、いても気づかれない可能性がある。

だからといって勧誘組に参加したとしても、その影の薄さから話しかけても気づかれない可能性がある。そこで、影の薄くない淀屋にも残ってもらうことにしたというわけだ。

「個々に向けての勧誘か・・・こういうのってどうしたらいいんだ？」

さて、こうして勧誘組となった赤城だが、彼の勧誘方法は・・・極めて単純だった。「よし、とりあえず適当に話しかけるか」

手当たり次第に話しかけ、サッカー部に入らないか？と持ちかけていく、またしても頭を使わない力業勧誘だった。

「誰にしようかな・・・よし、あの子にするか！」

というわけで早速近くにいた子に誘ってみる。肩まで伸びた紫色の髪。そして赤と  
いう色に反して、冷たい瞳を持つ少女。

「おーい、ちよつといいかな？」

「・・・誰ですか？」

敵意。彼女から感じられたのは、それによく似た雰囲気。冷めた瞳も相まって、どこか近寄りが見たいオーラが感じられた。

「俺はサッカー部キャプテンの赤城！それでモノは相談なんだけど、サッカー部に入らないか？」

最も赤城はそんな空気を全く感じておらず、いつものノリでサッカー部に誘う。

・・・鈍感力、ここに極まれり。

「・・・興味ないです」

当然こんな雑なやり方で上手くいくはずがない。少女は興味がないと冷たく言い放ち、すぐにその場から立ち去ってしまった。

「あれー？うまくいかなかったか・・・よし、次！」

気を取り直して、その後もひたすら話しかけてはサッカー部に入らないかと勧誘活動を続ける。

「サッカー部に入りませんか！あのフットボールフロンティアに殴り込みに行きましょう！」

サッカー自体は人気のスポーツだ。そのため興味を持って話を聞いてくれる人は、決して少なくない。

しかし、現実はそのなにごくはなかった。

「いや、俺スポーツは興味ないんだ」

「うーん、習い事とかあるし・・・ごめんね」

「すまん、野球部やからそっちにはいけないのや」

話は聞いてくれるものの、実際にやるとなると話は別という人がほとんどであり、断られ続けた。

「——というわけで、俺は家に帰って愛する嫁を愛でなくてはならないという使命があるからな。そっちにはいけない」

「そ、そうか・・・。何かよくわからないけどそれなら仕方ないな・・・」

結局時だけが無情に過ぎ、この日は一人もスカウトすることはできなかった。

「ま、まあ初日だし？そんなに上手くいくわけないよな・・・？」

まだ始めたばかり。最初から成功できるやつなどいるわけがないと、自分を正当化するための非常に見苦しい言い訳をしながら部室へと戻る。

「はははっ、やっぱり才能ないなあ．．．はあ、どうしょ．．．」

最初は笑って自分自身を誤魔化していたが、正直かなりへこんでいる。やっぱり才能がないと自虐まで始まってしまった。

「ただいまー！そっちはどうだった．．．？」

とりあえずキャプテンとして弱さを見せないように、いつも通り元気な挨拶をして部屋に入る。

その上で『頼む、俺以外も失敗してくれ』と内心でキャプテンとしても主人公としてもあるまじき心情を抱く。

そんなやましい心を持つ男に、天罰が下るのは至極当然のことだった。

「キャプテンおかえりー！こっちは上手くいっただんヨ！」

「俺もすっかりスカウトしてきたぜ！」

「いやー、部屋におったのは正解やな。危うく取り逃がしてしまうところやったで」

「おおう．．．なんとということでしょう．．．」

明らかに増えている。三人ほど増えている。自分は一人もスカウトできなかつたというのに、他のみんなはしっかりとスカウトに成功していた。

三日月は誰か入部してくれる人がいないかと、学校中を駆け回った。だが、なかなか入部してくれる人を見つけないことはできずにいた。

「どうしよう……あれ？あの子は……」

その部員探しの途中で、三日月はよく知る人物を見つけた。

「おーい！結衣ちゃんー！」

三日月が声をかけたのは、明るい茶色をポニーテールで、キリツとしたツリ目と八重歯が特徴的な少女。その少女は名前を呼ばれると、三日月の方に振り向いた。

「あれ？帝瑠じゃない。何か困ってるの？」

彼女の名前は獅子神結衣。三日月とは去年同じクラスで、今でも休み時間に話すほど仲がいい。

最初は友人を見つけたから声をかけただけだった。だが、どうせならばと彼女をサッカー部に誘ってみることにした。

「実はサッカー部に入部したんだけど、人数が足りなくて……だから結衣ちゃんにも入って欲しいんよー！」

「えつ、サッカー部？うーん、でも・・・」

まあいきなり入部してくれも言われても、色々事情があるだろうし、すぐに返事できなくて当然だ。

一応獅子神は家庭の事情などで行けないということはない。それを知っているから今回は誘ったのだ。とはいえいきなり誘われたのだから、すぐ返事はできないだろう。

しかし、ただでさえサッカー部の人数は少ない。今は一人でも多くスカウトすることが最優先。ぜひとも彼女にはサッカー部に加入してほしい。

・・・そこで、少しだけずる賢い作戦を使うことにした。

「・・・結衣ちゃんにしか頼めないんヨ・・・ダメ？」

獅子神は頼られるとその期待に応えたいと思うタイプ。今回は、彼女のその性格を利用する。

ちよつと姑息な方法ではあるが、言ってることは決して嘘ではない。実際獅子神は頼れるし、サッカーをやっていたという話を噂で聞いている。入部してくれれば、間違いなく戦力になってくれるだろう。

「そ、そうかしら！そこまで言われたら断れないわねえー！よし、私に任せなさい！」  
「え？う、うん。ありがとう・・・」

たしかにこの作戦を考えたのは三日月であるし、彼女が人から頼りたいタイプとい

うのも知っていた。だが、正直こんな上手くいくとは思っていなかったし、成功するにしても、もう少し時間がかかるかと思っていた。

・・・まさかここまで乗ってくるとは思像していなかったため、少し良心が痛む。

「それで部屋はどこなの？早く行くわよ！」

袖をぐいぐい引つ張り、部屋に行こうと催促してくる。・・・この子が将来詐欺などに引つ掛からないか物凄く心配になった。

「やっぱそう簡単にはいかねえよなあ」

時を同じくして、東条も勧誘に苦戦していた。興味を持つ者はいるが、入るには至らないという状況が続いている。

普通なら心が折れ、ゼロからサッカー部を作るなど無理なのだと諦めてしまいかもしれない。

「おーい！誰でもいいからサッカーやろうぜー！入ってくれたら絶対に後悔させねえからよー！」

しかし、それでも彼はめげずに続ける。お気楽だとか、単純なやつだと言われるかも

しれないが、もしそう言われたとしても彼は続けるだろう。

その理由は極めて単純。気楽と言われようがなんだろうが、楽しむためならどれだけの努力も惜しまない。彼はそういう男なのだ。

「すみませーん。ちよつとそこの美人な先輩、お話よろしいですか？」

諦めずにひたすら話しかけては断られ続け、偶然目に入った少女に話しかける。

名札の色から判断して、この少女は三年生だろう。癖があり紫を帯びた銀色のセミロングヘア。そして、黄土色の瞳は若干吊り目気味になっていることもあり、どこか勝ち気な受けた。

「おつ?うちに目をつけるとはお目が高いなあ。結構高くつくで?」

話しかけられた少女は、イタズラっぽい笑みを浮かべて東条を茶化す。

「そんな殺生な!もう小遣いが残ってないっすよ!」

本人がケラケラ笑っていたこともあり、東条もそれが冗談だとわかっていたので、こちらもノリよくおどけて返す。

「さて、冗談はこのぐらいにして・・・どうしたんや?何か困っていることがあるんやったらあねさんに任しとき!」

少女は満足したのか、東条に用件を聞く。とりあえず今回もサッカー部に入って欲し



いのだと簡潔に用件を告げる。

「はー、サッカー部か。そういえば一年ぐらい前に出来たとか言うところなあ。．．あれ？なんで今さら部員集めなんてしてるとるんや？」

「．．．そこは触れないでやってください」

気になって当たり前の所だが、まさかキャプテンの勧誘方法が絶望的すぎて誰も入ってこなかった、とは言えない。彼の名誉に関わるので、ここは適当に濁しておいた。

最も入部すれば遅かれ早かれバレるだろうし、そもそも彼の自業自得なので、言ってもよかつたのだが。

「ふーん？まあええわ。そういうことならうちも力を貸したるわ！これから一緒にがんばるな！」

「おおマジですか!?美人の先輩ゲツトだぜえ!!」

「ははは、上手いこと誉めよるな」

こうして東条も勧誘に成功する。彼女以外の勧誘には失敗したが、初めてにしては上出来といえるだろう。

「千景、お前は影が薄いんやな？」

部室に残った千景と淀屋は特にすることもないので、とりあえず雑談しながら三人が戻ってくるのを待つことにした。

「そうですね。そのせいで苦労することも多かったです」

先程のようにいるにも関わらず気づかれないということが度々起これば、不便極まりないだろうし、辛いこともあるだろう。

だが、淀屋には何か良い考えがあるのか、彼の返事に対してゆっくりと首を振った。

「でも、物は考えようって言うやろ？その特性を利用すれば、日常生活で役に立つで!!」  
「・・・例えばどんなことですか？」

千景が聞いてみると、その質問を待っていた!と言わんばかりに派手に立ち上がる。そして少し腹が立つようなドヤ顔で、その影の薄さの使い道を伝えた。

「女子更衣室に侵入してもバレへん!!」

「普通に犯罪ですよ。それ」

いったいどんな使い方かと思えば、ただの犯罪行為だった。少しでも期待した自分がバカだったのだろうか?とはいえ正直なところ嫌な予感はしていたので、そこまで落胆していない。

「バレへんかったら犯罪やないで!お前の影の薄さならそれが可能なんや!」

とまあそんなくだらない会話をしながら時間を潰していると、突然部室のドアが開

く。

「失礼する。サッカー部の部室はここであっているか？」

黒色のストレートヘアに橙色の瞳を持った、少しだけ背の低い少女。名札の色から判断するに、三年生だろう。

そして、手には昨日配ったピラを持っている。それを見て、わざわざここまで来てくれたのだろう。つまり・・・サッカー部に興味がある。

「サッカー部に入部したいのだが、構わないかな？もちろん無理にはとは言わない」

「いえ、ぜひ入ってください。何せ人数が少ないので、今は一人でも多く来てほしいんです」

「そうか、ならこちらこそよろしく頼むよ」

ちよつと変わった話し方をしているが、それもまた個性の一つ。話せる相手が二人に、それも女子。淀屋が内心でガッツポーズをしていたことを、二人は知る由もない。

このように方法や経緯はともあれ、勧誘に行った二人、そして残っていた部室組さえもスカウトに成功している。

「いやー、みんな優秀だねえ。・・・一人を除いて」

目を覚ました斧街のジトーとした目線が赤城に突き刺さる。いつもなら何も言えずに終わってしまうが、これでこちらが折れればキャプテンの威厳がなくなってしまうかねない。さすがにキャプテンの威厳が消滅してしまうのは色々まずいだらうと、咄嗟言ひ訳に反論する。

「何言ってるんですか!!三日月と淀屋勧誘したのは俺ですよ!!」

「つまり、一年かけてやつと三人の勧誘に成功?単純計算で四年間勧誘しないとメンバーが揃わないねえ。あつ、四年も経ったらみんな卒業してるじゃないか。また高校で一から勧誘し直しだねえ」

「ぐうの音もでない正論ツ!」

追加で言うなら、三日月はかなりゴリ押しだったし、淀屋も最終的には自分の意思で来ていたので、実質彼がこの一年間で勧誘できたのは、斧街しかいない。

「そんなことより新しく入った人の自己紹介をしたいんヨ!」

「そんなことつて酷くない!?俺の威厳のかかった大事な話し合いなんだぞ!」

「安心しな、あんたに威厳なんてもんはなかったよ」

「グハアツ!!」

立て続けの口撃に遂に心が折れてしまい、部室の隅っこで真っ白になってすっかりいじけてしまった。

「・・・どーせ俺なんて何もできないですよ。わかってますよ、そんなこと・・・」

これでは自己紹介ができないので、赤城を適当におだててなんとか復活させ、準備が完了した。

「では僕からですね」

新メンバーが話し合いで順番を決め、ようやく自己紹介が始まる。

「千景消一です。小学生の頃からサッカーをしていたので、お役には立てるかと思います」

最初は千景からだだが、簡潔な自己紹介。まだほんの数時間程度しか話していないが、なんとなく彼らしい自己紹介だと感じられた。

「よーし、次は私ねー」

次は三日月が連れてきた少女の番。少し緊張しているのか、軽く深呼吸をしてからみんなの前に立つ。

「獅子神結衣よ！私もサッカー経験者だから、何かわからないことがあったらいつでも頼ってね!!」

頼れそうな姉御系といったところだろうか？何にせよサッカー経験者が来てくれるのは非常にありがたい。きっと戦力になってくれるだろう。

「さて、ワタシは佐原一華。君達にとっては先輩に属するものになる。やるからには全

力を尽くさせてもらおうよ」

続けては、自らサッカー部に来てくれた佐原。独特な喋り方が少し気になるが、そんなことはサッカーをするに当たって何の問題もない。

「さて、大トリはうちがやらせてもらおうか!」

最後は東条が連れてきた少女だが、随分と自信ありげな表情を見せている。わざわざ最後を選択した辺り、相当な自信があると窺える。

「ふふん、うちはなあ——」

そしえ彼女が自己紹介をしようとしたまさにその時、唐突に斧街が反応し、指を差し向けた。

「そいつはセクハラだねえ。一応先輩だから、みんなはセクハラ先輩と呼んであげな」

いくらなんでも、セクハラなどという名前があるとは考えにくい。もちろんこの世の中には様々な名前があるので否定はしきれないが、明らかに嘘っぽいものの言い方だ。

しかし何も知らない純粋な少年少女達は、その言葉をいとも容易く信じてしまった。

「そうなんですか! よろしくお願ひしますね! セクハラ先輩!!」

「そうそう、小さかろうが大きかろうが、いくらでも女の子の胸揉んだるから覚悟しいやあつて違わうわ! なんやねんセクハラ先輩つて!!」

セクハラ先輩（仮）は少し遅れて勝手に自分の名前が改名されていることに気がついた。危うく自分の名前がセクハラで確定され、後輩からセクハラ先輩と言われ続けるところだった。

「だってあんたいつもセクハラしてるじゃないか」

「たしかにせやけどセクハラ先輩はヒドないか!?! オブラートつてもんを知らんのか!?!」  
「え? どうやったら音を振動させられるかって?」

「それはビブラート!!」

流石は関西系女子。お手本のようなノリツツコミを華麗に決めてきた。それを見ていた後輩達は、素晴らしいものを見せてもらったと言わんばかりに拍手を送る。

「え、ええと・・・ありがとう?」

話がかなり脱線してしまっただが、ようやく本編である自己紹介を始める。

「さて、話がだいぶ逸れてしまたが、うちは支倉静穂や! これからよろしく頼むで!」  
「支倉先輩ですか! これからよろしくお願いします!」

今度はちゃんと自己紹介を済まし、晴れてサツカー部への入部が完了した。

一日にして、五人もの勧誘・・・まあそのうちの一人は元からいたのだが、とにかく五人も増えた。

これで人数は十人。いよいよ最低限必要な人数が揃い始めた。彼らが動き始める日

は、近いかもしれない。



## 「始まりの戦士達」

チームを引つ張るキャプテンが、仲間が遅れをとるわけにはいかない。それがたとえ、勧誘であつたとしてもだ。

「・・・さあ、さすがに威厳を取り戻さないとな！」

一度は粉々に粉碎された威厳だが、壊れたのならまた直せばいい。というよりそろそろ戻しておかないとメンタルが持たなさそうだった。

赤城はそんな思いを抱きながら、昼休みに二年一組の教室へ足を踏み入れる。

「失礼しまーす！」

自分の威厳を取り戻すには、自身も早いところ勧誘を成功させるしかない・・・と、少なくとも彼は思っている。

そこで、この前スカウト候補に入れていた黒鉄という人のスカウト作戦を、急遽決行することにしたのだ。

「黒鉄綱基って人いますか！話したいことがあるんです！」

気合いを入れているからなのか、無駄に声がデカい。そのせいなのか、一組の生徒は他クラスのヤンキーが殴り込みにでも来たのかとぎわめいた。

「……ってお前かよ。ビックリさせんなよなあ……」

「黒鉄に何か用事があるんやな？そんな大声出さなくてもちゃんと呼んだるわ」

やがて状況を理解したのか、生徒達は再び雑談を続け、一人が黒鉄を呼びに行つてくれた。

「……俺に何の用事だ？」

そしてしばらく待つと、やたら大柄な男がこちらに声をかけてきた。間違いない、あの時の少年だ。彼が少年が黒鉄綱基だ。

こうして目の前に立つてみると、やはり大きい。その身体から溢れ出す威圧感に少し怯む。

だが、サツカーをするならこれからこのような場面に何度も出くわすのだろう。ならばこんなことでヒビってはいられない。

きっと大丈夫。なんだかんだ上手くいくはずだと、心を落ち着かせ、深呼吸をして用件を伝える。

「サツカー部に入ってくれないかな？それだけガツチリとした体なら、絶対に活躍できると思う！」

「……」

黒鉄は何も言わない。本当に何も言わないため、しばらくの間、気まずい沈黙が流れ

る。

「……………」

向こうが何も言わないため、どうすることもできない。やっぱり突然すぎたかと落胆し、出直そうとしたその時、黒鉄が口を開いた。

「……ああ、構わない。俺で役に立てるといふなら、喜んで参加させてもらおう」

彼は今、間違いなく構わないと言った。つまり、サッカー部に加入してくれると言ってくれたのだ。

「……えっ? いいの? てつきりダメだと思っただけど……」

ずっと怖い顔をして黙っていたので、正直ダメかと思っていた。だが、あっさり入部してくれるという拍子抜けな結果となる。

「ただその前に……一つ聞いていいか?」

「う、うん。 なにかな?」

最後に彼からの質問に答えることになった。その巨体には似合わぬ神妙な面持ちで、ゆっくりと口を開いた。

「俺はそんなに怖く見えるのか……?」

「……ごめん、ノーコメントで」

それは自分が答えるべきではないと、目線をそらして誤魔化した。黒鉄はそんな赤城の様子を見て、また黙り込んで、考え込むのだった。

「どうだああ!!俺だつてちゃんと勧誘できるぞおお!!」

「うるさい。眠れないじゃないか」

そもそも部室で寝るなという話だが、部室で大声を出すのも褒められた話ではない。

結論、どっちも悪い。

「だいたいマイナスがゼロになっただけで調子に乗ったら呆れられるだけだよ」

「うぐう!!」

そして今回も赤城は性懲りもせず無様に負ける。口論をすれば負けるとわかっていてるのに、なぜ彼は戦いを挑むのか？

少なくとも、現代の科学では解き明かすことのできない永遠の謎である。

「俺は黒鉄綱基だ。サッカーに関しては素人だが、やるからには全力を尽くす」

赤城が勝手にダメージを受けている間に、黒鉄が自己紹介を済ませる。その巨体と威圧感もあって、部室に入ってきた時は警戒していたが、自己紹介が終わる頃には拍手を

するぐらいには打ち解けた。

「……ん?ということは……十一人揃ったんやないか!」

周りの人数を数え、確認する。たしかにこの部室には、十一人ピッタリ揃っている。

赤城がサッカー部を立ち上げてから約一年。ついにサッカー部としての第一歩を歩める状態を作ることができた。

「ふむ、たしかに最低限必要な人数は揃っているようだ」

「……それなら一度練習してみてもはどうでしょうか?」

「うちも賛成だよ!そろそろサッカーしたいしね!」

みんなもそのことに気づき、折角揃ったのだから練習しようという声があがる。サッカー部なのに、何一つとしてサッカー部らしいことをしてこなかったので、やりたいと思うのは当然の反応だ。

「キャプテン!そんなところで燃え尽きてないで、必要な人数集まったんだしそろそろ練習もしようぜ!」

「そうか……練習か……えっ、揃ったの?」

「気づいてなかったのかよ?これで試合もできるぜ!」

「よっしやあああああ!!!みんないくぞおおおお!!!」

「ちよっ!?!いきなり走り出すなっ!?!」

まだ傷は癒えていなかったが、メンバーが揃ったというのなら燃え尽きている場合ではない。一瞬で準備を済ませ、誰よりも早く部室を飛び出していった。

「なるほど、ようするにワイは相手の邪魔をしたらええんやな！」

「せや、ここにいるのはDFや。せやからここにいるみんなは相手がゴールに向かうのを防がなアカンねん」

というわけで、校内のサッカーコートに移動し、城翔中学サッカー部初の練習が始まった。

「そんならボールを奪ったらええってことやろ！オーライ！オーライ！」

「いやそれは野球の捕り方やろ！？サッカーで手は使ったらアカンで！」

「何い！？手使ったらアカンのやったらどないしたらええんや！？」

「黒鉄先輩は足は遅いですが、ガタイがいいです。それを利用して、身体でボールを受け止めてみてはどうでしょうか？」

「・・・そうか、ありがとう。参考にさせてもらおう」

DFのみんなは、経験者の支倉と千景が中心となり、基本的なことや技術を学んでい

く。多少の不安要素もあるが、運動能力は高そうなので、基本さえ覚えれば戦力となってくれる・・・はずだ。

「俺はキーパーか！よっしゃ、止めてやるからガンガンシュートしてくれよー！」

「はーい！じゃあまずは私からやるんヨ！」

「おー、頑張るねえ。私は応援に徹するとしようかね？」

「いや斧街先輩も打ってきてくださいよ!?!」

「はいはい、心配しなくてもジョークだからそんなに慌てないでおくれよ」

斧街と三日月のFWコンビは、GKを担当する東条と練習することになった。

「いっくよー!?!..それっ!!」

三日月から蹴り出されたボールは、最初は右上に向かって進んでいった。東条も多少遅れながらも反応し、ボールに飛びつく。

しかし、ボールは途中からゆっくりと進行方向を変え、綺麗な弧を描いて左下へと進路を変えていった。

「うおっ!?!マジか!?!」

すでに別の方向へ飛んでしまった東条はどうすることもできず、そのままゴールを許してしまった。

「考えて行動してるうちはそんなもんだよ。身体が覚えて動くようになったら、上手く反応できるようにするさ」

F Wの二人は自身のシュートの精度を高めつつ、G Kの東条へアドバイスをする。経験者の二人からアドバイスをもらえることもあり、非常に有益な練習となっている。

しかし・・・

「よし、こんなもんかね?」

三十分程経ったところで、斧街がベンチの方へと歩き始めた。

「あ、あの? まだ三十分ぐらいいしか練習してませんヨ・・・?」

「いやいや、三十分も練習したんだよ? 自分で言うのもなんだけど、普段のあたいからしたら相当頑張ったさ」

そう言うのと、ベンチに座って休憩を始めた。彼女がサボり魔だということは聞いていたが、これは想像以上の難敵だ。誰か止められる者がいればいいのだが・・・相手が先輩ということもあつてか、注意するのは少し気が引けた。

「まあ気が変わるまで待とうぜ。先輩にも何か考えがあるのかもしれないし!」



「そうなのかなあ・・・?でも、やるしかないんヨ!」

・・・とはいえないものをねだつても仕方ない。二人でもできないことはないので、気合を入れ直してそのまま練習を再開した。

そして赤城達、MFを担当する選手達は、サッカーコートの手から端を、ドリブルしながらダツシユをしていた。

「みんなー、まだスピードあげても問題なさそうか?」

初めてサッカーをする人もいるので、最初は軽めにして様子を見ようかとも思っていた。だが、こちらの想像を裏切り、みんなしつかりとついてきている。これならもう少しハードにしても大丈夫だろう。

「ワタシは構わないよ。こうみえても足には自信があるのでね」

「私もまだまだいけるわ!無理そうだって感じたらいつでも言つてね!」

「いや、それはどつちかって言つたら俺のセリフ・・・まあいつか」

赤城と獅子神の二人は軽やかなドリブルをし、佐原も多少のぎこちなさはあるものの、事前に得た知識を活かして走る。

「・・・獅子神は何か悩みはないか？何かあるならワタシに話してくれても構わないよ」  
「いえいえ、私は大丈夫ですよ！先輩こそ何かあれば手伝いますから、いつでも頼ってくださいね！」

「フツ・・・その時はぜひとも頼らせてもらおうとするよ」

ドリブルをしながら雑談をする余裕もある。これは期待できるんじゃないかと、赤城は思わず笑みをこぼした。

「・・・しかし、結局サボるといふなら斧街はなぜサッカー部に入ったのだろうか？」

その途中、佐原が口を開いた。

「たしかに・・・キャプテンは何か聞いてないの？」

結局サボるといふなら、わざわざ残らなくても家に帰ってサボればいいはずだ。そもそも練習が嫌いななら、なぜサッカー部に入部したのだろうか？

「うーん、俺もわからないや。なぜか知らないけど入ってくれたんだよあ。人数も少なかったし、断る理由もなかったから入ってもらったけど・・・そういえば何で入部したんだろう？」

ベンチでのんびりと休む斧街を見て、赤城は疑問を浮かべるのだった。

## 優勝（ロマン）を掴み取るために

部活動、委員会、趣味などやりたいことは色々あるだろうが、学生の本分は勉強だ。それをおろそかにしてはならない。

「やばい、教科書忘れた」

・・・このように教科書を忘れるなど、本来はもつてのほかである。

「ごめん、教科書忘れたから見せてくれたりしない・・・？」

「ああ、これでいいか？」

「ありがとー！助かった！」

まあどれだけ反省しようと、忘れた教科書が飛んでくるわけではない。すぐに切り替え、隣の席の麻宮に見せてもらう。

「——えー、であるからして、秒速50メートルで走るAさんがBさんに追い付く時間は・・・」

「・・・あの、なんで怪我したの？言いたくないかもしれないけど、どうしても気になつて・・・」

授業が始まって間もなく、教師の講義を無視して麻宮に質問する。バレたら確実に怒

られるが、彼はそんなことで止まらないだろう。良い子はマネしないように。

「・・・そうだな。部活で少しトラブルがあったんだ」

授業中なので答えるのもどうかと思つたが、無視するのも悪いと思ひ答える。麻宮は悪くない。全ての責任は赤城にある。

「そつか。でもあれだけ足が速いつてことは一年から活躍してたんだろ？ なあ？ すごいよなあ・・・」

「・・・赤城はサッカー部に所属しているんだな」

羨望の眼差しを向けていると、今度は麻宮の方から質問してきた。しかもサッカーの話ときた。彼が反応しないはずがない。

「おおっ！ もしかして興味が出てきた!？」

「赤城!! うるさいぞ!!」

「す、すいません!」

バカみたいにデカい声を発したことで、案の定怒られる。ちなみに麻宮はセーフだった。これは恐らく日頃の行いの差だろう。

「・・・それで、何か聞きたいことはあつたりする？ サッカーの事ならなんでも聞いてくれ」

そして怒られてなお、懲りることなく話を続ける。こんな事だから彼だけ怒られたの

だ。

これは鼻屑ではない。当然の報いである。

「そうだな・・・聞き流してくれても構わないが、もし自分のせいで試合に負けてしまったとしたらどうする？」

ルールや魅力などではなく、いきなり暗い質問をしてきた。自分のせいでということ、もしかすると麻宮はチームで行う部活に入っていたのだろうか？

その辺りのことはよくわからないが、何はともあれ質問に答える。

「うーん・・・次はそうならないように特訓するかな？」

実際にそうなった経験がないためなんともいえないが、多分そうするんじゃないだろうか？自分のせいで負けてしまうなど考えたくもないが、万が一そうなったらこうする他ない。

「なら、その特訓で怪我をしてしまって、以前のように動けなくなったらどうしよう。それでも諦めないで続けられるか？」

「今度は怪我かあ・・・」

負けた相手に勝とうとして練習をし、その最中に怪我をしてしまったとしたら、当然しばらくの間は練習できなくなる。

自分が怪我で練習できない間にも、相手はさらに強くなり、さらに差ができる。

必死にリハビリをして復帰したとしても、その頃には埋めようのない差ができてしまっているだろう。

いや、それならまだマシだ。以前のようにプレーできるかどうかかも怪しいのだ。普通の人間なら、復帰を諦め別の道を探し始めるかもしれない。

「・・・わからないけど、俺は続けると思う」

まだ自分は怪我をしたことがないので、実際にそうならどうなるかわからない。それでも多分続けるのではないかと答えた。

「なぜ、そう言いきれる？」

「・・・実はさ、俺って頭悪いんだ」

それは知ってる。今までの行動を見て、少なくとも賢い子ではないという事は把握している。それはこのクラス全員が周知している事実だろう。

「頭悪いからなのか考えるの苦手でさ、楽しいからって理由でやってみることにしてるんだ。どうせ前に進むことしか知らないし、楽しいならやり続けるかな？」

バカが故に思考が単純でいられる。難しいことを考えずに、ただひたすら前を向いて突き進むことしか知らない。

それが時に、人を幸せに導くことがある。

「・・・そう、か。すまない。変なことを聞いて・・・」

・・・なぜだろうか。一瞬だけだったが、悲しげに見えた。やはり過去に何かあったのだろうか？

「えっと・・・何かあったら誰でもいいから相談した方がいいよ？自分だけじゃどうしようもないことでも、力を合わせれば意外とどうにかなるもんだし」

バカな赤城でも、彼女が明らかに何か抱え込んでいるのはわかる。・・・どうにも心配になる。

自分には何もできないが、何かあれば誰でもいいから相談した方がいいとアドバイスしてみる。自分はやったことないし、似たような状況になったらできるかわからないが。

・・・なんとも無責任なことである。

「よし、赤城。次にこの問題当てるから考えておけよ」

「はい！わかりました！」

今度は話しているのがバレていなかったのか、教師は特に叱ることもなく赤城を指名した。ほっと息を吐きながら、教科書の問題を確認する。

「・・・ん？」

・・・明らかに困惑している。しばらくアゴに手を当て、ため息を吐いたかと思うと麻宮の方に向き直る。

「なあ、これってどうしたらいいのかな？」

問題を確認するやいなや、無理だと判断したのか麻宮に頼る。この間僅か九秒。恐るべきスピードである。

「少しは自分で考えてみたらどうだ？」

あまりにも早すぎる諦めに、もはや呆れている。

「・・・自分だけじゃどうしようもないことでも力を合わせりやなんとかなる。それを証明するために俺はあえてわからないフリをしてるんだだけだ！・・・決して問題が解けないわけじゃないぞ・・・？」

・・・こんなにもわかりやすい嘘を見ることはめつたにない。確実にテストの日に泣く事になるだろうが、質問に答えてくれたお礼として、今回はちゃんと教えてあげるのだった。

「・・・実際になつたらどうなるんだろうなあ」

もし本当にそんな自体に直面したらどうなるのか？赤城はバカゆえまったく想像できず、まあサッカーは楽しいしやってるかなあ・・・ぐらいにしか思っていなかった。

「よーし、ワイの鉄壁守備を見せたるわ！」



「うんうん、最初に比べたら随分とよくなったなあ。その調子で頑張るんやで！」

「佐原先輩、調子はどうですか？」

「ふむ、ボールを上手くコントロールできるようになってきたよ。これならもう少しスピードを上げてドリブルしてもいいかもしれない」

練習を始めてかれこれ1週間。まだ見違えるくらいではないものの、最初に比べると技術は格段に上達している。

「だいぶ反応できるようになってきたから、そろそろ必殺技の練習もやってみるんヨ」

「ひ、必殺技!? めちゃくちゃカッコいいじゃん!! それってどうやってできるんだ?」

「えつとね、まずは・・・」

「おおっ! ワイもやりたいで! 支倉先輩、ワイにも教えてくれ!」

というわけだ、この日からは必殺技の練習もさせてみることにした。初心者はその言葉の響きに感動したのか、すぐにやりたいと申し出る。

「はははつ、やつば必殺技はいいよな・・・ん? あれは・・・」

「・・・・・・・・」

テンションの上がった数人を見て、自分も昔はそうだったなと笑っていると、どこかで見たとある少女がいることに気がついた。

「なあ、たしか前にも会ったよな? どうかしたのか?」

近づいてみて、ようやく思い出した。前に勧誘活動をしていた時に出会った少女だ。どうにも興味がなかったらしく、その時は話を聞いてくれることもなくすぐに立ち去ってしまった。

「ヘタですね」

「・・・えっ?」

・・・聞き間違いだろうか? 口を開くなりバカにされた気がする。自分の聞き間違いだろうかと困惑する赤城を差し置いて少女は話を続ける。

「何人かは良い動きをしていますけど、フットボールフロンティアの本選に出場するなんて無謀じゃないですか? 正直このレベルで優勝を目指すなんて、はつきり言ってバカバカしい」

「ちよっ?! そんな言い方ないだろ!」

たしかにヘタなことを指摘されても仕方のないレベルではある。まだまだ身体ができておらず、ルールも完全に把握しているわけではない。実際周りからは無理だろうと言われたことは何回もあったし、赤城自身も本当に優勝できると思っているかと言われれば答えに詰まる。

かといつて、面と向かってバカにされてはこちらも黙っているわけにはいかない。すぐにでも言い返そうとしたのだが・・・それよりも早く、少女が口を開いた。

「・・・それなのに、なぜ諦めないんですか？」

先程のようにバカにしている様子はなく、今度はただ知りたいという純粋な思いが伝わってくる。ちよつと引つかりはしたものの、その質問に答える。

「・・・まあ、サッカーをしているのは楽しいからだけど・・・どうせやるなら優勝を目指したいよ。明らかに無謀だろうけど、着いてきてくれる仲間もいるし、簡単には諦められない」

どれだけ遠かつたとしても、明らかに無謀だったとしても、ようやくここまで辿り着いた。着いてきてくれるという仲間がいてくれるのだ。

ならばとにかくやる、無理かもしれないなくてもやる。どうせそうすることしかできないのだ。想像力がある人間なら無理だと諦めるだろうが、彼にはそれが無い。そのため実際にやってみるしかないのだ。

「・・・いいですね。それ」

ずつと冷たい無表情を崩していなかった少女だが、赤城の話聞いた途端、ほんの少しだけ笑みを浮かべたように見えた。

「届かないものに手を伸ばす。憧れるだけのものを奪い取る・・・それって、夢があると思ってますよね」

啞然とする赤城を差し置き、青空を見上げ、まるで歌うように言葉を紡いでいく。

「最初から優秀な選手を集め、充実した環境を用意し、練習してきたチームかたや素人ばかりで、環境も整っていない状態で練習してきたチームどちらが優勝に近いかと問えば、間違いなく前者を選ぶでしょうが——

——<sup>ロマン</sup>夢があるのは後者です」

自身の真上に手を伸ばし、何かを掴み取るかのようにギュツと手を握る。そして、赤城の方に顔を向き直した。

「ひねくれ者でもいいのであれば、私もその無謀な夢に挑戦させてもらえると嬉しい」  
最初は話についていけずポカンとしていたが、やがて彼の顔からは笑みがこぼれた。

「・・・断るわけがない！一緒に優勝を掴み取ろう！」

「ありがとうございます。私は星見煌、よろしく頼みますよ？」

サッカー部のなかった中学校が、フットボールフロンティア優勝という無謀な夢を追いかける。それに挑戦する者がまた一人増えたのだった。

## 捨てた夢をもう一度

「よし、後ろは任せてくれ。ここから先へは行かせない」

「・・・ここは僕らで止めます」

フットボールフロンティア優勝。無謀にも思える目標を掲げ、毎日練習に励む。

「佐原先輩！ここは任せます！」

「ふむ、こちらが隙だらけ。通らせてもらおうか」

サッカーコートには、十三人の人影があり、それぞれ練習に励んでいる。

・・・そう、十三人である。

「おう！ここはワシに任しとけえええ!!」

見るからに筋肉質なゴリラ・・・もとい男が佐原の前に立ち塞がる。

いったい何があつて、こんなことになつたのか？まずはそのことについて軽く説明しておこう。

「キャプテン、今日はどんな練習するんだ？」

「そうだな・・・試合慣れしたいし、たまにミニゲームとかも練習に組み込んでみるか？  
連携とかの勉強になるし・・・」

ある日の放課後、特に何かおかしいことが起こることもなく、いつものように部室に入ると――

「ワシは盤上豪！ワシが入ったからにはもう安心じゃ！ガツハツハツ！」

――謎の人物が豪快に笑っていた。

「・・・は、はい？」

「なんじゃ？せつかくワシが来てやったんだからもっと喜ばんか！」

来てやったと言われても、そもそも呼んでないし、それ以前に誰なのだ？

もしかすると誰かの知り合いなのかもしれないと思い、他のみんなの知り合いなのか聞いてみたりもしたのだが・・・誰も知らないという。

・・・本当にこの人は何者なのだ？

「すみません、どちら様で？」

「うむ！ワシは盤上――」

「あつ、それはさつき聞いたんで結構です」

そこではない。名前はたしかに大事だが、今重要なのはそこではないのだ。

「えっと、入部希望ということでもいいんですよね？」

「そうじゃ！ワシは入部希望の盤じ——」

「そこはもう結構です。盤上先輩でよろしいでございますよね？」

訳がわからなすぎて、最後は自分でもよくわからない言葉遣いをしてしまうぐらい困惑した。

対して盤上は、珍しく動揺している赤城のことを気にすることなく話しかけてくる。

「これからよろしく頼むぞ!!ガッハッハッハッ!!」

「は、はあ・・・」

とまあそんなことがあり、盤上は入部することになった。

はつきり言って不安しかなかったのだが、意外にも安定しており、特にパワーを活かしたプレーは目を見張るものがあり、期待できる。

・・・それよりも問題なのはこっちだ。

「ちよつ?!起きてくださいってば!」

「ううん・・・あつ、おはよー」

赤城はベンチでぐっすり眠る斧街を起こす。ここまで堂々とサボっていると、もはや清々しい・・・わけがない。

「十一人揃ったら練習するって言ったじゃないですかあ!」

「えー、ちゃんとしたじゃないか」

「いやいや!!三十分ぐらいしかしてないじゃないですか!?!東条が捨てられた子犬みたいな目でこつち見てますよ!?!」

「斧街先輩いいいい!!俺はいつまでも待つてますよおおおお!!!」

「まあまあ、焦つてもしょうがないよ。のんびりとやればいいんじゃないかい?」

東条の叫びも虚しく、ご丁寧にマイ枕を取り出したまた眠る準備をし始めた。・・・いや、あの枕どこから取り出した?

「おーきーてーくーだーさーいーよおおおお」

どこから取り出したかはさておき、必死に揺さぶつて起こそうと試みるが、なかなか起きてくれない。どうしたものかと頭を悩ませていると・・・

「・・・・・・・・」

見知らぬ男が見るからに不機嫌そうな顔をして、グラウンド内に入ってきた。

「・・・・?あのー、俺達が使ってるんで関係ない人は・・・・」

「・・・・やる気がないならやめたらどうだ?他のやつが目障りだ」



赤城の制止を無視し、男は斧街にはつきり目障りだと言いつつ放った。

「……部外者に言われる筋合いはないと思うけどねえ」

対して斧街も負けじと言い返す。元を辿ればサボってる斧街が悪いのだが、見知らぬ人いきなり罵倒されたら機嫌も悪くなるだろう。

「……なら、俺と勝負だ。俺が勝ったらちやんと練習しろ。負けたらサボるなり勝手にするんだな」

「……随分と自信があるんだねえ。いいよ、その勝負受けようじゃないか」

「はわわ……とんでもないことになってるんヨ」

先程まで平和な空気で練習していた。だが、謎の男の乱入により周りの空気が一気に殺伐としたものとなり、みんなも心配そうに……

「おおええぞー！どっちが勝つか賭けた賭けたー！」

「じゃあ俺は斧街先輩が勝つて方に、赤城院の魂を賭けるぜ！」

「あんたらは何やつとんねん!?!」

……意外とそうでもなかった。みんなこの状況を結構楽しんでる。

別に仲が良いのは悪いことではないので、別に止めたりはしないが・・・勝手に人の魂を賭けるな。

「お前が持つているボールを奪ったら俺の勝ち。逆に俺が奪えず、ゴールを決めたらお前の勝ちだ」

勝負方法は極めてシンプル。斧街からボールを奪ったら相手の勝ち。

逆に奪われることなく、斧街がゴールを決めたら相手の負け。ただそれだけだ。

そして使うスペースはサッカーコートの中の半分領域。一対一で戦うには広いかもしれないが、お互いそれでいいというので、変更はない。

「・・・始めるぞ」

「ああ、さっさと始めようか」

それぞれルールの確認を済ませ、いよいよ二人の戦いが始まる。

「・・・そらよつとー！」

「ふん、その程度で抜かせると思ったかッ!!」

僅かな隙を見つけ、ゴール近くまで攻め上がろうとする斧街に対し、男は的確に立ち回り、前に行かせない。

「・・・これでどうだツ!!」

「おっと危ない!」

そしてただ前に行かせないように突っ込んでくるだけでなく、ボールを奪うことのできるチャンスを待っている。

「チツ、もう少しだったんだがな」

「なるほど、言うだけのことはあるみたいだねえ」

動きに翻弄されることなくついていき、抜かそうとしても先を読んでいるかのように前へ行かせない。

明らかに素人の動きではないのがわかる。経験者、それもなかなか腕が立つ選手なのは明白だ。

「なら・・・これはどうだい!!」

だからといって、現役のサッカー部が負けたら話にならない。

いったん後ろに下がると、ボールを空へ向かって蹴りあげる。さらに自身もボールを追うように跳躍。

「自分では正面からの突破は無理だと判断、だから相手の上を飛び越えていこうという魂胆だね」

「はい。斧街先輩はスピードに関しては低い部類に入ります。テクニックも高いわけで

はありませんし、不意をついて上から突破しようとするのは妥当な選択ですね」

斧街のプレーを見て、真面目に分析する千景と星見。

「見てみい東条!! 斧街先輩の胸がめっちゃ激しく動いとるで!! あんなん今まで見たことないぞ!!」

「クソツツ! なんで俺はカメラを持ってきておかなかつたんだ!?! 圧倒的後悔ツ!! 人生の汚点ツ!! 一生の不覚ツ!!」

同じく斧街を見ているが、まるで着眼点の違う東条と淀屋。

「・・・もうウチはツツコミせえへんからな? あとは頼れる後輩に任せるけどそれでええな?」

「先輩!?! あれをなんとかしろって言うんですか!?! 頼りたいといつても限度がありますよ!?!」

そんなバカ二年生ダブルスの相手に疲れ、後輩にバトンを押しつける支倉と、手に余るバカを押しつけられて動揺を隠せない獅子神。

こうしてみるとふざけているところもあつたが、この時全員が共通して斧街が勝つと思っており、善戦はしたものの男の方が負けたと思っていた。

だが・・・男は諦めていない。いや、上に飛んでくれたのは、彼にとってはむしろ都合だった。

「・・・くらえ」

足をゆっくり後ろに引き、風を纏わせる。そして、暴風を纏わせた足を相手の方に向かって振りだした。

「サイクロン!!」

静かに集まっていた風が、斧街の真下で荒れ狂う竜巻へと変化し、その辺り一帯が強風地帯へと変貌する。

「・・・えっ? ちよつと!?! 必殺技が使えらつてのは聞いてな——」

急いで足に力を入れようとしたが、彼女は現在空中にいる。力を入れて踏ん張ろうにも、そのための場所がどこにもない。

耐える間もなく易々と吹き飛ばされ、その際にボールも別の方角へ飛ばされてしまふ。

「・・・決着だ」

最後に飛んでいったボールを男が確保し、ゲームセット。

あまりに一瞬、思わぬ形で決着がついた。

「い、今のつて、必殺技・・・だよな?」

「ありやサイクロンじゃな。帝国学園あたりが使うシンプルかつ強力な技じゃ」  
相手の足元から竜巻を発生させ、吹き飛ばす。その隙にボールを奪う。

本来は相手が地上にいるときに使うのだが、相手が空中にいるときに使えば今のように避けようがない。より有効的に使えるというわけだ。

「・・・あつはつはっ！いやー、負けちまったねえ。こいつは予想外だよ」

最初は斧街もキョトンとしていたが、自分が負けたことを再確認すると笑い出した。  
「ここまできれいに負ければ悔しさもなく、むしろ爽快だった。

「さあ、約束通り練習しろ」

「はいはい、練習すればいいんだろ？おとなしく従いますよつと・・・ザン君！ちよつとそつちに立ちな！」

負けたからには約束を守らなければならない。斧街はボールを持つと、東条をゴールに行くよう手で示し、自身もゴール前へと移動した。

「・・・さあーで、ザン君。あたいがシュートするからちやんと受け止めなよ？じゃないと練習にならないからねえ」

「は、はいー」

いつものどこかおどけたような笑みではなく、どこか不敵な笑みを浮かべ、シュートを打った。

「そらよつとー！」

体重を乗せた、威力のある重いボール。約一年前からサッカー部にいたとだけあって、基本がしつかりとできている。

しかし、真正面から来ているため、素人でも決して止められないというシュートではない——

——はずだった。

「・・・あれ?」

先程までこちらに向かってきていたボールが水に包まれ、突如地中へと姿を消したのだ。

「ど、どこいった!?!」

ボールが急に消えて動揺を隠せない。そんな東条の様子を見ていた斧街はニヤリと笑い、ゆつくりと口を開く。

「・・・サブマリンショット!」

それと同時に、地面から勢いよくボールが飛び出してくる。

「嘘だろおい!?!」

さすが目の前にまで迫っていたボールに反応することはできない。ボールは見事にゴールネットを揺らすこととなった。

「うおおお!! 斧街センパイ!!? いつの間必殺技を!? 実は隠れて練習してたんですか!? それともさっきので覚醒したんですか!?!」

それに真つ先に反応したのは赤城だった。全力ダツシユで斧街の元に駆け寄る。

「まさか、元から使えたやつを使っただけだよ」

約一年ぐらい一緒にいたのに、彼女が必殺技を使えることを知らなかった。とんだサプライズである。

「……」

そんな和気あいあいとした様子を見た男は、自分の役目を終えたと言わんばかりに、背を向けグラウンドから出ていこうとしていた。

「あつ、待ってください!」

それに気づいた赤城は男を呼び止める。男は素直に足を止め、赤城の方へと向き直り頭を下げた。

「……勝手に乱入したことは謝る。すまなかった」

「いやいやそんなことはどうでも良いですよ!! それよりサッカー部に入りませんか? サッカーやってたんですよね!!」



サッカーをやっていたとは一言も言っていないが、先程のプレーを見れば相当やっていたのがわかる。もし入ってくれば、即戦力となるだろう。

だが、男は表情を変えないまま首を振った。

「・・・どんな理由があつたとしても、俺は一度サッカーから離れた。今さら戻れるはずがない」

やはりサッカーをやっていたようだ。しかし、何か事情があつてサッカーから離れ、もう自分はやらないと心に決めているらしい。

「でも・・・戻れるはずがないと思つているなら、サボつてる斧街先輩を注意したのはなんでですか？」

「それは・・・」

もうサッカーを諦めた。もう自分とサッカーは何の関係もない。

・・・本当にそう思っているなら、この場を無視していたとしてもなんらおかしくはない。いや、諦めたというならそっちの方が自然な反応だ。

「・・・まだ、サッカーに未練があるからじゃないんですか？」

心のどこかでは、奥底では・・・まだやりたい。そんな思いがあるのではないだろうか？

「未練が残つたままやめたら納得できないと思います！もう一度、俺達とフットボール

フロンティアを目指しませんか!!」

フットボールフロンティア。かつて自分が目指した舞台の名に、思わず心がざわつく。

「良い目をしている。・・・俺も昔はそうだったのかもな」

「・・・またサッカーをすれば、取り戻せますよ。熱かった頃の自分を」

・・・必死になってボールを追いかけた日々。ただただ大舞台を夢見たあの日々。がむしやらに頑張り、必死に夢の舞台を目指した。弱いと言われようが、勝てなからうが、ただひたすら練習してきた。

だが、着いてくる者は一人もいなかった。一向にやる気を出さない。最初から諦め、ただ無為な日々を過ごすチームに嫌気が差した。

融通が利かなかつた自分はそこでドロップアウト。一度は完全に夢を捨てた。あれから時間も経った。もうサッカーをすることはないと思っていたのだが――

「・・・裁野だ。よろしく頼む」

――また目指してみるのも悪くないかもしれない。

「はいーこれから一緒に頑張りましょう!!」

ガツチリと握手を交わし、周りからは拍手が送られる。男は・・・裁野業は、もう一度夢に向かって歩き出す。

「おー、良かったねえ。それじゃあたいは頑張ったんでこれで・・・」

「・・・もしあの女がサボってたら俺に報告しろ。すぐに叩き起こす」

「うげっ、そりやないよ・・・」

またサボろうとする斧街に釘を刺す。心強い監視役が入り、サッカー部はまた一つ前進する。

## 折れた翼、再生の時

「みんなー！新入部員連れてきたんヨー！」

「私は二年生の華咲結衣。よろしくね」

斧街と裁野の対決から数日後、いつものように部室でメンバーが来るのを待っている  
と、三日月が新たな部員を連れてきた。

「おおっ！いったいどうやって勧誘したんだ？」

本格的な勧誘をしてからそこそこ時間が経っていたので、もうこれ以上は増えること  
はないと思っていた。

三日月はいったいどのようなようにして、彼女の勧誘に成功したのか？

「購買で買ったのパンをあげたら釣れたんヨ」

「そっか！それは何より・・・釣れた？」

釣れたとはこれまた独特な表現だ。まあ食べ物を使って連れてきたので、ある意味間  
違ってはいないのかもしれない。

とりあえず勧誘方法については置いておき、彼女の实力を見てみたいのだが・・・今  
日はあいにくの雨だ。

「キャプテン、今日は休みにしたらどうだい？たまには休憩するのも大事だよ」

「・・・お前が休みたいだけだろ」

「ちえ、バレちゃった」

斧街の休みたいという考えは裁野に完全に見透かされており、呆れられていた。

外が雨だとしても練習はできる。体育館を借りればだいたいの練習はできるし、階段ダッシュや筋トレは体育館を借りることができなくてもできる。

・・・とはいえここまで休みなしでやってきた。今まで何かしらやってきた人は問題ないかもしれないが、まだまだ慣れていない素人もいる。もしかすると、知らぬ内に疲れが溜まっているかもしれない。

「たしかにずっと練習してたよなあ・・・よし、それじゃあ今日は休みにするか！」

「うむ、筋トレもインターバルが必要じゃ。休みは適度にとらなくてはならん」

「そうそう、たまには休まないと体壊すよ。だから今日はしっかりと休憩しよう」

「・・・わかった。練習しすぎて怪我をしてもまずいからな。今日は休むか」

実際正論なので特に誰かが不満を言うことはなく、この日の練習はなしということになり、荷物をまとめて解散した。

ただ、赤城の脳内はサッカーで埋め尽くされていた。

「うーん、やっぱこれかな？いや、こっちも捨てがたい・・・でもやっぱり・・・」

一度家に帰った後、財布を持った赤城はホームセンターへ足を運び、練習に使えそうなタイヤを探していた。

「・・・これは重すぎるとよなあ」

もちろん重い方が練習にはなるのだが、あまりにも重いと逆に練習にならない。

背伸びせず、自分の身の程にあったタイヤを買わないとちゃんと練習できない。それだけでなく重すぎると帰りが地獄と化す。

・・・それは過去の経験で既に把握している。想像力がないのも困りものだ。

とはいえ軽すぎるものだと練習にならない。最近はずームメイトが加入し、そのメンバーが思いの外上手かったこともあってちよつとばかり焦っている。そのため軽すぎるのも避けたい。

「うーん、やっぱり無難な円堂さんモデルのタイヤが・・・あれ？」

かの円堂守が愛用していたという（諸説あり）伝説タイヤを買おうと手を伸ばしたその時、見覚えのある人影を見つける。

「・・・麻宮、かな？」

はつきりと確認できたわけではないが、クラスメイトの麻宮の姿が見えたような気が

する。

ホームセンターには色々売っているんで、何かを買いに来たのだと思っ  
ていたが……

「たしかこの先ってペットショップだったはず……」

麻宮らしき人が向かったのは、ホームセンターの奥。この奥にはペットショップも併設されているのだが……自宅でも飼っているのだろうか？

もちろんさっきの麻宮だったという確証はないが、一度気になるとなかなか集中でき  
ない。

というわけで、自分もペットショップの方へ足を運ぶことにした。

それがまさかこんなことになるうとは、思ってもみなかった。

「ふふつ、可愛いな……」

やっぱりいたのは麻宮だったのだが……今の彼女はハムスターを手に乗つけて、普  
段は見ることもない可愛らしい笑みを浮かべている。

……なぜか絶対に見てはいけないものを見てしまったような気分だ。

「(い)ら(い)ら、くすぐりたいぞ? ……本当に可愛い……」

とはいえこれは偶然起こってしまった過失の事故。決して故意にやったわけではない。ここは大人しく帰って見なかったことにすれば――

「……あつ」

……バレていないうちに振り向こうとした瞬間、完全に目があった。まるで時が止まったかのように両者ともピクリとも動かなくなってしまった。

「し、失礼しました」

悪くないはずだ。自分は別に何も悪いことをしていない。偶然クラスメイトらしき姿を見かけたので、着いていただけで、悪意は何もない。

しかし、なぜかここにはならないような気がした。本能に従い、すぐさまその場から離れようと足を踏み出す。

「違うからな」

だが、麻宮はそれを許さなかった。

「……えっ?」

恐ろしいくらい落ち着いた声音で肩をガツチリと掴み、逃げることを許さない。

「え? いや、あの……別に良いと思うぞ?」

「違うからな」

「その、ちよつと意外だけどハムスター好きなんだよな? 別に隠すようなことでも……」



「違うからな」

「いや、でも……」

「ち・が・う・か・ら・な」

「アツハイ」

有無を言わずただ違うと言われ、赤城は納得……。はしてないが、こう言われると仕方ないので、渋々頷いた。

「それで、何か用事があるのか？」

手に持っていたハムスターをそつと降ろすと、いつもの凛々しい表情に戻し……

いや、なんか変な汗をかいている……。気のせいだろう。うん、きつと気のせいだ。そんなことより質問に答えなければならぬ。

「よ、用事はないんだけど……。ちよつと見かけたから話そうかなーって……」

「そうか……。そうか」

……。なんだか非常に気まずい。いつもなら会話が続くはずなのに、今は言葉が思いつかない。

まさかハムスター一匹にここまで翻弄されるとは思ってもみなかった。というかそんなこと誰が予想できようか？

「それはそうと、サッカー部の活動は上手くいつているのか？」

麻宮の方もこのままの雰囲気ではきまらずと感じたのか、サッカーの方へと話題をそらす。

「お、おう！もちろん!!」

サッカーの話題となれば、赤城は無限に話すことができる。なんとか生き延びる道を見つけることができた。

「今日も新しい部員が入ってきてさ、実力を見るのが楽しみで仕方ない!」

「そうか・・・良かったな」

サッカー部の現状、自分の憧れの選手、フットボールフロンティアへの思い。とにかくサッカーのことを熱く語り続ける。

「・・・前に、何かあったら相談したらいいって言っていたな」

すると、突如として話題が切り替わる。

「えっと・・・そういうやつだ。それがどうかしたか?」

自分で言っておいてなんだが、そのことについては完全に忘れていた。

「あのあと色々考えたんだが・・・赤城の言うとおり、誰かに話した方が良い気がしてな」  
「ああ、あるなら絶対に誰かに相談した方がいいぞ」

悩みを心の底に留めておくより、誰かに打ち明けた方がいい。たしかに言ったのは事実だし、そう思っている。自分がそうなった時にやれるかは別にして。

「なら、聞いてくれるか？」

「・・・えっ、俺なの？」

しかし、こうなるとは思ってもみなかった。自分で言うのもなんだが、相談事なら少なくとも自分以外の方が良いような気がする。自分なんかよりも適任な人はいっぱいいる。

「前に答えを教えただろう？まだその分を返してもらっていないから、今回の件はその貸し分だと思ってくれ」

それを言われるともう何も言えない。たしかにわからなかったので教えてもらったが、まさかそんなところから引つ張ってくるとは思ってもしなかった。

「・・・わかった、正直気になってたし聞かせてくれるか？」

とはいえ断る理由必要はないし、前から何かあるんじゃないかと気になってはいた。それに頼られて悪い気はしないので、赤城は麻宮の話聞くことになった。

かつて麻宮は東北にある中学校のサッカー部に所属していた。

強豪校にも関わらず、一年生の頃からレギュラーに抜擢され、天狗になることもなく地道に自身の力を磨いていた。

このままいけば、来年にはチームの主軸として活躍、さらに将来日本のサッカーを背負う一人として活躍してもおかしくはない。そんな多くの期待の目を受け入れ、彼女はひたすら己を鍛えていた。

・・・ところが、フットボールフロンティアの敗戦後に歯車が大きく狂い始めてしま

う。  
世間は麻宮に期待しすぎていた。あの負けた試合は本来なら勝てたはずの試合だと、なぜ負けてしまったのだと強く非難された。

自分が責められることも辛かった。しかしそれよりも監督、チームメイトが責められていたことが何よりも辛かった。

そのことが彼女の心を傷つけ、焦りを感じさせてしまった。自分もつと点を取ることでできていれば、パワーがあれば、より強力な技があれば・・・勝てたはずだと。

そう考えた彼女は、ある技を習得することに決めた。その技は強力で、未完成の状態でも有り余るほどのパワーを感じることでできた。

ただ、麻宮はその技の危険性を知らなかった。ただでさえ危険な技なのに加え、過度に自身を追い込む練習を続けた結果・・・練習中に大怪我を負ってしまう。

重症だったものの治療は成功。その後は諦めることなくリハビリを続け、なんとかプレーできるようにまで回復し、安堵した。

とはいえ、しばらくチームから離れていた代償は大きかった。

リハビリをしている間も周りは練習し、自分よりもずっと先へ行ってしまった。それに完全に回復したわけではないので、以前のように動くこともできない。周りは前進し、自分だけが後退した。もうその頃には、埋めようのない大きな差ができてしまった。チームメイトは気にするなど言ってくれたが、彼女はこのままだとチーム全体に迷惑をかけてしまうと判断した。そうして彼女はサッカーをやめてしまった。

・・・しかし、本当はそうじゃなかったのかもしれない。

「でも違った。私はチームのためなんかじゃない。・・・自分のためにやめたんだ」

チームから離れる時は当然悲しかった。これから共にやっていこうと誓った仲間と別れるのだから、そう感じるのは当たり前だ。

・・・しかし、心のどこかでホツとしている自分もいた。

「今まで通りに動けない。周りに置いていかれるばかり。そんな状況が嫌になった」

最初は世間からのプレッシャー。それがなくなると、周りとの差が重圧となった。

やめればそれから解放される。そう思い、少し安心してしまったのだ。

「だから最初やめた頃はそこまで辛くはなかった。やつとそんな生活が終わる。もう何も気にする必要がないと思ってた

・・・でも日が経つに連れて、そんな自分が嫌になった。今はもう後悔しかない」

後になって、なぜやめてしまったのだと後悔した。自分のせいでチームに迷惑をかけ、挙げ句勝手にやめていった。責任感の強い彼女は、心が弱いせいでやめてしまったと自分を責め続けた。

だが、いくら後悔しても戻れない。一度間違ってしまったことを正すことはできない。

「・・・聞いてくれてありがとう。話したら楽になった」

それでも話したことにより、気持ちが少し楽になった。最後に聞いてくれた赤城に感謝し、帰ろうと足を踏み出した。

「それで、これからどうするんだ？」

「・・・えっ？」

しかし、赤城はこれで話が終わったなど思っていない。

「だって後悔してるん・・・だよな？このままで終わったら後悔するんじゃないかな・・・

？」

「……もちろんこのままで終わっていいはずがない。できることならもう一度フィードに立ちたい。立ってまた戦いたい。」

だが、自分には資格がない。自分の都合で勝手にチームをやめた。それなのに、今さらまたやることなどできるはずがない。

「……私には資格がないんだ」

「資格とかそんな難しいことは俺にはわかんない。楽しいか楽しくないかでやってるし……麻宮はやりたいのか、やりたくないのかどっちなんだ？」

「それは……」

心の中ではやりたいと思っている。それでも頷くことができない。どんな理由があつたとしても、もう自分がフィールドに立つわけにはいかない。

意を決して、断ろうとしたその時——

「「わあああああ!?!」」

後ろから数人分の悲鳴と、人が倒れ込むような派手な音が聞こえてきた。

「な、なんだ!?!」

振り向いて確認してみると、どうやら人間雪崩現象が巻き起こつたらしい。いったい

どこの傍迷惑なやつが騒いでいるのかと思ひ、よく確認してみると・・・

チームメイトの姿があつた。

「何やつてんの!?!どこから出てきた!?!てかいつからそこにいたの!?!」

色々と言いたいことがあつたため、思わず三連ツツコミをしよう。・・・なんなのだ、三連ツツコミとは。

「・・・サ、サツキキタバツカリダヨ」

「さつきつて具体的にはいつ?」

「『ちよつと見かけたから話そうかなー』って言ったところや」

「結構序盤の方から聞いてる!?!」

「・・・一人で解決しようとしているお前が悪い」

「えつ、俺なの?結局俺が悪いのか!?!」

どうやら倒れ込んできたのは赤城のチームメイトらしく、随分と楽しそうにしている。本当に仲がいいと麻宮は感心した。

・・・いや、自分もかつてはそうだった。昔の自分は仲間と楽しく試合をしていた。何も考えず、ただただボールを追いかけていた。



それなのに、いつからか結果を出すことだけが全てとなっていた。周りの目を気にするようになり、期待に応えなくてはならないと自分を追い詰めるようになっていた。

「まったく、遊ぶのもいい加減にしろよな……」

……このチームで、0からやり直してみたい。もちろん今までのように結果をもとめるが、今度は――

「なあ、赤城」

「ん？ どうした？」

――童心に帰り、楽しむことを思い出した。

「チームに入れてくれないか？ もう一度、選手としてやってみたい」

なぜこの一瞬で心変わりしたのだ。いや、ありがたいことではあるのだが……さっきの騒動のどこに仲間になってくれる要素があったのだろうか？

とはいうものが入ってくれるのはありがたい。疑問は残るが、入部してくれるのならそこはもう気にしないでおこう。

「ああ、これからよろし――」

「やったー！ これから一緒にがんばるんヨ！」

「いや、だから俺が喋って――」

「よーしウチが面倒みたるから安心しいや！」

「あのな、人が喋ってる時に——」

「困ったことがあつたらなんでも相談しなさい！私が力になるから！」

これは新手の嫌がらせだろうか？赤城は訝しんだ。

「・・・ごめん、泣いていい？」

「知らん。勝手に泣いとけ」

「おい本気で泣くぞ!？」

やりたい放題のチームメイトの姿を見て、麻宮は思わず笑みを浮かべるのだった。

## 個性溢れる自己紹介（前編）

「よし、それじゃあ今日も張り切っていくぞー！」

部員はもう充分揃った。だが、監督はまだ見つからないので公式戦に出場することはできない。

とはいえ、最悪見つからなかったとしても、監督は手の空いている教師に任せればいい。そもそもそう簡単に見つかるとも思えないので、今は練習の方に重点的に力を入れる。

「・・・そういやまだまだ知らんこと多ないか？」

少しでも上手くなって全国大会で優勝するため、今日も練習に向かおうと準備していると、ふと淀屋が口を開いた。

「安心しろ！そういうのはやってるうちに覚えるから心配すんなって！」

たしかに基本的なルールや最低限必要な知識は覚えたものの、戦略や状況に合わせた動きなど細かいことはまだまだわかっていない。

とはいえこれは時間と慣れの問題だ。もう少し時間が経ち、実際に試合をやるようになれば自然と身体が動くようになる——

「キャプテン。たぶん淀屋はそういうことを言ってるんじゃないと思うぜ？」

———と思っていると、東条が口を挟んだ。

「せや、ワイが言うてるんはそつちやなくてチーム同士のことや」

「チーム同士のこと……？」

一瞬間に思ったが、よくよく考えてみればたしかに淀屋の言うとおりだ。

今までは簡潔な自己紹介しかしていなかった。それに途中から加入したり、いつの間にか部室にいたり……チームだというのにまだまだ知らないことの方が多い。

「なるほど。たしかにそうだよな……よし、それじゃあ今日の練習が終わったらちゃんとした自己紹介をやるか！」

そんなわけで、部員全員の時間の都合が合うかを確認し、練習後に自己紹介の時間を設けた。

「よし、それじゃあ早速やるぞー！」

「……別にやるのは構いませんけど、誰からするんですか？」

自己紹介を始めるに切り、まず一番手は誰からいくかの話し合いが始まる。

「あつ、俺は最後だからな？ キャプテンは最後に決めるものと相場が決まってるからな！」

「ふむ、ここは無難に名簿順などはどうだろうか？」

「一年生から順番にやるのもいいんじゃない？」

「誰からでもいい。さつさと終わらせるぞ」

「・・・なあ、誰か一人ぐらいは反応してくれてもいいんじゃないか？」

赤城はいつものようにスルーされ、誰からやるかの話し合いは続く。

こういうものは最初が肝心。後続に勢いをつけるために、ぜひとも自信がある人によってもらいたい。

「しゃーない。誰もいかんねやったらうち任せとき」

しばらくすると、含みのある笑みを浮かべた支倉が手を上げる。三年生でお調子者、それに話上手。たしかに一番手としては確かにありかもしれない。

ただ、手を上げる時に若干芝居がかつていた気がするのはいさだらうか？

「いやいや、それなら俺がやりますよ！」

続けてその様子を見ていた東条が手を上げる。たしかに盛り上がりそうなことをしてくれそうな気がするし、東条も一番手としてはアリかもしれない。

・・・しかし、これは自己紹介がしたくてあげたわけではないだろう。意図は他にあ

る。というより、おそらくあれをやりたいただけだろう。

「ちよつと待たんかーい！」

すると、そんな二人の動きを見ていた淀屋が何かを察したらしく、勢いよく立ち上がった。

「それやったらワイがやったるわ！」

「どうぞどうぞで」

「よつしや、完璧や!!」

……正直東条の様子がおかしかったこともあり、こうなることはわかつてはいたが：一応言っておこう。

「それをやりたかったただけだろ!？」

「当然ツ!!」

それやらんと自己紹介できんのか、と言いたくなかったが、指摘していたらいつまで経つても終わりそうもなかったので、淀屋に前に出るよう促す。

「よつしや、やることやったしいつちよ派手にぶちかましたるわ!!」

派手にぶちかます必要は一切ない。充分ボケたから、あとは穩便に済ませよう。

「ワイの名は淀屋マサキ！ホンマは野球の方が好きなんやけど、縁あつてこのサツカ一部で頑張ることになったんや！でいふえんだーつちゆうとこを担当することになった

けど、まだまだ初心者やからお手柔らかにしたのんますわ！」

さっきのノリからまた何かボケをかましてくるかもしれないと思ったが、意外にもちゃんとやってくれた。

「・・・なんや、なんかボケた方がええんか？」

「やらなくていいからな!？」

「なるほど、それはフリやな!！」

「断じて違う!！」

宣言撤回。やつぱりボケようとはしていたらしい。やつてはいけないというわけはないが、無理してまでやる必要はないし、他の人が待っているので次に進む。

「なら次はうちがやるで!！」

続けて自己紹介をするのは、先程も名乗りを上げた三年生の支倉だ。

「支倉静穂！ポジションはDFやで！後ろはこのあねさんがしつかりと守ったるからみんなは安心して攻めてきや!！」

一つ上の先輩、加えて経験者ということもあり、非常に頼もしく見える。

「それとユニフォームがキツなったらいつでも言いや？この手で直接サイズを測ったる

——

「そんなことだからあんたはセクハラ先輩とか言われるんだよ」

・・・やっぱり不安になってきた。三年生がこれで、このチームは大丈夫なのだろうか？

「じゃあ次は俺の番だな？」

東条には悪いが、正直なところ何かやらかす気しかない。本人の性格を考慮してもその考えに至るのは必然。それに、こういうのは一度流れに乗ってしまうと止められないのだ。

「東条斬だ！趣味は映画観賞！ポジションはキーパーだからガンガン打ってきてくれ！でも俺も初心者だから、多少は加減はしてくれよ？」

簡潔でやる気も感じる。お手本のような自己紹介だな。だが無意味だ（予言）

「それはそうとき、誰か数学の課題見せてくんない？明日提出だからさ・・・お願い誰か見せてくれえええ!!!」

「えっ?・・・それワイもやってなかったああああ！誰か見せてくれえええ!!!」

「お前から何言ってるんだ・・・って言いたいけどそれに関しては俺もやってないいいいい!!!誰か助けてえええええ!!!」

「キャプテン・・・やってなかったんだね・・・」

大ボケ担当はあの二人だけかと思っていたら、まさかのキャプテンもだった。こんなのが自分達チームのキャプテンだとは、前途多難である。残りの部員はそう思ったと



か。

「じゃあ、続きをやるか！さて次は誰に・・・」

結局数学の課題に関しては、後で三人で協力しようということと合致した。正直この三人が協力したところで焼け石に水のような気もするが、とにもかくにも自己紹介の続きを始める。

「あの・・・さつきから手を上げてます」

「うおお!?ビックリした!!」

誰がいくのかと待っていると、いきなり声が聞こえてきた。その声がした方を向くと、千景が手を上げてこちらを見ていた。

「ご、ごめんな!!それじゃあ早急にやろう!」

断っておくが、決してわざと無視をしていたとかではない。本当に手を上げていたのに気づかなかっただけなのだ。

「千景消一です。見たとおりの存在感がないですが、それを利用すればお役に立てると思っています」

あとさっきのことに關しては本当に気にしていないので、気を落とさなくても大丈夫です」

綺麗な土下座を決めている赤城にフォローしつつ、自己紹介を終える。許された赤城は土下座を解除し、席に戻ったところで次の人が自己紹介を始める。

「華咲結衣です。広い視野を活かしたプレーをしてチームに貢献したいと思っています。これからよろしくね」

非常にシンプルで手短な自己紹介。個性派が多いチームだが、ようやく常識人が現れたように見える。

「あのさ・・・なんでパンを持つてるんだ？」

ただし、それは手に大量の惣菜パンを持つていなかっただけとする。

「練習が終わったら食べようと思っていたので・・・いせませんか？」

「あつ、いや、そういうわけじゃないんだけど・・・どうぞお食べください」

席に戻ると袋を開封してパンを食べ始める。別に文句はないのだが・・・そこまでして食べたいのだろうか？

「じゃあ次は私が行くわ！」

とりあえず本題に戻る。自己紹介は滞ることなく、スムーズに進む。

「私は獅子神結衣!!サッカー経験者だから、何かわからないことがあったら頼ってね！」

別にサッカー以外のことで何か悩みがあったら協力するからいつでも私のところに来なさいよ！」

経験者でもあり、いつでも頼ってくれていいという。こういう人がチームに一人はいると、とても心強い。

「あつ、結衣ってことは私と同じ名前なんだ」

「あら、本当ね！同じ結衣同士仲良くしましょう！」

たしかに獅子神も華咲も名前は結衣だ。名前は同じでも、性格は違うものだなあとどうでもいいことに感心する。

個性派が多いサッカー部の自己紹介。イロモノと言われても仕方ないぐらい濃い面子が揃っている。期待半分不安半分の心持ちで、残りのメンバーの自己紹介が始まる……

## 個性溢れる自己紹介（後編）

前回は淀屋の一言から、練習後に自己紹介をしようということになった。

その結果、お調子者の三人がダ○ヨウ俱○部をしたり、アホの三人が凶悪な宿題敵を前に共闘することになったり、キャプテンが土下座したりと、たかが自己紹介で波乱が巻き起こる。

そして現在は獅子神の自己紹介が終わったところ。ここから七人目の自己紹介が始まる。

「ワシは盤上豪!!趣味は筋トレじゃ!!何か筋トレや筋肉に関して知りたいことがあったらなんでもワシに聞いとくれ!!ガツハツハツ!!」

なんというかこれに関して予想通りだった。以前のこともあるが、何より見た目でだいたいこんな感じだろうと予想ができた。

人を見かけで判断してはいけないというが、実際のところは世の中の人はだいたい見た目どおりな気がする。決して悪い意味ではない。ただ良い意味でもない。

「……ふむ、誰もいかならないなら私がいこうか」

盤上の自己紹介が終わり、次の人が立ち上がって交代した。

「ワタシは佐原一華だ。東条君にスカウトされてサッカー部へと加入することになった。暇な時は小説を読んでいる。サッカーのことはまだわからないことの方が多いが、他のことなら相談に乗れる。何かあれば頼ってくれて構わないよ」

話し方こそ癖があるが、セクハラ先輩と筋肉先輩、サボり魔先輩に比べれば数段マトモな人である。三年生では一番頼れるかもしれない。

いや、上記の三人も決して頼れないというわけではないが・・・少々、というより大分癖が強すぎる。

「しつもん。いつもはどんな小説を読んでいるんですか？」

ここで佐原の話聞いていた東条が質問をする。たしかに少し気になる。面白い本なら借りてみてもいいかもしれない・・・小説だからおそらく借りないと思うが。

「そうだね・・・最近は『おいどんは猫であるか?』という本を読んでいるよ」

「・・・えっ?」

佐原が口にしたのは、どこかで聞いたことあるような本の名前。しかし、自分達が知ってるのと微妙に違う気がする。質問した東条もこれには困惑している。

「・・・ふむ、笑ってくれてもいいのだよ?」

「あつ、あはは・・・」

どうやらこれは彼女なりのジョークだったらしい。ただ、彼女が言うとうどうにも冗談

に聞こえない。やはり雰囲気のせいだろうか？

「・・・誰もいかなければ、俺がやろう」

佐原が席に戻り、他に誰かいきたいという人がいないのを確認し、黒鉄が立ち上がる。

「・・・黒鉄綱基だ。赤城に誘われてサッカー部に入部することになった」

そこからしばし沈黙。別に自己紹介は何文字以上ないといけなといった制約はないが、もつとこう・・・他にあつてもいい気がする。

「・・・えつと、他になんかないか？ほら、趣味とか特技とかでもいいし・・・」

「・・・趣味は筋トレ。あとそれを利用した特技もある」

「おおっ！筋トレとはワシと気が合うのう！」

「でも筋トレを利用した特技ってなんや？」

なんとか話が繋がった。正直大したことはしていないのだが、赤木は我ながらナイスアシストをしたと心の中だねで自分を褒める。そしてそれを表に出さない自分を偉いとまた褒める。

といつても表情にしつかりと出ていたため、数名から冷たい視線を送られていた。なお、赤城はそれに気づかなかった。

「・・・淀屋、ジュースでも飲むか？」

「ん？特技の話はどこいったんや・・・？」

だが、せっかく話が繋がったというのに黒鉄は急に話題を切り替えた。淀屋が話を戻そうとしても、反応してくれない。

「・・・まあ喉は乾いとるからありがたいたくちようだいするけど・・・なんで特技の話から——」

淀屋が疑問に思うのは当たり前だ。何をどう解釈すれば、筋トレや特技の話からジュースになってしまっただろうか？

しかし、その答えはすぐに知ることとなった。

「——ハアアアアアアッ!!」

どこからかリンゴとコップを取り出し、彼らしからぬ大声を出したかと思うと・・・目の前でリンゴを握り潰した。

「こうすれば握力を鍛えつつ、果汁100%のジュースが作れる。俺の特技だ。・・・さて、飲め」

「・・・いただきます」

彼を怒らせるのは絶対にやめよう、全員の心が一致した。今ならジ・アースを打てるかもしれない。もちろん威力はお察しレベルのものだが。

「じゃあ次は私でいいですか？」

決して彼に悪意はなかったのだが、部室は静まり返ってしまった。そんな状況を打開する・・・つもりは彼女には毛頭ないだろう。

とりあえず自己紹介をさっさと終わらせる。多分そう思っている。

「星見煌です。フットボールフロンティア優勝なんて届きもしない夢を追いかけるのはバカらしいですが、私はそういうのが嫌いじゃないので参加させていただきました」

相変わらず言っていることは辛辣だが、闘志は燃えている・・・と信じたい。

「そういうえば、一年は僕ら二人だけなんです。サッカーは人気ですしもう少しいてもおかしくないと思います」

「人気だからこそ来ないんじゃないかな。サッカー界は競争が激しいわけだし、わざわざ創設したばかりの部に入部して優勝を目指そうとは夢にも思わないんじゃない？」

一年生。たった一年前の話だが、すでに懐かしい記憶と化している。サッカー部がないと知って絶望しても諦めずに続け、かなり遅れはとってしまったものの、スタート地点にまでやってきた。

諦めなければきつと夢は叶う。赤城はそう信じてここまでたどり着いた。諦めずにやってきてよかったと心の底から思っていた。



ちなみに優勝を目指しているのになぜ強豪校に行かなかったのかというと、推薦が来なかったからである。あと学力が足りなかったからである。ついでに技術も大してないからである。

他にも理由はあるが、これ以上は彼の名誉を傷つけないようにするため記載しない。ただ結論からいうと、彼は行かなかつたのではなく、行かなかつたのである。なので地元中学校に行き、そこで努力をして優勝を目指そうとしたら、そこにはサッカー部がなかつたという始末。ようするに、彼は知能レベルがかなり低いのである。

「はい、じゃあ次はうちがやるんヨ！」

赤城が回想に耽っている間に、すでに次の人が自己紹介を始めようとしていた。

「うちは二年の三日月帝瑠！小柄だから小学生に間違われることもあるけど、こう見えても三番目に入部したからここではみんなより先輩なんヨ！」

そう言つて堂々と胸を張る。その言動も含めて小学生と間違われるのだろうか：・触らぬ神に祟りなし。誰も何も言わなかつた。

「・・・ところでそのお面はなんだ？」

「あつ、それはうちも気になつてたんや。誰かからもらったん？」

「そういえば、あのお面のことについては誰も聞いてなかった。そこそ目立つのになぜ誰も聞かなかったのだろうか？」

「これはね、お祭りの時におばあちゃんに買ってもらったんヨ！可愛いでしょ！」  
「そうなのだな。よく似合っていると思うよ」

お面を着けているという点となぜか語尾がヨとなる以外についてはマトモである。このチームにはなぜか常識外れなことをする人が多いので、数少ない常識人としてサツカー以外でも頑張つてほしい。

「三年の裁野だ。入部したからには高みを目指していくつもりだ」  
「うおつ、いつの間にな」

気がつくとすでに交代していたらしく、裁野が自己紹介を始めていた。やるなら一声ぐらいかけてほしいものだ。

「……特に言うことはないが、サボつてるやつには容赦しないから覚悟しておけ」  
最後の一言で、斧街が露骨に目をそらす。聞こえるような深いため息を吐いてから席へと戻った。随分と短い。彼らしい自己紹介である。

「あと三人……斧街先輩、私からでもいいですか？」  
「構わないよ。あたいはいつでもいいからねえ」

というわけで、先に麻宮から自己紹介をすることになった。

「麻宮涼華だ。ポジションではFWを担当させてもらう。これからよろしく頼む」

これまた簡潔な自己紹介。もちろんそれが悪いわけではないのだが、これでは少し近寄りたいたい感じになってしまう。

これからは同じチームの一員としてやっていく以上、もう少し親しみやすさがあつた方がいい。そう思った赤城は何かないかと考えた。

「・・・そうだ！補足するとハムス・・・いや、なんでもないです・・・」

みんなに親しみやすくなつてもらいたい。その結果、例のハムスターのことを話せばいい感じになるかと思いい口に出したのだが・・・目で言うなど威圧された。やつぱりあまり公言してほしくないのだろうか？

「FWだからうちと一緒だよ！頑張ろうね！」

「ああ、少しでもディフェンス陣が楽できるようにお互い頑張ろう」

「えへへ、言われなくてもそうするんヨ！」

ただ、言わなくてももちろんとチームに溶け込んでいるようだ。どうやら余計な心配だつたらしい。

「じゃあ次はあたいでいいんだね」

麻宮の自己紹介も終わり、早いもので残るはあと二人。赤城は最後なのでここではまだ動かず、先に斧街が自己紹介をする。

「斧街雨海。趣味は昼寝でポジションはFWだよ。あとはそうだねえ……あつ、暇な時は話し相手にでもなってくれるかい？」

「なんだか締まらないというか、その場のノリに身を任せているように見える。気ままにやる、その感じがなんとも彼女らしい。」

「あたいの自己紹介はこれで終わり。だからあとは頑張りなよ」

斧街が席に戻り、ついにキャプテンが立ち上がる。

「よしーいよいよ俺の番だな!!」

「わざわざ最後まで待ったのだ。ここでピシッと決めてこそ真のキャプテンというものの。絶対に失敗は許されない。」

「サッカー部キャプテンの赤城!!趣味と特技は当然サッカー!憧れの選手は円堂守!目標はフットボールフロンティア優勝!!みんな、優勝目指して俺についてこい!!」

「完璧に決まった。これ以上ないぐらいの完璧な仕上がりに、これでこそキャプテン。みんなのやる気もきつと遥かに向上しただろう。」

「おもしろいな。最後やしオチがないとアカンわ」

「部員集め上手くやってたらもつといい感じだったんだらうねえ」

「もつと実力つけないと優勝なんてできないと思いますよ、キャプテン」

「思ってたより辛辣っ!」

じゃあどうするのが正解だったというのだ。ここはボケた方がよかったのか？それが正解だったのか？・・・それでスベったら目も当てられない。

「・・・冗談や。頼りにしてるでえキャプテン！」

「その間は何!?!なんか怖い間があるんだけどホントに頼りにしてる!?!」

「だいじょーぶ!みんな信頼してるから胸を張っていいんヨ！」

「ごめんさっきの聞いたあとだと全然安心できないんだけど!?!」

何だか釈然としないが、なんだかんだ仲良くやっていけそうなチームとなった・・・そう信じたい。

## 必殺技、完成への道

中学サッカー界で皆が目指す憧れの舞台、それがフットボールフロンティア。

もちろん誰もが行くことができるわけではなく、本戦に出場するためには予選を勝ち抜かなければならないが、そもそも勝ち抜くためにはどうすればいいか？

もちろんサッカーの大会なのだから、サッカーの技術は持っていないといけない。

しかし、それだけだとどうしても勝ち抜けない。この世界のサッカーで勝ち抜いていくためには、どうしても必殺技が必要不可欠となる。

とはいえそれは一朝一夕で覚えられるような簡単なものではない。ただでさえ完成には時間がかかる。ましてや開催時期を考えると、時間も有り余っているとはいえない。むしろ少ないぐらいだ。

「よし、今日はいよいよ必殺技の特訓をやつてくぞー！」

だからといって最初から諦めるわけにはいかない。それに完成には時間がかかるといったが、短期間で覚えることができる人もいる。諦めずに、やれるだけやってみる。それで無理だったなら仕方がない。

「・・・それはいいが、必殺技をいきなり作れと言われてもわからないぞー」

「せやな。なんかアドバイスはなないんか？」

「アドバイスカ。えーっと・・・ちよっと待ってくれよ・・・」

経験者ならどうすればいいかわかるが、素人にいきなり作れと言っても厳しいものがあるだろう。せめて何かしらのコツであったり、重要なポイントを知っておかないと無理と言っても過言ではない。

「・・・そうだな、大事なものはイメージだ！」

「なるほど、イメージか！・・・イメージ？」

・・・彼の言っていることは決して間違いではない。想像力は必殺技を完成させる上で、非常に大事な役割を担っているのは事実だ。

だが、そんなことはわかっている。イメージだけでなんとかならないから詳しく聞いているのだ。もし仮にイメージだけ完成させたなら、その人はいわゆる天才に分類されるだろう。

とはいえ赤城の気持ちもまったくわからないわけではない。必殺技の説明をしろと言われても、言葉で表すのは少し難しい。

「キャプテン、ここは見せてあげた方がわかりやすいんじゃないかい？」

百聞は一見にしかず。結局のところ、実際に見せるのが一番わかりやすく、手っ取り早いだろう。

「はい、それならうちがやるんヨ！」

三日月がピョンピョン跳ねながら私がやるとアピールする。他にやりたいという人もいなさそうなので、彼女に任せてみることにした。

「それじゃよく見てるんヨ!!」

自信満々の笑みを浮かべ、足元のボールを勢いよく踏みつけると、地面に半分ほどめり込んだ。

そしてボールを踏みつけたまま足を後ろに引き、強い回転をかける。

すると地面との摩擦によりボールが発火、さらに少しずつ浮き上がってきた。

「バウンドフレイム!!」

浮き上がってきたところで全力のキック。ボールは炎をまとったままバウンドを繰り返し、トリッキーな動きでゴールに吸い込まれた。

「す、スゲー!! やっぱり必殺技ってカッコいい!!」

「ナハハハハ! すごいでしょー!!」

それを見ていた淀屋達、サッカー初心者からは歓声があがり、三日月も満足げな笑顔を見せた。

「今見たとおり、必殺技を作るにあたって一番わかりやすいのは属性かねえ。炎だとか水だとかはイメージを持ちやすいよ。あとは自分の特徴とか個性を利用するのもわか



りやすいし、ありだと思おうよ」

「なるほどのう・・・なら、ワシはこの身体を活かした技でも考えてみるとするか」  
筋肉要塞の盤上が、その肉体を活用できる技を持つことができればかなり頼りになりそうだ。

「あとは属性に付け加えるのありよ。さっきの技なら炎に加えてバウンドさせてボールの動きを読ませなくしたり、有名なファイアトルネードなら自ら回転して、勢いをつけることで威力を向上させたりもしてるわ」

「なるほど、そういうのもあるのか・・・ありがとな！めちやくちやわかりやすかつたぜ！」

「へっ？そ、そうかしら！他にも色々あるから知りたかったらいつでも来なさいよ！」

他の炎系統のシユート技だと、先程の二つに加え太陽の力をボールに伝達させるアトムミックフレア。炎の魔神を呼び出し、拳と共に放つ爆熱ストームなどがある。可能性は無量大だ。

「あつ、他の人の技を参考にするのもありなんヨ」

「せやせや、むしろ最初は動画とかで見てそのまま覚えた方がええかもしれんな。慣れてきたら自分で考えたり、アレンジしたらええで」

たとえば彼女、支倉が使うコールドカッターはスピニングカットという技を元にして

いる。これは木戸川清修の西垣という選手が使っていたのだが、支倉はまずこれを覚え、そこから自分なりにアレンジしたのだ。

「よし、それじゃあ今日も練習するぞ！みんな位置につけー！」

とにかく一つ軸にできる技を覚えれば、そこから派生させたり、連携して威力を上げることまでできる。何か一つだけでも覚えておきたいところだ。

「支倉先輩！なんか野球に関連した技とかないつすか？」

「うーん・・・あるにはあるけどやめとき。色んな意味でオススメできる技ではないわ」「じゃ、あたいは頑張ったんで今日はこの辺で・・・」

「・・・斧街？」

「わ、わかったよ・・・もう少し頑張れるよ・・・」

FFの地区予選までもう三ヶ月を切っている。時間は限りなく少ないないが、諦めるなんてつまらないことはしない。可能性があるのなら、それに賭けるだけだ。

それからしばらく必殺技の練習を続け、気がつくとすでに日が暮れ始めていた。

「それじゃあ今日はこのぐらいにするか！お疲れさま！」

当たり前だが、この日の練習で必殺技を完成させたものはいなかった。無理もない。

そんなに簡単にできるなら最初から教えている。

ある程度基礎を完成させ、技のイメージを作り上げる発想力、それを現実のものとするための身体能力、完成まで地道に努力できる忍耐力。それらが揃って初めて完成させることができるのだ。

「ガツハツハツ！必殺技こそできんかったがいい汗を掻いたわ！」

「・・・難しいな」

「そうだね。なかなか上手くないものだ。いかにサッカー選手が努力をしているかということがうかがえるよ」

ひとまず今日の練習はこれでおしまい。それぞれ感想を口にしながら、部室に戻っていく。

だが、東条だけは戻ろうとせず、何かを考えていた。

「イメージ・・・イメージか・・・そうだ！おい淀屋！」

「なんや、どないしたんや？」

やがて考えがまとまったのか、東条は部室に戻ろうとしていた淀屋に声をかけた。

「日曜あたりに・・・いいか？」

「おう、別にかまへんぞ」

「サンキューな！助かるぜ！」

結局何を話していたかはわからないが、日曜日がどうだとか言っていた。おそらくプライベートの話、それならば介入するのはよくないと感じ、聞くことはしなかった。

「さて・・・今後はどうしようか・・・」

今日の練習の様子だと、全員努力できるタイプらしい。これなら時間さえかければ、ちゃんと必殺技を会得することが可能だろう。

だが、それでは間に合わない。FFに間に合わせるには練習だけだと間違いなく間に合わない。練習だけでなく、何かしらのきっかけ・・・起爆剤がないと勝ち上がることはできないだろう。それこそ試合などができれば一番いい。

「どーしたもんかな・・・?」

いくら努力しようが、それだけでは限界がある。折角出られるようになったのだ。できることならば勝ちたい。

「そうだねえ、ダメ二元で頼みに行ってみるかい?」

「うおっ!ビックリした・・・」

いつの間にか斧街が隣にいた。こちらの考えを汲み取ったのか、他の中学に相手になつてくれないかと頼みに行こうと提案した。

「そうですね・・・やるだけやってみましょうか!」

こんなでできたばかりの素人チームとわざわざ戦ってくれるかは甚だ疑問だが、もしか

するといえるかもしれない。手当たり次第回ってみることにした。

「練習試合?・・・ええやん、面白そうやな!」

「・・・へっ?いいんですか!」

手始めに一番近くの学校に頼みに行ってみた。ただ時間も微妙なので、サッカー部の人はいないかもしれない。仮にいたとしても断られるだろうと思っていた。

だが、運のいいことにサッカー部の人はまだ何人か残っており、しかも思いもよらぬ返事まで得ることができた。

「おいおい、そつちから言い出した癖に何驚いてんねん?こつちはいつでも相手になつたるわ!」

「おおおお!!マジですか!?!本気と書いてマジですか!?!」

「いやなんで二回も言ったんだい?」

あまりの嬉しさに混乱しているのか、同じことを言っている。いや、本当という意味のマジと本気という意味のマジだから意味はちよつと違う。意味がわからないという点では合っているが。

「あつ！みんなに伝えないとな!!ちよつと行つてきます!!」  
「えつ?ちよつと待つ——」

まだ正式な決定ではなく、具体的な日にちなども聞いていない。試合したかったのはわかるが、はしやぎすぎである。

そもそももうみんな帰っているだろうし、学校に帰ったところで仕方ないだろう。まあ追いかけるのもめんどくさかつたので、放つておくことにした。

「元氣なやつぢやな。これは試合が楽しみやな」

「それはそうと、なんであたいらのところとの試合を受けたんだい?他に戦うところはなかつたの?」

練習試合といえど、そう簡単にできるようなものではない。他の部活との兼ね合いや時間の都合、遠い場所なら移動費などの予算もかかる。

正直こんなできたばかりのチームよりも、ある程度経験のあるチームと試合した方がよっぽど良い練習になるはずだ。

「なに、自分らもなんだかんだできたばつかのチームでな。試合に飢えとるんや。それに試合が一番の経験やし、受けといて損はないやろ」

とりあえず近かつたからという理由できたが、どうやらここも最近できたばかりのチームらしい。たしかにそれなら受けられる試合はなるべく受けておきたいかもしれ

ない。

しかし・・・それだけが理由ではないだろう。

「・・・それに地区予選で戦う可能性がある以上、データを取つといて損はない・・・つてところかい？」

「なんやバレとつたんか。つまらんなあ」

実践練習をしつつ、今後戦う可能性のある相手のデータをとる。たしかにそれなら戦う価値もあるだろう。

「まっ、情報も大事やが戦うのが楽しみってのは嘘やない。楽しみにしとるで！」

「はいはい、こつちも楽しみにしてるよ。そろそろ試合しないと限界だろうしねえ」

「素人とはいえ試合はしたいやろうからなあ。なんなら試合ためにサッカー部に入ったみたいなものやし」

「・・・まっ、そんなとこだね」

両者不敵な笑みを浮かべ、斧街はこの男と練習試合の段取りを決めるのだった。

## 初試合！輪成中学！①

前回の必殺技の練習から実に一週間。ついにその日がやってきた。

「……この日が来たツツ!!!」

目を覚ますやいなやフルスロットル。朝食を掻き込むように平らげ、一瞬で荷物をまとめて勢いよく家を飛び出し、全速力で学校に向かう。

「おはよー!!!」

「おっ、おう……」

学校についてからもテンションは高いままをキープ。そのせいで周りから少し引かれたり、授業中にはずっとニヤニヤしていたせいで度々怒られた。

それでもテンションは一向に下がることなく、そのままの調子で放課後を迎えた。

「みんな！急いで準備しろー!!早くしろー!俺は待ちきれないんだー!!」

普段から明るい彼だが、それにしても今日は異常に高い。何かしらの薬の使用が疑われるが、決して法に触れるようなことはしてない。

それなのば、なぜこんなことになっているのか？

「まったく、子供みたいですね。少しは落ち着いてくださいよ」



「でも僕も楽しみですよ。あんな風にはなりません。……だから地味なんですかね……?」

余りのテンションの高さに星見からたしなめられる。そして存在感を出すためには、ああすればいいのかと血迷う千景。

「これ以上アホの子が増えても困るからキミはそのままでもいいよ。めんどくさいし」  
本当になってしまおうと困る。何よりあんなのが二人もいると面倒なので、星見がとめる。

「でも楽しみなのはわかるんヨ。初めての試合だもんね!」

「そうじゃのう。ワシもこの日が待ち遠しかったぞ!!」

ここままで赤城のテンションが高い理由。その理由は前回の練習試合の話が関係している。

サッカー部が創設されてから初めての試合。ついに本格的に始動するのだから、気持ちが高ぶるのは当然だろう。

実際赤城以外のメンツも、いつもと比べると全体的にテンションが高くなっている。もちろん赤城ほどではないが。

「そうだろうさだよなー!! なんだって試合ができるもんなあ!!」

それにしても赤城だけは異常なほど高い気がする。いや、気がするではなく間違いな

く高い。

だが、無理もない。自業自得ではあるものの、創設してから一年もの間はずっと試合できなかった。他よりも長い間、彼は待っていたのだ。

それが念願叶ってようやく試合ができる。そう、一年もかかってしまったが、一つ夢が叶ったのだ。

「赤城、輪成中学というのはどんなチームだ？」

他にもサッカー部のある中学はあるのに、こんな素人チームとわざわざ試合を受けてくれたのだ。裁野もどんなチームなのか興味があるのだろう。

……もつとも彼の場合は試合でどう立ち回るかを考えるために相手のことを知りたいのだろうが。

「輪成っていったら近所にあるところか。あそこにもサッカー部あったんだな」

「知らなくて当然だよ？ あそこは二年前に創部されたみたいだけど、試合経験も少ないし、大会に出たのは去年が始めて。世間にはあんまり知られてないみたいよ」

どうやら華咲が色々調べてくれていたようだ。調べた結果によると、一年差で創部されていたことが判明した。そうなると少しだけ親近感が湧いてくる。

「へえー、こっちは一年前で向こうは二年前か。これは負けらんねえな！」

「まっ、一年前に創部とはいえこっちは実質今年からのようなもんだからねえ。二年で

広がった差は大きいよ?」

そう言つて、斧街はチラリと赤城の方を一瞥する。

「そ、それはすみませんでした……。でもこうして試合できるわけだし、今日は楽しんでいきましょうよ!」

まるで悪びれてない。たしかに過去のことはいくら後悔しても帰つてこない。過去に後悔するぐらいなら、今日の前にあることを解決した方がいいだろう。

ただ、少しぐらいは反省してもらいたいものだ。

「キャプテン。全員の準備が整つたようだ」

「そうか!それじゃあ急いで出発だー!!」

もう待ちきれないと言わんばかりの満面の笑みを浮かべ、輪成中学にむけて歩きだした。

「……ここか?」

出発し、歩くこと数十分。目的の場所にたどり着いた。

「ああ、ここで間違いない……多分」

念のために確認し、正門から堂々と中へ入る。まだ残っている生徒も多く、物珍しそうにこちらを見ている。支倉や東条はそれに対して手を振ったりしていた。

「うーん、なんだかいい匂い・・・釣られそうになるね」

「思ったんやけど、校舎とかつて建てんのいくらぐらいかかるんやろうな？」

他にも呑気な会話が聞こえてくる。今回が初めて試合となるわけだが、意外と緊張してないのだろうか？

「・・・おつ？来よつたな」

校舎を見ながらしばらく歩いていくと、ユニフォームを来た人達が現れる。間違いない、この人達が今日の相手だ。

「前は自己紹介できへんかったな。俺はキャプテンの三堂豹馬や。素人同士なかようしような」

「はい！俺は赤城太陽！城翔中学サッカー部のキャプテンです！今日をお願いします！」

お互いに軽く自己紹介をし、ガッチリと握手をかわす。

「よっしゃ、早速やけど移動しよか。ついてき！」

「はい！」

向こうも早く試合がしたいのか、すぐに案内を始める。赤城達も三堂の後をついて

いった。

「ふーん、あれが相手チーム?結構強そうじゃない?」

「けどわりかし最近できたらしいで?たしか一年前やったかな?」

「じゃあ俺らんとことほぼ同期やん。親近感沸いてくんなあ」

「ほぼつて言ってるけど一年差よ・・・?まあいいけどね、そんな細かいこと」

「よそんなこに負けんなー!派手にやったれー!!」

グラウンドに到着すると、すでにギャラリーが集まっているのが確認できる。

「どうやら校内で噂になっていたらしく、試合を一目見ようとギャラリーも大勢集まってきたようだ。さすがは人気スポーツのサッカーだ。」

「おお・・・サッカーは全然知らなかったけど、結構盛り上がるんやな・・・」

「うう・・・試合自体は初めてじゃないけど・・・やっぱり緊張するんヨ・・・」

試合前に調整をしていると、ちらほらとそんな声が聞こえてきた。さすがに試合前となると緊張するらしく、数名を除いて表情が固い。

「・・・よつと」

そこで、耳元で思いつき手を鳴らしてみる。パンツと乾いた音が辺りに響いた。

「ひゃあ!」

「・・・!驚きました・・・」

よほど緊張していたのか全然気づいておらず、ビクツと肩を揺らし、驚いていた。

「ちよつ、何してるのよ!?!ビックリしたでしょ!」

「いや、折角の試合なのに緊張してたからさ・・・これで落ち着いたか?」

「えっ?ま、まあたしかに少しは落ち着いたけど・・・」

多少荒療治ではあるが、こうすることで緊張を緩和させることができる。タイミングを間違えたり、知らない人にやるとめちやくちや怒られるのでオススメはしない。

とりあえず多少は緊張がとれたようなので、ここでもう一押ししておく。

「みんな、初めての試合だから緊張するだろうし、不安もあると思う!俺も内心はドキドキしてる!!」

むしろ緊張するなという方が難しい。普通の人でも試合慣れするまでは緊張する。ましてや初絡みとなると、その不安は大きいだろう。もちろん赤城にも不安はある。

「でも難しく考える必要なんてない!勝ち負けは置いといて、まずは初めての試合を楽しもう!!そうすりゃ自然と結果はついてくるさ!!」

それでも純粹に楽しもうとする赤城の姿に周りもつられ、自然と笑顔になる。そう、まずは楽しむこと。それがサッカーをする上で一番大事なことなのだ。

まあ実際は赤城も結構不安に思っていたりするのだが。それは態度にも顔にも出さない。だってキャプテンだもの。加えて始めての試合ということもあり、不安もあるものの楽しみという気持ちが勝っていた。

「苦節一年、やっとキャプテンらしいことできたねえ」

「それは言わないでくださいよ!?!?気にしてるんですから!」

この一言さえ言われなければ、完璧に決まっていた。

城翔中学フオーメーション

——麻宮——三日月——

——赤城——

——佐原——星見——

——盤上——

——淀屋——千景——

——支倉——黒鉄——

——東条——

輪成中学フオーメーション

—— 鶴葉 —— 南仁輪 ——

—— 三堂 ——

—— 太井正 —— 京破 ——

—— 河内 —— 西谷 ——

—— 能寺 —— 梅岡 —— 西谷 ——

—— 芳本 ——

これが初めての試合、色々と試してみたいことがある。まずは一年生や初心者を出して、様子を見てみることにした。

そしてコイントスの結果、ボールは城翔中学からだ。

「みんな、まずは自由にやってみようぞ！」

赤城の一言の後、ホイッスルが鳴らされる。まず麻宮は三日月にボールを渡し、続けて佐原にボールを回した。

「自由にか。難しい注文だね。とりあえずできるだけのことをやってみようか」

ボールを受け取った佐原は確実に、そして丁寧にドリブルをし攻め上がる。彼女が持ち合わせているスピードもあり、いいペースで前に運んでいる。

「いただききつー！」

「む、させないよー！」



だが、まだまだ甘い箇所がある。そんな隙をみすみす見逃してくれるわけがなく、スライディングを仕掛けられる。

それを練習でやったように避けようとしてみたが、やはり練習と実践ではまるで違う。完全に避けることはできず、ボールは弾かれてしまった。

「オーケー、あとは任してください!」

しかし、こぼれ球は赤城がしっかりと拾って再度攻撃を仕掛ける。

「河内、西谷!二人がかりで止めろ!」

「任してください!」

「俺アは簡単にはやられたりせえへんぞ!!」

二人の選手が道を遮る。このまま強引に突破するか、それともパスを出していったん体勢を立て直すか。答えは・・・

「正面突破してくのみ!」

その瞬間、赤城の背中から炎が燃え上がる。

「な、なんだ!?!」

DFの二人が驚いている間にも炎は燃え続け、次第に形状は歪な翼の形へと変化していく。

「追えるもんなら追ってみろー!!ヒートウイング!!」

燃え上がる炎の翼を大きく広げ、ボールを上手くキープしながら二人の頭上を飛び去った。

「おお、なかなかやるやないか。だがすぐってアツツウ!？」

飛び去った赤城の後を二人が追いかけてようとした瞬間、地中から突然火柱が噴出し、追いかけてようとする者達を遮る。

「麻宮ー! 思いつきりいいぞー!!」

相手のデIFエンスを見事に振り切った赤城はF Wの麻宮に繋ぐ。

「・・・ああっ!」

ボールを浮けとった麻宮は持ち前のスピードとテクニクを活かし、DFを華麗に突破。キーパーとの一対一に持ち込む。

「まずは一点・・・決める!」

ゴールに狙いを定め、一睨み。すると地面が一瞬にして凍りつき、氷のフィールドが形成された。

「フリーズショット!!」

蹴り出したボールは氷をまといながら超スピードでゴールを襲う。

「うおっ!?! はや——」

相手は素人と聞いていたので油断もあった。しかし、それを差し引いても速い。なん

ならその辺の選手よりも遙かに速く、鋭いシュートだった。

キーパーの油断に加えて麻宮の実力が重なる。まずいと感じた頃にはもう遅く、すでにボールがゴールネットを揺らしていた。

「しもたな・・・完全にやられたわ」

「おおおおお!!!やったぞ!!!みんな、先制点だ!!!」

初試合で相手から先制点を奪う。赤城は嬉しさのあまり、自分が決めたわけでもないのにガッツポーズを決めた。

正直なところ、まさかここまで上手いくとは思っていなかった。もちろんいいチームだとは思っているし、相手の油断もあつたとは思うが、それにしてもまさかここまで力があるとは予想外のことだった。

「なあ、あいつらこの間創部したんだよな?」

「なんか強くな?あれで初心者なのか?」

対して輪成中学のメンバーは、城翔中学の実力に驚いていた。城翔中学はつい最近できたばかりの無名チームと聞いていたので、実力は対したことないと思っていた。自分達も人のことを言えるほど強いわけではないが、さすがに素人に翻弄されるようなことはないだろうと思っていた。

だが、実際は予想を超える強さだった。本当に初心者なのかを疑うぐらいには、完成

されたプレーをしていた。

・・・実のところ、城翔中学にはサッカー経験者が十人いる。しかもただの経験者ではなく、強豪校にいたり、かなりの実力を持っていたり・・・とかなり手練れの経験者が集まっていた。そのため、その辺のチームよりは強いチームに仕上がっていた。

「みんな落ち着くんや。こんなしよっぱなから慌ててどないすんねん」

驚きを隠せない輪成中学のメンバー。そこにキャプテンの三堂がやってくる。

「たしかに思ってたよりはやるみたいや。けどな、勝たれへんような相手でもないぞ？」  
三堂の言葉にハツとする。たしかにこちらの予想よりも強い。それは間違いないことだ。

しかし、予想よりも上だっただけ。冷静に相手のプレーを振り返ってみれば、まだ自分達の方が実力は上だ。

「気持ちで負けたら話にならんぞ！しっかりせえ！」

キャプテン直々に気合いを入れ直したところで試合が再開。

こちらが点を入れたので、今度は相手からのボールだ。

「さつきみたいにくと思つたら大違いやぞ!!」

やはり先程は油断があったのか、比べてみると明らかに動きがよくなっている。

「ワシが相手じゃ！かかってこい！」

「ワイがいることも忘れとつたらアカンで!!」

それでも臆することはなく、盤上と淀屋の二人が行く手を阻む。

「おー、連携がようとりれてるなあ……」

三堂は一度その場で止まり、じつくりと動きを見る。

そして、獣の力をその身に宿し、キラリと瞳を輝かせる。生物が本来持っている野生の本能を解放した。

「でもな、そんな守りじゃ甘いで?……ワイルドパンサー!!」

しなやかでありながらどこか野性的なステップ。二人を圧倒し、僅かな間を華麗に抜き去った。

「おおーっと、うちんとこのキャプテンの華麗な必殺技だあああ!」

「さすがキャプテン!芸術点は満点だ!!」

「しかもモフトパンクキューザーなので得点はさらに十倍に!」

「サツカーで得点十倍ってどういうことなんヨ!」

「おおつ、ナイスツツコミ!」

「えっ?……あ、ありがとう?」

これは褒められたのか?ありがとうと言ってるし、一応褒められたのだろうが……なんだか釈然としない。

しかしそれを深く考えている場合ではない。もうすでに三堂は鶴葉にパスを出し、キーパーとの一対一に持ち込んでいる。

「これで振り出しだな!!ローリングキック!!」

フィギュアスケーター顔負けの勢いで回転し、そのままの勢いを乗せてボールを蹴る。

正直他と比べるとあまりパツとはしないが、あれでも一応必殺技だ。普通にシュートするよりは威力が高い。

「まずい!?誰か援護できないか!!」

この世界では技には技で対抗するのが常識。というのも、超常的な技に対して、ただ普通に止めようとしても止められるはずがない。

例外があるとすれば二つ。

一つはシュートブロックだ。何人かで蹴り返そうとしたり、身を呈して阻めば威力は落ちるため、技を使わずとも止められるようになる。

もう一つは身体能力の差。たとえば幼い小学生が必殺技を使ったとしても、相手が筋肉モリモリマッチョマンの変態なら意味がない。技など必要ないだろう。

「……すまない、ここからでは間に合わない」

「すまん!うちもここからじゃ無理や!やから斬君、あんたが止めるんや!」

しかし先程にもあったが、状況は一对一。シュートブロックはどうあがいても間に合わない。

そして、東条は身体能力は平均以上ではあるものの、所詮はそれまでだ。ましてやサツカーは素人。このままでは確実に決められてしまうだろう。

「へへっ、何もしてなかったわけじゃないぜ?」

だが、なぜか東条は不敵な笑みを浮かべ、ゆつくりと息を整え始める。そして彼は、イメージを頭の中に思い描いた。

「今ならいけるぜ!!」

その言葉と同時に、右手に青色のエネルギーが発生。それは徐々に形を変え、鉤状の形を形成した。

「あれは!?!」

「見てな!!これが俺の必殺技、キラーブレードだ!!」

腕を振りかぶり、鉤をボールに叩きつける。しばらく拮抗したのち、ボールを切り裂き見事に止めた。

「す、すごいぞ東条!!いつのまにそんな技を覚えたんだ!?!」

赤城の記憶では、東条は技を完成させることはできていなかったはず。そもそもイメージを固めたのかもわからない。

「東条、お前まさか日曜のやつって・・・」

「おう！前にイメージが大事って言ってたろ？だから映画を見てそこから着想をな！あとはこつそり練習してた！」

「やつぱりそうやったんやな！なんかおかしい思ったらワイに黙ってそんな思惑を張り巡らせとつたんか！ズルいぞ！！ワイはあの映画見てた時はポップコーンが美味かったぐらいいしか考えてなかったんやぞ！！」

どうやら淀屋には何か心当たりがあったらしい。なんだか不服そうにしている。

「まあまあ、今は試合中だしその話はあとにしようぜ？何か奢ってやるしさ」

「言うたぞ！絶対に忘れたなんて言わさんからな！あとでそこそこ高いもん奢ってもらうぞ！！」

奢りという魔法の言葉により、東条は許された。あのままずっと話され続けても困るのでありがたいが、それでいいのか淀屋よ。

「じゃつ、あとは頼んだぜ！！」

東条が投げたボールを佐原がトラップし、追加点を取るために再び攻め込む。

「まさかこんな苦戦するとはね。でも、こつちも黙ったままじゃいかないぞ！！」

だが、またしても阻まれる。先程の二の舞になりたくはないが、相手は経験者、対してこちらは始めてまだ間もない素人。普通に勝負しても突破するのは厳しいだろう。



「・・・そうだね、一か八かでやってみよう」

ならば可能性に賭けてみよう。それに、後輩が成功させたのだから、先輩が意地を見せなくてどうするのだ。

「覚悟はできたかな?今度こそいただくよ!」

相手が迫ってきているが、そんな時こそ冷静に。そして駆け抜けるのだ。相手を置いていき、目で追わせない。そう、風のように、速く――

「・・・疾風ダツシュ!!」

それはまるで吹き抜ける一陣の風。他を圧倒するスピードで、一気に抜き去った。

「おおっと!」

「物は試しというけどやってみるものだね。それじゃあ三日月、あとは任せるよ」

東条が必殺技を完成させたことによる相乗効果か、佐原も技を完成させることができた。これにより勢いに乗った城翔中学は相手を少しずつ押し込んでいく。

「アクロバットキープ!!」

名のとおりアクロバットな動きで翻弄。大地、そして空をも駆け、相手に手を出させない。

「このまま二点目もいただくんヨ!!バウンドフレイム!!」

ダイフェンスを突破した三日月はすぐにシュートを打つ。炎をまとったボールが右、

左、右と不規則に跳ね回る。

「もう油断はせえへんで!!」

先程のようにはいかない。今度こそは止める。その思いを胸に、芳本が右腕を掲げる。すると、何かが手に収まった。

色は白。扇のような形だが、扇と比べるとかなり巨大で叩くための形状をしており、やや不格好だ。

そう、これこそがツツコミ道具の一つ、ハリセンである。

「ヒツティングハリセン!!」

通常サイズのものより無駄にデカイハリセンを向かってくるボールに叩きつけ、見事に弾き返した。

「くくくつ、ナイスだぜ!」

大きく弾かれたボールは京破は確保。やや乱雑にディフェンスを突破していく。

「よし、ここから先は行かさへんで!!」

破竹の勢いで突破していた京破だったが、まだ技も使えず、決して才能があるとも言えない淀屋が必死に食らいつく。

このままだけは勝てる。そのためには、DFである自分が守るしかない。いつものおちやらけた態度はそこにはなかった。

「邪魔だなこの野郎!」

「今だけは嬉しい言葉やで!」

相手の動きを上手く阻害し、先へ行かせない。充分な仕事ができている。

「でも、少しは周りを見た方がいいんじゃないかねえの?」

「・・・っ!しもた!」

気づいた頃にはもう遅い。京破は淀屋の死角にいた南仁輪へとパスを出した。

「よくここまで頑張ったなあ。けど、今度こそ同点やで!!」

ニヤリと笑みを浮かべると、青い光に包まれたボールを真上に蹴りあげる。

「さあさあみんな、大阪に来たのなら寄つてきいや!通天閣シュート!!」

ボールは一定の高さでとどまり回転。さらに大阪の象徴、通天閣を背景にし、高所から激しく回転するボールを蹴り落とす。

「上等だ!キラーブレード!!」

東条も習得した技で対抗。切れ味抜群の刃物でボールを叩き切ろうと試みる。

「・・・ぐつ、なにい!」

だが・・・健闘むなしく、東条の技は破られてしまった。

「よおおおし!まずは一点やでえ!」

決めた南仁輪が吠え、見ていたギャラリも一気に沸き上がる。

「おつかしいな。止められると思ったんだけどな・・・」

一方東条は何がダメだったのか、疑問符を浮かべていた。正直この強そうな技なら、どんなシュートでも止められるんじゃないかと思っていた。

そこへ、なんだか話しくそうにした支倉が声をかける。

「・・・あのな、斬君。そのキラーブレードって技やけど・・・もうあるんや」

「・・・えっ?」

「ついでに言つてやろう。それはそこまで強い技とは言えない」

「ええっ!」

「・・・それに通天閣シュートはそこそこ強い技なんですよ」

「ええええええええ!!??」

驚愕の事実。認めたくない現実。そして止められなかった理由。さまざまな思考が混ざりあい、ガツクリと肩を落とす。

まさか必死に考えた技がすでに世の中にあり、ましてや弱い技・・・シヨックを受けてしまつて当然だ。これはもしかすると、しばらく立ち直れないかもしれない――

「で、でも普通なら必殺技を完成させるのにもつと時間がかかるんヨ!だからもつと自信持つて!」

「そうだよなあ!普通は無理だもんなあ!やっぱり俺はスゲエよなあ!!」

褒められるとすぐに立ち直った。・・・褒められたから立ち直ったのか、それとも褒めてくれたのが女子だったから立ち直ったか、どちらにせよそれでいいのか東条よ。

そして、ここから一方的な試合展開になってしまふ。

「よっしゃ、ガンガン攻めてくぞ!!」

「みんな、ここが踏ん張りどころだぞ!!」

最初こそ順調だったが、やはりそう上手くはいかない。一年という期間は大きく、徐々に自力の差が見え始める。

「・・・っ!すまない・・・」

「大丈夫や!気にせんでええぞ!」

初心者組のミスは経験者組がカバーしてなんとか持ちこたえようとするも、少しずつ差が広がってしまう。

「通天閣シュート!!」

「キラードブレード!!」

必死に抵抗するも、流れには逆らえない。次第に疲れも見え始め、ドドメの一点を入れられて前半が終わった。

得点は三対一。やはりあの一点から試合の流れが傾いてしまった。この二点差、どうやったら返せるのか・・・正直思いつかない。

「いやあ、練習と試合は違うもんやな」

「・・・そうですね。後半はもつとチームに貢献したいです」

ベンチに戻りながら前半を終えての感想を話す。聞いてみると、思ったように動けなかった者がほとんどのようだ。

「みんなよく頑張った！初めてでここまで戦えたんなら」

気休めなどではなく、初めての試合にしてはよく頑張ったと思う。三点で止められたのなら上出来だ。なんならもつと大差をつけられてしまうかもしれないと思っていた。負けても仕方ない試合でこれなら何も問題は無い。

「・・・じゃ、これからはあたいの出番かね？」

「みんなよく頑張ったわね。あとは私に任せておきなさい！」

そして、ベンチに座っていた経験者達がゆっくりと立ち上がった。

## 初試合!輪成中学!②

前半が終わり、ハーフタイムに入る。タオルで汗を拭き、水分補給も忘れない。時間は僅かだが、この間に少しでも疲れをとる。

「すみません。不甲斐ない結果ですが、あとはお願いします」

「あなたは怪我のこともあるし、無理は禁物だよ。今はゆっくりと慣らしていきな」

「ガツハツハツ!もう少しこらえたかったが・・・今のワシじゃこれが精一杯じゃ!」  
「大丈夫ですよ。私に任せてください。まあ点を取るのは私の役目じゃないですけど」

前半に出場していた選手のスタミナや実力などを考慮し、交代する選手を決める。

交代するのは怪我のことがある麻宮、まだ動きの甘い淀屋と盤上、動きは悪くなかったが、スタミナが心配な佐原の四人。

この四人が変わって、後半からは温存しておいた経験者を投入し、流れを変える。これでなんとかなればいいのだが・・・

「ワイの出番もこれでしまいか・・・もうちょい出たかったな」

怪我などのアクシデントが起こらないかぎり、おそらく今日の試合ではもう出ることはないだろう。あとはベンチから試合を見て、応援することしかできない。

「おい、出番はないかもしれないが試合はよく見ておけ」

すると、淀屋の独り言を聞いていたらしい裁野が声をかけてきた。

「成長に繋がる何かを見つけられるはずだ。そうすれば次の時には叩き潰せる」

「わ、わかったっす!」

目付きと口調の悪さが相まって少し怖いのが、彼なりのアドバイスである。決して悪いものではないので、素直に受け止めたい。

城翔中学フオーメーション

——斧街——三日月——

——赤城——

——獅子神——星見——

——華咲——

——黒鉄——千景——

——支倉——裁野——

——東条——

数名メンバーを交代し、位置につく。いよいよ後半戦が始まる。

「はっはっはっ、モンキーターン!!」

「後半も遠慮せんからなあ! ワイルドパンサー!!」



相手は後半開始直後から必殺技を多用し、猛攻を仕掛ける。城翔サッカー部の面子は必死に食い止めようとするが、ゴリ押しで突破されてしまう。

「結構やるんだね。でも、ここで止めるよ」

突破され、これ以上追加点を取られてしまうと試合が決まってしまう。先にはいかせない、華咲が三堂の前に立ち塞がる。

「口だけならなんとでも言えるで!。パンサーステップ!!」

必死に食らいつこうとするも、やはり必殺技と通常のプレーでは厳しいものがある。奪うどころか、触れることすらできなかつた。

「残念やったな!。お前の負けやで!」

三堂の言うとおり、自分の負け。残念ながらここで止めることはできなかつた。

だが、特に悔しくはない。そもそもここで抜かれようが構わない。今この場に置いて大事なものは、自分に注意が向いているかどうか。

・・・そう、これは個人戦ではない。何も自分が止める必要などないのだ。

「そうね、たしかに私の負け。・・・でも、これはチームでの戦いだよ?」

華咲に注意が向いていたため、気がつかなかつた・・・死角から静かに目を光らせていた男の存在に。

「サイクロン!!」

「のわっ!？」

隙だらけの状態では荒れる暴風に耐えることができるはずもない。三堂は容易く吹き飛ばされた。

「前半は散々やられたからな。かたきはとらせてもらおう」

裁野は奪ったボールを即座に蹴り出し、それを星見が胸でしつかりとトラップ。一気に中盤まで持ち込むことに成功した。

「みんなすまん！奪われてもうたわ！」

「へっ、すぐ取り返せば問題ないっすよ！」

星見の近くにいた太井正が、取り返すから気にしなくていいとフォローする。そう、取られたなら取り返せばいいのだ。

「ふうん、取り返せるものなら取り返してみなよ。まっ、無理だと思うけどね」

それを聞いていた星見が、来いと言わんばかりに相手を挑発する。

「な、なにい?・・・いいいぜ、それならすぐにでも取り返してやんよ!!」

どうにも煽り耐性が低いのか、すぐにこちらに突っ込んできた。

正直動きが単調になってくれればそれでいい程度に考えていたが、まさかここまで乗ってくるとは思いもしなかった。

しかし、どちらにしろチャンスには変わらない。

「ムーンサルト!」

充分に相手を引き寄せ、体操選手顔負けの動きで猛進してきた相手の頭上から一回転。そして、華麗に着地を決めた。

「まさかこんなに上手くいくとは思わなかったよ」

「ちくしよー!!油断したー!」

挑発的な笑みを浮かべ、着地後すぐに三日月へとパスを繋ぐ。

「今度こそ決めるんヨ!バウンドフレイム!!」

パスを受け取った三日月はすぐさまシュートに移行。再び跳ね回る火球が相手キーパーを襲う。

「さつき止めとるから問題ない!また打ち返してカウンターや!!」

とはいえあの技はさきほど防いでいる。たしかにバウンドしているため多少面倒ではある。だが、慎重にどちらかに飛ぶか見極めて、正面から技を叩き込めば防ぐことは容易い。

・・・にも関わらず、なぜか三日月は笑っていた。相手が確実にミスをするという確証でもあるのだろうか?

「・・・獅子神さん!あとは任せるんヨ!!」

その答えは、すぐに知ることとなった。

「任せておきなさい！あんたのシユートは無駄にはしないわ！」

いつの間にか、獅子神がゴール前にまであがってきていた。彼女もまた足が速い。不規則に跳ね回まるボールに、一瞬で追いつく。

「くらいなさい!!ライオン・・・ハートツ!!」

女の子らしからぬ大きな雄叫びを上げると、音のエネルギーがボールに吸い込まれていく。

すると、ボールの色が今度は女の子らしい鮮やかなピンクに変化し、形もハートへと変化したボールをシユートする。

「おいおいマジかいな!?・・・ええい、ヒツティングハリセン!!」

まさかのシユートチェインに驚きながらも対抗。しかしこればかりはさすがに厳しく、あっさりと力負け。一点差にまで詰め寄った。

「ありがとね!おかげで助かったんヨ!」

「ふふん、そうでしょう!!あんたのシユートもすごく良かったわよ!!」

よつほど嬉しかったのか、二人はハイタッチしてお互いに褒め合う。

「くそー、なんかえらい笑つとるとは思ったけど、あんなことしてくるんか・・・」

まさかシユートチェインをしてくるなんて思いもしなかった。もう油断はしていなかったのだが、いくらなんでもあれを読めというのは無理がある。

「いやー、見事にしてやられてもうたな」

止められず、悔しがる芳本の元へ、キャプテンの三堂が話しかけにきた。

「短期間であれだけのことを身につける・・・ありや厄介でっせ」

F Fの予選が始まる頃にはどれだけ成長しているのだろうか・・・わからないが、難敵になっていることは間違いないだろう。

「・・・上等や。むしろそれぐらいやってくれんと俺らんとこに火がつかんわ」

芳本の言葉を聞いた三堂は、不敵な笑みを浮かべてみせた。

それから試合が再開するも、しばらくの間は両チームに大きな動きはなかった。

中盤付近での奪い合いが激化し、奪っては取り返し、攻め込んで取り返されるの繰り返しが続く。残り時間がどんどん減っていく。赤城はこのままでは勝てないと不安になっていた。そんな膠着状態の試合に風穴が開けられる。

「このままええとこなしで終わられへんなー！ワイルドパンサー!!」

キャプテンの三堂が意地を見せ、必殺技で強引に突破。確実に勝つならこのままゴールを保持し、適当に時間を潰せばいい。どうせ残り時間も短いのだから、それでなんとなる。

だが、それでは実質負けを認めているようなもの。たしかそうしても、勝ちにはなる。それでももらちやんと、最後まで戦う姿勢を見せる。それが真の意味で勝つということだ。

それに……こんなに楽しい試合をそんな形で終わらせるわけにはいかない。

「……先には通さん」

「おおつ、怖いなあ。もつとリラックスしたらどうや？」

言葉は短いが、そこにはたしかな意思が存在する。そう、自分はDF。ここで相手を止めることが自分の仕事。黒鉄はそれをわかっているため、必死に食らいつく。

彼にはスピードがないという欠点があるが、それでも持ち前の巨体を活かして必死に妨害する。必殺技にも警戒しつつ、なんとか食い止め続ける。

「やるやないか。でも俺だけ見てたらアカンで!!」

しかしその瞬間、ダッシュして後ろから躍り出てきた南仁輪にパスを出されてしまった。

「なんだと……っ!」

やはりこの辺りはまだまだ素人。必殺技を警戒しすぎるあまり、他の面がおろそかになつてしまっていた。

完全に隙を突かれてしまい、相手のパスにも対応できなかった。

「残念ながら快進撃はここまでやな!」

南仁輪は追加点を確信したのかニヤリと笑い、余裕を持ってシュート体勢に移行した。

「これで終わりや!!通天閣シュート!!」

今まで東条はこの技を止めることができていない。単純に経験と技の威力が足りない。

その二つはすぐになんとかなるようなものではなく、時間がある。つまり、このままではシュートを止めることはできないだろう。

「綱基君、あんたの行動は無駄にはせえへんで!!」

ただし、それは一人だというのが前提だ。

「コールドカッター!!」

シュートライン上に割り込んだ支倉が、横薙ぎの蹴りで足に溜めた冷気を打ち出す。すると、地面に触れたところから氷の壁が形成された。

「あら、止めきれんかったか!」

しかし、これではまだ止めるに至らない。氷の壁を突き破り、ボールは止まることなくゴールへ突き進む。

それでも、充分すぎるほどに威力は軽減されていた。

「支倉先輩あざっす!!キラブブレード!!」

威力の下がったところにエネルギーで形成した鈍をぶつける。一度も止められなかったシユートを見事に両断してみせた。

「おおっ!!止めやがったか!やるな!」

「みんな!頼んだぜ!!」

時間はないが、みんなが絶対に点を取ってくると信じ、なるべく遠くへボールをぶん投げる。

「あつ、やべ」

・・・ところが投げた場所が悪く、再び相手にボールが渡ってしまった。

「おおっ、こいつはラッキー!!こいつはもらってくぞ!」

本人がその失敗に気づいた頃にはもう遅い。相手のミスでボールを確保した輪成中学は再攻撃を始める。

「まずい!?!みんな止めるぞ!!」

「・・・待ってください。あれは・・・?」

東条のヘマをカバーしようとした星見が何かに気づく。

ドリブルをする太井正の近くに、前にあがっていた千景が忍び寄っていたのだ。

「・・・バニシングステイール」



気がつかれないまま射程距離内に入ったところで、静かに技の名を呟き、さらに接近する。

「・・・今です」

まったく気配を感じさせることなく、無駄のないスライディングで見事にボールを奪うことに成功する。ボールを奪取したあとは、その場からすぐに離れる。

「さーて、今回は俺がゴールまで決めてやろうかな〜!はっはっはっ!」

一見地味だが、それでいい。この技は千景の存在感のなさを利用している技。実際太井正はボールを奪われたにも関わらず、まだゴールに向かって走り続けている。

「おい!いったん戻れ!」

「へっ?なんでっすか?」

「ボール奪われたんだから当たり前だろ!」

「うえ?!あー!?!ボールがない!!」

周りに指摘されて、ボールがなくなっていることによく気づく。慌ててボールを奪った千景を追おうとするが、時すでに遅し。千景は他の選手にパスを出した後だった。

「存在感がないとあんなことできんのか!!・・・ワイもやってみるのありかもしれんな」  
淀屋には向いてないし、絶対できない。近くで聞いていた佐原は口には出さなかった

ものの、心の中でそう思った。

「キャプテン、お願いします」

「ああ、任せとけ！」

千景のパスを受け取った華咲からのパスをもらう。ボールをトラップし、一気に切り込んでいく。

「絶対にここで食い止めたるわああ!!」

ここで点を取られたら同点。自分達も必死だが、相手も必死なのが伝わってくる。

それでも負けられない。みんなが守り、繋いだボール。このチャンスをふいにするわけにはいかない。

「そうはさせない! ヒートウイング!!」

赤城は相手のディフェンスを技を使って強引に突破。そしてシュート技のない自分だと決めることはできないと判断し、ここで本職であるFWにパスを出す。

「よし! 斧街先輩! 決めてきてください!!」

時間的にもこれが最後だろう。勝つことはできないのは確定しているが、せめて同点には持ち込む。期待を込めて、斧街にパスを出した。

「はいはい・・・あたいに任せておきな」

気だるそうながらも、少し嬉しそうに返事をし、キーパーと相対する。

「サブマリンスヨット!!」

一見するとノーマルシュート。だが、違う。途中でボールが水に包まれ、地中へと沈んでいく。

「ぬおっ?!ボールが消えたで!!」

「消えてなんかないよ。まっ、似たようなもんだけど」

しばらく地中を潜航し、地面から浮上。水をまとったボールが突然相手に襲いかかる。

辛うじて反応し、両腕で抑え込もうとすることはできたが、技を使っていない彼が止められずはすもなく――

「……ぐっ、やっぱアカンか!?!」

――三点目をもぎ取った。

「ありや、もう終わりかい?折角乗ってきたのに」

そして、それと同時にホイッスルが鳴り響く。どうやらちょうど今ので試合終了らしい。

「あー、同点かー。惜しかったなあ……」

もちろんこれは練習試合。勝つことよりも経験、成長することが何よりの目的だ。

それに創部してわずかな期間でここまでの勝負ができたと考えれば、充分すぎる結果

だろう。負けても仕方のない試合で同点。悪くはない。

それでも、ここまで惜しいところまで来ると勝ちたかったような気もする。

「いやー、ええ試合やったな」

一人で悔しそうにしている赤城のところ、三堂がやってきた。

「それにしても自分らホンマにこれが初試合・・・いや、それどころか創部したばつかなか？ それにしては上手いで？」

「その辺に関しては俺も驚いてます！正直勝てるとは思ってなくて・・・でも勝ててよかったです！」

「なんやそら？おかしなやつぢやな」

自分でも驚いていると言いながら胸を張って堂々とした態度をとる赤城を見て、三堂は思わず苦笑した。というより、苦笑するしかなかった。

「まあええわ。今日はありがとな！」

「こちらこそありがとうございます！次は大会で戦いましょう!!」

最後にガツチリと握手をし、今度はF Fで戦おうと約束し、輪成中学を去った。

「しっかし勝って良かった・・・」

「なんだいキャプテン。負けるんでも思ってたのかい？」

「い、いやそういうわけじゃないですけどね！」

ここからどれだけ成長するか、それは彼らの努力次第。

## 試合後の反省会

輪成中学との試合から一日後。この日は昨日の試合の反省会をすることになった。

「FWはみんな経験者だから攻めは良かったと思う。ただ、守りに甘いところがあるね」  
たしかに今回FWとして出場した斧街、麻宮、三日月の三人は全員経験者と言うこともあり、動きは悪くなかった。このままでも充分通用するだろう。

対してDFは五人のうち二人が素人。前半は四人が出場し、その素人の二人をまとめて投入していた。当然まだ動きが悪く、改善点が多数見られた。そのせいで失点したのも事実だ。

だが、裏を返せばここからいくらでもよくなるということ。まだまだ伸び代があるということなので、そう気を落とす必要はないだろう。

「ただ、私達も精進しないといけない。点を取ることができれば守る方は楽になるからな」

それにFWがより点を取ることができれば、守る必要もなくなる。まだまだ未熟なのは、FWも一緒だ。

「・・・もう少し知識をつける必要がありそうだ」

「せやなあ。ワイもほとんど何もできんかったし、こりや練習せなアカンみたいやな」  
黒鉄と淀屋の二人は、前回の試合でチームにあまり貢献できなかった。そのため他のメンバーより成長することを強く望んでいる。その心があれば、きつと成長することができるだろう。

「まだブランクがあるな。以前の動きを取り戻さないとダメだ」

「はははっ、うちも腕が落ち取ったなあ。やっぱりたまには身体動かさんとアカンな」

他にも経験者だが、しばらくサッカーをしてなかったこともあり、久々の試合で思うように動けなかった者もいる。活躍こそしていたが、まだ本調子ではない。

「まあ初めてしては上出来だと思っけどねえ？普通ならもつと萎縮して動けなくてもおかしくないしさ」

肝が座っているのか、まだ観客が少なかったからか・・・可能性としては限りなく低い、赤城のやつが効いたのか、原因はわからない。何にせよ初めてであれだけ動けたのなら申し分ないだろう。

「よし、反省会はこんなもんにしようぜ！とりあえずみんな頑張ったってことにしてさ！」

これが現在自分達のいる場所。全員が全力を出した結果。それがあの同点だ。

ここから上に行くためには、FFで勝ち上がるためには、必死に練習するしかない。

少ない時間を無駄にしないよう、赤城達はこの日も練習を始めた。

「・・・これだな」

「おつ、ホンマや。ほな早速拝聴といこか」

まだ技を覚えていない者は、必殺技を覚える練習をすることになった。ただ、やみくもにやっても覚ええられるはずがない。

そこでまずは必殺技の動画を見ることにした。これで必殺技のイメージをより具体的に浮かべやすいようにし、そこから技を覚える。

「・・・この技は汎用性がありそうだな」

「個性的な技があるのう・・・おつ？こいつは良さそうじゃ」

「・・・なんやこれ？これってハンドちやうんか？」

比較的低い難易度の技、自分との相性のいい技、ポジションに与えられた仕事など、様々なことを考慮して何を覚えるかを慎重に選ぶ。

「それではお願いします！」

「よつしゃ、遠慮せんとガンガンきいや！」

そしてすでに技が使える人は技の強化、また連携技の習得。さらに、より強力な技の



開発をしようと試みる。

「・・・フリーズショット!!」

「ゴールドカッター!!」

ここでは麻宮と支倉がゴール付近でお互いの技をぶつけあっている。

氷の弾丸と氷の壁のぶつかり合い。その丈夫を制したのは・・・支倉だった。

「うーんやっぱり威力がないからなあ、距離があつたり出が速い技が相手やと厳しそうやな」

「・・・はい、もつと威力が必要です」

「いやいや！言うてもあのスピードならそんじよそこらのやつなら止められへん！そんな顔せんと自信を持ちや！」

表情にこそあまり出ていなかったが、落ち込んだように見えたのでそんなに気にするなとフォローをしておく。

実際あれだけ完成度が高いのだ。正面から対峙して、止められる選手は決して多くないだろう。そこまで気にしなくても問題はないだろう。

「じゃあもう一発いくんヨ！」

「おう！ガンガン打ってきてくれ！」

一方麻宮達とは反対側のゴールでは、東条と三日月が練習している。三日月がシュー

トを打ち、東条がそれを止めるといふシンプルな練習だ。

「バウンドフレイム!!」

威力こそ高くはないが、厄介なことに跳ね回る。そのためキーパーはボールがどの辺りに来るかを予想しなければならない。

「右、左、右・・・今だ! キラーブレードオオオ!! ついでえええええ!!??」

技を使ったはいいものの、不規則なバウンドを見切ることができなかつた。加えてゴールポストに鉋をぶつけてしまったせいで、腕がかなり痺れた。

「だ、大丈夫!?!」

「お、おう! 気にしなくていいぜ! これぐらいなんてこたあねえ!」

心配して駆け寄ってきた三日月に平気だと答えたが、実際のところは嘘である。めっちゃくちや痺れて痛いし動かないしで散々な状態である。

「ならいいけど・・・無理しない方がいいんヨ?」

「おう、安心してくれ!」

しかし、女の子前でカッコつけたい東条は無理して平気だと答えたのだ。とはいえこのまま練習を再開すると、バレてしまう。

「・・・そうだ! さっきのシュートなんで止められなかつたかわかるか? 俺はもう完璧に止めたつもりだったからわかんなかつたからさ!」

真面目にそれっぽいこと言っているが、これは単なる時間稼ぎである。このまま戻られてシュートを打たれたら、さすがに腕が死ぬと判断した東条のつつさの判断から出た質問である。

「えーつとね、技に集中しすぎてボールをあんまり見れてないんヨ。これに関しては慣れだからもつと練習するしかないんヨ」

「なるほどな・・・わかりやすい」

キーパーはゴールを守る最後の砦。もちろんDFも協力してくれるが、DFだけに全てを任せるとするのは酷な話だ。

絶対に突破されないという保証もない。突破されることだって当然ある。つまり、キーパーがしっかりしていないと、安心して攻めることができない。

DFには素人が多いということもあり、東条にはなるべく早く成長してもらおう必要がある。それをわかっている三日月はひたすら打ち込み、東条の成長を促そうとしているのだ。

「じゃあそろそろ再開するんヨ！」

「えっ、あつ・・・」

一刻の時間も惜しい。三日月はボールを持つと、自分の持ち場に戻っていく。あまりに突然だったので、東条の時間稼ぎはここで終わった。もちろん腕はまだ痺れている。

「お、おう！いくらでも打ってこおい!!」

・・・このあと東条の腕が死んだのは言うまでもない。

「それじゃあお願いします!」

「ああ、いつでも来い」

場所は変わって、グラウンドの中央付近。ここでは赤城と裁野が対一で練習をしている。

「ヒートウイング!!」

前回の試合でも活躍した技。炎の翼を生やし、手出しのできない空中から突破を試みる。

「甘いぞ、サイクロン!!」

「おおっ・・・のわあああああ!?!」

しかし、空中で暴風に煽られてしまい、コントロールが一切効かなくなる。なんとか持ち直そうとあがくものの、そのまま地面に叩きつけられた。

「いてて・・・ダメだったか・・・」

「やはりまだ改善が必要らしいな」

実はこの技、飛んでいる時はあまり自由に動けず、ほぼ一直線にしか飛べない。ようするに、動き自体は読まれやすく、なおかつ無防備になるのだ。

もちろん飛んでいる時点で邪魔をされることは少ないが、先程のように空中にも影響のある技を使われてしまうと対応の使用がない。

「もうちよつと動けるようになるか素早く飛べたらいいんだらうけどなあ……」

色々試しているものの、普段の生活で空を飛ぶなんてことはない。そのためイメージが掴みにくく、飛ぶのが精一杯。ここからどうしたらいいのか、赤城自身もよくわかっていない状況だ。正直どうしようもないと思っている。

「……でも、やるしかないんだよな。裁野先輩！もう一回お願いします！」

「当たり前だ。できるようになるまでやるぞ」

考えてもわからない時は、実際に身体を動かしてみるのが一番。赤城はその後も自身の必殺技の調整をし続ける。

……が、なかなか上手くはいかない。個人の感情としてはもつと続けたい。あまりチームに迷惑をかけたくないという思いもあり、なんとかして改良したいが、無理をするのもよくないので一度休憩を挟むことにした。

「腕が……俺の腕が……」

「だから無理しない方がいいって言ったんヨ？」

「ほーん、ホンマに痛いんかいな？」

「いででで!!触んたって!!俺の腕はいまめちやくちヤデリケートなんだ!!」

「いや、うちは全部演技やと予想したで？ここは綱紀君にいつちよ試してもらおか！」  
「・・・俺の力が必要か？」

「それはシャレにならねえからマジでヤメロって!」

「・・・なんだい？こつちはずっと仕事してたっていうのに随分と楽しそうじゃないか。  
まあ練習は免除だからいいんだけどねえ」

みんなで楽しく雑談していると、斧街先輩達がやってきた。一応言っておくが、今回はサボっていたわけではない。

「お疲れさまです!!それで監督の件どうでしたか!」

獅子神、千景、そして斧街の三人は監督をしてくれる人を探しに行っていた。監督がいなければ大会にも参加することはできないので、非常に重要な役割だ。

「こつちはダメだったねえ。自分達のことだけで精一杯って感じだったよ」

「私もダメだったわ。頼めるだけ頼んだけど忙しいみたいね・・・」

「・・・僕はそもそも気づかれませんでした」

教師もこれからの授業の予定を組んだり、生徒達の指導、さらに今後の行事のための準備と決して暇ではない。

さらに顧問になれば、より負荷がかかる。そう簡単に引き受けてくれるはずもなく、上手くいきそうもない。

「そっか・・・ダメだったか」

近々大会もあるし、できることならばそれまでに正式な顧問を見つけておきたかったが・・・残念ながら、この調子だとそうもいかなさそうだった。

「最悪打つ手がなくなったら手の空いてる人にやってもらうしかないわね」

一日限定監督。あまり褒められたやり方ではないし、戦略的にもよろしくない。できることならばサッカー部の顧問としてやってくれる人を見つけたところだが、残念ながらそれは厳しい。いざとなればこれでやるしかないだろう。

「そうだよなあ。でも前の試合は監督なしで問題無さそうだったし、なんとかなるか！」  
樂觀的な考え方だが、実際どうにもならない以上、慌ててもどうしようもない。これぐらい気楽な考えでちよいどいいのかもしれない。

「じゃあ練習を続けるぞ！早速準備だ！」

「まつ、頑張んなよ。あたいは今日の分は働いたから・・・」

「・・・ちゃんとやれ」

「へいへい。ブラック企業はやだねえ」

なんだかんだ言いつつ斧街も練習に参加し、残りの時間は全員で練習に費やした。

## ポジションの意味

六限目終業のチャイムが学校中に鳴り響く。授業を終えて挨拶を済ませると、帰るために荷物をまとめ、終学活の準備をする。

それが終わってからからの行動は各生徒によって異なる。そのまま家に帰る者もいれば、教室や図書室に残って勉強をする者、掃除当番に当たっていたり、先生からの呼び出しで帰れない者と多岐に渡る。

そして、部活動のために帰らない人も当然いる。城翔中学サッカー部に所属しているメンバーも、放課後から練習があるため帰っていない。

「暇だなー。なんか面白いこと言ってくれー」

「無茶言うなや。四六時中おもしろいこと言えるやつなんかそうおらんわ」

件のサッカー部の部室では、男子二名が暇そうに話をしていた。

「どうやらこの日は東条と淀屋の二人が一番乗りだったらしい。」

「てかなんで俺達意外に誰もいないんだ？華咲は日直らしいから送れるってのは聞いてるけど」

「さあ？どうせ授業が長引いたとかトイレとかちやうんか？知らんけど」



「まあ普通に考えてそうだよなー。・・・ところでなんか面白い話ないのか？」  
「その話二回目やぞ。なんで時間置いたらおもしろい話出てくると思ってたんねん。それも早めの認知症か？」

「そんなこと言うなよー、ホントはあるんだろ？ケチケチせずに教えてくれよ」  
「せやからないもんはないわ。さっさと諦めんかい」

暇すぎて何か面白い話はないのかと聞く東条に対し、そんなものはないから諦めろと断言する淀屋。

しかし無理もない。この二人は仲がよく、休み時間にも度々会っている。そのためわざわざ部活動の時まで待つ必要もなく、面白い話があればだいたい休み時間に教室で話している。なくて当然なのだ。

「ちくしよー、このままじゃ暇で死んじゃうよ。ホントに何もねえのかよ？」

「・・・せやなあ、おもしろい話ではないけど質問してええか？」

面白い話がいっぱいあったというわけではないが、ちょうど聞きたいことを思い出した。本人も暇さえ潰せればこの際なんでもいいということなので、暇潰しついでに聞いてみる。

「ほな聞かせてもらうけど、なんでキーパーになったんや？」

淀屋が前から気になっていたこと。それはなぜ彼がキーパーになろうと思ったのか

だ。

キーパーは相手の攻撃を防ぐ最後の壁。ここで止められないと失点は確実。他よりもプレッシャーを感じるポジションのはず。

目立つといえれば目立つが、あまりにも荷が重いポジション。経験者でもないかぎり、理由もなくやりたいとは思わないだろう。

単にあんまり動いてなさそうだから楽だと思ったのか、根拠のない自信があったのか、はたまた他にやる人がいなさそうだったから自ら進んで引き受けたのか。

それとも、実は何か強い思い入れがあったり・・・

「なんでつて後ろにいるポジションだから女子の尻見ても気づかれないだろう？」

・・・まあそんな高尚な理由を持つているはずがなく、正直な下半身に従っただけだった。

「それめっちゃわかるわ」

そして淀屋は淀屋で共感している。中学男子はそういうことを考えるお年頃でもあるので、仕方がないのかもしれないが・・・とにかく下心しかなかった。純度100%の下心だ。

「そういう淀屋はなんでDFなんだ？モテたいってならやつぱりFWとかだろ？」

いったんお年頃の話置き、再びポジションの話に戻る。

サッカーにおいて花形といえるポジションといえば、やはりFWというイメージが強い。

もちろんMFやDFが不人気というわけではない。むしろこれらは試合で勝つためには非常に重要な役割を担っているポジションだ。

とはいえ得点を決めるといふ試合を動かし、なおかつ目立つポイントからやはりFWの人氣は高い。ましてやFWには有名な選手も多いこともあり、なおさらだ。

もちろんそれだけに競争率も高いが・・・それでも素人も多いこのチームなら、一度挑戦してみてもよかったのではないだろうか？

「なんでかって、そんなもん決まってるやろ——」

いつものおちやらけた表情はそこにはなく、まさに真剣そのもの。きつと、今度こそはマトモな理由が・・・

「——さっきの東条の理由もあるんやけどな・・・ほら、フィールドならなんと合法接触やぞ!!」

「なっ、なんだとお!?!」

・・・出てくるわけがなかった。東条と同じく、何か深い理由があるわけではない。結局二人はお年頃の男の子だったというわけだ。

「な、なんてことだ・・・俺の考えが浅はかだったつてのか・・・ッ!!」  
「考えが浅はかすぎるで。もつと考えなアカンなあ?」

崩れ落ちた東条を見て、これは勝つたなと言わんばかりのドヤ顔で見下ろす。まさに勝ち組と負け組、社会の縮図がそこにはあった。

「・・・でもそんな暇あんのか? 試合になったら他のこと考えてられないんじゃない? 特にフィールドプレイヤーならなおさら」

しかし、ここで思わぬ反撃を食らうことになる。

「えっ・・・いや、それは・・・な、なんとかなるやろ」

正直な話、前の試合でもボールを奪うということに無我夢中で他のことを考えている暇はなかった。ベンチにいる時ならまだあったかもしれないが・・・その時も味方の応援で精一杯だったし、そもそもベンチだと意味がない。

「やっぱキーパーだって。キーパーならシュートが来るまでの間は女子の尻も見れるし、相手の顔と胸もしつかりと観察できる!」

「ぬぐう!?!」

普段は頭の悪い二人だが、こういう時だけは頭が活性化される。遺伝子にでも刻まれているのか、はたまたエロスというものが偉大なのか? 真相は闇の中だ。

「くっ、たしかに東条の言うとおりのやな・・・」

「だろ？結局俺の方が一枚上手だったな？」

さて、こんな話を他人に聞かれたどうなるか？相手にもよるが、軽蔑されるのは容易に想像できる。

「……キミたちは実にバカだな」

「……えっ？」

ふと、入口の方から声が聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あ、あー……おつす……来てたのか？」

顔を向けてみると、たしかにきていた。どうやら終学活が終え、部室に来ていた星見の声だったらしい。とりあえずきこちない挨拶を返す。

「キミたちがなぜ今のポジションを選んだのかを話してた時からいたね。それにしても本当にくだららない」

まるで養豚場の豚を見るような目でこの一言。我々の知らない世界ではご褒美になつたりもするが、そちら側の世界ではない人にとっては普通は傷つく一言だ。

ただ今回の場合は特に弁明することはない。それもそのはず、二人が悪いからだ。

「あの……？ワイら一応先輩やし、せめて敬語ぐらいは使ってくれへんか……？」

「あれ、知らないのかな？敬語というものは敬える相手に使うんだよ」

「俺たち敬われてないの!？」

「逆に聞くけどさっきの会話のどこに敬える要素あるのかな？あるのならぜひとも教えてほしいね？」

たしかにない。少なくともさっきの会話を聞いて、敬える要素などどこにもなかった。逆に蔑む要素ならいくらでも見つかった。敬語を使われなくなっても仕方がない。

「待て！安心してくれ！俺はいわゆるナイスバディーなお姉さんにしか興味はないから星見は安心してくれ！」

「ふーん、なるほど。最低という言葉すらも生温いみたいだね」

別に胸の大きさや身長を気にしているわけではない。だが、自分はまだ一年だ。これからいくらでも成長の余地はあるという意味も込めて睨みつけておく。

やっぱり気にしているんじゃないかと言ってはいけない。痛い目を合いたくなければ、余計なことを言う前にお口にチャックをしておこう。

「ちよつと!!何やってんのよ!!」

さらに、この場に獅子神までやってきた。端から見ると、男子二人に後輩の女子が冷ややかな目線を当てているというこの状況。もうややこしいことになる気がしない。

「ああ、獅子神先輩。実はこの二人が『やっぱり女の身体は最高だぜー、グへへへー』みたいなことを言っていました」

「待て!?それは誇張しすぎだぞ!!」

「せやー！いくらなんでもそれは拡大解釈やぞ！」

「あんたら・・・いい加減にしなさいよー！！！！」

残件ながら獅子神には二人の弁明が聞こえていないため、当然怒っている。しかし、いつもよりさらに機嫌が悪いようにみえる。ここに来る前に何かあったのだろうか？

「女の子の前でそんなこと言うなんて最低よ！！どういう神経してんのよ！！」

と、そんなことを考えている暇はない。すぐにでもフォローして彼女の怒りを静めなければならぬ。

「せやから安心しろつて！ワイらはペチャパイには興味ないんやて！」

「私だつてなりたくてなつたわけじゃないわよッ！！」

「あべし!？」

これぞまさしく余計な一言。余計すぎる一言を言ったせいで、獅子神の強烈なキックをくらひ、淀屋は地面に沈んだ。

なぜあれでフォローできると思ったのか？それは淀屋にしかわからない。

「お、落ち着くんだ！たしかに胸はないけど尻の方は悪くないと思うぞ!!」

「支倉先輩と同じこと言うなあ!!」

「あつ、まさか機嫌悪い理由つてそれか!?!支倉先輩余計なへぶ!?!」

キックされる寸前、いい笑顔でサムズアップしてる支倉先輩の姿が頭をよぎった。こ

れが走馬灯なのか？とりあえずセクハラ先輩。あなたのせいで可愛い後輩の命が儂く消えていきました。責任取ってください。

「ふう、大丈夫だったかしら！感謝しなさいよ〜？」

若干八つ当たりの分もあつたが、星見の危機（ただの勘違い）でもあつたため、今回は妥当な判断だろう。ニッコニコの笑顔で胸を張った。

「・・・いや、別に助けてなんて言つてませんよ」

だが、星見な特に感謝するわけでもなく、すたすた歩いていつてしまった。

「・・・へ？ちよつとー!?待ちなさいよー!!」

感謝されると思つていた獅子神は、一瞬呆然としたあと、すぐに星見を追いかけていった。

「・・・えつと、何があつたんだ？」

部室に入った赤城が不思議そうに首を傾げる。部室に入って最初に見たのは倒れた淀屋と東条。そして、それを赤城と同じように、不思議そうに見ているメンバーの姿



だった。

「黒鉄？何か知ってるか？」

「……いや、俺が来た頃にはすでに……手遅れだった」

なんということだ。自分の知らない間に部室で事件があつたようだ。二人は恨みこそ買うようなやつではなく、むしろ誰とでも仲良くやれるような人物だ。

ただちよつと下半身に正直な二人なので、原因がないとは断言はできない。ようするに、意外でもないということだ。

「……可哀想だね。安らかに成仏するんヨ……」

「……アホか、まだ生きとるわ……」

それから目を覚ました二人に話を聞いたが、どうにも記憶がおぼろげらしい。ただ、支倉先輩が何かしたという証言があつたので、このあとあらぬ疑いがかけられたとか。

## フットボールフロンティアルール

全国の中学サッカー部が目指す夢の舞台、フットボールフロンティア。サッカー部に入部したものは、皆がここを目指し、サッカーという競技に中学生生活を賭ける。

しかし、いくら出場したいと願ったとしても、どれだけ努力をしても、報われるとは限らない。出ることのできるチームの数には限りがある。

地区大会を勝ち上がってきた48チーム。それに加え、特別枠の16チーム。計64チームだけが本戦に出場することができる。

さて、具体的には説明しよう。まず各都道府県で行われる地区予選で優勝したチームが、本戦に出場することができる。東京はレベルの高さと出場チームが多いことから西と東で地区がわけられているので、これで合計48チーム。どのチームも基本はこれを目指して予選を戦う。

だが、それだけだとある問題が起こる。そう、優勝した中学にばかり強い選手が集まってしまう、弱い学校には人が集まらなくなってしまうのだ。

そうなると、地区予選で優勝した中学が次の年も優勝する確率が高い。そしてまた優勝したので人が集まる。逆に弱いチームには人が遠ざかり、力の差が広がる……と、悪

循環が起こってしまう。

実際40年間無敗だった帝国学園には、東京どころか県外からも強い選手がやってきて、優秀な選手が集中していた。

これではまずい。このままでは同じようなことが起こりかねない。そう思った運営側の人たちによつて急遽用意された措置。それこそが特別枠である。

これは地区予選で優秀な結果を残したチームを全国大会の特別枠として招待する制度だ。つまり、負けたとしても全国大会に行けるということだ。

ただし、タダでいけるほど甘くはない。もちろん基準がある。その選考基準は三つ。一つ目は地区予選で優秀な結果を残していること。

さすがに結果を残せなかったチームを記念に招待しても、ボロボロにされるだけ。下手すればトラウマになりかねない。ある程度の成績を残したチームでないと、戦いにならない。

という理由から、地区予選の試合を見て、優秀な成績を残した上位16チームだけが出場できるようになった。

二つ目は本戦に三年間出場していないこと。

たとえばA校が優勝し、B校が特別枠として招待されたとする。そうになると、翌年の入学者はA校とB校に人が集まるだろう。

では、その年のFFはどうか?・・・また同じようにA校とB校が本戦に出る確率が高いだろう。それではこのようにした意味がないのだ。

そこで過去に本戦に出場したチームは、しばらくの間は特別枠を利用して全国大会に出場することはできないようにした。

つまり過去三年の間に一度でも全国大会に出場していた場合、そのチームは地区大会を優勝することではしか全国大会に出場する方法はない。

そうすれば片方は確実に出場できないため、16チームの特別枠には新規の中学が入る。別のチームが特別枠として招待されるため、うまくサイクルが回るというわけだ。

三つ目は同じ都道府県から二校出場していないこと。

たとえば東京地区だが、あそこは激戦区。他の地区と比べてみても、非常にレベルが高い。

もしも何も配慮せず特別枠を適応した場合、特別枠のほとんどが東京で埋まってしまふ。それを防ぐために、各地区から二校出場したら、それ以上は出場できないことになっている。

ちなみにこれは前年度優勝校がFFに出場できるという伝統のルールにも適応される。そのため、もし同地区に前年度のFF優勝校がいた場合、残りの枠は優勝だけに納めてしまう。

条件はあるが、これらの条件を満たしていれば、たとえ優勝していなくとも本戦に出場できる可能性が出てくる。

「・・・とまあこんな感じで、仮に負けても結果を残していれば、出場できる可能性はあるんだ」

やたら分厚い本を手にし、メンバーに説明する赤城。彼が持っているのはFFの大会規定が書かれている本なのだが、それにしても分厚い。これを全部覚えている人などいるのだろうか？

正直関係者の人でもちゃんと覚えられているのか怪しい・・・いや、覚えている方がおかしい。それぐらい分厚い。なんならこれは鈍器だと言っても信じてもらえそうだった。

「でも優秀な結果つてどう判断するんや？どっちにしても決勝ぐらいまでいけつてことちやうんか？」

たしかに淀屋の言うとおりである。結果を残す、つまり勝ち上がれと言っているようなもの。実際特別枠で選ばれるのは、上位に入賞したチームがほとんどだ。

「だいたいそうだな。その枠で出たほとんどのチームは決勝か準決勝ぐらいまで残って

る。でも一回戦で負けたチームが出場してることもあるんだ」

ただ、それは基本的な話。もちろん上位にいる方がやはり本戦に出やすいが、例外もある。

二年ほど前、あるチームが一回戦で敗退したのだが、試合自体は接戦であり、善戦していた。そして、一回戦で戦った相手が前年度、加えてこの年に優勝したチームだったのだ。

その優勝チームは他のチームに対しては一方的な力を見せて勝ち上がっていたが、一回戦の相手にだけ唯一苦戦していた。そのことが評価され、一回戦敗退のチームが特別枠として招待されたという例もある。

まあそんなことはなかなか起こらないため、実際のところは上位を目指すしかないのだが。

「……だいたいわかった。だが、なぜ今その話をするんだ？」

気になるのはなぜ今なのかだ。結構大事なので、練習前に集めて説明するより、時間を作ってちゃんと説明した方がいい気がするが……

「えっ？一週間後に大会があるからだけど？」

「……ん？」

その瞬間、部室の空気が変わった。

「・・・それならもつと早く言うべきじゃないか？」

当たり前前のツツコミ。大事なことなのだから、もつと前に説明しておくべきだろう。

「えっ? いや、でもこの方がサプライズになるかなって」

「なるほど、みんなを驚かせたいと思ったのか。しかしだな、大会の日にコンディションを合わせたり、その日の予定とかを空けておかないといけないことを考えると早めに言った方がいいのではないかな？」

「・・・返す言葉がございません」

幸いにもその日に予定があるという者はおらず、全員参加できるようだが、本当に浅はかというか甘いというか、どうにもやることなすことが空回りしている。

・・・普通ならキャプテン失格である。

「ま、まあとにかくだ! 初の大会だし気合い入れていこうな!!」

「あつ、むりやり話をそらしたんヨ」

まあ今回行われるのは大阪府大会であって、この大会に優勝すればFF本戦に出場できる・・・ということはない。この大会の結果が、FFの予選に直接影響するわけではない。

そう、これはFFとはあまり関係がない大会なので、最悪出れなくてもそこまで影響はない。あくまでも府で開催される小規模な大会なので、そこまで気にする必要はな

い。

しかし赤城はその辺りの説明も省いているため、ものすごく重要な大会の報告を怠っているような空気になってしまったのだ。

ようするに全部赤城キャプテンが悪い。

「前日に言われるよりはマシだ。ただ次はないと思っておけ」

「頼むからしつかりしてよね、キャプテン」

「わ、わかった！今度はちゃんと報告する！」

さて、先ほど直接の影響はないと言ったものの、まったく関係ないわけでもない。実はこの大会、準優勝以上の結果を残すとFF地区予選のシード権を得ることができ、一回戦を免除されるのだ。

なので、間接的ではあるが影響はある。加えて負けたとしてもペナルティがあるわけではないので、出場しても損はない。むしろ相手の戦力を見つつ、実戦経験を積むことができるという点では、参加して損をすることはなく、得しかない。出場しなくてもFFに出られるし、本戦に行くことはできるが、ここは参加しておくべきだろう。

「そういえば監督の方は大丈夫か？いないなら探した方が良さそうだが・・・」

「ああ、そっちはちよつと前に見つけてきたから安心してくれ！」

「・・・報告しないということが徹底されてますね」



監督の方も、ずっとというわけではないものの、大会のための一日限定監督を確保することはできたので、参加の準備は万全だ。

「それはそうと初戦の相手は決まってるのか？」

「ん？ ああ！ 数日前に抽選会に行ってきた！ ここに誰が相手なのかが書かれてる！」

そう言うと、ポケットから一枚の紙を取り出す。赤城もまだ見ていないため、どかが相手なのかは知らないのです、楽しみにしている。

「なんやホンマかいな！ ならばよ教えてくれや！」

「そうやー！ はよあねさんに見せーや！」

淀屋や支倉辺りは楽しげに騒いでいたが、何人かは呆れていた。ここまで全部知らないことである。今後はちゃんとして報告してほしいものだ。

「そんなに慌てなくても教えるって」

あんまり寄られると暑苦しくてしかたがないので、いったん離れてもらう。そして、紙に書かれている一回戦のチームを発表する。

「一回戦の相手は・・・双輝中学だっけ！」

「そうか！ 双輝中学・・・うん？」

「・・・え？」

発表した瞬間、先程まであんなにわいわい騒いでいた部室から音が消えた。

「えっと、キャプテン」

「……ど、どうした？」

「……私たちの言いたいこと、わかりますよね？」

城翔中学の一回戦の相手は、地区ナンバー2の双輝中学に決定した。それもくじで。何が言いたいかはもうわかるだろう。

「い、いや……なんのことだかさっぱりだなあ……ははは……」

「……………」

全員からジトーとした視線が突き刺さる。先程まで自信満々だったが、さすがにこの空気には勝てなかった。

「待て待て待て待て!! いや、たしかにみんなの言いたいことは痛いほどわかる! 俺もこれ見た瞬間はマジで夢でしょ? って思ったしなんなら絶望した!! でも最終的にはここにも勝たなきゃダメなんだ!! ビビってちやダメだ!」

初心者チームが一回戦から地区の優勝候補と当たる。まるで漫画のような展開ではないか。これで勝つことができたならば、まさに大番狂わせの展開、それこそ英雄、まさに主人公である。

しかし、そんなに都合よくいくのは漫画やアニメの中だけの話。現実でこうなつてしまふと勝てる保証はどこにもない。

なんなら内心で一番動揺してたのはキャプテンである。頑張つて動揺を表に出さないようにしたのだけは褒めるべきところだ。

「たしかにいずれは勝たなきゃいけないのは事実だよ。ただ今である必要はないと思うけど?」

経験が大事な今、同レベルぐらいのチームと試合をするのが一番。勝ち上がりつつ、ゆつくりと経験を積んでいくのがベスト。

もちろんそう上手くいくはずもないのだが、あろうことか初っぱなから地区ナンバー2が相手になるとは、いくらなんでもくじ運が悪すぎる。

あと、このどきくさきに紛れて星見がタメ口だった。淀屋、東条に続いて、赤城が不名誉な称号を手に入れた瞬間であった。

「そ、そうだけどき!何かの間違いとかで勝てるかもしれないし・・・諦めるのはまだ早いって!」

「別に諦めてはないよ。ただもう少し運なんかなかったのかな?」

「まったく、ウチに任せておいたらええ感じにしてあげたのになあ?こう見えてもくじ運ええんやで?」

「しかも一番強いところじゃなくて二番っていうのも中途半端だしな・・・」

「せやな。そこは一番強いところを引かな面白くないわな」

「なんでくじを引いただけでそんなに言われなきやいけないの!？」

散々な言われようだったが、みんなもこうなった以上は仕方がないと思っ  
ているのだらうか？練習する時にはいつもと同じ・・・いや、いつも以上に  
気合いを入れて練習していた。これなら大丈夫だろう。そう信じたい。

## V S 双輝中学①

大阪大会。FFとはほとんど関係はないが、それでも今人気大爆発のサッカーということもあり、試合前からありえないほどの盛りあがりをもせている。

「うわっ、やっぱり公式戦は違うわ・・・観客が段違いね・・・」

「・・・深呼吸しておいた方がいいかもしれないですね」

前のような学校内の興味本意の集まりではなく、真正銘のサッカーファンが数多く集まり、試合が始まるのを今か今かと待っている。

さすがにこの状況で緊張するなという方が無理がある。何人かは深呼吸をしたり、ストレッチをするなどして心を落ち着けようとしていた。

「やるしかないんだよな・・・」

さて、この大会に参加した城翔中学はキャプテンとある男の運のなさにより、初戦から地区ナンバー2のチームと戦うことになってしまった。

とはいえこうなってしまう以上しようがない。駄々をこねても嫌だと拒んでも対戦相手を変えてくれるはずがない。できるかできないかではない、やるしかないのだ。

「・・・みんな・・・こうなった以上は仕方ない！今出せる力を出しきるぞー！」

「もちろんわかってるんヨ！」

「ガツハツハツ！練習の成果を見せてやるわ！」

それに希望を捨ててはいけない。勝負というものは絶対ではないのだ。実際弱小校が強豪校に勝つ、すなわち下克上の例は、今までにだっていくらでもある。

少しでも可能性があるのならば、諦めてはいけない。

「おおつ、たしか今日の対戦相手だよな？」

強豪との試合を前にして、気合いを入れているところに相手チームのユニフォームを来た男が話しかけてきた。

「はい！俺が城翔中学キャプテンの赤城です！」

「そっか！俺は天城真矢。ここのキャプテンだ。今日はよろしくな！」

試合前の礼儀は大事、キャプテン同士で挨拶をかわし、天城とガツチリと握手する。すると、相手キャプテンの天城の背後から、また別の男が現れる。

「へー、あんたがそっちのチームのキャプテンか。俺はこのチームのエース、都丸真高次っていうんだ。よろしくな？」

「そうそう、こいつがうちの頼れるエース……ってお前じゃないだろ!？」

エースかと思ったらエースじゃなかった。言葉にすると何を言っているかまったくわからないのでわかりやすく要約すると、彼がエースというのは嘘だったらしい。

「・・・なんで俺がエースの千刃だ。よろしくな」

「は、はい・・・よろしくお願いします!」

天城の隣にいた男が、一歩前に出て手を差し出して来る。どうやら彼が本物のエースストライカーらしい。改めて挨拶する。

「わりいな、つい口から野心が滑つちまったよ。まっ、将来的には俺がエースになるからあながち嘘じゃねえけど」

対して都丸真はまったく反省していない。まあエースストライカーになるというのなら、このぐらい図太くないとやってはいけないだろう。ある意味正しい成長をしているとも考えられる。

そんなことを思っていると、野次馬魂に火がついたのか相手チームがさらに集まってきた。

「ふーん、この人たちが今日の対戦相手か。そんなに強そうに見えないし、一回戦はもらったな」

「リオちゃん、そんなこと言ったらダメでしょ!」

「だからちゃん付けするなって!いつも言ってるでしょーが!」

「おいおい、まーたやってるぞあの二人。しょうがないやつらだな」

「あれ?そのしょうがないやつが片割れ、しかも男の方に告白したの誰だっけ?」

「つて、おいコラ近藤オ!! 余計なこと言うなあ!!」

「ちよつ、お前ら! 試合前なんだから喧嘩すんじゃない!?」

「皆さん落ち着きましようよ。これから試合なんですから・・・ね?」

強いと聞いていたから軍隊みたいなのを想像していたが、どうやらそうでもないらしい。思っていたより平和・・・というよりイロモノの部類に片足を突っ込んでそうだった。

変わった人が多いというか、なんというか、あんまりまともな人がいなさそう・・・みんな緊張したらアカンで! なんやったら姐さんがいつちよ揉んで緊張をほぐしたるわ!」

「先輩! それなら俺もお手伝いします! いやさせてくださいッ!!」

「おいおいズルいで東条!! それやったらワイも手伝うわ!!」

「キミたちはブレないんだね。将来が心配になってくるよ。くれぐれもお昼のニュースに出演なんてことはないようにね」

「コラ男子イ!! あと支倉先輩も余計なことするなあ!!」

・・・いや、もしかしてこつちもそんなに変わらないのだろうか? あつちにも負けず劣らずの・・・

「・・・まつ、いつか」



考えても仕方ない。もうすぐ試合開始、これ以上は余計なことを考えないようにすることにした。

『いよいよ始まった大阪大会！まず前年度FF地区大会準優勝の双輝中学！今年は一年生も豊作らしく、去年よりも期待が持てそうです！』

対してその相手は今年に入って本格的に始動した城翔中学！実力は未知数ですが、やる気は充分！期待しましょう！』

城翔中学フオーメーション

麻宮 ————— 斧街

赤城

獅子神 ————— 星見

華咲

千景 ————— 黒鉄

支倉 ————— 裁野

東条

双輝中学フオーメーション

— 都丸真 — 千刃 — 飛野 —

— 鏡原 — 天城 —

— 菠羽 —

— 近藤 — 桜葉 —

— リオン — まのん —

— 黒桐 —

全員がポジションに着き、準備完了。今回は相手からのボールで試合がスタートする。まずはどうにかしてボールを奪わなければならない。

「さて、まずは一点決めてくるぜ!!」

「よし、遠慮せずにやってこい!!」

ホールを持った都丸真が、勢いよくドリブルをして駆け上がってくる。それを華咲が阻止しようとして立つ。

「エースになるならこんなところで止まってらんねえよな。突破させてもらうぜ!」

「そっちのエース事情は知らないけど、私も通すわけにはいかないからね・・・エナジーライト!」

自然エネルギーでできた球体を頭上に掲げると、光が発生。その眩しきで相手の目をくらまし、その隙にボールを奪うことに成功する。

「目が、目がああ!!」

「じゃあここからはキャプテンに任せるよ」

どこぞの大佐みたいなことになっている相手は放っておき、赤城にパスを出す。

「ああ、サンキュー!それじゃあみんな、いくぞお!!」

ボールを受け取った赤城はとりあえず攻める。守りに入ったところでじり貧になるだけ。強敵に勝つには攻めるしかない。

「ヒートウイング!!」

出し惜しみをしてもしようがない。最初から技をガンガン使用し、相手の守りを強引に突破していこうと試みる。

「おおっ!なかなかやるな!」

「やるっていつてもまだ一人抜かれたただけだけだな」

「まだまだこれから!ヒートウイングッ!!」

続けて同じ技で突破を試みる。見たところ相手ディフェンスは空中に作用する技を持つていないのか、何もしてこない。それならまだチャンスはあるかもしれない・・・

「・・・ん?」

と思っていたが、やはりそう上手くはいかない。相手を突破して地面に着地すると、なぜかバランスがとれない。

「な、なんか滑るんだけど!?!」

地面がツルツルしており、上手く立つことができない。バランスを崩した結果、ボールはあらゆる方向へ飛んでいってしまい、赤城はすつ転んでしまった。

「いたっ!? な、なんなんだ・・・?」

「ああ、気をつけなよ。そこ結構滑るから・・・って遅かったかなあ?」

そこに相手DFの一人である榎月リオンがボールを持って笑っていた。

「ワックスフロアの力はどうかだった?」

赤城が飛び上がった瞬間、リオンはどこから取り出したモップを使い、赤城が着地するであろう場所を磨いた。そうすることで地面の摩擦をなくし、バランスを崩させたのだ。

ようするに飛んでるところを撃ち落とすのではなく、着地狩りという考え。まさに盲点だった。

「すまん! 油断してた!」

「問題ないですよ。取り戻せば済む話ですから」

とはいえ取られたのであれば取り返せばいい。ただ黙って素通りさせてあげるわけ

がない。星見が鏡原の前に立ちふさがる。

「たしかにそうですね。取られたのなら取り返せばミスは帳消し。でも、易々と奪わせてあげると考えているならそれは間違いです・・・ミラートンネル!」

「っ!」

だが、それは相手も一緒。大人しくはいどうぞと奪わせてくれるはずがない。

不敵な笑みを浮かべた鏡原の目の前に自分の等身と同じぐらいの大きさの鏡が出現。鏡原は怯むことなくその中に飛び込んでいった。

「いったいどこに・・・?」

「・・・星見!後ろだ!」

少し離れたところに先程とは別の鏡が出現し、そこからまた姿を現した。

「ええ、こっちですよ。もう遅いですけどね!」

鏡原は相手のディフェンスが来る前にパスを出し、千刃がボールをトラップした。

「・・・容赦しないから覚悟しとけ!」

鋭いパスを受け取った相手のエースストライカー、千刃はゴールを一瞥。それと同時に足には黒いオーラが纏わりつく。

その黒いオーラが剣の形状に変化したところで、千刃はボールを斬りさくように蹴り込んだ。

「切り裂け……ヴァイススラッシュ!!」

鋭い黒剣によって放たれた斬撃が、ゴールまで一直線に突き進む。

「おおっと！そうはいかんで！コールドカッター!!」

ゴールまでは少し遠いところからのシュート。もちろんディフェンスは何もしないはずかない。支倉が冷気を纏った氷の壁でシュートブロックし、威力を軽減させる。

「支倉先輩、あとは任せてください！キラーブレード!!」

そして最後の壁であるキーパーの東条が、ホラー映画にでも出てきそうな水色の鈍のオーラを腕にまとわせ、それをボールにぶつける。

相手のシュートは途中でシュートブロックをされている。それに距離も遠かった。威力は通常よりも落ちているのはたしかだ。

しかし、その二つの要素を帳消しにするほどの差があった。

「っ…マジかよ!?!」

多少持ちこたえることに成功したものの、東条の鈍はあえなく崩れてしまい、ボールはゴールネットへと吸い込まれていった。

「まず一点、いただいたからな」

「こ、こんなにあっさりと・・・!?!」

強豪であるということは知っていたし、今の実力では勝てる相手ではないとは思っていた。だが、実際に戦ってみるとその差は歴然、改めて現実を思い知らされてしまう。

この一瞬で絶望的なまでの差を見せつけられてしまい、赤城は愕然とする。

「・・・っ!みんな!試合は始まったばかりだ!!諦めたらダメだぞ!!!」

だからといって弱気な発言はできない。負けているときにこそみんなを鼓舞する。それがチームを引っ張るキャプテンの指名だ。

「もちろん!うちらは諦める気いなんかないで!」

「・・・最後まで全力で戦います」

だが、このチームは鼓舞などしなくても諦めたりはしない。頼れる仲間が、最後まで勝利を目指して戦い抜くと心に決めていた。

## V S 双輝中学②

「みんないいぞー！もつと攻めてけー！」

「がんばれー！みんなならもつと点取れるよー」

「まだ前半やー！こちらが守るからこっから逆転するでー！」

「はい・・・俺達が、ここを守る・・・！」

双輝中学との試合は早くも一方的な展開を迎えていた。あのあとさらに二点を取られ、早くも三点差。対してこちらは一点を取るところか、いまだにシュートすら打てておらず、厳しい状況が続いている。

相手のエースストライカーである千刃を徹底的にマークしても、都丸真と飛野の二人に点を取られてしまう。相手FWは三人、対してこちら四人。人数だけ見れば抑えれなくもなさそうだが、相手が技術の高さに翻弄されてシュートを打たせてしまうというのが現状だ。

また隙を突いてボールを奪っても、シュートまで持つていけない。こちらの技がまったく通用せず、相手のディフェンスを崩すことができない。何もできずに、ボールを奪われ、また攻撃が始まる。勝てるビジョンがまったく浮かばない。



「うぐう……マジで強いんだな……」

実際に戦って、赤城はその強さを身に染みるほど感じた。スピードもパワーもテクニクはもちろん、連携や細かいプレー、何もかもが自分達とはまるで違う。

いとも容易くボールを奪取し、隙を見せることなく流れるように攻撃に繋げ、手をさせないまま得点を奪う。まさに強豪としての姿がそこにはあった。

「どうしたもんか……?」

とはいえ、こうなることはわかっていたはずだ。そう上手くいくはずがない。これで勝てたならそれはもう偶然に偶然が重なった奇跡だ。

相手が相手のため、今回の試合は負けてもいいと考えている。勝つということより、自分達が今どの位置にいるのかを知る。この強敵を相手にして、どこまで戦えるのか。それを知ることが目的の一つでもあった。

自分を知ること、これは敵を知ると同じぐらい大事なことだ。幸いにもこの試合に負けてもFFにはあまり影響しない。なら当たって砕けるの精神で、試せるだけ試す、それしかない。

「さて、もう一点もらうぜ！バルバリアタックル！」

疲れた様子もなく激しい攻撃を続ける双輝中学。都丸真は海賊船のオーラを纏い、相手を寄せ付けることなく突破しようと試みる。

「いかせるか・・・！サイクロン!!」

しかしそうはさせないと裁野も技で対抗。波をもろともしない海賊船だが、荒れ狂う竜巻によつて徐々に破損していく。

「クソっ！海賊舐めんなあああ！」

「何っ!!」

だが、エースになるといふのなら、こんなところで止まってはられない。現エースを引きずり下ろし、自分がストライカーになるといふ強い思いを胸に抱き、竜巻を突破した。

「じゃあ氷壁に当たつて今度こそ沈没やな！コールドカッター！」

「えっ、ちよっ!!ぶつか——」

・・・が、竜巻を突破したところまでは良かったものの、最後は氷の壁に当たつて撃沈。やはり前方不注意は事故の元になる。

「すみませーん！事故っちゃいました！」

「ドンマイドンマイ！次から安全運転で行こうぜー！」

「・・・ええつと、安全運転する海賊っているのかな？」

海賊がルールを守つて安全運転する姿など正直見たくはないし、それで突破できるとは思えない。思わず薙羽は口に出してしまった。

「さあ、今度はみんなの見せ場やで！」

守りきれれば次は攻めるのみ。獅子神にパスを出して、反撃を試みる。しかしそこに相手DFの近藤が立ちはだかる。

「やつと俺にも活躍の場がやってきたか！よし、この俺の力を見せてや——」

「そんな話聞いてられないわよ！ダツシユアクセル！」

「あつちよつとお!?まだ喋ってる途中だぞ！相手の決め台詞の時は攻撃しちやいけな  
いって暗黙のルールを破らないで!？」

何か言っているが、敵に慈悲などいらぬ。獅子神は一切の容赦なく技を使って突破し、さらに切り込んでいく。

「よし……のまま決める！」

あと少し、あと少しでゴールまで持っていくことができる。一発打って、不穏な空気をここで変えてみせると意気込みゴールまで突っ走る。

「させないよ、ストームトラップ!!」

「へっ?きやああああ!？」

だが、そう上手くいかない。相手DFの桜葉が両足を広げて逆立ち、そのまま高速回転を始める。その勢いで竜巻を起こし、獅子神を吹っ飛ばした。

「えへへ、油断しちやだめだよ」

ボールを確保した桜葉の間延びした声が聞こえてくる。あと少しのところだったのだが、残念ながらボールを奪われてしまった。

「ああ、たしかに油断するのはよくない・・・な！」

「あ、あれ〜!?!」

人の振り見て我が振り直せとはいうものの、実際にやるのは難しい。麻宮は完全に油断して桜葉からボールをかつさらっていった。

「まだまだ！旋風ちゃんが突破されてもわたしがいるよ！」

それでもまだ相手のデイフェンスを突破しなければならない。それでも麻宮はすぐに対応してみせる。

「そんなことはわかってるさ、イリユージョンボール!!」

「つてボールがいつばいい〜!?!」

相手が来た瞬間にボールと共に一回転。そして着地した瞬間にボールがいくつにも増える。無数のボールで朧月を惑わし、ここを突破する。

「これで流れを変えるツ!!フリーズショット!!」

スピード重視のフリーズショット。本来なら真正面から打つより、至近距離で端を狙う、またできるのなら隙を作った方がいい。

だが、現在斧街はマークされているためその場から動けない。かといって他の選手を

待っている時間もない。そのため一人でシュートを打った。

「はあ……面倒くせえなあ……ブラックチェーン……!」

キーパーの黒桐が腕を上げると、地面から幾つもの黒い鎖が遮射出され、ボールに絡みついていく。やがてボールは勢いをなくし、最後は黒桐が片手でボールを掴みとつた。

「くっ!ダメか……」

「お前ら、ちゃんと守ってくれよ。止めんのもだりいんだからよお」

「いやシュート一本なら頑張ってる方でしようよ!? 贅沢言わないでください!」

一本もシュートさせるといふ無茶振りに近藤が思わず反論。黒桐はへいへいと軽く流し、ボールを大きく蹴り出した。

「よーし、あとは任せとけ! そよかせステップ!!」

蹴り出されたボールを持った天城は、風を感じさせるような軽やかなステップで相手のディフェンスを避けていく。

「飛野! もう一発決めてこい!」

「はい、任せてください」

そして天城のパスを受け取った飛野はすぐボールに強力なスピンをかけ、右足を鋭く振り抜いた。

「・・・イーグルグライドッ!!」

ボールは超低空で滑空しながらゴールに向かう。しかし明らかに距離が遠い。ただのロングシュートなら威力は落ちるため、止められるだろうが・・・そういうわけではないのだろう。

「まだまだこれからだよ!」

やはりただのロングシュートではない。シュート線上にいた波羽がボールを一度横に蹴る。さらにスピンをかけることでボールは先程よりも高速の回転を始め、最後にボールを回し蹴りで強く撃ち出した。

「フリップウインド!!」

先程よりも回転が増したボールは、強風を起こしながら羽根を纏って猛スピードで突き進む。

「・・・シュートチェインですね。なら、僕が——」

チェインされたといえど距離は遠い。それなら威力は大きく下がるため、チャンスはある。DFの千景が少しでも威力を下げようとシュート線に入ろうとした。その瞬間・・・

「おっと、俺も混ぜてくれよ? なんだって未来のエースなんだからよ!!」

そこに強引に割り込んで来た都丸真がボールの回転はそのままに、威力を殺さないよ

う右足を上手く使って空中にあげた。

そしてそれに続くよう自身も回転しながら飛び上がり、左足で華麗なオーバーヘッドキックを決める。

「イエニチエリバスター!!」

「・・・っ!」

「嘘だろオイ!?!」

シユートチエイン自体は決して珍しいことではない。現に城翔中学も以前の試合で実際に獅子神と三日月の二人でシユートチエインをした。

しかし、三連シユートチエインとなると途端に話は変わってくる。それぞれのシユートの勢いを殺すことなく合わせ、ちゃんとチエインできるようにしないといけない。それをあんなにと容易くやったのだ。驚くのも無理はない。

「・・・ぐっ!?!すみません!」

「大丈夫!あとはなんとかするぜ!キラブレードオオオ!!」

千景と東条の二人で必死に対抗するが、一人でも手を焼く相手。三人のシユートチエインを止めきれはるはずがなく、さらに失点を重ねてしまう。これで点差は四点となった。

「すみません・・・力になれませんでした」

「んなことねえって！最高のサポートだったぜ！ただ俺の方がちよつと力足らずだっただけだな！」

謝る千景を励まし、東条はもつと練習しないと行って笑っている。

だが、内心は相当悔しいはずだ。苦勞して編み出した技があつさりと破られ、失点を重ねて悔しくないはずがない。

それでも東条は笑ってみせ、次は止めてみせると意気込んでいる。赤城は東条の精神の強さを感じた。

『さあ、ここで前半が終了！展開は一方的、双輝中学がリードしていますが城翔中学も最後に一本シュートを打ちました！ここからどうなるのか、最後まで諦めずに頑張つてほしいですね！』

そしてここで前半が終了。点差は四点とかなりの差をつけられてしまった。逆転するためには少なくともあと五点。しかもそれは点を取られなかつたらの話。ここから失点をさらに失点を重ねることも考えると、絶望的な差と考えていいだろう。

「やつらに勝つには正面突破だとまず無理だ。何か作戦が必要だろうな」  
「・・・作戦、隙がない以上難しそうですね」

油断でもしてくれたならチャンスはあるが、それもない。今のところ隙はどこにもなく、完全に封殺されている。



「・・・すまない、もう少し力があればあそこで点を取れたはずなんだが・・・」  
「いや、シュートまで持つていけたのはかなり大きいはずだからね。悲観する必要はな  
らぬ」

これに関しては華咲の言うとおりだ。最初の方はシュートを打つどころか守りを崩すことさえできず、手も足も出なかったのだ。結果としては止められて、点を取られたものの、最後の最後に一本打てたのは大きな成果だ。

これで少しは流れが変わってくればいい。何かの布石となればいいのだが・・・  
「・・・よし、とりあえず後半も頑張ろうな!!」

ここで何かいいアイデアが浮かべばいいのだが、悲しいかな頭の良くない赤城では作戦は思いつかない。負ける未来しか見えないが、それは口に出さず、チームを鼓舞しようとして一人倍大きく声を上げる。

「おっしや、ここからはワイもやったるで!」  
「みんなで頑張つて逆転するんヨ!」

疲労がたまった選手とベンチの選手を交代し、ここからの後半戦に望みをかける。

## V S 双輝中学③

前半で疲労がたまったメンバーを数名交代し、後半戦が開始。三日月からのボールを受け取った佐原が果敢に攻めていく。

「もうだいたいぶ点差は開いてるけど、まだまだ攻めさせてもらうよースパイラルドロー!!」  
「……っ!」

だが、ゴールまでの道は遠い。波羽の技の前になす術もなく奪われてしまい、ボールはFWの飛野の元へと渡ってしまふ。

「なるほど、それなら私が止めようか」

「させるか、このボールは無駄にしない。ラプターズステップ!!」

まるで猛禽類が木々をくぐり抜けるかの様に動き、並外れたボディバランスと繊細なボールコントロールを活かして獅子神を翻弄し、抜き去る。

完全に前半からの悪い流れが続いていたが、ここで交代したばかりの盤上が魅せる。

「なかなかやるのうーじゃが、これ以上はいかさんぞー!パワーチャージ!!」

「なにっ!?!」

両拳を打ち付けてパワーを溜める。そして一気解放し相手にチャージをかけ、そのま

ま吹き飛ばした。

「ガツハツハツ！ワシだって何もしてこなかったわけじゃないぞお!!」

必死の特訓により習得した技を早速有効活用し、ボールを奪い取ると、佐原へとパスを繋いだ。

「さつきはしくじってしまったからね。その分を取り返させてもらうよ・・・疾風ダツシュ!!」

「くっ！なかなかやりますね!」

ボールを奪うことに成功し、佐原も相手の守りを崩して突破していく。後半が始まってすぐにチャンスが生まれる。

「斧街、あとは任せてもいいかな？何せワタシは弱いから、シュートしても得点はできないだろうしね」

「あいよく。じゃあ任せときな」

技もない自分のシュートでは決めるのは無理だと判断し、ここは斧街にボールを託す。だが、榊月姉弟が立ちはだかる。

「へえ、二対一かい？上等だよ!」

流れが来ている今なら、なんとか得点まで持つていけるかもしれない。他の選手はマークされているため、ここは無理にパスを出さずに正面突破を試みる。

「リオちゃん、いくよ！」

「だからちゃん付けするなマダネキ!!」

「うう・・・今なら見逃してくれるとにいく！」

そんなやり取りをしながらも、榊月姉弟はお互いの息を合わせてそれぞれが役割通り、完璧に動いてみせる。

「ブロックサーカス!!」

姉のまのんがスライディングしかけ、ボールを上げる。そしてタイミングを合わせて跳躍していた弟のリオンがボールをトラップし、華麗に降り立つ。

「あ、あれえ? おかしいねえ・・・」

「ドンマイなんヨ! 斧街先輩!」

いけるかと思ったが、やはり勢いで押しきれぬほど甘い相手ではない。攻め込まれても落ち着いて対応し、こちらの攻撃を許さない。

「よし! もう一点入れるぞー!」

その後も双輝中学は手を緩めることなく、怒涛の勢いで攻撃をしかけてくる。軽やかなドリブルでこちらのディフェンスを華麗に突破していく。

「ヴァイススラッシュ!!」

「キラード!!・・・だああああ!」

いくら守りを固めても猛攻を凌ぎきることはできず、またしても得点を入れられてしまう。だが、赤城はもうあまり気にしていない。というのも、ここまで来たら追加で何点取られようがもう変わらないだろう。

点を取られるのは仕方がない。とにかく一点でいいから得点を入れる。それ以上は取れない。いや、そもそも取れても一点が限界だ。

それでめ試合結果が0と1では話が変わってくる。もしこのまま何もできずに負けてしまえば、双輝中学への完全な敗北のイメージがついてしまう。

次に戦う試合でも、今回の何もできずに負けた試合が想起される。勝てるビジョンが浮かばず、萎縮して圧倒される。それだけはあつてはならない。

そうならないようにするためには、ここで爪痕を残しておく必要がある。これは今ではなく、未来のため。もう何点取られようが構わない。一点を取るためにひたすら走る。

「ストームトラップ〜！キャプテ〜ン！」

「よっし任せろ!!そよかせステップ!!」

だが、たった一点ですら届かない。相手に翻弄されボールを奪われる。すぐに相手の攻撃が再開し、こちらは守ることで精一杯。とても攻撃のことを考えられるような状況ではない。

「飛野！もう一発決めてこい！」

またしても攻め込まれ、天城からのパスを飛野がトラップし、ゴールを見据える。

「・・・これでトドメだな」

ボールにスピンをかけて上空へ蹴つ飛ばし、そのあとに飛野自身も飛び上がり、オーバーヘッドシュートを放つ。

「ファルコンドライブ!!」

先程までとは別の技。ボールは隼が獲物を捕らえるかのような勢いで鋭く、速くゴールまで突き進んでいく。

「何度でも何度でもブロックしたるわ！コールドカッター!!」

もちろんただでは打たせないと、支倉はすぐにブロックした。威力は削れたものの、まだ東条が止められるほどの威力ではない。このままでは追加点は免れないだろう。

「おーし、東条！ここはワイに任しとけ!!」

と、そこに現れたのは後半からDFとして参戦した淀屋。しかし技を修得していない彼では止めることはできない。いったいどうするのかと思つたその瞬間、なんと淀屋は頭突きで対抗した。

「それはさすがに無茶じゃないかい!？」

「なにおう!!男は無茶してなんぼやあ!!」

両足で必死に踏ん張るも、さすがに無理がある。徐々に押され、足の踏ん張りもきかなくなってきた。

「ぬぐぐぐ……ナメんなああああ!!」

もうダメかと思ったその時、淀屋の頭からバチバチと電気のようなものが迸った。かと思うと、頭から溢れだしたエネルギーが、巨大な手の形に変化した。

「な、なんだありや!?!」

エネルギーで構成された巨大な手は握り拳を作り、ボールと衝突。なんとそのままボールを弾き返した。

「お、おおっ！なんか出た！頭から手が出てきよったぞー！」

言葉にするとなかなかシユールなものである……とか思っている場合でもない。弾かれたボールは波羽が確保し、すぐさま逆サイドにシユートを打ってきた。

「ちよつと想定外だけど、それならこうするまでだよ！マツハウインド!!」

「やべっ!?!」

飛野のシユートに対応しようとしていた東条は慌てて逆サイドに戻ろうとするが、スピード重視の技ということもあり、このままでは間に合いそうにない。

「……は任せろ」

それを見た黒鉄がシユートブロックをしかけようと走る。しかし、相手のシユートは

速く、対して黒鉄はあまり足が速くない。

この距離では身を呈してのブロックはできないだろうと諦め、失点を覚悟した。

「・・・ザ・ウォール!!」

だが、その心配は杞憂に終わった。黒鉄の背後に巨大で雄々しい壁がせりあがり、相手のシュートの進行を阻害する。

「東条、後は頼む・・・!」

まだ技が完成しきっていないのに加え、正面ではなく多少横にズレていたということもあり、止めるには至らなかつた。それでも充分な時間を稼ぎ、威力も下がった。

「ナイスウ!後は俺に任せときな!!」

ここままでしてくれて止めないわけにはいかない。東条は真正面からボールを抑え込み、無事に止めきつてみせた。

「よし、取ってやったぞー!!」

「いやあ、これはもう一点取られたかと思つたわ。みんなええ活躍やつたで!」  
失点を覚悟したが、ここはなんとか相手の猛攻を凌ぐことに成功した。



と、ここまででは良かったのだが、やはり現実そう上手くはいかない。結局この後ボールを奪われ、またしても流れるように点を取られてしまった。

みんなも隙については攻めて相手の攻撃を必死に守ろうとするものの、結局突破口を見つけられないまま時間だけが無情に過ぎ、後半も残り時間わずかとなった。

「みんな！絶対！一点は取ろうな！！」

「もちろんだよ。さすがにこのままでは終われないからね」

「後ろはワシらに任せとけえ!!今度はしつかり止めたるわ!!」

赤城はみんなの指揮を下げないために一応一点を取るとは言ったものの、ここからどうすればいいのかがまったく思いつかない。今ある自分達の技では、相手キーパーを打ち倒すことはできない。

不意を突こうにもそんな余裕はなさそうだ。仮にできたとしても生半可な手法では確実に対応してくるだろう。とはいえ正面衝突ではこちらが負ける。どうしたらいいかのわからない。

「ぬおおお！パワーチャージ!!」

「くっ、すみません！」

「どんまいどんまい！すぐに取り返すぞ！」

ここで盤上が再びボールを奪取。そして赤城へとパスを繋いだ。信じてパスを出し

てくれたはいいが、いまだに得点する方法は・・・

「・・・そうだ！」

決して良案と呼べるものではない。今この瞬間に思いついた、破れかぶれの雑な方法。当然成功するかはわからない。

「(いけるか・・・いや、他に選択肢はない！やるしかない!!)」

だが、他に方法が思い付くわけでもない。このままやられるだけだと今後に関わる。ならば可能性が低いとしても、それに賭けるしかない。

「三日月・・・頼む！」

「はい、任されたんヨ！」

まずは三日月にパスを出す。しかし、ここでディフェンスを突破しなければならぬ。突破さえできれば、どうにかなるかもしれない。

「えへへ、させないよお！ワックスフロア!!」

「あの子も使えるのか!？」

三日月のいる方向に対してモップがけをし、あえて通りすぎるがこれでいい。モップがけした後の地面はつるつるとなり、バランスを崩させるつもりだ。

「どういう技がわかっていれば対策のしようはあるんヨ！アクロバットキープ!!」

「あ、あれえ!？」

とはいえ一度見ている技なら対策できないこともない。地面が滑りやすくなり、立てなくなる。それならば地面に触れなければいい。空間をフルに使い、地面に降れることなく移動し、モツプがけで降りた。

「このシュートは絶対に決めるんヨ！バウンド・・・」

そして本日二度目のシュートに持ち込む。三日月はボールを回転させ、地面に埋め込む。やがてボールは勝手に浮き上がり、そのままシュートする・・・はずなのだが、今回は違う。

「今だ！上に打ってくれ!!」

「ええ!?!上!?!」

シュートを放つ直前、赤城は上に向かって打てと言い出した。赤城の意図が読めず、三日月も困惑する。

「遠慮はいらないから、できるだけ高く打ち上げてくれ！大丈夫！信じてくれ!」

「え、ええつと・・・わかったんヨ!」

とはいえ何の意味もなくこんなことを言うわけがないだろう。言われたとおり、三日月は高くに打ち上げた。

「何を考えてるのかわからんけど、ありや上げすぎたな。これじゃ俺らの出番はないな」

「そうだね。あれじゃあ打てないし、ブロックする必要は——」

「ヒートウイング!!」

「ええ!?!」

そう、確かにあの高さでは普通は誰も届かない。逆にいえば、どうにかしてあそこまで到達すれば誰にも邪魔されないということ。そこで赤城は自分の技を利用し、強引にボールのところまで飛び立った。

「まさか……?」

これでシュート際に邪魔はされない。あとは別に難しい話ではない。非常に簡単な話だ。ボールは高いところから落とせば、よく跳ねるようになるというだけの話。

「一か八かだあ!! ハイバウンドフレイム!!」

より高所から叩きつけることによってさらに高く、よりダイナミックで不規則なバウンドし、まるで炎を纏った大蛇のようにも見える。これならばまず軌道は読めないだろう。

「チツ! ブラックチェーン!!」

黒い鎖がボールに向かっていくが、これだけ動きが大きいとまず当たらない。技で止めるのを諦め、仕方なく両手で強引に抑え込む。

「……ぐああああ!!」

だが、いくら地力の差があるとはいえ必殺シュートを技なしでキャッチするのはかなり厳しい。これで止められるはずがなく、ボールはゴールに吸い込まれていった。

「よ、良かったあ！一点入ったぞ！」

着地後の妨害技などはあったが、空中に作用する技を持っていなかったのが幸いだった。もしあれば、確実に妨害されて打てなかった。

また、今回の技はぶつつけ本番。制御できず、変な方向に飛んでいってしまう可能性もあった。成功したのはかなり運が良かったといえるだろう。なんなら入らないことが前提だったし、決められなくて仕方ないという覚悟はしていた。

・・・あくまで最後まで諦めない意思を見せるためにやったことなのだが、まさか入るとは自分でも驚いた。

『城翔中学!!なんとこの終盤で一点を返したああああ!!必死に食らいつくも、今の今まで翻弄されるばかりでしたが、見事一点を奪い取りました!!』

しかし試合はここで終了!良いプレーを見せてくれましたが、残念ながら一回戦で敗退です!』

一点決めたところで試合終了のホイッスル。最終的な結果は8対1と惨敗だが、最後の一点は希望の一点となるだろう。

相手は地区ナンバー2の相手。そもそも負けて当然の試合だ。もつと点差が開き、一

点も取れなかったとしても仕方なかった。

それでも創設されたばかりのチームで相手が強豪でも工夫すれば得点を入られるという事実。きつと良い経験になったはずだ。

「まさか最後に決められるとはなあ。なかなかやるじゃないか！」

「いや・・・みんなのお蔭ですよ・・・！俺一人じゃ、どうにもならなかったですし・・・！」

「そうだよな、サッカーはチームスポーツだもん！」

試合が終わり、息を切らしながら相手キャプテンの天城と話をする。今日の試合の良かったところ、盛り上がったところなどを話し、健闘を讃えあう。

「ところで・・・天城キャプテンって何かした？」

「・・・えっ？」

しかし、その話を後ろで聞いていた双輝中のメンバーがとある疑惑について話し合い始めた。

「そーいや何もしてねえような気がする・・・何かしたっけ？うちのキャプテン」

「ちゃんと何回か相手のディフェンスを突破してたよ！まあ、あんまり目立ってなかったけど・・・」

「でも声は出てたよねそれはすごく良かったと思うよ。目立ってはなかったけど」

「んー、やることはやってたけど目立ってはないのはたしかだね。俺の方が止めてたし活躍って面では俺の方が上かなあ？」

「リオちゃん！そんなこと言っちゃダメでしょ！目立ってなくても仕事はしたんだからちゃんと褒めないと！」

「お、お前らあああああ!!!」

「わあゝ、追いかけてっこだね〜！」

散々な言われようで動かないわけがなく、天城と双輝中メンバーの追いかけてっこだね〜。まる。

「・・・キャプテン、とりあえず帰るかい？」

「そ、そうしようか・・・？」

城翔中学のメンバーはこの状況をどうしたらいいのかわからないが、いたところでもできない。天城には悪いがスルーして帰ることにした。

## 予想外の奥の手

双輝中学との試合から一日が経過。負けてしまったため、しばらく試合はない。今日から再び練習の日々となる。だが、もう既に練習は始まっているのにも関わらず、赤城は部室に残っていた。

「どおーしたらいいのかなああああ．．．」

残っている理由は非常にシンプル、ただ単にこれから先のことで悩んでいた。

とはいえそうなるのも無理はない。あのチームは同地区の相手。つまり再び戦う可能性が非常に高い。しかもあれで地区ナンバー2の実力であり、まだ上がある。なんなら全国にはさらに強いチームがいる。

これが円堂守のような選手であれば面白い相手とまた戦えるという発想になるのだろうが、そんな化け物じみた鋼のメンタルを持つている選手は数少ない。どうしたらいいのかわからなくなるのも仕方ないことだろう。

．．．とはいえ、赤城のメンタルは少々低すぎる気がしないでもない。特に追い込まれた時のメンタルが低すぎる。

「何かいい作戦はないのか．．．？でも作戦あっても勝てるとは思えないし．．．そもそ



も思い付かないし……」

練習時間を増やせばいいのだろうか？だが、時間を増やすのにも限度がある。となると設備の強化が考えられるが、相手が相手とはいえ結果は一回戦敗退。そんなチームに充分な部費を用意してくれるとは思えない。

「これ勝ち目あるのか……？ここはもう来年に賭けるしか……いやそれだと先輩が卒業しちゃうし……みんなと一緒に頑張りたいし、迷惑かけちゃうし……」

「キャプテン。あんたがサボっちゃだめぞー」

「うおわああああ!?!」

悩んでいると、練習しているはず（おそらくサボリ）の斧街が声をかけてきた。いつたいつからいたのか、赤城は唐突に声をかけられ思わず叫び声をあげる。

その反応を見た斧街はこれが見たかったといわんばかりにケラケラ笑っている。

「いやあ、それにしても昨日の試合は大変だったねえ。ボッコボコにされちゃったんよ」「えっ、あつ……で、でもみんな諦めずに頑張つてましたよ!」

キャプテンが不安になっていたら、チームにも全体にも影響する。そう考えた赤城は、とりあえず何事もなかったかのように話を合わせておく。

「ふーん、みんな諦めずにねえ……?」

斧街の言葉で部室内の空気が止まる。しばらくの間、沈黙が流れた。この空気に耐え

きれず無理やり言葉を絞り出す。

「な、なんですか・・・？」

「・・・まっ、なんでもないさ。それより早く練習に来なよ。サボって怒られるのはあなたの専売特許なんだからさ」

手をヒラヒラと振って部屋から出ていった。とりあえずホッと一息つくが、肝心の勝てる方法は相変わらず浮かばない。

最初は楽しむことを第一にやっていたはずなのだが、いつの間にか芽生えた勝ちたいという気持ち。キャプテンの責任感からだろうか？

「・・・やるしかないかあ」

こうして悩んでいる時間こそ無駄。その時間があるなら少しでも足掻くために練習した方がいい。頬を軽く叩き、気合いを入れ直してからグラウンドに向かった。

「キャプテン今まで何やってたんだよ？まさか・・・俺達に内緒で秘蔵のエロ本でも見てたんじゃねえだろうな!!」

「なんやて!!そんなもんがあるんかいな!!一人だけサボってそんなもん見とるなんてズルいぞ!!」

「そんなものないからな!? 誤解を生む発言はやめてくれ!!」

グラウンドでは他の選手がすでに練習を始めている。赤城もその中に加わり、東条の余計な発言を訂正してからすぐに練習を始める。

「・・・それにしてもメガトンヘッドとは、なかなか癖の技を覚えようと思ったんですね」  
以前淀屋が使った技、メガトンヘッド。シュートブロックの技としてはなかなか強い反面、本来はシュート技のため通常のディフェンスでは使えない。DFとして使うには扱いがかなり難しい技だ。

「ん?あの技そんな名前なんか?」

「いや知らんってことはないやろ?メガトンヘッド覚えようとしてたんちやうんか?」

「いや、あれはたまたまつわ」

衝撃のカミングアウトに思わず絶句。淀屋いわく本当は別の技を覚えようとしていたらしく、メガトンヘッドはたまたまできたらしい。

そういえば、あの試合の時も自分が使ったにも関わらずなぜか驚いていた。たしかに何も知らずにヘディングして、いきなり何か出てきたらああいう反応になるのも頷ける。

「なら、本当は何を覚えようとしてた?」

「ガニメデプロトンって技っす」

「・・・じゃあメガトンヘッドは本当に偶然できたんですか？」

「せやな。なんかようわからんけど咄嗟にやったらできたわ」

淀屋は今まで運動をしていかなかったため、基礎能力はあまり高くなさそうだが、意外とセンスがあつたりするのだろうか？だとするなら今後期待できるかもしれない。

と、ここまでは良い解釈をした場合の話だ。

「つてガニメデプロトンもシユート技でしょ。DFのあんたが覚えてどうするのよ？」

問題なのは覚えようとした技だ。ガニメデプロトンはシユート技。もちろんDFがシユート技を覚えてはならないというわけではない。それにガニメデプロトンでシユートブロックというのもできないわけではない。

だが、基本的にはブロック技を覚えるのがベスト。結果として覚えたメガトンヘッドもブロックできるシユート技ではあるが、こっちは意図的ではなかったのてまだいい。問題なのは意図的に覚えようとしていた技がシユート技だということだ。

正直ロクな理由ではないだろうが、一応なぜ覚えたのかを言うように促してみる。

「だつてかめ〇め波みたいでカッコいいやん！」

やつぱりというか、人によつては頭を抱える返答をしてきた。しかし無理もない。策や利便性なんてクソ食らえ、カッコいいか否か。年頃の男の子にとつてはこれが一番大事なのだ。

「こら！か〇はめ波とか言うたらアカン！話がややこしなるやろ！」

「いやいや！あれどう見たってかめは〇波やん！誰かどう見たって〇めはめ波やん！」

「だからやめなさいよ！！色んな意味でまずいから！！」

前の試合でかなりの大差での負けたとあつて落ち込んでしまふかもしれないと思つたが、そんなことはなかった。ちよつと騒がしくはあるものの、次こそは勝つとみんな練習に励んでいる。

「・・・よし！次こそ勝つぞー！！」

みんなが張り切つていふというのに、自分がくよくよするわけにはいかない。とにかく練習をするしかないと奮起し、赤城も練習に本腰を入れる――

「お前らじゃ勝てないな。確実に」

――はずだった。

「・・・え？」

いつの間にかグラウンドに見慣れぬ男が入ってきていた。ボサボサの髪の毛、悪い目付き、そして気だるそうにした態度。こう言うと悪いが、明らかに不審者にしか見えな

い。少なくとも赤城にはそう見えた。

「ちよつと！誰よあんた！」

「なんだ知らんのか？俺はこの学校の理事長だ」

こんなことを思うのは申し訳ないが、こんな小汚ない理事長がいるわけがない。誰がそんなわかりやすいすぎる嘘を信じるというのだ。赤城以外もそう思っているのか、皆が怪しむ視線を投げかけ・・・

「ええ!?す、すみませんでした！」

・・・獅子神は将来詐欺にでも引つ掛かるんじゃないだろうか。いい子なのは間違いないのだが、それゆえにもものすごく心配になる。一年の星見に至っては完全に呆れており、頭を抱えている。

「どう見ても嘘に決まっているよ。二年生にはまともな判断をできる人がいないのかな？」

双輝中との試合前に、自分のところも結構なイロモノなのではないかと疑っていた赤城であったが、どうやら本当かもしれない。しかし中にはまともな人もいる。一緒にするのはよくないだろう。

「う、嘘吐いたのね!?ますます怪しい！」

この嘘に限っては引つかかった方が悪い気もする。たぢそのことは一度置いておく。

何はともあれこの謎の男が怪しいという点においては間違いないのだ。

「はっはっはっ—！驚いたかサッカー部！」

謎の男に疑いの目を向けていると、どこからかバカみたいな高笑いが聞こえてくる。それと同時に二人の男女が姿を現した。

「技術工作部に現れた期待の超新星！入江現!!」

「同じく技術工作部の太智悠利だ！」

カッコつけて盛大に登場してもらったところで悪いが、まったく聞いたことがない。名前もそうだが、そもそも技術工作部があつたことすら知らなかつた。

「なにっ?!技術工作部やて?!」

「知っているのか支倉先輩?!」

どうやら支倉はその存在を知っているらしく、やたらと大袈裟な対応をしている。東条もそれにならつてわざとらしい反応をしていた。

「顧問こそいるものの部員は二名しかおらん!ほぼほぼ機能していないも同然!いわゆる幽霊部活動やな!」

「酷い言いようね?!そんなに言うことある?!」

「まあ全部事実で否定はできないんだけどな!悲しいぜ!!」

「・・・あつ、そういえば入江つてやついた気がする」

「まったく、同じクラスなのになんで天才である私の存在を忘れてるのよ！東条、あなたには私が天才である所以を話してあげるから後で来なさい！」

「あー、それ言われて思い出したけど太智って俺達のクラスにもいたや」

「そうそう、俺は赤城達と同じ二組だぜー」

「・・・なんで来たか話していいか？」

「ここまで黙っていた技術工作部の顧問が口を開く。このままあの二人を喋らせても話が進まなさそうなので、話してもらうことにした。

「なら、その前に話しておこう。なぜ俺がお前らに勝てないと言ったか

これに関しては単純な話だ。元から持っている技術、残された時間、環境。何もかもがお前らにはない。ないない尽くしてやつだな」

「うぐっ・・・」

先程まで赤城が考えていたことだ。これに関しては紛れもない事実。このチームの何人かは初心者、経験者もいるが、長い間サッカーをしていなかったためblankがある。

それを解決するのは時間だ。時間さえあればどれだけ下手だろうが、blankがあるうが問題ない。じっくりと解決できる。しかし、それも残り少ない。

時間がないなら、よりよい練習環境を用意すればいい。整った環境があれば効率のい



い練習ができる。たとえ下手でも、時間がなくなるとも、これさえあればぐんと成長することができるとができる。

だが、それもない。このチームには何も無いのだ。

「・・・結局何が言いたいんですか？ わざわざ私達を煽りに来たというわけではありませぬよね？」

「その先はこの天才の私と、そんな私と部活ができる幸運な太智が説明してあげよう!!」華咲の問いに対し、入江と太智の二人がポーズを決めて前に出る。ちゃんと説明してくれるのかもすごく心配だが、そんな心配を余所に二人は話を始める。

「我々技術工作部は現在部員が二人。一応顧問はいるし、この私天才のがいるけどさすがにこれだと部活としては認められない! そのせいで部費もまともに貰えず物を作ることもできない!」

対してサッカー部は部員こそいるものの顧問がいない。いちいち誰かに頼むのも面倒だし、手続きとかも大変でしょう!!」

一応ちゃんと説明してくれているが、身振り手振りがいちいち大袈裟だ。それこそ演劇部にもなったらどうだと言いたいが、話が進まないためここは我慢する。

「だからこそ合併を持ちかける! うちの顧問の新凱先生あらかいがそつちの監督も兼任するぜ! ついでに俺達もマネージャーとなるう! その代わり部費はこつちが管理で八割徴収!

で、追加でもう一つ条件がある！どうだ、悪くないだろ？」

ようするに、技術工作部とサッカー部で合併をしようという提案だ。

たしかに合併すれば、向こうは一応形状の必要な人数が揃えられる。なおかつ足りない部費もこちらの分を使えばある程度補える。

こっちは正式な顧問を迎え入れることができる上に、役に立つかはさておきマネージャーが来てくれる。たしかに一見すると悪い話ではなさそうだが・・・一つだけ問題があった。

「・・・ちよつと待て、八割も持つていくんかいな!？」

こちらの分の部費を八割も持つていかれる。いくらなんでも横暴としか言いようがない。

「別に良いでしょ？ユニフォームとかはもう揃ってるし、あと買うといつても追加のボールとかドリンクぐらいじゃない？あつ、交通費に関してはちゃんと出すから安心よ!」

「いやボールだけでどうしろつて言うのよ!？」

「こっちも設備とかがいるんヨ!!そんな余裕ないんヨ!!」

「せやぞ！せめてもうちよいまけんかい!!」

たしかに監督とマネージャーは欲しいが、部費八割は持つていきすぎだ。それにこれ

に加えてもう一つ要望があるというのだ。まだ時間はある。それなら頑張つて監督を探す方を選ぶ。

「・・・俺を監督にしてくれれば強くなれると保証しよう。それなら悪い話じゃあないと思うんだが？」

だが、新凱は自分さえ監督にすれば確実に強くなる。何か確信があるような含み笑いもしている。ハツタリのような気もしない。

「・・・ひよつとして、昔すごい選手だったんですか!？」

実はこの人がかつてはすごいプレーヤーで、効率の良い練習方法や緻密な戦略を立てられるというのなら話は変わってくる。

それならばぜひ監督になつてもらいたい。八割持つていかれるのはやはり痛いところではあるが、もしすごいプレーヤーだったというなら良い機材を無理に買う必要はなくなるため、対等な等価交換となるだろう。

「いや、まったく」

しかし、そんなことはなかった。なんならサッカーどころか運動ですらほとんどしたことがないという。

「・・・なら、どうやって俺達を強くするんです？申し訳ないが信用できません」

黒鉄の言うとおり。それでどうやって強くなれるというのだ。部費徴収のために適

当なことを言っているとしたか思えない。

「・・・あなたが監督になったら、勝てるようになるんですか？」

だが、それでも赤城は話を聞くことにした。

「勝負事に絶対はないからな。勝てるとは言えん。だが、このままやるよりは強くなれるというのは保証しようか」

具体的な方法を言っつてこず、濁している時点でかなり怪しい。それでも赤城は首を縦に振った。

「・・・わかりました！お願いします！」

「ええー。キャプテン、本気かい？」

「怪しいのはわかってます！でも、可能性があるなら賭けみてもいいんじゃないですか？」

決して疑っていないわけではないし、正直信用はまったくしていない。だが、普通にやつても予選で負けてしまう可能性の方が高い。ならば、多少のリスクを負うことが必要になってくる。

「・・・まつ、キャプテンがそう言うんならしゃあないな。ついていったるか！」

「私も賛成だ。本当に強くなれるのなら、このチャンス逃すわけにはいかない」

「仮に何かあれば抵抗するだけだ。問題ない」

ちよつと物騒な声も聞こえてきたが、みんなも納得してくれた。見た目が怖かったりおちやらかしたりすることもあるが、本当にみんな良い人だ。

「おつし！決まりだな！それじゃあ行くぜ！」

「行くつて・・・どこに行くんだ？」

「なに、来たらわかる」

そう言うのと、新凱は不敵な笑みを浮かべて歩いていった。

不自然に思いながらも、みんなで新凱の後についていった。学校を出て、そこそこの距離を移動し、たどりついたのは・・・

「あの・・・ここつて遊園地ですよね？」

ナニワランド、大阪の有名なテーマパークの一つ。観光名所として人気のスポットだが、これといってサッカーに関係があるような施設ではない。

「やっぱり騙したのね!!怪しいと思つたわ!!」

「・・・騙すのは、よくないです」

「くそー、俺達を騙しやがつて！でも折角来たからには遊んでいかないと失礼だから遊

んでいくぞ！もちろん全部奢ってもらうからな！」

「まずはジェットコースターからや！それが終わったらバイキング、あとはせやなあ……」

「おつとビックリハウスも忘れてたらあかんで！何かあったらいつでもあねさんに抱きついてええからな！」

「後ろ三人、本当は遊びたいだけだね？」

「ちよつと！遊びじゃないのよ！……ま、まあたしかに楽しそうだけど……」

「おおつと、キミもあっち側なのか？」

「まあ待て、黙ってついてこい。金は払ってやる」

そんなわけで入場料は新凱が支払い、中へ入る。ジェットコースターや観覧車など定番のものからよくわからないものもあり、数名は目を輝かせていた。

しかし新凱はそんなものには興味がないのかさっさと歩き、辿り着いたのは……先程支倉も言っていたビックリハウスだった。

「さすが監督さんよくわかってるやん！じゃあまずは誰と組むか決めなあかんわな！誰かくじ引きとかできるもん持ってへんか？ないならあねさんが決めさせてもらうで！とりあえず斬君とマサキ君でべアな」

「なして!? なしてこいつなんかと一緒なんですか!？」

「こんなんは女の子とペア組むんが普通やろ!?なんでよりもよってこいつやねん!」  
ギャーギャー騒いでいるあつちはもう放っておき、残ったメンバーがビツクリハウス  
について話し合う。

「・・・ふむ、たしかここはそれなりに怖いと有名なビツクリハウスだね」

「ほう、ワシはあんまり詳しくないんじやが・・・そんなに有名なのか?」

「もちろん日本一とかそういうわけじゃないけど、こういうテーマパークの中ではそこ  
そこ怖いって評判なんヨ。ま、まあ・・・私は全然平気なんヨ・・・?」

「・・・本当?」

「ウソナンテツイテナインヨ」

「そこそこか・・・なんか、近いものを感じるなあ・・・」

「そこそこというのが絶妙に中途半端。赤城は悲しながら親近感を覚えてしまった。

「・・・なんや獅子神。震えとるけど・・・まさか怖いんか?」

「は、はあ!?べ、べつにいい!!怖くなんてないけどねえ!!」

抗議から戻ってきた淀屋が獅子神に声をかける。本人は平気だと言っているが、話し  
かけられた瞬間にビクツしており、声も足も震えている。説得力はまるでない。

「・・・わっ!」

「ひやあああああ!!・・・東条!!あんたねえええええ!!」

「ちよつ！悪かったつて！あやまいででででで！」

「・・・俺たちの目的はそつちじゃない。こつちだ」

余計なことをして獅子神にシメられている東条はさておき、新凱はビツクリハウスの隣にある茂みの中を歩いていく。赤城たちもそれについていく。

「・・・階段？」

「作業員用の裏口か？それにしても随分とわかりにくいところに・・・」

赤城達が不審に思うのを他所に、勝手に入っていく。正直入っていいものなのかとは思ったが、しょうがないので中に入る。

「なんだか不思議な部屋だね。食べ物匂いは・・・しないか」

「・・・さすがにこんなところにはないと思いますよ」

「ここは物置なのだろうか？色々なものが置かれており、さらに青空が描かれたのどかな絵が飾られてある。」

「さて、お前ら。やってこい」

新凱の指示で、入江と太智の二人が奥にある装置を動かす。すると何かが動く音がし、壁の絵が青空から夕暮れの景色に変化した。

「あとはまた階段から移動すればいい」

「あの、それだと外に出ますよね？」



「大丈夫よ！この私を信じなさい！」

同じ階段なのだから外に出るだけのはず。疑問に思いながらも入江に押される形で階段を移動する。

「……っ！これは!？」

本来なら外に出るはずだというのに、階段を移動してたどりついたのは外ではなく、どこか前衛的で形容しがたい不思議な部屋だった。

「次はここだな。ついてこい」

「は、はい……」

さらに部屋にある装置を操作し、奥にある謎の乗り物に乗って下へと移動する。そこには様々なトレーニング機材に加え、よくわからないがすごそうなものがあつた。

「こんな場所があつたのか……?」

「ふっふっふっ、驚いたでしょう！私のような天才でなければ見つけれなかつたわ！」  
胸を張って自分の天才アピールをしてくる入江。新凱は面倒だったのか相手にせず、ここについての話を始めた。

「ここはたまたま遊びに行っていた入江と太智が見つけたときは何の施設かはわからなかつたが、調べていくうちにサッカーの練習をする施設だということがわかつた」

「それで研究魂に火が着いて詳しいデータを取ったんだけどさあ、俺達はサッカーなんてしたことない！いやー、困ったもんだぜ」

「・・・なるほどな。さつき言ってたもう一つの要望はデータ収集の協力か」

「そういうことよ！それぐらいなら構わないでしょ？別に不利益があるわけじゃないし！」

部費こそほとんどなくなってしまいが、たしかにこれなら部費もほとんど必要ないだろう。こちららが惹かれ始めたのを察してか、新凱はこちらをノリ気にさせるべくある情報を話す。

「一つ良いことを教えてやろう。実はあの雷門中学もここで練習したことがある」

「えっ!？」

雷門中学。もちろん知らない人はいないだろう。イナズマイレブンの再来と言われ、新たな伝説を作り上げたチームだ。

全国大会で優勝し、エイリア事件では中心となって事件を解決、さらには多くの選手が世界大会に選出されるなど、まさに伝説のチーム。そんなチームがここで練習していた・・・それならば、自分達もかなりのパワーアップが見込めるだろう。

「・・・まあただの噂だな」

「いや嘘なんですか!？」

まさかの嘘に数名はお手本のように綺麗に転じた。あまりにも真剣な表情と真面目なトーンで話していたものだったため、普通に信じてしまったのだ。そんな期待できる嘘は吐かないで欲しい。

「そんな反応をするな。なんでもここは宇宙人の基地だとか強化人間を作り出すための施設だとか眉唾な噂しかたつてない。それに比べれば俺のはまだありえそうな噂だろう」

そう言つて悪びれもせず、頭をポリポリと搔いている。そういえば宇宙人というと、昔エセ宇宙人が襲撃してきたというニュースもあつた。それからもう四年も経つ。時の流れは早いものだ。

「でも使えるのかしら？ 結構古そうよね、これ」

いつからあつて、いつから使われなくなつたのかはわからないが、それなりに時間が経っているのかとところどころ古びているところがある。

「そこは安心してくれ！ 今俺達が修理してるところだぜ！」

「おそらく今月中には完全に直るわ！ さすが私！ 見慣れないものでも直すことができる！ まさに天才!!」

さすがは技術工作部・・・と言いたいところだが、これは技術工作の範囲なのだろうか？ いささか疑問ではあるが、この際気にはならない。

「ただここでの練習はおそらくかなりハードなものになる。それでもやるのか？」

まだ全容はわかっていないが、普通ではないのはたしか。間違いなく厳しい練習になるだろう。しかし、それでも答えは決まっている。

「……もちろん、俺はやります!! えっと……みんなもいいか……?」

というより、普通にやっても勝ち目がないのから実質選択肢はない。やるというよりやるしかないという表現の方が正しい。

「私は構わない。厳しい方が特訓になるからな」

「それに面白そうだし、むしろ楽しみなんヨー」

「秘密基地的なやつは男のロマンやーテンションあがるでえ!!」

そんな赤城の本心は露知らず、むしろみんなは楽しみにしている。

「決まりだな、それじゃあ今日から俺が監督だ。まあサッカーはほぼ知らんから試合のときは自由にやってくれ」

なんとも無責任だが、練習施設を見つけてくれ、使えるようにしてくれるだけありがたい。新凱監督に感謝し、これからの構想を練ることにした。

## より強くなるため

新たな施設に行けるようになったものの、修練場はまだ使えない。そのためしばらくはいつも通りグラウンドでの練習なるのだが、この日は練習の前に会議を開いている。メンバー全員で修練場が使えるようになった時の計画を立てているのだ。

「——で、どれくらい頻度がいいんヨ？」

「・・・難しいですね。あそこの練習がどれだけ厳しいのかわかっていませんし」

「できることなら、一日も欠かすことなく練習に励むことができれば最適なのだろうね」  
あの機材の充実している修練場ならば、確実にパワーアップは期待できる。毎日やれば相当の力を手に入れることができるだろう。

だからといって、やたらめつたら練習すればいいというものではない。

「もちろんだ。だが、毎日あれで練習するのはキツイだろうな。週に二回から三回、それ以外はここで基礎、連携を重点的やるのがいい」

過剰な練習は怪我のもと。ましてや、あそこの練習はハードというレベルを越えているという話だ。レベルの調整はできるらしいが、それでもやりすぎるのは危険だろう。

「しかし、そのペースで勝てるでしょうか？ できる人は多少無理してでも毎日やった方

が・・・」

「まあまあ、焦ったらアカンで涼華ちゃん？疲労とかは気づかん内に溜まつてくもんや。特にあんたは前に怪我してるし、下手に無理して再発、悪化なんてしたら目も当てられへんで」

生真面目な麻宮は、余力のある人は多少無理してでもやるべきではないかと意見を出す。しかし、無理はよくないと支倉に止められる。

「・・・すみません。少し焦りすぎていました」

たしかに自分が焦りすぎていたと考えを改め、頭を下げた。支倉は気にするなと頭を撫でる。

・・・その際に胸に手がいつていたのを星見は見逃さなかった。当人が気にしておらず、こつちが標的にされたらたまったものではないので何も言わなかったが。

「そうそう、無理はよくないからな！怪我だけはしないようにな？」

・・・と赤城も無理はしないように言ったものの、正直赤城も焦っている。いくらい施設が見つかつたとはいえ、あれだけの差を見せつけられて余裕な気持ちを持てるはずがない。多少無茶してでも練習したいと考えるのは当たり前だ。

しかし、怪我はできない。人数がギリギリというわけではないが、このチームは一人一人がそれぞれの役割を持っている。一人が怪我すれば、そこに大きな隙ができてしま

う。そのため過度な練習をすることはできない。

無理してでも力を付けたいとは思いますが、それによる怪我は避けたい。まさに板挟み状態、ジレンマとはこういう状態のことを言うのだろう。

「とりあえず修練場を使うのは月の一週目と三週目は月水金の三回、二週目と四週目は火木の二回にしておこうか？これを基本として、あとは慣れとかその日の様子とかで細かく調整していく。これでいいかい？」

「ええんちゃう？うちは文句ないで」

「私もいいよ。やってからの調整は必要だろうけどね」

特に否定する声もなかったため、これで今後の予定はだいたい決まった。とはいえまだ使えないので、使えるようになるまではグラウンドで地道に練習するしかない。

早速グラウンドに移動し、今日も地道に練習開始。基礎、応用、技、各自で自分の今やるべきことを見つけひたすら特訓する。

「・・・裁野先輩、何の練習を・・・？」

裁野はボールも持たず、目を瞑っている。それにも関わらず、どこか近寄りがたい雰囲気を出しており、何もしてないとはいいがたい。

「・・・この地区で優勝を目指すなら、サイクロンだけだと厳しいだろうからな。相手のボールを直接奪う技も用意しておいた方がいい。だからイメージトレーニングをしてきた、それだけだ」

世の中にはイメージトレーニングというものがある。想像し、頭の中でイメージを固めて技術を上げるといふものである。

この練習の良いところは、まず物が必要ない。加えてあまり疲労がなく、集中力を高め、頭をすつきりさせることもできる。また、身体を使う場合はある程度の広さがある場所が必要になるが、想像するだけならどこでもできる。

頭の中で技のイメージを作り、架空の相手に技を仕掛ける。ひたすらそれを繰り返す、どのような技にするのかを固定する。

「・・・でしたら俺も一緒に練習していいですか？奪ったボールをキープする練習をする必要があるのだから」

とはいえイメージだけでは限界がある。実際に動かし、なおかつ相手がいた方がやりやすいだろう。ちょうどオフエンスの練習をしたと思うていた黒鉄は練習に誘ってみる。

「・・・ちょうど技のイメージが固まったところだ。やるのは問題ない。だが、俺は練習でも容赦しない。やるなら覚悟しておけ」



「・・・はい！」

オフェンスとディフェンス、お互いがやりたいことをできる。条件が合致し許可もとれたため、今度は二人で練習を始める。

別の場所ではFWが練習している。シュートを打ち、威力の向上。また、新しい技の開発を試みている。

「煌、シュート練習してるの？」

そこにやってきた獅子神が話しかけたのは、シュートを打っている星見だ。前はMFでの出場だったが、本来はFWだ。

「ああ、どれだけ守りが固くても点を取れなきゃ勝てないからね。攻め手は多いに限るよ。・・・で、なんでキミは私のことを名前で呼んでるのかな？」

「別にいいでしょ？だって私たちチームメイトだし、もうすでに仲良しじゃない！」

そうやって獅子神は星見と肩を組もうとしたが、星見はそれを避けた。その結果、獅子神は勢い余って顔を土につける羽目になった。

「な、なんで避けるのよーっ!!」

「そうだね、なんというか・・・バカが移りそうだったからつい」

「ねえ酷くない!？」

勘違いしてはいけないが、獅子神は決して頭が悪いわけではない。少しばかり疑う心  
が足りていないだけだ。ようするに偏差値などのバカではない。純粋なバカなのだ。

「酷いも何も事実じゃないか」

「うー！そんなに言うことないじゃないのよー!」

「・・・あれは大丈夫ですか？」

「あれはスキップだから多分大丈夫なんヨ」

ギャーギャー文句を言う獅子神とそれを適当にいなす星見。これではどっちが上級  
生なのかわからない。強いて言うなら獅子神の方が若干大きい。ドングリの背比べ程  
度の差ではあるが。

「それで三日月さんは何を？」

「うーんとね、ハイバウンドフレイムを一人で使えたら強いと思ってるんヨ。それで  
色々試してるんだけど上手いかわなくて・・・」

ハイバウンドフレイム、たしかにあれを一人で使えたら強力だ。そこで三日月は一  
人でも使える方法を模索しているが、なかなか上手いかわらないようだ。

やはり連携するのが一番だろうが、二人だと片方マークされると詰みだ。それにあれ  
以降赤城と共に練習したができなかった。三日月のパワーでは以前の高さまで安定し

て打つのは難しく、赤城の方も空中でバランスをとるのが難しいらしくコントロールできず外れてしまう。

結局幻の技となつてしまいそうだった。

また別の場所では、キャプテンの赤城がボールを持つて何か思案している。

「飛ぶ、羽・・・炎・・・ええつと、あと何があるつけ・・・？」

この地区を勝ち抜くには、ヒートウイングだけでは無理。それは前の試合で証明された。ならばどうやって解決するのかという話だが、使い込んで強化する、より強力な技へ進化させる、まったく別の技を覚えるという三つの方法が主なパターンになる。

最初の方法が一番簡単だ。別に難しいことをする必要はない。ただひたすら技を使い続ければいい。と言うのは簡単なのだが、それ相応の強化をするにはかなり使い込まないといけない。ようするに手間がかかるのだ。

次にまったく別の技を覚えるという方法。上手くいけば、強力な技をすぐにも覚えられるかもしれない。しかしこちらはゼロから始めるため、要領を掴めないと延々と時間がかかる。何もできずに終わるという可能性も充分にある。

それらの中間卓となるのが強力な技への進化だ。今ある技を軸にし、新たな技を覚え

る。たとえばワイバーンクラッシュという技。ドラゴンクラッシュの威力を継承しつつ、そこにスピードを加えた技。完全な新しいものではなく、あるものを正當に強化し進化させる。

これだけ見ると一番良いようにも見えるが・・・ヒートウィングの場合、どう強化したらいいのかが思いつかない。あそこから何を加えれば良いのだろうか？と悩んでいるところだ。

「うーん・・・まったくわからん・・・」

炎の翼をまとつて飛ぶ。ある意味技としては完成形のようなもの。スピードを高めたり、より高所への飛翔、炎の強化など改善のしようはまだまだある。しかし、進化となると話は別。どうやって進化させたらいいのかまったく思いつかない。

「あーあ、こんなこと考えなくていいぐらい上手ければ良かったんだけどなあ・・・」

もつと小さい頃から始めていれば？もし自分にたぐいまれな才能があれば？こんなことを考えても上手くなるわけでもなく、それらが手に入るわけではないが、人間は自分がないものを欲しがるもの。他の人が上手いとその欲はより大きくなる。赤城もまさにその状態だった。

「おおキャプテン！一人で何してるんじゃない？」

「・・・いや、なんでもないですよ！そっちこそどうかしましたか？」

そこにボールを片手に持った盤上がやってきた。邪な考えはさつと捨て、いつも通りの調子に戻して話をする。

「うむ、もっと強くなりたいたいからな！他にやることがないなら練習に付き合ってくれんか？」

「もちろんですよ！どんどん来てください！」

「ガハハッ！すまんのうち！それじゃあ早速いくぞ！」

このままずっと考えていても、時間を無駄に使うだけ。とりあえず体を動かすしかない。赤城は盤上と二人で特訓を始めた。

## そこに山があったから

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、各々が次に向けて準備する。この後は帰宅、掃除、雑談、居残りなどやることは違う。

「おーつす、今日もはえーな」

そして、サッカー部所属の東条は部室に入る。一番乗りかと思つたが、そこにはすでに淀屋がいた。結構早く来たつもりだったのだが、淀屋の方が早かつたらしい。

「せやな。でもそつちも早いやん」

「それもそうだな！」

またしてもこの組み合わせ。ここまで一緒になると、運命的なものを感じる。変態同士は引かれ合うといったところだろうか？もつとも、二人はもつと可愛い女の子を要求するだろうが。

「はあー、しつかし誰か来るまで暇だな」

「誰かけえへんかな。二人やとさすがに暇やで」

揃いも揃つて暇だとぼやく。とはいえ二人だけでは退屈なものも仕方ない。ましてやいつも話すような仲良し二人組。話したいことはおおかた休憩時間などに話している。

暇なのは間違いないだろう。

「そんな二人の元に来てやったぜ！」

と、この暇な時間をどうするか悩んでいると、ちやうど誰かやつてきた。快活そうな笑顔をしている男、太智優利だ。

「なんや太智かいな。現ちゃんやないんかい」

「チエンジだチエンジ。男に興味はない。現ちゃんを呼んでこい」

「そりやないぜー、同じサッカー部の仲間だろ？」

さつきまで誰か来ないかと言つていたのに、モテたい男セットは太智を適当にあしらう。彼らは女の子が欲しかつたのだ。まったくもつて贅沢な話である。なお太智は気にせずぐいぐい来る。

「仲間やいうてもなあ．．．正確には違う部活やし、なんかなあ．．．」

たしかに場所と機材を提供してくれた点に関しては感謝している。あれがなければ地道な練習で大きな差を埋めなければいけなかつたが、あの修練場さえあれば短期間で差を縮めることができるだろう。その点は本当に感謝している。

しかし、一緒にフィールドに出て戦う仲間と比べると仲間とは言えない気もする。ましてや今回の件は親切心というわけではなく、向こうにも利益があるから。仲間というよりは協力関係と言つた方が適している。

「じゃあとおきのお話を話してやるぜ」

「とっておきい？どうせくだらない話じゃねえの？」

「だいたいこういう時のとおきというの是对した話ではない。どうせ信憑性のない七不思議だとか、全員が知っている教頭先生ツラ問題程度のことだろうと適当にあしらうつもりでいた。」

「いやー、知りたいと思うけどなあ・・・」

・・・現先輩の胸度、知りたくないのか？」

その瞬間、部室の空気が止まった。

「なんやて・・・？お前、まさか・・・」

「・・・なるほど、お前も俺達と同類かッ!!」

東条の一言に不敵な笑みを浮かべ、大袈裟な動きで頷いた。

「あの人は機械の改造とかしてるときはめっちゃくちや集中してるから見放題だ！だから現先輩の胸度はだいたい把握しているぜ！」

「ナニイ!?なんちゆう羨ましいやつちや・・・ワイも技術工作部に入るべきやったか・・・」



「淀屋、落ち着け！俺達だって試合中は合法的に見ることができるとし、なんなら合法接触が可能なんだ！俺達の選択は・・・決して間違つてない！」

さすがは下半身に正直な二人。聞いてもいないのに自分が思ったことをはつきりと口に出した。

正直者は救われるという言葉があるが、正直者がバカを見るとという言葉もある。きつと彼らはバカを見るだろう。まあこの場合は彼らが悪いので、意味は少し変わってくるが。

「それで、どのくらいなんだ？俺が見た感じ平均よりは少し大きいぐらいと予想してる」「さすがだぜ。あんたの言うとおりおそろく並以上。ただ大とまではいかない、おそろく並と大の中間辺りと考えるのが妥当だぜ」

「なるほど、戦胸力6000といったところやな。なかなかやるやん」

さつきから胸度やら戦胸力といった謎の単語が出てきているが、気にはしていない。天才よりもバカの方が何を考えているのかわからないときだつてある。

しかしそれを調べたとて意味はない。ただただ時間を浪費するだけ。聞き流してスルーしておくのが一番だ。

「・・・ところでさ、あれは何だ？」

ここで話を区切り、太智が指を差したのはよくわからない布。何かに被せているの

か、やたらでこぼこしている。それになかなか大きい。一人は隠せるぐらいの大きさがある。

「さあ？昨日まであんなもんなかったんやけどな・・・剥がしてもええんちゃうか？」  
「まさか部室に変なものはないだろうしな。よし、剥がすか！」

あんなものを置かれていたら気になって集中できない。部室に危険なものがあるとは考えづらいし、仮に問題があつたならまた戻せばいい。三人が布の周りに集まり、一気に引つ剥がす。

「・・・ん？」

「・・・えっ?！」

わざわざ被せている辺り、何か貴重な物でも置いてあるのかと思つたが・・・あまりにも予想外だった。そこまで手入れされていない青色の長い髪の子が気持ち良さそうに寝ている。だが、完全に見たことある人だった。

「なあ、この人つてさ・・・」

「ああ、斧街先輩だな」

なんでこんなよくわからないことになっているのか？まさかとは思うが、誰か来た時に寝ているのがバレないようにするためわざわざ布を被ってカモフラージュでもしようとしたのだろうか？

正直目立っていたし、バレバレ。本当にそうならバカとしかいいようがないが……この人いつつも寝てんな。授業中も寝てるって話だし、逆に夜は何してんだ？」

「ホンマよう寝るわなあ。とりあえず起こそか。このまま寝られてもそれはそれで集中できんし」

それにしてもこんなものを用意してまで寝るとは、よっぽど眠かったのか。それともこの寝心地がいいのか。何にせよ寝られていても困るので、起こすために手を伸ばす。

しかし、淀屋はそれに気づいてしまった。

「……ッ!!見てみい東条!エベレストや!エベレストが二峰もあるで!」

「は?淀屋さあ。お前ついに幻覚でも……ッ!!」

ここは日本、世界の名峰であるエベレストなどあるはずがない。ましてや二峰とはどういうことだ。とうとう頭がイカれて幻覚でも見るようになったのかと思ったが……違った。

「なつ、なんだとお?!そんなバカなッ!」

たしかにそこには巨大な山が二峰あった。その大きさは世界の名峰、エベレストに匹敵するぐらいの圧倒的大きさを誇っている。

……とまあ派手に言っているが、彼らが注目しているのは斧街の胸元である。つま

り、そういうことである。

「せ、戦胸力100000・・・だと!？」

「な、なんちゆうことや・・・そんなことありえるんか!？」

「これは驚いたぜ・・・こんな近くに名峰が存在するなんてな・・・」

三人はいったん距離をとり、頭を落ち着けてから小声で相談。それぞれの考えを伝え合ったところ、三人の考えは同じ。結論を出した。

「ワイらはサツカー部。足腰を鍛えるのは当然のことや。練習も兼ねて、この山に登頂するとしよかあ」

足腰を鍛えるために山に登る。言葉だけならわからなくもないが、やってることは完全にアウトである。

「なぜ山に登るのか?その問いに対し、登山家は言った。そこに山があるからだ。だからこの山に登るのは合法だぜ!」

とりあえずこの三人は登頂する前にやる必要がある。登山家に対しての謝罪である。というかそもそもこの山は登山してはいけない。

「よーし、お前ら!城翔中学登山部、始動だ!」

いつからここは登山部になったのだ。しかし、ツツコミを入れる者が不在。完全に欲にまみれた急造登山部が始動・・・

「——協力してくれるのはありがたいけどなあ。修練場で本当に勝て・・・あつ、もう来てたのか」

「おつ、キャプテンか！先に失礼してるで！」

と、そこに何かぶつぶつと呟きながらキャプテンの赤城がやってきた。しかし特に三人は気にしていない。挨拶だけして続けるつもりである。

赤城はというと、三人が何を言っているのかはわからなかったが、別にいいかと気にしないことにする。それよりも、三人と後ろでぐっすり寝てる斧街を見てうなだれた。

「また斧街先輩が寝てる・・・しようがないな・・・」

寝てるかサボるかの斧街。やれやれと思いつつも、律儀に起こすためほっぺたをぺしぺし叩き始めた。

「あー!?おいキャプテン!!何してんねん!!」

「えっ?そんなに強く叩いてないけど・・・」

あんまり強く叩くのはいけないと思っただけで、起こすときはいつも軽くぺちぺちする程度にしている。痛くないようにしているはずなので、淀屋が止めたことを疑問に思う。

「そうじゃねえだろバカヤロウ！日頃の疲れが溜まって寝てるかもしれないんだぞ！」

「いや・・・それはそうかもしれないけどさ、日頃の疲れっていつても斧街先輩は基本サボリ——」

「シヤラツプ!!キャプテンの意見は聞いてない！とにかく起こすなんてもつてのほかだぜ！恥を知れ！」

「え、ええ・・・？」

いつもはそんなことを言わないのに、今日は絶対起こすなどひき止める。困ったものだ。と赤城は頭を悩ませるが・・・

「ううん・・・あれ？もうこんな時間かい？いやあ、よく寝たよ。それじゃあ今日も頑張るとするかねえ」

だが、三人が大声を出して騒いってしまったことも相まって、三人が悪事を働く前に斧街が起きてしまった。

「言いましたね？言質取りましたよ？」

「手厳しいねえ。そんなこと言わずにのんびりやろうよ」

目を覚ますと、今日は頑張るとこれ以上ないぐらい疑わしいことを言っている。遅刻常習犯が次から絶対に遅刻しないと云ってるぐらいには疑わしい。

「・・・斧街先輩」

赤城と斧街が二人で話していると、途中で東条が割り込んでくる。いつものようなふざけた感じではない。その目は本気だった。

「なんだい？ あんたも疑ってるのかい？ 心配しなくても今日はちゃんとやるってば」

「そんなことどうでもいいんで、とりあえず寝てください」

「・・・うん？」

「あの、どうでもよくないんだけど・・・？」

てつきり東条も疑っているのかと思つたが、予想外の反応だった。赤城も訳がわかつておらず驚いている。

斧街からすれば味方が増えたということになる。それ自体はいいことだが、とりあえず今はもう眠くはない。

「いやいや、もう眠気はないし今はいいよ。またあとで・・・」

「そう気を使わずに。ほら、お疲れでしょう。今すぐに寝てください」

「え？ いや・・・今はもう大丈夫だから・・・」

「疲れは自分の知らん間に溜まっつとるって聞いたことあります。せやから眠りましょう」

さらに東条だけでなく、淀屋と太智の二人が加わり、三人がじりじりと詰め寄る。ちよつとしたホラー映画みたいだった。

「なっ、なんなんだい!? ちよっ、もういいから!」

斧街がいくら言っても聞かず、三人は距離を詰めてくる。

「まさかずつと寝てたことに対する当て付けかい!? それは悪かつたつて! あたいも反省してるつて!」

あまりにも必死すぎる。この寝てくださいは、永遠に寝てる的ニユアンスを持つているのかもしれない。いつもサボっているため、心当たりは充分にある。

「いえ! ただの親切心ですツ!! ご気になさらずツ!!」

「それにしても目が怖い!? 圧がすごいんだけど!?」

鬼気迫る表情で斧街に寝るように勧める三人。下手なB級映画よりもよっぽど怖い。

「そんなことないですわ! ワイらは斧街先輩のことを大事に思つとるんです!」

「そうそう! 気のせいですから早くお眠りになつてください!!」

「絶対気のせいじゃないよねえ!? これ絶対永遠の眠りとかそつちの意味だよねえ! ちよつとキャプテン見てないで助けてくれないかい!!」

「え、ええ・・・?」

一応サボりの常習犯なので、身に覚えはある。これはまずいと赤城に援護を要請するが、状況を把握できない赤城はただ呆然とするしかなかった。

「おはよー! 今日元気になっていくんヨ!」



ちようどそのタイミングで他の部員がまとめてやってきた。そんな彼女らが見たのは、四人の男が斧街の周りを取り囲み、鬼気迫る表情で詰め寄っている場面である。

「えっと、あの……ご、ごめんなさい……？」

「三日月、見てはいけないよ」

「ねえ、退部してもいい？嫌なんだけど、こんなサッカー部にいるの」

唾然とし何を思ったのか謝る三日月。そんな三日月を見て、佐原がこの光景を見せないよう咄嗟に目に手を覆い被せて隠す。事情は知らないが、見せてはいけないような感じがした。そして星見はいつものごとく幻滅していた。

「……その、なんだ。無理矢理はよくないと思うぞ……」

「うむ、ワシらが来てない間に大変なことになつてるのお」

「……ちゃんと練習するなら好きにしろ」

黒鉄や盤上も目の前の光景を見て、呆然とするしかなく、ようやく言葉を発するも歯切れが悪い。なお裁野はあまり気にしていなかった。

そして、少し遅れて状況を把握した獅子神が声を荒げた。

「こんの変態どもオオオオオ!!いい加減にしなさいッ!!」

「ひでぶっ!!」

「あべしっ!!」

「うわらばっ!!」

「待って!?!俺は関係な——」

獅子神の強烈な蹴り、通称シシガミンキックが華麗に炸裂。冤罪の赤城も含め、四人は地に伏した。

「いてて・・・なんでこんな目に・・・」

「ご、ごめん。てつきりあの三人と一緒に何か企んでるのかと・・・」

「・・・すみません、僕がもつと早く声をかけていれば」

「いや気にしないでいいって!別に痛く・・・ごめん、やっぱり痛い・・・」

あの後誤解は解けた。本来なら証拠がないため覆しようはなかったのだが、実はあの場には千景もいたのだ。ゴタゴタしてしまったせいでものごとく気づかれていなかったが、ここに至るまでのことをすべて見ていた。

そして、赤城が蹴られて後によく気づいてもらえ、すべてを話したことで誤解だったことが判明。冤罪を作らずに済んだ。まあ蹴られた後ではあるが。

「よし、とりあえずこれでいい。怪我というほどのものでもないから動いても問題ない。多少痛むかもしれないが……」

「おお、ありがとー。それにしても麻宮は怪我の手当て上手いんだなあ」

「怪我してから色々調べたからな。軽い怪我なら自分で治せる」

呆気からんと答えるが、そもそもこれは何の怪我に分類されるのだろうか？ 打撲……というほどのものでもない。とはいえそれはもうどうでもいい。とにかく誤解が解けてよかった。

「俺は疲れている斧街先輩を休ませようとしていただけだぜ!!濡れ衣だー!!」

「それはそうと麻宮ちゃん!ワイらにも治療を頼みますわ!!ハリーハリー!!」

「そうだそうだ!というか俺達の方が重症だ!!ぜひ俺達に愛の施しを!!」

「全然懲りてへんなあ。まっ、それぐらいいやないとセクハラなんかやってられんわなあ!!」

「おお……っ!さすが支倉先輩!わかっていらっしやる!!」

なお、残りの三人は当然許されなかった。三人はただ休ませてあげたかったのこつちにも手当てをなどと供述しているが、誰も信じてくれなかった。唯一支倉先輩のみ彼らは将来有望やで……と言ったぐらいだった。

「……すまない。あれはどうしたらいい?」

「ほっとけ。あいつらはほっといても勝手に治る」

「そうだね。ほっといてもいいんじゃない？」

結局あの三人は手当てしなくていいと言われてしまった。三人は不満そうにしていたが、本当に何もしなくても勝手に治っていたとのこと。

## 荒央中学降臨!!

例の大阪大会は順調に進み、今日から三回戦の幕が上がる。ここまで来るとチームもそれなりに減っており、ある程度の実力を持つチームが残る。

そのため圧倒というよりも白熱した試合が起こりやすいこともあって、観客も試合が始まるのを今か今かと待っている。

・・・もつとも、今回の場合は少し違う。

「ええ調子やなあ。このまま優勝いけんちやうか?」

「よし、このまま一気に駆け上がってやるぜ!」

「負けちまった城翔中学の分まで頑張らないといけないな。今回も勝とうぜ!」

なんとか三回戦まで進出した輪成中学。相手が良かったということもあるが、城翔中学との試合で火がつき、かなりのパワーアップを遂げていた。

しかし、次の相手はそう簡単にはいかない。

「地区最強・・・か」

誰かがポツリと呟く。自分達がこれから戦う相手は、この地区で王座に君臨しているチーム、荒央中学だ。

観客がいつもよりも試合を楽しみしているのはこれが原因。王者の圧倒的な強さ、今はそれをもとめているのだ。

「なんや、ビビってんのか?」

「まさか、むしろ楽しみつすよ!」

仲間の威勢のいい返事を聞いたキャプテンの三堂はニヤリと笑う。地区最強、前年度地区大会優勝校。実力は自分達とは桁違いだろう。

とはいえ相手がどこだろうが、やることはいつもと変わらない。一試合を全力で戦って、ただ勝ちに行く。それだけだ。

「みんな行くでえ!! 格上なんて関係粗へん!! 今回も勝利やー!!」

「おっしやー!! やったるでー!!」

「負けへんぞー!! ウィーアーチャンピオン!!」

輪成中学と荒央中学の試合は騒がしい中開幕した。

それからしばらくして、赤城達はかなり遅れて試合会場に到着した。

「——輪成中学のみんなには頑張ってほしいよなあ」

「なに、あいつらなら大丈夫じゃろう！きつとなんとかしよるわ！」

「そう上手くいくかねえ。何せ相手が相手だし、なかなか厳しい戦いになると思うよ？」

赤城達が最初に戦い、同点と拮抗した相手、輪成中学。自分達は一回戦で負けてしまったが、輪成は順調に勝ち続け、三回戦で地区最強の相手、荒央中学と戦うことになった。そこで荒央中学の偵察を兼ねて応援に駆けつけたのだ。

ただ全員が来たわけではない。星見、裁野、黒鉄、麻宮、華咲、佐原、千景ら七人は残って自主連をしている。大人数で偵察しても仕方ないし、何人が残って練習するのは正しい選択だろう。

「でもどうせなら最初から見たかったよな。結構時間経つちまっただろ？」

「まさか電車が止まるなんて予想外やったわ。危うく見られへんところやったで」

赤城達は電車で会場まで向かっていたが、途中何かトラブルがあったということまで、到着がかなり遅れてしまった。そのせいで前半戦を見ることはできなかった。

「でもなんとか間に合ったし、問題ないんヨ！」

すでに後半戦は始まっているため、試合自体はあまり見ることはできない。それでも試合の動きだけなら後で動画などで確認することができる。

今回は実際に見ることによって、動画などでは測れない力を見るのが目的。だから遅れても大きな影響はない・・・とはいえないが、意味がないわけでもない。会場内に入

り、観客席に向かう。

「おー、やってるやって・・・」

なんとか試合中に間に合った。まだある程度時間はあるし、これならばしつかり見ることができると安堵するが・・・スコアを見て、言葉を失った。

「8対2・・・!?!」

スコアボードに写し出される現実、想像以上の点差。たしかに強いとは聞いていたが、さすがにこれは想定していない。思わず絶句する。

「ほら、でも二点取ってるんヨー!」

「えっ、あつ・・・そ、そうだな!! 輪成も頑張つて——」

あまりの惨状に放心状態になってしまったが、三日月の一言で赤城は我に返る。よくよく見てみると、二点取っているのだ。つまり付け入る隙自体はある。この悪い空気を払うべく、すぐに声を出していく。

「あんちゃんそれは違うで。この二点はわざとあげたんや」

だが、赤城達の話の聞いてきたおじさんが口を挟んできた。いったいどういうことなのか? 疑問に思っていると、察したらしいおじさんが話を続ける。

「まず前半は新入生の実力を測るためにスタメンがほぼ一年で構成されとつた。せやから隙が大きい、突破も決して難しいわけやなかつた」



試合で一年生を多めに起用する。これはたしかによく聞く話だ。なるべく試合で経験を積ませ、三年が引退しても穴がでないようにするのだ。

「それに加えて荒央中学正キーパーの不破羅王、こいつがなかなかのクセ者や。まだ一年やが、こいつはテストとかじゃなくすでにレギュラーを勝ち取つとる男。一年レギュラーとだけあつて、荒央の中でも指折りの実力者なんやが：：いかんせん尊大でな。最初の二点は見逃すんや」

「・・・ええ?それつてキーパーとしてどうなんだよ?」

同じキーパーである東条は訝しげな顔をする。相手の攻撃を防ぐ最後の砦。いつもふざけてスケベな発言ばかりしているものの、やると決めた以上絶対に守るという意思だけはいつも持っている。それゆえ彼の行動には疑問を感じざるを得なかった。

「こいつに関しちや何とも言えんわ。まあええように解釈するんなら味方への信頼つちゆう考え方もできるわな。こいつらやつたら三点以上取つてくる、そう考えとる。それに・・・」

「それに?」

「実際のところ、三点目は取られてないやろ?」

たしかに三点目は取られていない。二点までは止めず、それ以降はすべて止めているということ。自信に違わない、実力の証明だ。

そして後半になってからは二・三年を投入。一気にギアを上げ、シユートすら打てない状況が続いていた。

「分身デیفフェンス!!」

「うおっ!? 増えやがった!」

三人に分身した荒央のDF、梶子。その分身の一体がボールを奪い、別の分身へパス。そして本体にボールを回ると分身が消えた。

「三人に増えた程度で驚いてたら優勝なんかできんで! ジブンらもつと練習せなアカンな!」

梶子は知っている。全国にいけば、このぐらいのことは平然とやってのける選手など山ほどいる。試合経験、鍛え方が違うのだ。

「クツソ、負けるかあ!!」

「考えもなく突っ込んでくるなんて、実績もなければ考える頭脳もないんだねー。そんなことじゃあ万代ちゃんには勝てないよ!」

続いて荒央の最もバランスのいい選手、千堂はボールをキープしたまま縦に一回転、その着地と同時にボールが増えた。

「イリユージュオンボールか!!」

「と、思うでしょ?」

だが、まだまだ終わらない。さらにボールをキープしたまま一回転、二回転と回っていく内に、ボールが数えきれないくらい増えていく。

「はあ!?ど、どうなってんだ!?!」

「これぞミリオンイリジョン!!君ごときじゃ見極められないよねえ?それじゃ、あとはよろしく!」

あまりにも数が多すぎる。これでは狙いを定めるところの話ではない。千堂は困惑している姿を嘲笑うかのように本物のボールを足元に寄せ、デイフェンスを突破。

そして、千堂からパスを受け取った祇園。その背後に戦艦の大砲が出現する。その大砲にボールを装填し、ゴールに狙いを定めた。

「終わりだ!!  
フォーティーツー 4 2 キヤノン!!」

祇園の声が合図となり、ボールが発射される。この技はロングシュートだけでなく、威力を調節すればパス技としても使うことができる。

今回はロングシュートとして使用。距離があるためゴール前で打つよりは威力は落ちる。とはいえ自力が違いすぎれば、威力が下がっていようが止められるはずがない。このシュートでさらに点差が開いてしまった。

「お前ら諦めんな!!まだまだいくで!!」

「もちのろん!まだまだ諦めてないっすよ!」

それでも諦めない。試合時間にチームの実力、どう考えても何とかなるような状況ではないが、それでも諦めることはない。まだ勝てる。心の底からそう思っている。

諦めず、試合が再開してすぐに攻め込む。なんとか隙を見つけて、そこから崩してきた。

「・・・どうした、その程度か？」

「ジブンらまだまだ戦えるやろ？それとも、もう限界なんか？」

だが、隙がどこにもない。なんとかパスを出したいが、DF陣に阻まれる。かといってこのままドリブルしても自分では突破できないだろう。

「クツソ！これでもくらえっ！」

このまま何もできずにやられるわけにはいかない。そう判断した鶴葉はここから強引にシュートを放つ。

「ローリングキック！これでどうだ!!」

とはいえこの技は威力が高いわけではない。加えてこの技は本来ロングシュートではない。そのため威力はかなり低くなってしまふ。

「ふんっ!!」

ヤケクソのロングシュートを相手キーパーの不破

はただのパンチングで弾き返す。本来ロングシュートでない技を無理矢理な体勢で

打つ。そう考えれば当然の結果なのだが、なかなか辛いものがある。

「退屈だ。この程度でよくここまで勝ち上がって来られたものだ」

やはり決めることはできなかったが、弾かれたボールは運良く確保。これでとりあえずは安心できる・・・と思っていたが、安堵している暇もなかった。

「その程度のパワーで、俺達を崩せると思ったか？もしそうならば心外だな・・・グレイ  
ブストーン!!」

「うわあああつ!!」

が自慢の豪腕を地面に叩きつけると、地面にヒビが入る。さらに無数の尖った岩が隆起。徐々に狙いが正確になり、最後は真下から隆起していた岩に突き上げられ、ボールを奪われる。

「祇園、やってこい」

続けて祇園が剛力山からのパスを受け取るも、輪成も負けじとすぐにデイフェンスを固めて守る。先程ロングシュートを打ってきた選手、打たせないために一気に距離を詰めてボールを奪いにかかる。

「さあ、この爆音を聞いていきな！爆竹フェイントオ！」

「だああああうるせええええ!!」

それでも祇園は余裕は崩さない。周囲に大量の爆竹が出現し、すべてが一気に鳴り出

す。近づいたことが仇となり、思わず輪成のDFは耳を塞いでしまい、その間に突破されてしまう。

「じゃあっ!!若迫、決めてこい!!」

ここまで完璧な動きで攻撃を封殺、ボールが繋がれ、ゴール前まで持つてこられてしまった。

「さあ、今度うちの見せ場やで!覚悟しいや!!」

足を上げ、身体を反らしながら華麗に一回転。その間にボールに鮮やかなエネルギーが集まり、最後の方は後ろに下げた足を振り抜く。

「ローズスプラッシュ!!」

ボールのあとに続くように優美なバラの花びらが撒き散らされる。それでいて、鋭いトゲが止めるものを傷つける。

「おおおお!!ヒツティングハリセン!!」

巨大なハリセンを持ち出して対抗するも、やはり止めることはできず、またしても点を取られる。誰がどう見てもサンドバッグのような状態だった。

「そんな……ここまでの差があるのか……?」

観客席で見ていた赤城はポツリと口に出す。自分ならばこの僅かな残り時間、せめて一点だけでも決めて次に繋げようとするだろう。

しかし、実際に戦ったなら・・・間違いなくそれすらもままならない。今のままでは勝てる勝てないという話ではない。きつと相手にすらならない。それぐらい絶望的な力の差がある強さ。

みんなでわいわい楽しくサッカーをしながら優勝するなんて・・・夢なのだろうか？  
「・・・キャプテン、大丈夫かい？」

その様子を隣で見ていた斧街が話しかけてくる。

「えっ、ああっ！問題ないです！むしろ楽しみですよ！」

「おー、あの惨劇見て楽しみつて言えるんか・・・変わったやつちやなあ。ワイも負けてられへんなー！」

「なにおう往生際の悪さなら俺も負けてねーぞ！」

伝説の男、円堂守はどんなに絶望的な状況でも諦めず、サッカーを楽しんだ。絶望的で、勝ち目がないような時でも笑顔を絶やさなかった。その結果、それがチームにも伝染し、試合中の爆発的な成長へと繋がって勝つことができた。

キャプテンとはそうあるべきなのだ。チームを鼓舞し、常に頼られる存在でなければならぬ。だから仲間に弱みは見せられない。特にメンバーが増えてからは、責任感か

らかよりそう思うようになった。とにかく笑顔は絶やさず、仲間に関心はかけさせない。それを心がける。

それによくよく考えてみれば、サッカー部がない状態、ゼロから始まったのだ。今さら一つや二つ、無謀なことが増えたところで変わらない。無理やりではあるが、そう考えて自分を納得させることにした。

「・・・よし、俺がなんとかしてやらんといかん!! ワイルドパンサー!!」

「なに?! しまった!!」

このまま何もできずに負けてしまうかとも思われたが、ここでキャプテンの三堂が奮起。悪い流れを打破するべく、限界まで意識を集中させ、相手のディフェンスを突破していき、相手キャプテンの篠原を突破することに成功する。

「おーし! 一発強力なやつぶちこんだれええ!!」

「任してくれ! 通天閣・・・シユートオオオ!!」

キャプテンが限界を超えて、ここまで繋いでくれた。ならば自分もそれに答えなければならぬ。繋いでくれたキャプテンの意思を受け取り、全力のシユートを叩き込む。



「ほう、我が牙城を崩してきたか……いいだろう！ならば俺の技を見せてやる。光栄に思え!! スフィックススクローツ!!」

ここまで技を使わず完封してきた不破の背後からスフィックスが出現する。スフィックスはその巨大な両前足を動かし、ボールを地面にたたきつける。

「これこそが我が奥義の一つだ」

残った力を振り絞り全力で打ったシュートだったが、あつさり止められてしまう。これが無理なら、正面から突破することは不可能だ。

「なんてこった……パンナコッタ」

「何言ってるんすか!?!」

「よーし、ナイスツツコミや！まだいけるな！」

こんな状態でもツツコミは忘れない。つまり心の余裕があるということだ。それならば問題ない。

「そうだ！俺達は諦めねえぞ！」

「まさか、まだまだいけませ!!」

「最後まで戦いますよ！希望を捨てちゃいかんって偉い人が言ってた！」

「よーし言うた!! みんなついてこいや!!」

心が折れることはない。止められたのなら、入るまで攻撃を続ければいい。正面突破

が無理ならば、奇襲をかければいい。それだけの話だ。

「ええ根性してるやん。そういうの嫌いやないで？」

「ああ、好感は持てる。だが容赦はしない。グレイブストーン!!」

なんとかボールを奪って攻め込むも、また相手のディフェンスに妨げられる。だが、この技はもう見きった。この技は自分のところに来るまではラグがある。それまでにパスを出せばいい。

「キャプテ——」

「おっと、そうはさせへんで？分身ディフェンス!!」

しかし梶子がそれを許さない。鋭い岩が隆起する中でなんとか見つけたパスコースだったが、それらは分身によって塞がれてしまう。

「クソ！ダメか!!」

結局突破することはできずボールを奪われさらに追加点を決められてしまう。それでも、いくら得点を入れられても、決して諦めない。

「みんな!!最後の最後まで諦めんなあ!!こっから逆転やあ!!」

普通に考えて、この残り時間僅かな状況で逆転などできるはずがない。実力は相手为上、点差も開き、こちらはもうスタミナがほとんど残っていない。

それでも試合中は何が起こるか分からない。何が起こり、そう信じて最後まで全力で

プレーする。

だが、その言葉を打ち砕くかのように何も起こらないまま無情に時間だけが過ぎていく。必死に足掻いても何も起こらない。

そして試合終了間際、一人の少女にボールが渡った。

「希望？ 奇跡？ あいにくそんなものはないんだよね！ な・ぜ・な・ら、この私を相手にしてるから!!」

腹辺りのところまでボールをあげると、姫百合の背後にキラキラと光輝く細剣が現れる。そして、細剣の刀身がゴールの方へと向けられる。

「プリンセスレイピア!!!」

鋭いソバットキックが炸裂し、相手突き刺す勢いでボールが放たれる。キーパーの芳本が技を出す間もなく、ゴールに決められてしまった。

「負けるわけがない！ なぜなら、私がいるからね!!」

丁度決めゼリフを言ったところで試合終了のホイッスルが鳴り響く。結果はまごうことなき惨敗だった。

「だあああああ!! 負けたあ!!」

「手も足も出んかったな。あらバケモンやわ。おつそろしいなあ」

負けた輪成中学の選手は緊張の糸が切れたように地面に倒れ、他の選手と話す。流れに乗っている今ならもしかしたらとも思ったが、やはり簡単にはいかない。流れや勢いで押し切れるようなチームではなかった。

わかつてはいはいるものの、やはり悔しい。仰向けになつて寝転がっていると、最後にシユートを決めた相手チームのエースストライカー、姫百合がニマニマとした笑顔でやってくる。

「まあまあ負けたのは仕方ないって、それよりも地区ナンバーワンのチーム、そした地区最高の美少女ストライカーと戦えたことに誇りにグエエ!」

姫百合が話している真つ最中、何者かに首を掴まれる。それにより女の子が出してはいけないような声を出してしまった。

「すまん!!うちのドアホが余計なこと言うたな!おらさつさと帰んぞ!」

姫百合を掴んだのは、相手キャプテンの篠原。随分と手慣れた様子で姫百合を引っ張る。どうやらこういうことはよくあるらしい。

「なにすんだこの石頭!はーなーせー!!」

「だあれが石頭や!!帰ったら反省会!!終わったらそれを踏まえての練習や!ボサツとし

たらアカンぞー！」

「ゲエ!? やだぁ!! 試合の後ぐらい余韻にひたらせるやコラー!!」

強引に連れていかれる姫百合を見て、啞然とする輪成中学のメンバー。しかしいつまでもブーツとしてはいられない。三堂は頬を叩き、気合いを入れて立ち上がる。

「みんな! 帰ったら反省会して練習するで! 次こそあいつらの鼻を空かしたろうな!」

「・・・! もちろんっすよ! 次は俺達が勝つ!」

「次は絶対負けへん! 負けへんぞー!!」

次は自分達が勝つ。チーム全員が気合いを入れ直し、スタジアムから去っていった。

一方試合を見終わった赤城達も準備を済ませて帰って行く。その帰り道で今日の試合の感想を口々に話していた。

「あいつら、あれだけやられて全然へこんだらんな。試合には負けただけどメンタルだけなら勝ってたんちやうか?」

「メンタルだけって条件なら俺達も負けてねーよ! まっ、実力の方もいつか追い越すつもりだけどな! なあキャプテン!」

「お、おう！もちろん！最後の最後に勝つのは俺達だからな！！みんなビビったらダメだぞー！」

自信を失くしたり、勝てるわけがないと諦めてしまう人も出てくるかもしれないと覚悟していたが、意外と余裕そうだった。危機感がない、呑気なだけかもしれないが……諦めてしまうと立ち直らせるのにかなり時間がかかるので、そうなるよりはマシだろう。

「すごい人ばかりだったね。戦えるのが楽しみなんヨ！！」

「私もよ！早く帰って煌達にも教えてあげなきゃ！」

「みんなその調子や！相手が強いんやったら、うちらもそれに負けへんぐらいつよなればええ。本番まではまだ時間もある、それまでにパワーアップや！」

支倉の言うとおり、フットボールフロンティアが開幕するまでまだ時間がある。それまでにどこまで実力を上げられるかが大事だ。

こうなると少しの時間も惜しい、一刻も早く修練場が完成するのを祈るしかない。

場所は変わり、荒央中学のサッカー部室。ある程度の広さがあり、物も充実している。

さすがは名門といったところだ。

現在は水分補給や着替えの際中であり、やることを終えたメンバーがまだ着替えている残りのメンバーを待っているところだ。

今日の試合自体は大差で勝利、さぞ喜んでいる・・・と思うかもしれないが、そんなことはない。

「あーもー! あいつらホンマ好き勝手動きよつて! 俺の気持ち考えたことあんのか!? しかも帰ってくるのもおつそいなあ!!」

主に・・・というかキャプテン一人がかなりキレていた。とはいえ試合中に指示を無視して好き勝手にやるメンバーが多数なので、こうなるのは無理もないのかもしれない。

「まーまーそう言わんと、今回も勝てたしええやん。ある程度のゆとりは大事やでー」  
「忍・・・お前はなんでそんなに気楽なんや・・・」

「まあたしかにどいつもこいつもイタリアもしやあないやつらやけど、これぐらいエゴがないと勝ち上がれんで」

と、同じ三年の梶子はそれっぽいことを言っているが、実際には自分に関係ないので適当に流しているだけである。こればかりは篠原がキャプテンになってしまったのが運の尽きだ。

「せやけどさあ・・・せやけどさあ!!」

「すまんかったって。ほら、これで涙拭きいや」

さすがに可哀想になつてきたので、ティッシュを投げ渡す。ありがたくそれを使い、一旦落ち着いた・・・かと思つたが、再度声を荒げ始める。

「ちくしよー! 不破のやつはお前なら余裕だろとか抜かしよつて二点取られるまでは動かんし!」

若迫は若迫でうちはCCC以外からの指図は受けんとか言い出しよるし!

挙げ句の果てに姫百合や!!なんやあのワガママ問題児は!?

どういう育ち方したらあんなことなんねん!?まさか敵校のスパイか!?俺の胃袋を潰しにかかつとんのか!?

「(これは相当ストレス溜まつとるなあ・・・)」

あまりの荒れっぷりに引きつつも、内心で同情してしまふ。どこかで機会があれば、ラーメンでも奢つてあげようと心に決めるのだった。

「まったく、下級生はキャプテンの気持ちを含んで欲しいものだ」

「ホンマに・・・って、お前もやぞ豪!!三年で同期だから関係ない思つとるかもしれんけどお前も大問題やからな!」

隣で話を聞いていた剛力山はたしかに、と言わんばかりに頷いていたが、キャプテン



の篠原はお前にも問題があると指摘する。それに対して剛力山は不服そうな表情を浮かべる。

「なに・・・？俺はチームのために守備に徹していただろう。何が不満なんだ」

「そこじゃないわアホんだら!!お前いつつも相手チームに女子がおつたら我先にとスリーサイズ聞きに行くやろが!!その度に俺が謝つとんねんぞこのドスケベ!!」

「中学男児たるもの女子のスリーサイズは気になって当然のことだ。試合中に気になつて集中できないよりマシだろう」

プレーはたしかに問題ないが、他に問題がある。しかし本人はまったく悪いと思つておらず、なんなら言い訳をし始める。

「それっぽいこと言うてごまかそうとすな!!結局お前が聞きたいだけやろ!」

「・・・ええいそれがどうした!!だつたら何が悪い!!」

「こいつとうとう開き直りやがった!」

お手本のような手のひら返し。開き直り方もよくあるやつである。

「まったくだよねえー。まっ、剛力山先輩は三年だからいいとして、一年は一番下なんだからちゃんと目上のいうこと聞かないと」

すると、それまでの話を聞いていた千堂も会話に入ってくる。

「全然よくないわあ!!てか千堂オ!!お前はお前で試合中に相手チームに対していちいち

数字マウントを取んな!!一回えらいことになったんを忘れたんか!」

篠原は今でもその時のことをはつきりと覚えている。去年の三年生が引退し、篠原がキャプテンに就任したばかりの頃の話。新世代としてはりきり、とあるチームと練習試合をすることになった。

・・・だが、その試合の際に千堂が相手チームに対して偏差値の低い底辺集団と煽ったのだ。その結果、近くで聞いていたヤンキーがぶちギレて乱入、試合どころではなくなったことがあるという前科を持っている。

結局この事件は篠原が全力の土下座を決めて事なきを得た。まさか中学生で、しかもキャプテンに任命されてすぐに全力の土下座をするとは思ひもしなかった。

「あー、うん。あれは・・・ごめん」

さすがにキャプテンに土下座させたのはまずかったと思っているのか、頭を下げる。ただ謝るなら相手を煽るのをやめろと言いたところだ。何を言っても数字マウントを取るのを止めない、なぜなのだ。

「どうなってんねん・・・特にあの一年が入った辺りで自己中が伝染しとる・・・」

三年にも二年にも問題がある選手がいるが、今年入ってきた一年が特に問題児となっている。一年が好き勝手やるせいで、今までは問題なかった人まで問題児化するというバイオハザード的なことが起こる始末。正直胃薬が何個あっても足りない。

「あー、疲れた！誰か肩揉んでー」

と、そこに遅れて噂の一年生と残りの二年生が部室に帰ってくる。やっと着替えてきたかと思えば、一言目がこれである。なおこの一言は件の問題児、姫百合のものである。

「なあにが肩を揉めや!!さっさと席に着け!!」

「もー、まだ試合が終わったばかりだよ？何するの？」

「反省会やる言うたやろ!?!話聞いとんのか!?!」

首根っこ掴んだ時に間違いなく言った。なんなら帰りのバスでも言ったし、バスから降りた時にも言った。

三回である。三回も言ったのに、こいつは一回も聞いていなかった。

「ええー?でも私は得点決めたし、逆にキャプテンは抜かれてたし。反省しないといけないのはキャプテンなんじゃないのー?」

「なあ!?!」

「私はしっかり決めてきたのにキャプテンは相手に隙を与えちゃうなんて、これはキャプテンとしてどうなのかなー?ねえー?」

たしかに今日の試合で、あまり活躍らしい活躍はできなかった。対して姫百合はしっかりと得点を決めてきた。それをわかっているからか、ここぞとばかりに憎たらしい笑顔で話してくる。

「そうかそうか・・・お前はそういうやつなんやな・・・!」

笑顔とは不思議なもので、時に憎たらしく、時に怖いものになる。特に笑顔でキレられると怖い。さすがの姫百合も今回はヤバイと思ったのか、慌てて言い訳を始める。

「そ、そんな顔しないでさあ・・・ほら、さっきの発言は若気の至りってやつだし・・・許して?」

「安心せえ、怒ってへん・・・怒ってへんからなア!」

「じゃあそのバカデカいハリセンはなに!?絶対怒ってんじゃんか!」

逃げる姫百合、追いかける篠原、それを見て爆笑する残りのメンバー。いつも通りの光景が広がっていた。

## 完成!ナニワ地下修練場改!!

輪成中学と荒央中学の試合から数日後。城翔中学のサッカー部室にはいつものサッカー部の面々に加え、技術工作部の二人の姿があつた。

「あの施設の設備は全部直しておいたから、これからはいつでも使えるわ!ふっふっふっ、ここまで来ると私の才能が怖い!」

例の修練場にあつた設備をすべて直し終えたようで、今回はその報告にやつて来ていた。相変わらず謎の自信に満ち溢れているが、そこは気にせず直してくれたことに感謝しておく。

「そうか!ありがとう!これで一気にパワーアップできるはず!」

ただこう言つたものの、不安がないわけではない。たしかにあそこには色々置いてあつたが、本当にあれで成果が出るのかは定かではない。

そもそもあの施設が何のため物かわからない。いくらかはスポーツのトレーニング器具らしきものがあつたが、パツと見た感じほとんどがよくわからないものであの施設がサッカーに関係あるとは到底思えない。雷門が練習していたとかいう噂もあるらしいが、冷静になつて考えると信じられない。

とはいえ他に方法がない以上、この修練場に賭けるしかないのだ。

「ついでに追加機能も用意したい！これで通常よりもさらに強くなれるぜ！」

「追加機能……なんやそれ？」

「それは実際に行つてからののお楽しみ！というわけだから今は秘密ね！でも期待していいわ！」

どうやら二人もただ直すだけではなく、色々と試行錯誤してくれたらしい。部費はかなり持つていかれたが、頑張ってくれたのなら何も問題はない。

「へえー、それは楽しみなんヨー！」

「……わざわざ付けてくれたのか。助かる」

話を終え、メンバー全員でナニワランドへと足を運ぶ。本当は技術工作部の二人と一緒に行く予定だったのだが、二人はまだ少しやる事が残っているらしい。

そういうことで二人は用事を終わらせてから行くことになった。待つていてもいいのだが、時間がかかりそうとのことでサッカー部は先にナニワランドに向かった。

「……で、来たはいいけどこれってどうやって使うんだろ？」

先に修練場に来たまでは良かったのだが、使い方がいまいちわからない。説明書らしきものはなく、技術工作部の二人もいないため説明してくれる人もいない。

「適当にやったらなんとかなるんじゃないか?」

「待つても仕方ないもんね。やってみるんヨ」

とはいえ、あの二人がいつこつちに来られるのかはわからない。ただただ待つているのは時間の無駄、自分達で何とかかかしてみることにした。

「あつ、あれとかどうかしら?」

見たことないものが多いためにまいち使い方がわからない。そんな中、獅子神が指を差したのがランニングマシン。たしかにこれなら使い方もおおかた把握している。

「はえー、でっかいランニングマシンやなあ。いくらぐらいうすんのやろ」

「こんなものがあるとはのう。これは期待できそうじゃ」

たしかにこれだけ大きいと値段も高そうだ。それをタダで使えるのはありがたい。前に使っていた人はこんなにも大がかりな施設をなぜ放置してしまったのだろうか?

「みんなー、そつちの準備はええかー?」

しかし、そこは考えても仕方がない。答えは出ないだろうし、出たとしても何かになるわけではない。最初にこの施設を作った人に感謝しつつ、早速使ってみることにする。

まずはMFの面々で超大型のランニングマシンに乗ってみる。乗ってみた感じは特に違和感はない。ただ大きくなっただけのランニングマシンという印象だ。

「はい！大丈夫です！」

「よっしゃ！合図はうちが任せとき！よい、ドン！」

・・・って言ったらスタートすんねんで」

「そんな古典的なのはいいですから！」

伝統のフェイントを一度挟みつつ、今度こそスイッチらしきものを押して起動。まず最初はゆっくりと動き始める。

「ふーん、ちゃんと動くみたいだね。安心したよ」

「・・・詐欺じゃないみたいだな」

どうやら宣言通りしつかり直してくれたらしい。正直半信半疑でもあったため、しつかりと動いてくれたことでひと安心。観戦しているメンバーも納得の表情を浮かべている。

と、安心していただけが・・・

「でも・・・なんか、あれだな・・・」



「普通ね・・・?」

何か変わった機能があるというわけではなく、ただ走るだけ。大きいということ以外には何もない。本当にただ走るだけ、ようは普通のランニングマシンだ。ここにはヤバい物もあるとか聞いていたので正直拍子抜けだった。

「まあいいんじゃない?これでも今までよりは効率的になるし」

とはいえ華咲の言うとおりである。ボールだけでの練習ではやはり限度がある。それに複数人同時に練習できるなら普通のものよりも効率が良い。これでも別に問題はないとしばらく走り続けていた。

「・・・って、なんだ!?!地震か!?!」

何事もなく進んでいたが、突然地面が揺れ始める。まさかこのタイミングで地震でも起こったのかと思っただが、どうやらそうではないらしい。

「いや、これは地震の揺れとは違う・・・なるほど。マシンが傾いて、坂状に変化しているみたいだよ」

「へえー、やっぱり普通じゃなかったのね。面白いわ!」

やはり普通のマシンではなかったらしく、途中から大きな変化が表れ始める。スピードアップはもちろんのこと、角度が変化して坂になる。また、障害物が出てきたりと常に角度が変わってバランス感覚が必要になったりと、このランニングマシンには通常で

はありえない機能が搭載されていた。

「これ以外の機材にも何かしら機能が付いているのか……面白い。これなら今度こそやつらを叩き潰せる」

「……これなら、あの頃の自分に追い付けるかもしれない……!」

と、観戦しているメンバーが口々に感想を述べるなか、東条だけはまったく別のものを見ていた。

「おいおい、何見てるんや? 水着のねーちゃんでもおつたか」

「だったら良かったんだけどよ。それはそうと、これってなんだと思う?」

東条が指差した物を見る。そこには「丁寧に『絶対に押すな!!』と書かれたボタンがあった。ボタンのカラーも赤色で、周りは黒と黄のストライプと明らかにヤバそうな仕上がりになっている。

「何って……ボタンやろ」

「いやバカにすんな。それぐらい知ってる。そうじゃなくて、これって押していいやつだと思うか?」

ここまで危険そうに押すなど書かれていると逆に好奇心がそえられる。だが、やっぱり押しはいけないか? と躊躇う。迷った東条は淀屋に押しでもいいか聞いてみる。

「せやろな。これは押さなアカンやつや」

これを聞いたのが麻宮や千景ならば、危険だから押さない方がいいと至極真つ当なことを言っていただろう。だがしかし、東条はこれを淀屋に聞いてしまった。

押すなは押せの合図。淀屋は子供の頃から大阪特有の英才教育でそれを学んできた。つまり、淀屋にはこれが押せにしか見えていない。また、支倉も同じく、これが押せに見えるている。

「うちもそう思う。絶対に押すなは押せやでつて習った」

「なるほど・・・」

とはいえ危険と書かれている以上、自分達が勝手に押すわけにはいかない。というわけで、現在走っている面々に聞いてみることにした。

「キャプテン、ちょっといいか?」

「な、なんだ?今は、あんまり話しかけないでほしいんだけど・・・」

しばらく走り続けているため、さすがに疲れが出始めている。できることなら手短かに、なんなら話しかけないでほしかった。

「いやさー、ここに危険だから絶対に押すなってボタンがあるんだけど押した方がいいか?」

「えっ・・・危険・・・?」

さすがに危険と言われては放っておけない。すぐに返事を出そうとしたが、赤城は一

且考える。たしかにこの施設は得体が知れない。何の目的があつて作られたのか、また何があるのかはわからない。そんなところにあるボタンなど、危険と書かれていなくても押すことはしないだろう。

とはいへここは遊園地の地下。小さな子供が見つけたりする可能性がある以上、あまりにも物騒なものが用意されているとは考えにくい。それに、もし本当に危険なら技術工作部の二人が取っ払つてくれているはずだ。

しかし、わざわざ危険と書いてある辺り決して良いことは起こるとは思えない。それに、今無理に確認せずとも、自分達が降りてから何が起こるのかを確認すれば良いだけの話だ。

「・・・わかつた。とりあえず今は押さないでくれるか？後で確認するからさ・・・つて、マジでキツイなこれ・・・」

「・・・押さないでええんやな？」

淀屋が返事を再度確認するが、問題はない。後で確認すればいいのだから、これは押さないのが適切な判断だろう。それよりも疲れているから声を出したくない。

「そうそう、頼むから押すなよ？」

「あいよ、わかつたわ！」

東条、押せ」

押すな押すなは押せの合図。フリとは怖いものである。

「任された!!」

「なあ話聞いてた!?!」

結局この会話はなんだったのか、あれだけ押すなど言ったのに東条はスイッチを押した。たまらず赤城は声を出した。

「……この音は?」

ガコン!!と何か重い物が動く音が聞こえたかと思うと、後ろから嫌な金属の音が聞こえてきた。見ている面々も明らかに表情が凍りついている。

「……みんな。今すぐく嫌な予感がするんだ」

「……奇遇ね。私もよ」

「ワシもそう思うのう。後ろから変な音がしとる」

怖いがこのままというわけにもいかない。覚悟を決めて、恐る恐る振り向いてみる  
と……

「……なんで丸ノコがこんなところにあんのよおおお!!?」

真後ろで鋭い刃が音を立てながら回転している。頭がおかしいとしか考えられない

機能だ。近代で拷問器具を作ったなら、このようなものになるが出来上がるだろう。

「うおお!!なんじやあれは!」

「ちよつと待つて!?!あれはヤバイつてえ!!死ぬ!!絶対死ぬつて!」

チームメイトの悪ふざけでお亡くなりなるなど冗談ではない。しかもこんなよくわからないところで死ぬなどごめんである。先程までの疲れはどこへやら、全速力で走り出した。

「みんな、パニックになるのが一番良くないよ。一度冷静になるんだ」

しかし、こんな状況でも佐原はいつも通り冷静で表情を変えることなく走っていた。それに続き、この光景を見ていた星見も呆れた様子で口を開く。

「あのねえ、知られていないとはいえここは遊園地の地下。そんな物騒なものがあるわけないよ」

たしかに言われてみればその通りだ。万が一誰かがこの施設に入り、システムを作動させようものなら誰が責任を取るというのだ。恐らくサボったりしないよう、おどすために用意された物だろう。

星見はやれやれと言わんばかりにゆっくりと刃の方に近づき、ポケットに入っていたハンカチをサツと丸めて刃の方に投げてみる。

結果、ハンカチは粉々に切断された。

「えつと・・・星見?」

「黙って走らないと死ぬよ」

「星見イイイイ!?!」

いくら自分には関係ないとはいえ、見捨てるのだけは止めてほしかった。

どうやら押したタイミングが終盤だったらしく、あの後すぐにランニングマシン止まった。マシンが止まったことを確認するやいなや、乗っていたメンバーは転げ落ちるようにマシンから降りた。

「はあ・・・はあ・・・なあなんで押したの!?!俺押すなって言ったよな!?!危うく死にかけるところだったんだけど!?!」

「いやーすまん!でもワイかてあんなことなるとは思わんかったし、なによりフリかと・・・な?」

「な?じゃないわよ!?!そつちの悪ふぎで私達死にかけたんだからね!?!」

「そもそもあの手のやつは押せと言ったら言ったで押すよね?キミ達最初から押すつも

りしかなかったじゃないの？」

まあたしかにあれを予想しろというのも無理はあるが、だからと言って許されるわけがない。今後は止めろと言ったら止めるように言い聞かせなければならぬ。

「やつほー！思ってたより早く来れたぜー！」

「さーて、ちゃんと練習してるかしら？」

そこへ予定より早く用事を終えた入江と太智がやってくる。丁度いいタイミングだと、赤城はすぐに修練場の危険物を指差した。

「二人とも来てくれたか！ちよつと聞いてくれ！この施設とんでもないものが——」

「おー、早速これ使ったのか！いやー追加して良かった！」

「だから言ったでしょ！危険だから押すなって書いてけば絶対に押すって！やつぱり私は頭脳明晰！最高ね！」

「ちよつと待て！これ二人の仕業か!？」

こんなにも危険なシステム、てつきり二人が確認をし忘れたのか、はたまた外し忘れてただけだと思っていた。しかし、実際はその逆。二人がこの危険極まりない装置を追加で付けた犯人だった。

・・・そういえば追加で機能を付けたとか言っていたのを思い出した。



「死ぬ気でやれ!と言われても実際にはできないもの、そこで!!私達が特別に死ぬ覚悟  
のできるように改良を加えてあげたのよ!!素晴らしいでしょ!!」

「たしかに実際に死ぬ気でやる人はいないね。ただ、かといって本気で殺しかかるとい  
うのは聞いたことがないよ。改良というより改悪じゃないかな?」

「たしかに死ぬ気でやれとは言うけど、本気で殺そうとするやつがどこにいるんだ!」

むちやくちやな理論に対し、佐原は冷静に指摘、赤城は本気で反論する。そしてもう  
一つ、あることに気づいた。

「……って、まさか他にもあるのか!」

その嫌な予感を裏付けるように、入江は良い笑顔で頷いてみせた。

「もちろん!キーパーに向かって飛んでいくボールが三回に一回ぐらいの割合で鉄球に  
なるとか、一回シユートを決められなかったごとに横の壁が迫ってくるとかの仕掛けを  
追加してあるぜ!」

「あとは自動で戦ってくれる人型のマシンね!見事に勝利すると何も無いけど負けてし  
まうと大・爆・発するシステムが付いてる!これは特に自信作!!」

素晴らしい技術である。しかし、どんなに素晴らしい技術でも使い手がこれでは宝の  
持ち腐れ……なんなら腐りすぎて兵器と化している。

「とりあえずキミ達の頭の中は危険思想で埋め尽くされているということがわかった

よ」

「そんなシステム今すぐに取りっ払いなさいッ!!」

当然怒る獅子神、そして後ろで東条があぶねえ・・・と肩を撫で下ろしていた。さすがの東条も一歩間違えれば大怪我となるようなものに対しては、いつものように余裕な対応はできない。

「何を言ってるの!!あなた達はフットボールフロンティアを勝ち上がりたいでしょ!! それなのに楽しんで強くなろうなんて思ってるの!?

楽しんで強くなれない!それなりの覚悟を決めるべき!!現にこれなら常に死ぬ覚悟で練習できるから短期間で力を得ることができる!!麻宮!!あなたはパワー不足で悩んでるんでしょ!!だったらこれぐらいは乗り越えないと!!」

「それに盤上先輩は筋肉付けたいんですよね!だったらこの特訓はおすすめつすよ!!死ぬ気でやるから身体に自然と限界まで負荷がかかるから筋肉が付きやすくなる!!」

「・・・た、たしかにその通りかもしれない。楽しながらでは強くなれない。多少のリスクは・・・」

「ほう、効率的に筋肉がつくじやと・・・?それは面白いのう!!」

「涼華ちゃん!盤上!騙されたらアカンで!これは特訓やない!ただの拷問や!」

自分に厳しいストイックな性格に加え、パワーが足りないという本人も気にしている

点を指摘され、麻宮の心が揺れる。また、盤上もさらにパワーが付くという言葉に反応するが、こんな練習をやつてたまるかと支倉が二人を止める。

二人が止められたとみるやいなや、今度はターゲットを赤城に変える。

「キャプテン!!あなたもキャプテンらしくもつと実力付けなきゃって思ってるんじゃないの? だったらこの特訓をやるべき!! これなら嫌でも死ぬ気で練習できるから、パワーアップも一瞬!! 私と同じく天才になれる!!」

「うっ!? そ、それはたしかに・・・魅力的というか・・・」

「ちよっ、キャプテン! あんたもかい!」

「ワイも手伝うから誰かあのアホを止めるんや!!」

「よっしや任せろ!! 俺のキラードで暴走を止めてやる!!」

「斬君が止めるのはボールだけでいいんヨ!」

たしかにチームをまとめるキャプテンが弱くては話にならないと、こつちもこつちで指摘されて流されそうになっている。斧街がすぐにやめるよう説得にかかり、他も便乗してもうてんやわんやである。

結局二人は納得こそしなかったが、危険物はちゃんと撤去され、無事に普通の練習ができるようになった・・・が、今後また付けなにか心配である。

## ハード・トレニング

修練場と通常の練習を繰り返す日々が続くなか、大阪大会が無事に終わった。その結果、優勝した荒央中学と準優勝した双輝中学がシード権を得ることになった。

「優勝は荒央中学か、やっぱり地区一位は違うなあ……」

自分達が手も足も出なかったチームに勝利しているチームがあるという事実。上には上がいるというが、実際こうして知ってしまうと絶望しそうになる。

「……でも、双輝中学も食い下がってきましたね。終盤で一気に決められましたけど、それまでは互角でしたし」

「実力でいえば、双輝中の一步上ぐらいが荒央になるのかねえ？」

たしかに双輝中学は荒央中学に負けたものの、試合終盤まではほぼ互角に戦っていた。実力に大きな差があるというわけではないだろう。

「この地区で勝ち上がるためには、この二校と戦えるぐらいの実力がないといけない……！」

間違いなくこの二校とはどこかでぶつかることになるだろう。双輝となるか、荒央となるか、はたまた両方と戦うことになるか。

どちらにせよ、この二校と互角以上に戦えるぐらいの力を得なければ全国大会に出場できたとしても負けるのは明白。その前にしっかりと実力を付けなければならぬ。

「ふむ、それなら今すぐにも修練場に向かった方が良いのではないかな？」

本戦に出場するためには練習あるのみ。たしかにゆつくりしている時間はない。すぐにも練習しに向かうべきだろう。

「ええー。もうちよつとゆつくりしてもいいんじゃないかい？無理は禁物だよ」

「お前の場合休みみたいだけだろうが。さつきといくぞ」

適度な休みも必要だが、過度な休みはただのサボリである。しっかりと練習をして初めて休みが意味をなすのだ。サボりたいだけの斧街を引きずる形で修練場に向かった。

「おー、早速来たか。毎日よくやるよなあ。俺ならやめてるぜ」

何回も通うことになるので、あらかじめ買っておいた年間パスポートを使ってナニワランドに入場。そのままホラーハウスに足を進め修練場に入ると、中には太智と入江の姿があった。

「あれ、なんで二人が？」

最初の時以降はたまに機材の確認に来るぐらいで、少なくとも最初つからいるような

ことはなかった。さらに入江はタブレットのような物を持っており、赤城はそれが気になって目を向ける。その視線に気づいたのか、どや顔で説明を始めた。

「今回は君たちのデータを集めて、色々と改良していく予定よ！…ふっふっふっ、君たちを成長させつつ私自身の成長も忘れない！さすが私！」

最初の部分だけで用件はわかったので、いつもの自画自賛はスルーして早速練習を始める。見られていようがやることは変わらない。

「さて、さっさと終わらせて休憩するとしますかねえ」

「よっし…どんどん来いよ!!」

重なる的をボールで打ち抜き、マシンガンのように連続で打ち込まれるボールを掴み取り、誰も触っていないのにやたら素早く動き回るボールの動きを読んで止める。

正直何の練習だかわからない。サッカーボールがなければただの奇行にしか見えな  
い…いや、サッカーボールがあっても充分奇行だろう。

「マツハウインド!!」

だが、そんな意味のわからない練習でも確実に成長している。その証拠に佐原は新しいシュート技を会得している。双輝中学の選手が使っていた技だ。

「おー、あんたもシュート技を覚えたのかい？やるねえ」

「いざという時のために私もシュートできるようにした方がいいと思ってね。手数は多

いに越したことはないよ」

佐原の言うとおり、できることが多いのは悪いことではない。攻められる選手が多ければ相手のディフェンスにプレッシャーをかけることができる。いざという時には攻撃に参加し、奇襲を仕掛けることも可能だ。

「そりゃいいねえ。もつと覚えてあたいに楽させてくれよ」

「では、そう言つてたと裁野君に報告しようかな?」

「おつと、そりゃ勘弁だよ」

楽はしたい、だが怒られるのはごめんである。斧街が言ったことは内密にするということだけで片付いた。

「オラアアア!!キラーブレード連発だあああ!!」

そしてキーパーの東条は無数に飛んでくるボールに対応。水色のエネルギーを右手に集中させ、形成した鉈をやたらめったら振り回すすべてのボールを止めようとしていた。

しかし、最初の一撃にパワーが集中しているのか、二三発目はどうにも軽くなつてしまい、ボールを止められるような威力にはならない。

「ちくしよー、悪くねえと思っただけどなあ。これじゃ無理か?」

自分でもさすがにやり方が適当すぎかとも思った。もつと威力の出せるやり方があるのではないのかと模索はしていた。とはいえこれ以外の方法がどうにも思い付かなかった。

もう少し上手くエネルギーを扱えるようになれば二発目以降も威力を保てるはずなのだが、エネルギーの扱い方がわからないためどうしようもなかった。そのためがむしやらに数を重ねるといふ方法をとるしかないのだ。

「安心せえー!一人で止められんって言うんやったらワイが手え貸したるで!」

「せやせや、なんやったらゴールほっぽり出して攻めてもええんやで!シユート打たれる前にウチらが全部止めたるわ!!」

キーパー一人で止められないなら、二人で協力すればいい。なんならシユートを打たせなければ絶対に決まらない。単純ではあるものの、たしかにその通りだ。

「ありがとよ!でも俺だつてただではやられねえからな!絶対一人でも止められるようなすげえキーパーになってやる!!そして女の子にモテまくる!!」

最後に欲望をただ漏れさせた東条は、次こそ止めてやると気合いを入れ直して練習再開。連射されるボールをすべて止めると意気込む。

「最高だぜー!もつと練習してデータを収集させろー!」



「浮かぶ……浮かぶわー！さらなる強化！改造！改良！！ちゃんとメモしとかないとー！」  
それらの様子を見ている入江と太智の二人はメモを取っており、改良という言葉をした。

改良、字の通り良い方向に改めるはずなのだが、以前の件を考えると改悪になりそうな気がしてならない。ちゃんと目を配っておかなければ、何をしでかすかわかったものではない。

「それじゃあ早速ロケットランチャーを手に入れにいくわよ！太智！後に続きなさい！！」

「よーし！買ってくるぜー！」

「どういう結論に至ったらそうなるんヨ!?」

予想外でもない、案の定だった。強いていうなら思っていたよりも早かったというだけ。しかし何をどうしたらサッカーの練習でロケットランチャーという単語が出てくるのか。

「そんなもの用意しなくていいから！というかサッカーの練習にガチの兵器使うなんて聞いたことある!?!」

この二人の思考回路も気になるところだが、今は止めるのが先。慌てて赤城は二人を引き止めるが、太智は首をかしげた。

「そうか？でも調べたらサッカーボールで街を破壊してる映像とか出てきたからさ、そのぐらいの威力が必要なのかなーって」

そう言つて数年前のニュース映像を見せてくる。たしかに変態的な格好をした人達  
が、黒いサッカーボールで街を破壊している。

エイリア学園、今から四年前に色々と騒動を起こしていたやつらだ。この頃はよく  
ニュースにもなつていたため覚えてる。全国で大きな被害を出していたが、大阪には  
特に大きな被害がなかった。

唯一あつたことといえば、大阪のどこかでイプシロンとかいうチームと試合が行われ  
ていたということぐらい。とはいえその試合がどこで行われていたのかはわかつてお  
らず、あの時は実感こそ沸いていなかった。

まさか四年の時を経て、こんな形で被害を被りそうになるとは思いもしなかった。エ  
イリアの二次災害である

「そういえばそんなこともあつたのよねー。だから大至急口ケランがいると思つて探し  
たのよ。で、見つけたってわけ！さっすが私！」

「恨むからな・・・エイリア学園・・・ッ!!」

改めて考えると、いくら特殊なものとはいえサッカーボールで街を破壊するとはどう  
いうことなのだ。どんな特訓をしたらそんなことができるようになるのか、逆に知りた

い。どうせろくでもない特訓をしていたに決まってる。

「とにかくロケットランチャーとか危険なものは買わないで！わかった!」

とにかくあんなものは極端な例である。なんで売ってる店があるのかも謎だが、絶対にヤバイ店に決まってる。というよりヤバかろうが普通の店だろうが兵器を使うなんて絶対にダメ。獅子神も絶対にそんなもの買うなと強い語調で言い寄る。

「ええー、根性ないのねー。もうちよつと気合い見せてもいいんじゃない？なんといってもこの天才が協力してるんだから!!」

そしてこの返しである。たしかに天才かもしれない。人を怒らせることに関してだが。

「そんなに文句を言うならまずはキミ達がやったらどうかかな?」

「できないからあなた達にやってもらってるんじゃない。頭悪いんじゃないの?」

「・・・チツ」

「ちよつと煌!グーはダメよ!せめてパーにしなさい!」

グーパンをかまそうとする星見を獅子神が必死に止める。何人かは止めなくてもいいんじゃない?とも思っていたが、獅子神の良心によって二人は殴られずに済んだ。

そこから離れた場所では、ヤバイことになっているとも露知らず、盤上が華咲に話しかけていた。

「ワシのポジションはDMFじゃ。で、華咲。お主もワシと同じポジションじゃの」

「そうですね。で、それがどうかしましたか?」

「よくぞ聞いてくれた!!実は前から気になっておつての、このポジションは何をすればいいんじゃない?」

「どうやら今まではなんとなくて動いていたらしい。名前からおおよそを把握し、多分守り中心のミッドフィールダー程度の知識しかなかったようだ。」

まさか何も知らずに動いていたとは思っておらず、思わず呆れてしまう。とはいえ、前までは筋肉のことしか考えていない素人だったのだ。それならば仕方ないかと考えを改める。

「やることは色々ありますね。中盤で相手の動きを封じる、中盤辺りから指示を送る、必要に応じて攻撃にも参加します」

実際にはもつと細かいが、あんまり一辺に教えてもわからないだろうと思い主要な部分だけ教えておく。

「うーむ・・・ワシは考えるのは得意ではないからのう。動いて後方からの支援を中心とするかのう」

「それでいいと思います。同じこととする選手は二人も要ひませんし、バラバラの方が相手によって切り替えたりできるので」

フィジカルが強い相手が多いなら盤上を起用し、相手を止める。相手が戦略を練ってくるなら華咲を起用し、こちらでも作戦を立てて相手に思うような動きを取らせないなど、バラけていた方が相手によって違った対応ができる。同じことやるより、バラバラの方が多彩な動きができるため、その方がいいだろう。

「なるほど！助かったぞ！ではしつかりと身体を鍛えねばならん！ガツハツハツ!!」  
それはいつものこと・・・というツツコミは野暮。華咲は何も言わず、頑張ってくださいね、と一言だけ添えて自分の練習に戻っていった。

「よし・・・今日はこのぐらいにするか・・・」

時間を確認し、この日の練習を終える。この練習もそれなりに数をこなしてきたが、まだまだ慣れない。話に聞いていたように、かなりハードな練習になっている。

「・・・帰って早く休みたいですね」

「うん、うちも疲れちゃったんヨ」

しかしそのキツさに見合った効率的な練習になっている。以前よりもパワー、スピード、テクニクどれを取っても上昇している。

連携などは普段の練習で行えばいいため、それも大きな問題ではない。この調子で続ければきつと全国大会にもいけるはず。ちゃんと自分で考えて、しっかりと実行できている。なんと頼れる仲間だろうか。

「・・・よし、明日も頑張るぞー！」

まずは自分が元気を出していかないといけない。キャプテンとしての自覚を持ち、疲れを感じさせぬよう笑顔で誰よりも声を出していった。

## 花の女子会 団子の男子会

「第一回！城翔中学サッカー部女子会！イエーッ！！」

テンションの高い支倉とは裏腹にほとんどはパチパチとまばらな拍手。唯一獅子神がイエーイー！と返したぐらいで思わず支倉はテンション低っ！と大袈裟なりあくションをとる。

そんな反応を怪訝な表情で見る星見。なんだか初っぱなから混沌としている。いや、いつものことかもしれないが。

「で、セクハラ先輩。急に呼び出して何をするつもりですか？セクハラするなら人目のないところの方がいいですよ」

「ナチュラルにセクハラ扱いはやめてな!?あとそれぐらいわかってるわ！」

とにかく何をするのか聞かなければ前に進めない。星見が余計なことも交えつつ先陣を切つて話をするよう促す。

支倉はセクハラ扱いされたことにツツコミを入れた後、咳払いをして切り替える。無視してはいけない一文もあつた気がするが話が進まないのだから聞かなかつたことにする。「いやな、うちら同じサッカー部やのにお互いのことを知らなさすぎへんか？いくら今

年になってからの出会いとはいえこのまま何を知らずに引退なんて寂しいやん！」

「そうですか？」

「そうやねん！この世は一期一会！せつかくの繋がり、出会いは大事にしたいやん！で、フットボールフロンティアが開幕したらそんなことする暇ないないやろうから今のうちにやつとこうつてわけや！」

一応前年度から活動はしていたが、本格的に動き出したのは今年のこと。そのため三年の支倉は一年も経たず引退することになる。

この短い期間では、仲間のことを知ることなどできるはずがない。せつかくの出会いなのに一瞬でお別れなど寂しすぎるだろう。そこで女子会を開催し、お互いの親睦を深めようというのが彼女の提案だ。

「でも何人か来てないんヨ？」

「ああーそれな。無理強いはできへんから、用事がある人は来てないねん。いつかみんなで女子会できたらええなあ〜」

今支倉が言ったように、ここに全員が来ているわけではない。斧街は普段の生活態度から自業自得の生活指導。華咲は新作スイーツを買うために並びに行き、佐原は受験に向けて勉強をしなければならなかった。

集まることができたのは企画立案者の支倉、そして三日月、麻宮、獅子神、星見の五



人だ。

「知りませんよそんなこと。四人で好きに——」

とはいえ、そもそも用事のあるなしに関わらずそんなことはどうでもいいという人もいる。現に星見は他の部員のことなど知ったことはないというスタンス。

今日ここに来たのも、大事な話があるとされたから集まったのである。これだったら別に来なかった。

「たしかに仲良くするのは大事なんヨ！」

「私もそう思うわ!!煌もそう思うわよね!!」

「・・・あー、はいはい。私もそう思うよ」

と、星見はまったく興味なかったが、他の二人に圧される形で首を縦に振った。無下にしない辺りなんだかんだ根は優しい子なのだろう。

「それじゃあまずは・・・涼華ちゃん!なんか話したいこととかある?」

「話したい・・・ことですか?」

こちらも他の部員と同じく、事情も話されずいきなり呼ばれた麻宮。いきなり話したいことと言われても、当然そんなものを用意しているはずがなく首を捻る。

「なんでもええんやで。女子会つぽい話やったら」

「・・・わかりました、それでは私が」

しばらく沈黙が流れたが、話す内容を思い付いたらしい。カバンの中からメモ帳を取りだし、何やら色々と書き込まれているページを見せる。

「現状の練習ではあまり効率がいいとは言えません。そこで今後の新たな練習方法について私から一つ提案を……」

その瞬間、星見は頭を抱え、他の三人は綺麗に椅子から転げ落ちる。麻宮はその様子を不思議そうに見ていた。

「涼華ちゃん！今日はそんな堅苦しい話やなくてな、もつと女の子らしい話題を頼むわ！」

「……？そうですか。それでしたら今週のサッカーマガジンの注目選手についての情報を……」

続けて取り出したのはFFに出場する注目選手情報などが掲載されているサッカーマガジン。ページを開き、どの選手を警戒すべきかを話そうとし始めた。

「麻宮ちゃん！もうちよつと女の子らしい話をしない!？」

「これは、女の子らしくない……?」

獅子神の指摘に対し、そんなバカなど言わんばかりに少し目を開く。

とはいえよくよく考えてみれば、麻宮は小さい頃からサッカーをしており、中学の頃は強豪校のレギュラーだった。女の子らしいことをする暇がなかったのかもしれない。

「では、新しい技の習得について——」

「そ、それも違うと思うヨ……?」

「うーん、せやなあ女の子らしいっていうのは……恋バナとかスイーツとか? そういう話題やで!」

と、説明に乗じて麻宮の肩に腕を回し、そのまま胸も揉んでみる。前にも試したが、やっぱり特に反応はしなかった。それどころか真剣な顔で話を聞いている。

「(おお、動じへんなあ……!この子は大物になりそうな予感、姉さんにはわかる!わかるで!)」

どっちかといえば、誰にでもセクハラをしていく支倉の方が将来的に大物になりそうではある。

度捕まつてある意味大物というのは勘弁してほしいが。それは誰も望んでいない。

「へえー、結構しゃれてるじゃん。気に入った!」

「この店はナンバーワン人気らしいよ。やっぱり数字に偽りは無いってところだねー」

女子トークに花を咲かせていると、別の客が喋りながら入店してきた。もちろん貸し切りでも個室でもないため当たり前前のことなのだが、店に入ってから第一声がこれだったため少し気になった。

そんなに失礼極まりないことを言いながら店に入ってくるのはどんな輩なのか——

「ああつ！あんた達は荒央の!!」

「・・・えつ?どちら様?」

「あれだよ、私達のファンでしょ!いやあ、参っちゃうなあ。まあサインぐらいなら書いてあげてもいいよ?転売はダメだけどね!」

「違うけど。ちよつと自惚れすぎじゃない?」

見当違いも甚だしい。とはいえ改めて考えてみるとこちらは直接試合をしたわけではなく、試合を観戦していただけ。向こうが知らないのも無理はなかった。

「あつ、あれちやうかな?ほら、双輝と一回戦で戦ってた・・・そうやんな?」

ファンではないならなんなんだとしばらく頭を悩ませていたが、若迫がようやく答えにたどり着いた。それを聞いてもなおしばらくはわからなかったのか、頭を悩ませる。そしておよそ一分後、ようやく思い出した。

「なーんだ、できたての雑魚チームじゃん」

「あーはいはい、実績ゼロのチーム?じゃ興味ないねー」

たしかに事実ではあるが、そういうのは思っても口に出さないものである。気の知れた友人ならまだ許されるが、少なくとも向こうは初対面。城翔のメンツもあくまで試合を見ていただけのため、実質初対面。それでこの態度である。

「ちよつと上からなのが気になるんやけど・・・まあええわ！せつかくやから一緒に話さへん？今女子会をしてるんや！」

態度の問題こそあるが、女子会は大勢の方が楽しい。そう判断した支倉が三人を女子会に誘つてみる。

「ホンマに！ウチらもオフやし、一緒に女子会すんのも楽しそうやわ！二人もええやんな？」

「えー、どうしよつかなー？私達はこの地区の王者！暇じゃないんだよー？」

ノリ気の若坪に対し、姫百合ははやたら王者という部分を強調して焦らしてくる。暇じゃないならなぜこんなところでお茶しているんだという話になるが、そこはもうつっこんではいけない。

それからしばらくして・・・いや、しばらくという程の時間でもないが・・・

「で、キャプテンが口うるさくつてさあ！やつてらんないよ！あの石頭は真面目すぎる！」

「う、うーん・・・多分それは姫百合ちゃんにも問題が・・・やつぱりなんでもないんヨ」  
・・・見ての通りである。色々言っていたものの、参加すればこの通り。やつぱりみ

んなでワイワイするのが楽しいのか、見事なまでに打ち解けている。

「うちのところは口うるさくはないなあ。ただ全体的に個性が強いからまとめるのが大変そうやな！」

「その個性派グループに入ってるの自覚してます？」

「そりゃあ個性がないと今時やってけんぞ！セクハラをするのもやむなしやな！」

個性がないとやっていけないというのは実際そうなのだが、セクハラが個性に入るのか些か疑問である。

「やはり荒央の練習は厳しいのか？」

「まあね。お金の掛け方が違うし指導者も実績がある人ばかりだよ。で、そっちはどうなのかな？」

「指導者はいないと言っても過言じゃない。お金も・・・徴収された。ただそのお陰で・・・」

「だよなー。そんなことだろうと思ってたよ。大変だねえ、実績がないと信用もないから」

「いや、そのお金で・・・」

「おおっと涼華ちゃん、それ以上は言わんとこな」

支倉が流れるような動作で口元を押さえる。今は仲良く話していても、いずれ戦う運

命。となると、こちらの秘密兵器である修練場のことには伏せておいた方がいいだろう。

「うーん、美味しい！すみませーん！これ一つ追加で！」

一方獅子神は話をしつつ運ばれてきた料理に舌鼓を打っていた。話して食べ、話して食べる。その様子を見ていた星見が一言。

「獅子神、太るよ」

「ふぐう!？」

必要最低限の言葉で最大効率のダメージを与える。非常に合理的だ、ただしダメージを与えた先は味方である。

獅子神は大量に含んだ口の中の物を吹き出しそうになったが、それをギリギリで抑えてちゃんと飲み込む。危ないところだった。危うく女の子らしからぬ絵面になるところだ。

「べ、別にいいじゃない！ちゃんと運動すれば！」

「それは太る人の常套句」

「それは実際だと動いてないからでしょ！私はちゃんと部活で動いてるし！」

「でも食べすぎたら運動しても太る」

「ぐぬぬ・・・そ、それでも今日だけなら・・・」

「その今日だけが毎日続いて太るんだよ」

「なんでそんなこと言うのよー!!折角美味しく食べてたのにー!!」

即座に反論するも全てきれいに論破され、涙目で訴える。年頃の女の子とだけあって、やはりカロリー等は気にしてしまうところだろう。

対して星見は明らかに反応を楽しんでいる。きつとサディストに違いない。根は良い子なのだが、表面から見える部分はなかなかキツそうだ。

「あはははは!!でも二人とも胸がちっこいからね!むしろいっぱい食べて揉んでもらった方がいんじゃないのー?ねえー?」

姫百合は普段から度々余計なことを言う。そのせいで怒られることが多々あるが、彼女は決して懲りることはなかった。

「あれ?どうしたの?」

それゆえに禁句に振れることもある。いつもはキャプテンの篠原が渾身の謝罪することによってなんとかなっているが、そのキャプテン仲役がいけない以上、火は消せない。

沈黙したままゆらりと立ち上がった獅子神と星見が姫百合の両側に立ち、腕を拘束する。

「・・・本当に揉んだら大きくなるかしら?折角だから実験しよっか」

「支倉先輩、手伝ってもらえます?もう好きにしてもらって結構です」

「ちよいちよいちよいちよい!!」



「おつ、もちろんええで。そういうのはうちに任せとき!!」

これはまずい、何かやばいセクハラされる。しかも目の前の支倉とかいうセクハラ執行人の手の動き手練れのそれだ。このままでは間違はなくやられる。この上ない身の危険を感じる。

何か方法がないか僅かな時間で思案する。幸い怒られることはよくあるため、言い訳を考えるのはすでに一流の域に達していた。

今回も打開の一手を思い付き、それを実行に移すために姫百合は何の関係もない千堂を指差した。

「あ・・・あいつがさつき城翔は実績ゼロ、胸もゼロ、虚乳・貧乳、胸元クレーター、ペチャパイ集団って言ってた!!」

「万代ちゃんそんなこと一つ言も言っていないんだけど!?!というか嘔吐いた挙げ句先輩に向かってあいつ呼ばわりってどういうことかな!?!」

よくもまあこの短時間でそれだけの悪口を思い付いたものだ。とか思っている感心している場合ではない。いつの間にか星見と獅子神の両腕を拘束され、目の前にはセクハラがいた。

「それでは支倉先輩、どうぞ」

「よっしゃ!それじゃあ覚悟しいや!!」

「ひいやあああああ!？」

この後店の人にうるさいと一喝されるのはまた別の話。

城翔中学から歩いて十分程度のところで営業しているラーメン店。かなり値段は抑えられており、量が多く味も決して悪くはないことからそこそこ有名で、特に食べ盛り  
の男子や運動部にとって人気のある店だ。

その店に男三人が神妙な面持ちでおり、何やら議論をかわしていた。そのうち二人は  
城翔中学の東条と淀屋、そしてもう一人は荒央中学サッカー部所属の剛力山だ。

「そうか・・・お前らもそう思うのか」

「やっぱ素晴らしいと思うっす」

「結局んこここれは譲れませんわ」

いつもの二人に追加の一人が加わったこの三人の様子は真剣そのもの。部活帰りな  
どの寄り道で来るラーメン屋には余りにも場違いな空気、それぐらい緊迫した雰囲気  
が流れていた。

・・・しかし、話している内容が合致しているとは限らない。

「おっばい……いっすよね」

「当然、それが自然の摂理だ」

「そもそも嫌いなやつがおるんか？」

真面目な顔して何を話しているのか。もちろんそういうお年頃だが、こんな他人がいるような場所でもくもまあ恥ずかしげもなくこんな会話を真面目にできるものだ。思春期の子供からすればそんなことは些細な問題で、こっちの方が大事な話題かもしれないが。

さて、運動部に人気とは言ったがもちろんそれ以外の客もいる。そのような客からの視線が痛い。まだ中学生ということあり、そのようなお年頃ということでもギリギリ許されている（と信じたい）が、それはそれで正直公開処刑である。これだったら店から放り出された方がマシかもしれない。

なお会話には混ざっていない他の学生は話にこそ参加していないものの、わかると言わんばかりに頷いている。それはそれでなんだかキツイものがあった。

「あのさ……頼むからそういう話題は人がいないところで……」

「なんであのスケベゴリラはいつもいつも……!!」

赤城はあまり強くは言わないものの、止めるように説得しようとしており、篠原はもう止めることを諦めていた。

それはそれとして、東条と淀屋の二人がいるのはわかるがなぜ相手チームである剛力山と篠原が一緒になって話しているのか？ どのような敬意があったのか説明しておこう。

この日は練習が休みということもあり、赤城は今後の作戦や練習方法の相談のために数人を呼んだ。しかしただ話すだけでは折角の休みが消えるということで、ご飯を食べるながらという話になった。

ちなみに全員が来たわけではない。三年の裁野は受験と被っているため、今日は勉強のため先に帰った。また同じく三年の盤上は、最近サッカーのトレーニングが中心のため、自分の肉体が鈍るかもしれないということで今回は不参加。最近あまり使えていない筋肉に負荷をかけてくるとのこと。そのため三年男子が不在ということになる。ちなみに女子は件の件で全員不参加である。

何はともあれ残ったメンバーで食事をすることにし、評判の店でラーメンを食べるところにした。そして、作戦と練習の話もそこそこに、しばらくすると東条と淀屋がいつものように思春期トークを始めた。

「うちのチームで一番胸がデカいのって誰や？」

「三年はやっぱりデケエよな。やっぱ一年の差って大きいのか？」

「せやけど三年でもちっさい人はおるし一年でデツカいのもおる」

「わからねえ……でも小さいのは星見とか獅子神とかだよな」

そこまでは良かった……いやよくはない。公共の場なのだからもう少し遠慮してほしかった。ただ止めても無駄なのはわかってるので、仕方なく放つていた。

「お前たち……少しいいか？」

そこにやってきたのが、荒央中学の剛力山だ。安いかつ量が食べられるということ、どうやら荒央中学の選手も同じ店に来ていたらしい。

「えーつと、どちら様つすか？」

「どっかで見たことあるような気もすんなあ……」

「気にするな、ただの筋肉もりもりマッチョマンの同志とだけ言っておこう」

「??????」

そして二人はそのまま剛力山と意気投合。結果三人で思春期トークに華を咲かせることになり、止めに来た篠原らも巻き込んであのようなことになってしまったのだ。

「……はっ！またあのわがまま娘が余計なことをしとる気がする!?!あいつ……揉め事を起こすないうとるのに……!!」

「は、はあ……?」

その荒央中学をまとめるキャプテン、篠原はというと頭を抱えて謎の電波を受信して

いた。何があつたのか気になるが、なんだか疲れていそうだったので聞くのは止めておいた。

「はあ……赤城君、キミはわかつてくれるやろ?」

そんな篠原は唐突に顔を上げたかと思うと、今度は赤城に話しかけてくる。何のことだかわからない赤城は困惑する。

「えつと……何がですか?」

「決まつとる、キャプテンの苦労や!キミも相当苦労しとるやろ……見たらわかる!わかるで!!」

そう言つて篠原は例の三バカの方に目を向ける。なんとなく聞いてきた理由がわかつた。

たしかにキャプテンとしての苦労はある。なかなか癖のあるメンバーまとめ、キャプテンとして頼られるため弱みは見せてはならない。また、何かあつた時の判断は自分に任せられる。重圧のかかる立場だ。苦労がないとはいえない。ましてやあの癖のあるメンツをまとめるとなると尚更だ。

とはいえ一癖も二癖もありつつ、よくも悪くも一人一人が自分よりも頼れる存在。それもあつてか、支えられることでなんとかやれている。

「まあ……たしかに大変ですけど、それでも——」

「そうやんな!! 大変やんな!! いやーキミならわかってくれると思うってたんや!!」

自分の思いを話そうとしたが、途中で遮られてめちやくちや大袈裟な握手をしてくる。そのあまりにも大振りな握手に赤城は国語の教科書に載っている某修道士を思い出した。なお赤城は握手の場面以外は覚えていない。

「すまん、最近うちのキャプテン荒れてんねん。許してくれるか?」

そんなキャプテン同士の間話を聞いていた梶子が、同じく様子を見守っていた黒鉄に手を軽く合わせて謝っていた。

「・・・大丈夫です。それよりいいんですか、こんなところで油を売っていても」

「大会がとりあえずしまいやからなあ。束の間の休息つてやつや。明日からまた練習再開、キャプテンの胃痛もアクセル全開で加速していくで」

そう言つて、自分には被害がないからかケラケラ笑っている。

「それにしても、そっちもおもしろいのが多いやん。賑やかでええなあ」

こっちも負けてないけどな、と付け足して餃子を一つ食べる。なんとなく向こうのチームにも個性が強そうなのが集まっているのは容易に想像できた。

「・・・・・・・・」

今は試合外、オフの場だ。だからこそ敵チームであつてもこうしてのんびりと会話をすることが出来る。

「ん、どないした？なんか顔に付いとるか？」

だが、いくら仲良く話していても、いつかは戦う運命。フィールドに立てば本戦出場をかけて戦わなければならない。その時になれば・・・

「・・・試合では、絶対に負けません」

ここで弱気になつてはいけない。心を強く持ち、容赦はしないと相手の目を見てはつきりと応える。

「・・・ええ心意気やん。こつちも遠慮せんぞ？」

ちよつと意外そうにした後、もちろんだと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべる。それに対して黒鉄と言葉こそ出さなかったが、ゆつくりと頷いた。

「そうか・・・まだサッカーを始めたばかりの初心者か・・・。なら一つアドバイスしておこう、試合中に揺れる胸に注視のも悪くはない。だが、真の手練れはそれと同時に引き締まった尻、そして太ももの僅かなチラリズムを堪能する。よく覚えておけ」

「ナニイ!?せやつたんか!?ワイらは・・・甘かつたんか・・・!!」

「先生!!勉強になります!!ぜひ他にもご教授ください!!」

「ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”!!」

「篠原さん!?!しつかりしてくださいあぁあ!!」

と、そんなシリアスな空気をぶち壊す叫びが聞こえてくる。うち一つはこの世の終わ



りみたいな叫びを発していた。

「・・・本当に大丈夫ですか？」

「心配せんでええ。いつものことや。むしろ下手に手を貸そうものならワイらもあぁなるんやで」

心配ではあるものの、あっちには関わったら最後胃が潰されかねない。そう察した黒鉄はおとなしくラーメンを啜るのであった。

## 嵐の前の静けさ

いよいよ明日からフットボールフロンティアの予選が開幕する。部員が集まらない、勝つことができないと一時はどうなることかと思つたが、なかなか形になつてきた。

もちろん完璧というわけではないものの、みんなは優秀だ。あとは試合をしていくうちにコツを掴んでいくだろう。

「黒鉄、一点ではなくもつと広範囲を見ろ。相手が正面から突破してくるとは限らないぞ」

「わかりました・・・！」

「うーん、もつと技のレパートリーを増やした方が良くわよね？」

「あるに越したことはないと思うよ。少なくとも困ることはあるだろうけどね」

「それじゃあもつともーつと頑張るんヨ！」

今日も真面目に練習に取り組み、明日に向けて備えている。ときおり問題のある行動もするが、それはさておき本当に頼りになるチームメイト達だ。

「みんなー、ちよつと集まってくれるか？」

集中して練習をしているところで悪いのだが、話すことがあるため全員呼ぶ。みんな

は赤城の声を聞くと動きを止め、そろそろ集まってきた。

「まずは今まで着いてきてくれてありがとう！明日からフットボールフロンティアが開幕するけど、こうやって参加できるのはみんなのおかげだ！」

「な、何を今さら言うとするんや。そんなストリートに褒められたら照れるやんか・・・」  
「へへっ、むしろこんなおもしろいことに参加しないわけがないだろ？」

「ワシらはただ着いてきただけじゃ、気にするでない！」

いきなり褒められて照れる、また当たり前だと笑顔を見せる者。

「ホントよくこんな無謀なことをするよ。まっ、だからこそ価値があるんだけど」

「そうそう、夢は大きくないと楽しくないよね」

「お陰で毎日が楽しい。それに価値のある時間を過ごさせているよ」

無茶だと思いつつ、加入して協力し、この夢に乗ってくれた者。

「むしろ感謝を言いたいののはこっちだ。誘われなかったら、私は逃げたままだった」

「一度はサッカーから離れた。だが、再び意思を取り戻せたのはお前がいたからだ。・・・

感謝している」

不甲斐ない形で離れたにも関わらず、引き戻した赤城に対して恩義を感じる者など、それぞれ理由は違えど赤城に感謝していた。

皆に感謝するはずが、まさか返されるとは思っていなかった。赤城は照れくさくな

り、強引に話を変える。

「ええつと、話を戻すけど明日は試合だから今日はもう終わりにしようと思う！ここからは自由にしていいぞー！」

明日は試合、ギリギリまで練習したらむしろ動きが悪くなるだろう。そのため今日は早めに切り上げることにした、というのが今回の話だ。

「おっ！マジでか!？」

「なんやて！じゃあこれからナニワランドとか行って遊んで帰ってもええんか!？」

本当は早めに帰って休んでもらうのが一番ベストだ。疲れが溜まった状態では動きが鈍るため、帰ってしつかりと休息を取ってほしい。

「でも怪我とか問題は起こしたりしないようにな？それさえ守ってくれたら好きにしてくれていいぞー！」

とはいえここまでずっと頑張ってきてくれたのだ。遊びたい気持ちはよくわかるので止めることはしない。問題さえ起こさなければそれでいいだろう。

「よっしゃー!!キャプテンも行こうぜー！」

「あー・・・俺は明日の準備とかしないといけないから・・・ごめん！みんなで楽しんできてくれ！」

これから先、しばらくは大会で忙しくなる。だから赤城も一緒に行こうと誘われた

が、明日に向けての準備があるため今回は断った。

「ほんならしやあないなあ・・・よし、それやったらキャプテンの分もワイらが楽しませてもらうわ！行けるやつで遊びに行くでー!!」

「おう!!今からでも遅くねえ!全部の乗り物制覇してやる!ナニワランドRTAの開幕だぜ!!」

行けないのであれば無理はさせられない。淀屋達もそれなら仕方ないと強要はせず、遊べるメンバーを誘って行くことにする。

「よし、煌!私達も行くわよ!!」

「なんで私が・・・そもそもこっちにも予定とかあるからね?・・・まあ今はないから別にいいけど」

獅子神から誘われ、星見も行くことにした。なんだかんだ言いつつその顔は満更でもなさげだった。一番最初に話したときの印象と随分変わったものだ。

「・・・・・・・・」

一方麻宮は行こうかどうか迷っていた。本人として行ってみたいというのが正直な気持ち。ストイックな性格だが彼女も中学生、遊びたいと思うのは当然の気持ち。であれば行けば良いじゃないかと思うだろう。

とはいえ生真面目な麻宮は普段あまり馴れ合ったりしない自分が行ったところで周

りに気を使わせるだけにならないかという迷いがあつた。自分のために周りに気を遣わせることはしたくはない、その思いが彼女の動きを縛っていた。

「おつ、涼華ちゃんも行くか？楽しいで〜」

「私は……」

そこへやつて来た支倉から誘われはしたものの、本当に自分が行つても迷惑をかけるか心配だった彼女は答えに詰まる。

支倉はその様子を見て、少し唸つた後再度話しかける。

「んー、迷つてるんやったら行つてみたらええんちゃう？やらずに後悔するよりやつて後悔やで！それにみんなで行つたら絶対楽しいし！」

「楽しい……」

「そうそう！この間も何人かでいったんやけどな、そこでやつたたこ焼口シアンルーレットはなかなかの傑作やったで！いやーみんなにも見せたかつたわ！」

楽しいという言葉でふと思ひ出す。前の中学校にいた頃は一年からレギュラーということもあり、期待の目で見られていた。

そして、麻宮本人も周りの期待に応えるようとするあまり、サッカーで結果を残すことしか考えられなくなっていた。

ひたすらボールを蹴り、昨日の自分よりも強くなること。それだけを考えていた彼女

はいつしか独りよがりになり、昔のように楽しんでサッカーをすることを忘れていた。

ここで行かなかつたら、また独りよがりになってしまい、また楽しむことを忘れてしまいかもしれない。サッカーは個人プレーではなくチームプレー。何より楽しむ心を忘れてはいけない。

「では……私もいいですか?」

すぐ昔のように戻るわけではないが、この経験でみんなと楽しむサッカー、昔の気持ちに戻れるかもしれない。まだ自分にはそれができないが、その一歩として今回の誘いを受けることにする。

「おっしや!それじゃあ一緒に行こか!!」

支倉はもちろんだと言わんばかりに手を差し出す。麻宮はその手を握ると、少しだけ笑みを浮かべた。

「……裁野先輩、どうしますか?俺は行くつもりですが……」

折角の機会なので、黒鉄もみんなと一緒に行くつもりだ。そして同じDFとして世話になっていく裁野に行くのか行かないのかを聞いている。

「俺も行こう。こういうのも悪くない」

あまりこういうことには興味がなさそうだが、面倒見のいい裁野もついて来てくれるようだ。ただ彼の場合は遊ぶよりも、問題を起こさないよう監視するという目的が含ま

れていそう……いや、そつちが真意かもしれない。

「たこ焼きとかもあるかな？折角だし出店の料理コンプリートしたいねー」

「ガツハツハツ！試合前の景気付けというわけじゃな!!ワシも屋台巡りでもするかのう  
！」

盤上と華咲の二人も料理目当てで行くことを決めた。あそこにはたこ焼などを筆頭にフードスペースも充実しているため、試合前の景気付けにはちょうど良いだろう。

「あつ、あたいはパス。眠いから家でのおんびりと眠らせてもらうよ」

しかし赤城以外全員が行くというわけではないようで、斧街はパスするらしい。理由がこの上なく彼女らしかった。

「そつすかー。斧街先輩らしいつすね」

「サボりじゃないからな。今回は許可しよう」

「……いつから承認式になったんだい？」

そもそもサボるのが悪いので許可も承認もないのだが、何にせよ今回はいかないというこで合意が取れた。無事にお休みである。

「よーし、それじゃあみんなで——」

「……あの、僕も行きます」

「キヤアアアアア!？」



「……すみません、驚かしてしまつたみたいですね……」

これで全員集まつた……と思つたら、千景が背後におり、獅子神の叫び声が響き渡る。もう何回やったかわからないやり取りだが、いまだに慣れない人は慣れないらしい。ナニワランドのホラーハウスにいれば即戦力だろう。

「やつぱ影薄いな……。いつそ全身金ぴかの服を着させたら釣り合いとれんじゃね?」

「いくらなんでもそれは目立ちすぎると思うんヨ……?」

「ふむ、今度試してみようか。後輩の悩みを解決するのも先輩の役目、ここはワタシに任せてくれないかな?」

「……ありがとうございます?」

なんだか変なことになっているが、一応考えてくれてるのでお礼を言っておいた。実際やるとなれば間違いないく逃げることになるが。

みんながナニワランドに向けて出発してからしばらく後、赤城は自宅にいた。明日の試合の事で頭がいっぱいだった。

「ふう……」

息を吐き、カレンダーを見つめる。去年にサッカー部を設立。そして時間はかかってしまったものの、今年になってようやく動いた。

一人、また一人と増える度に嬉しくなった。仲間と練習できる、試合ができる。人数が増えていく度に部室は彩られていき、騒がしくながら毎日楽しい日々だった。

「ああ、もうそんなに経ったんだなあ・・・」

初めての試合を思い出す。たまたま組むことができた練習試合、初試合ということのみんな緊張していた。だから緊張することはないと、楽しむことが大事なんだと伝えた。その結果、なんとか引き分けまで持つていくことができた。初めての試合で引き分けまで持ち込めば充分だろう。

「やっぱり強かったよなあ。そりゃ負けちゃうか」

そして大阪府大会では強豪校の強さを見せつけられ負けてしまった。とはいえ、かなり善戦したといえるだろう。元より負け試合だった試合で取ることのできた最後の一点の価値は、一点よりもずっと大きい。

「・・・・・・・・」

これもみんながいたお陰、感謝してもしきれない。間違いなく頼もしく、心強い仲間だ。

だが、心の奥底では違う感情もあった。

「本当に、大丈夫なのか・・・？」

一人、また一人と仲間が増えていく度に、嬉しい反面不安な気持ちも増えていった。仲間が頼れないとか、実力がない、また性格に問題があるとかそういう話ではない。先程も言った通り、みんな頼れる仲間で実力だつてある。何より諦めない心だつて持っている。これ以上ないぐらい最高の仲間だ。

「みんな強いよな・・・」

だから不安なのだ。みんな自分よりもセンスがあり、ずっと強い。精神、才能共に自分より上だ。そんな周りより弱い自分がキャプテンでいいのかと不安になってしまふ。それに、キャプテンにも関わらず試合に負けても仕方がないと考えるのではないだろう。チームのキャプテンがそんな思考でどうするのだ、と自分が嫌になる。

あんなにも優秀な仲間がいるのに一度も勝てないというのはよろしくない。数回の練習でコツを掴み、技を得とくし、基本的な動きを覚える。ポテンシャルは相当高いはず。なのに今のところ一度も勝てずじまい。

「そっくだよなあ・・・」

その理由はわかっている。自分が弱いからだ。精神も能力も才能も指揮力、他の誰よ

りも劣っている。

最初の試合はブランクや素人勢の動きが仕上がっていないから、二回目は地区でナンバー2に君臨しているチームが相手だった。たしかに負けても仕方がないとは言える。しかしそれはただの言い訳に過ぎない。そもそも負けた時に考えるべきは負けた理由ではなく、次に勝つための方法を考えないといけない。

だというのに、自分は負けても仕方がないと言い訳ばかり探している。まだ本番じゃない、練習試合だから、初めてだから、強豪だから、まだ時間があるから。いつもこれだ。

たしかに練習試合はあくまでも練習だ。自身の成長が何よりも大事。双輝中学との試合も、強豪との対決ということはいい経験にはなるし、あの試合は負けても次があるとは言える。

だか、だからといって勝つことを放棄していいわけではない。いくら得るものがあったとしても、負けて満足してはいけけないのだ。ましてやそれがチームの前に立つキャプテンなら尚更だ。

「・・・みんなは頑張ってる。それなのに、俺は・・・」

何度も思う。メンバーは間違いなく優秀、数回の練習、試合である程度の動きを身に付け、技を修得した。試合でも諦めず、最後まで勝つという意思を持って戦う。

そんな優秀なメンバーを本来纏めるはずの自分が一番頼りない。そんなことだから負けるのだ。

フットボールフロンティアで負けたら間違いない自分のせいだ。もし負けたら、自分のせいで十四人の努力が無駄になる。自分のせいで無駄にしてしまうのだ。

重みが違う。サッカーはチームスポーツ。自分一人のために残りの十四人が負けてしまったらどう責任を取る？ 取れるはずがない。責任を取ってどうこうなどという甘いものではない。

ましてやみんながみんな自分からサッカー部に入ってくれたわけではない。多少の無理をして仲間になってもらった人もいる。そのため尚更負けられないという不安が大きくなっていった。

だが、最初はそこまで大きく考えていなかった。たしかにマイナスな思考になることはあったが、まあなんとかなるだろうと気楽に考え、サッカーを楽しもうと考えていた。しかし、メンバーが揃い、キャプテンとしての自覚を持つようになってからは変わった。みんなと一緒に練習をし、試合をしていき、周りの才能、精神力の高さに気づくと自分の弱さが嫌でもわかってしまう。その結果、不安が大きくなっていった。

「俺に……できる、のか……？」

心が強く、実力もあって頼れる仲間。それに対して実力も心も弱く、仲間が持ってい

るものを何一つ持っていない自分。

しかも一番必要なキャプテンとしての素質もない。チームを統制することはできない。自分の頭の悪さではチームの内情を完璧に把握することなどできない。

諦めないように鼓舞することもできない。そもそも自分が諦めているのだ。うわべだけならできるが、内心で諦めていればそれはチームに薄々伝わってしまう。

みんなを導くこともできない。自分が一番最後尾にいる。導くどころかついていくのがやっと、それ以上なんてできない。

唯一あるのは明るさだけ。その明るささえも、芽生えてきた不安から消えつつあった。

サッカーが好きという思いは変わらないし、楽しむことだつてできている。だが……どうしようもなく不安になる時がある。そしてFFが開幕する前日、その不安はいつも異常に膨れ上がっていた。

もう負けてはいけないという状況が、いつも以上に不安を大きくしてしまっているのだ。

「……いや、何を考えてるんだ！」

……そもそもこういう思考になることがいけないのだと切り替える。ポジティブシンキング。日頃から常にプラスに考えること。そうすればこんな考えに至らないはず。

どうせ明るさしかないのだから、せめてそれぐらいは絶やさないうにするしかない。今自分にやれることといえればそれぐらい、ならばそれをやるしかない。

「・・・よし、やるぞ!!」

明日の試合、みんなの前では笑顔でいよう。それだけでいい。それしかないのだから、無理してでも自分にできることをやる。不安をあおってはいけない。

赤城は頬を叩き、気合いを入れ直す。そして明日に向けての準備を進めた。

## V S 非宋中学 前編

いよいよフットボールフロンティア予選が開幕する。府大会は負けたとしてもFFがあるためそちらに切り替えればいいが、今回負ければ次の大会は一年後。三年生は引退となる。

無論赤城は二年生なので一応負けても次がある。だからといって負けていいはずもない。集まってくれた仲間のためにも試合に勝ちたい。

「みんな大丈夫か・・・？」

今日の試合は弱小校対無名校ということもあり観客は以前より少ない。だが、今回は負けてはならないという条件付き。決意を固めたものの、やはり緊張感がまるで違った。

「これで三回目やしな。さすがにもう慣れたわ！」

「問題ないよー。むしろようやく本番って感じだね」

「・・・優勝するのは、俺達だ」

仲間は特に緊張した様子がない。二回の試合を経て慣れたようだ。さすがだと言えよう。



「大丈夫そうだな」

赤城はまだ緊張している。とはいえ今からどうにかなるわけではない。今からできることがあるとすれば、これからの試合を全力で戦っていくこと。みんなは緊張していないので、後は自分次第だろう。

「俺は指示をしない。サツカーについてはわからんからな。自分達で考えて行動しろ」  
「私もよく分かんないから全部任せる！その代わり修練場の改造は任せときなさい！」

こちらの監督は飾りのようなもの、本人も任せると言っているため自分で考える他ない。とはいえそれは前から話していたことなので、別に気にすることではない。ただ入江に関しては自重してほしい。

「よし、みんな！絶対に勝つぞー！」

何はともあれ準備はできた。不安と期待、両方を心に秘めて憧れの舞台への第一歩を踏み出した。

対してこちらは非宋中学。明るい城翔中学とは対照的にどこか諦めたような、どんよりとした暗い雰囲気の流れていた。

「おー、元気が良いなあ。俺達も昔はあんなだったっけ？」

「ハハッ、そうかもな。でも聞いた話じゃあいつらつて素人なんだろう？それなら俺達にも勝ち目あるかもな」

「まっ、そうなら二回戦で負けるってオチだろうけど」

特に一番気合いが入っているはずの三年がこの調子だ。勝ちたいという意味はそこになく、運が良ければ勝てるかもしれない程度で考えている。

「おい！今からそんな調子でどうする！そんな気持ちじゃ勝てる試合も勝てないぞー！」

キャプテンの進道が気合いを入れさせようとするものの、へいへいと軽く聞き流される。こんな状態ではまともに戦えたものではない。

「わ、私達が勝ちます！」

「そうだよ映里ちゃん！ボク達がぜったい勝つのだ！！」

「おうとも！守りは俺に任せて攻めてこい！」

「俺もベンチから応援してるぞー！！がんばれー！」

だが、全員がそういうわけではない。キャプテンの進藤、そして一年生と一部の二年生達は希望をまだ持っている。この試合に勝てば腑抜けた三年の気持ちも変わるだろうと切り替える。

『さあ、今年もこの季節となりました！フットボールフロンティア地区予選、まもなくキックオフです!!』

く。  
刻一刻と試合時間が迫る。気合いを入れ、それぞれのチームからスタメンが位置につ

城翔中学フオーメーシヨン

麻宮 — 星見

獅子神 — 佐原

赤城

淀屋 — 盤上 — 千景

支倉 — 黒鉄

東条

非宋中学フオーメーシヨン

阿倍 — 相澤

吉田 — 角田

進道

米田 — 飯田

鹿野 — 菊地 — 鏡野

フォーメーションにつき、審判が両チームの準備が整ったことを確認。

『大阪府の予選を勝ち上がるのはいつたいたいのチームなのか！いいよいよ運命が動き出します!! それではキックオフです!!』

実況の声とほぼ同時に主審がホイッスルを鳴らす。試合開始の合図だ。

「みんな！頑張っていこう！」

まずボールを持った城翔中学は攻めるため、非宋中学は守りから反撃へと繋げるためにその場から離れ、それぞれの仕事を果たすべく走り出す。

「はわわ・・・形が崩れちゃう・・・！」

と、思いきや一人だけ集中できていない。試合前に勝つと意気込んだ鏡野だったが、走り出す選手を見てあわあわと右往左往している。

「おい！始まったんやからしっかりせえって!!」

すでに試合は始まっている。これから相手が攻めてくるのだから、守ることに集中してもらわないと困る。

「で、でも形が崩れて・・・」

「試合なんやからで当たり前やる!？」

「向こうは何をやってるんだ・・・?」

相手の事情はわからないが、すでに試合は始まっている。少し気の毒な気もするが、相手がグダグダになっている間に攻め上がる。

「あーもう! だったら俺が止める!!」

鏡野はもう無理だと判断し、角田自ら後ろに下がって守りに加わる。

「無駄よ! ダツシユアクセル!!」

無理くりディフェンスを仕掛けようとしたものの、一時的に加速した獅子神が守る暇も与えずにここを突破する。

「キャプテン!」

「ああ、やってやるさ!」

パスは繋がったものの、またしてもディフェンス陣が立ち塞がる。これ以上無理をできないと判断し、赤城にパス。

「させません!・・・なんで寝癖付いてるんですか!」

まだ不安定ではあるが、なんとか戦線に復帰した鏡野。だが今度は相手の寝癖が気になって行動が鈍くなる。直してない方も問題だが、気にする方も気にする方である。

「えっ?・・・って、しまった!」

とはいえこれはこれで赤城の気を散らすことができた。奪うことはできなかつたも

のの、ボールを弾くことに成功した。

「気にするな！まだ挽回できる！」

それでもまだ攻撃は止まらない。麻宮が持ち前のスピードで弾かれたボールをすぐさま確保する。

「うおっ、はや——」

「フリーズショット!!」

そして相手を抜き去った麻宮はそのまま誰にも邪魔されることなく技を打つ。そのあまりのスピードにキーパーは一步も動けず、完璧な運びで一点目を奪うことに成功した。

「・・・よし、決まった」

決まった後は麻宮らしい静かで控えめなガッツポーズをとる。

「オツケー！ナイスショット！」

「・・・良いショットでした」

「ちよいちよい！こつちにも見せ場ちよーだいや！」

それとは対照的に盛り上がる城翔中学のメンバー。想像以上に順調で、早い段階で先制することができた。ナニワランドでの練習が相当効いているのだろうか？

何にせよここで決められたのはありがたい。だが、まだ試合は始まったばかり。油断

はできない。とはいふものの、盛り上がるのも無理はない。現に赤城も決まった時は声をあげて喜んでいた。

「な、なんてやつらだ・・・!」

一方非宋中学のキャプテン、進道は愕然としていた。今回の相手は素人と聞いていたので自分達でもやれると思っていたが、想像していたよりも遥かに強い。

「いや、俺達が弱いだけじゃねーの?」

「それな。素人相手にも勝てないなんてな」

だが他のメンバーはというと、自分達が弱いだけだとへらへらしている。なんならもう勝てないと決めつけている者もいた。

「お、お前らなあ・・・やる気あんのか!」

「そないなこと言われてもなあ?」

「そうそう、事実だし。強かったのは昔の話だつて。キャプテンもそろそろ現実見よぜっ。」

非宋中学、かつては強豪だったが、ここ数年間ずっと負け続けてきた。それでも最初の頃は諦めない心を持っている選手も多かったという話だ。

しかしいつまでも結果が出ず、惨敗続き。負ける度に周りからも落ちぶれた目線で見られるようになり、嫌になって諦める選手が続出。それが落ちぶれる速度を上げてしま

い、結果今のようなチームになってしまった。

進道はそれでも足掻き続けた。同世代のみんなも入学当初は俺達がこのチームを変えられるのだと豪語していた。だが、それでも最初だけ、負けが込んでいく内に、いつの間にか同世代で諦めないのは彼一人になっていた。

「なんでわかってくれないんだ……！」

もう一度だけでもいい、最後にみんなと心が燃え上がるようなサッカーがしたいと願っていたが……このままではそれは叶わない。

「くそっ、早く取り戻さねーと……！」

予想外の強さ、早い段階で一点を取られてしまったが、まだ時間はあるため逆転は難しいというわけではない。しかし逆に言うと、さらに点差を広げられる可能性がある。それに早く点を取り返しなきゃいけない、仲間の士気にも関わる。

現にもう諦めムードが漂い始めているのだ。これ以上点差を付けられると建て直しがきかない。絶対に諦めない、奇跡を起こすのだと走り続ける。

「……ステルスステイル」

しかし、早く点を取らなければならぬという焦りにより周りが見えておらず、ただでさえ存在感の薄い千景の存在を視認することができなかった。

「……ボールはどこだ!？」



ボールを奪われたことに気づいたのは、千景がパスを出し終えた後のこと。すでに中盤を抜け、相手ディフェンスを切り抜けようとしている。

「ここ、ここから先には通しません！」

「俺らが相手や!!」

鏡野を筆頭としたDF陣が守りを固めている。少し数が多いと判断。いったん後ろに戻し、そこから今度は佐原が逆サイドから攻め込む。

「クツソ!こんなところで負けてたまるか!俺は先輩みたいにはならねーぞ!!」

「・・・ほう、色々と事情がありそうだね」

佐原は相手の悪い空気感を察し、何かあるのだと悟る。何も無い平常時ならいくらでも相談にも乗る。だが・・・

「だが、これは試合なんですね。残念ながら話を聞くことも、手加減もしてあげられないよ」

こちらにも負けるわけにはいかない。それに試合で手を抜くなど言語道断、それこそ相手を侮辱しているようなものだ。

自分達にできることは全力でぶつかること。歯痒いが、他に方法もないためこうすることしかできない。

「では、実戦で使わせてもらおうか・・・マッハウインド!!」

自分達を大差で負かした相手、双輝中学が使っていた技。修練場の練習で身に付け、実践で使うときが来た。

「あー、やっべ。打たれたか」

キーパーの昭米は技を出すこともできず、ボールはそのままゴールネットに突き刺さった。

「ふむ、問題はないようだね。これなら今後も使えそうだよ」

試合では使ったことはなかったが、これなら問題はないと技の出来に満足する。通用するならば攻撃の幅が広がる、多彩な攻めが可能だ。最も双輝の選手が使ったものと比べるとかなり劣るが、それは佐原自身も理解しているため驕ることはないだろう。

「いける!!この調子でいくぞお!!」

二点を決め、完全に流れを掴んだ城翔中学。こうなれば何も問題はない。ここからさらに勢いをつけて、点差を広げていくだけだ。

「いくぞみんな!!まだ試合は終わってない!!」

「もちろんっす!!」

それでも相手も完全に諦めてしまったわけではない。僅かながらまだ希望をもっている選手もいる。

「おっと!そうは問屋が許さんで!!男淀屋が一世一代の大勝負——」

「なめんなつ!!モグラフィエント!!」

「おいー!?セリフぐらい最後まで言わしてくれてもええやん!」

手出しできないようにボールを地面に埋め込む。ボールは地面を潜航し、相手を通りすぎたところで地面から飛び出し、進道はそれを確保する。

「しゃあ!!見たか!」

「やるのう!じゃが、ワシの前には無力じゃ!」

とりあえず突破できたことで安心し、前を見ずに走っていた。そのため後ろで控えていた盤上への反応が遅れてしまう。

「おわっ!?マジかよ・・・!」

「残念ながらホンマやで?」

「俺らのとこの筋肉ダルマ先輩をナメんなよ!!」

折角突破できたというのにあっさりと奪われる。進道は自分の油断を呪った。

そして盤上のパワフルなパスでボールは一気にゴール付近まで飛んでいく。少ないチャンスを活かそうとしたため、相手の守備はガラガラだった。

「退いとけ!俺がやったるわ!!クイックドロ——」

「クイックって言うわりには遅すぎるんじゃない?」

ゴール前に残っていた菊池がなんとか止めようとするも、技が使われる前に獅子神と

のワンツーでここを抜ける。

「これでもFWだからね。今回は私が決めさせてもらおうよ」

そう言うのと踵を使ってボールを真上に打ち上げる。ある程度飛んだところで、ボールは黄色に輝いた。

「スターアロー!!」

飛び上がった星見がボールをシュートすると、形状が星に変化。夜空に輝く流れ星のようにゴールへと流れ込んでいく。

「プレッシャーパンチ!!」

一方キーパーの昭米はゴールバーの上に乗る、さらにそこからジャンプして上空から拳を叩きつける。

「あー、無理だなこれ・・・」

が、威力の違いで無理だと察する。その言葉通りボールの勢いは弱まることなく、ボールはゴールポストに突き刺さった。

「・・・どれだけ無謀な夢でも可能性はある。まっ、挑戦すらしなかったら無駄だけど」  
相手が途中で諦めたのを見て、星見はこのチームに負けることはないだろうと判断する。実力差は時に気持ちでひっくり返せる時もある。それすらもないチームは何もできないのだ。

「これで三点目か!! いけるぞー!!」

「この調子だよ! みんな頑張ってる!!」

ノリにノッた赤城達。人数こそ少ないが、城翔中学の応援にも気合いが入る。

「よーし、俺も行くぞー! ヒートウイング!!」

これだけ優位なら何も心配することはないと、赤城は調子を取り戻す。今は攻める時だと、声を出して相手陣営に切り込んでいく。

「あー、やっべ」

「点差が開くなあ。失点記録更新か?」

相手の方はもう戦意が喪失したのか、半数以上の選手からやる気らしいものは感じられず、適当にやっているように見える。

もちろん全員が全員そうというわけではないのだが・・・サッカーはチームスポーツ。いくら一人二人がやる気があつて強かろうが、その選手を抑えられたらそれでおしまい。この調子では、非宋中学に勝ち目などない。

「フリーズショット!!」

そして前半残りわずかのタイミングで麻宮がもう一点決め、これで四点差となり一度

休憩を挟む。これだけ点差が開けばよっぽどのことがない限り負けることはないだろう。

「おっしやあ！初勝利できそうやな！」

「ワシらの努力が実った！ただそれだけのこと！当然の結果じゃ！」

「ふっふっふっ、この勝利は天才の私が協力あつてこそ！さすが私ね！」

たまに問題を起こしたり命を危機を感じる時もあったが、積み上げてきた努力は間違いない。この試合もその成果が出ているだけだ。

「みんな、油断しちやいけないぞ。輪成との試合も先制したのはこっちだけど、最後は引き分けだったからな？」

みんなの動きはよく、逆に相手の動きは良くない。後は油断せずに最後まで全力で戦い抜けばこの試合は間違いなく勝てるだろう。

「・・・裁野先輩、どうかしましたか？」

「いや、大したことじゃない。ただやる気のない奴らがグダグダやっているのは気に入らん。見ているだけで腹が立つ」

かつてやる気のないチームに嫌気がさし、一度はサッカーを離れた裁野。どうにも相手チームのやる気がないことにイラついているようだ。

「みんな！気合い入れていこう！」

「もちろん!!どんなシュートが来ても止めてやる!」

「この試合、うちらが勝つんヨ!!」

とはいえ先程の佐原もそうだが、可哀想だから、このままだとやる気を出さないからといってわざと点を与えるのは相手チームへの侮辱にすぎない。そもそもそんな接待サッカーなど何が楽しいのだ。

とはいえ説得をしても意味はないだろう。やる気がない人は身内の説得すら応じないこともある。よく知らない相手から説教されたところで聞く耳を持つことはまずない。

自分達が思っていたサッカーとは少し違うものの、できることはない。今やれることはこの試合を全力で戦い抜くことだと再度気合いを入れ直し、後半戦に備える。

## V S 非宋中学 後編

前半から怒涛の攻撃を仕掛けた城翔中学。その甲斐あつて四点を取ることに成功し、差を大きく広げることができた。

「あーあ、終わったな。俺達も引退かー」

一方前半の段階で四点を取られた非宋中学。当然ながら空気は重苦しい。三年は当然のことながら、すでに二年生達も大半が落胆していた。

無理もない、進道達の代も二年になる頃には進道以外は諦めるようになっていた。自分達では勝てない・・・と。

「おい、そんなこと言うなよ。まだ後半が丸々残ってるんだぞ」

だからといってこのままでいいわけがない。試合もそうだが、諦めてもいいという考えを払拭しないと今後の人生でいつまで経つても羽ばたくことはできない。

一生逃げたまま、自分と向き合えず、きつと後悔することになってしまう。それでもいいはずがない。

「じゃあなんかあてあんの？ここから逆転できる方法」

「いや、それは・・・」



現状、特に打開策はない。相手チームに穴がないわけではないのだが、それ以上にこちらの穴が大きすぎる。そちらのカバーに手をとられ、攻められるような状態ではない。

「わ、私達はまだ諦めてませんよ・・・！」

「そうですよ！諦めなければチャンスはあります!!」

「・・・あつたか？前半にそういうチャンスの場面」

「続けても恥さらすだけだと思っぞ？」

一年生が諦めずにやろうと説得するものの、たしかにこのままでは点差は広がる一方。これ以上やったところで勝ち目などなく、さらに点差が広がるだけ。もはや公開処刑のようなものだ。これならさっさと棄権した方がマシと考えるのも仕方がない。

「ほら、諦めて後は適当にやろーぜ。真面目にやったところで何にもなんねーよ」

「そうそう。ほら、客も帰ってるぞ」

すでに観客も試合の結果はわかっただと言わんばかりに帰り始めている。ここから盛り上がることもなく終わると思っっているのだろう。

それは三年生達も同じ。ここから逆転、それどころか一点すら返せるとは思っていない。そんな結果が見えている試合を見るなんて時間の無駄、意味のないことだ。

「で、でも！まだ半分残ってますし、何か奇跡が・・・」

「はいはい、いくら夢見ても勝てやしねーよ。おとなしく勉強でも——」  
「・・・何やってんだか」

必死に説得するも、無駄と言つて話を聞かない先輩達。そんな様子を先程から黙つて見ていた男が口を開く。前半戦でずっとベンチにいた男だ。

「なんだよ、俺達じゃ勝てないなんてわかりきつてたことだろ。何を今さら」

「あー、そーだな。お前らなんかじゃ無理に決まつてたか。変なこと言つてわりーな」

そう言つてわざとらしく手を振る。煽るような口調。口車にでも乗せようとしてるのかもしれないが、乗つたところで勝ち目などない。

「・・・試合にも出れねえやつがごちやごちや言つてんじゃねえよ」

正面から言い返すことができない。イライラしていたこともあり、何も考えずに口に出してしまった。

「おい！その言い方は・・・！」

「あつ・・・」

試合に出れない。それは彼が下手という意味ではない。むしろ逆で、全体の能力が高い水準でまとまつており、少なくともこのチームでは間違いなくトップだ。

彼の名は菊原栄一。チームが低迷していく中で入部した選手。実力はチーム随一、沈んでいくチームを引き上げられるかもしれない、唯一の切り札だった。彼がいればもし

かするかもしれない、そう思っていた時もあった。

だが、彼が一年生の頃に出場したフットボールフロンティアの初戦から足を大怪我を負ってしまった。

その試合は辛うじて勝利したものの、切り札を失った非宋中学は次の試合で敗退。そして、彼もまともにサッカーができる状態ではなくなつた。リハビリをし、日常生活には支障がないところまでは回復したが、サッカーができるまでには回復せず引退目前まで来てしまったのだ。

「すまん……」

いくら煽つたのが向こうとはいえ、言つていいことと悪いことがあるのはわかる。謝罪はしたものの、さらに重苦しい空気となつてしまった。

「じゃつ、俺が一点だけプレゼントしてやろうか？」

だが、当の本人はまったく気にしていなかった。

「お、おいおい、出れねえのに何言つてんだ……ふざけてんのか」

「出れないことはないだろ。バレなきや問題ない」

そんなことはない。話は聞いている。基本は安静、リハビリの時以外は極力無理をしない。試合に出るのもNGであり、動きにもよるがどれだけ頑張つても五分程度が限界だという話だ。そんな時間で何ができるといふのか。

「・・・だいたい少し出たところで何になるんです？思い出作りでもする気ですか？」  
「俺は思い出作りのつもりじゃなくて、本気で点を取るつもりなんだがな。まっ、お前からしたら五分しかない、俺にとっては五分もあるってこと。わかったか凡人？」  
それだけ言うと、監督の制止する声を振り切ってフィールドに向かった。

『さあ、いよいよ後半が開始です！城翔中学は前半で疲労した選手を下げてきました！  
対して非宋中学は・・・見覚えのない選手が入りましたね？』

城翔中学は麻宮と斧街、星見と三日月、盤上と華咲、そして千景と裁野を交代し後半戦に臨む。後半は非宋中学からのボールだが、交代した三日月がボールを奪うことに成功する。

そのまま攻め上がるが、そこへ同じく交代した菊原が果敢にスライディングを仕掛けてきた。

「くらえっ!!」

「甘いんヨー！」

・・・が、無事にかわした。三日月はスライディングを上手く避け、一気に攻め上がった。

ていく。

「なんだよ・・・結局ダメじゃん」

「口だけつてこつたろ。そりやそうだ」

ボールを奪われた後も必死に追いかけるが、全盛期のスピードはもうない。身体は思うように動かず、差は開いていく一方。

「ああ、くそ。上手くいかねえな・・・!」

時間がないため早いところ点を決めたいが、思うようにはいかない。改めてもう昔の自分には戻れないのだと嫌でも認識させられた。

「佐原先輩!」

「任せたまえ・・・と言いたいところだが、少々厳しいね」

三日月からのパスを受けとるが、前半の疲れが少しある。加えて相手が多いため、隙を見て斧街へと繋ぐ。

「あいよ、それじゃあ決めてきますか!」

またか・・・と、追加点が取られてしまうことに落胆する。何回もこういう場面に遭遇している。慣れていってもおかしくないはずなのに、もう諦めているはずなのに・・・こうやって点を取られると悲しくなる。

何もできないことに悔しさを感じない、といえは嘘になる。本当は悔しいに決まっ

いる。だが、自分達には力がない。止めようがないのだ。

だからきつぱりと諦めるようにした。初めから勝つ気がなければ、負けても悔しくも悲しくもない。どうせ勝てないのだしそれでいいだろうと勝負を捨てるようになっていた。

「これ以上は・・・行かせません!!」

「ありや!？」

しかし、ここで城翔の流れが止まる。一瞬の隙を見つけ鏡野がボールを奪い取る。

「進道キャプテン!」

「・・・っ、ああ!」

ここに来てようやく掴みとったチャンス。絶対に無駄にはできない。だが、相手の守りを破り、得点にする方法は――

「・・・菊原!!」

一か八か、賭けるしかない。

「へいへい、任せな!」

ボールを受け取った菊原は、本領発揮だといわんばかりに相手の守りを悠々と突破していく。

「(・・・やっぱいってえな、クソツ)」

それでもこのままでは守りを破ることはできないとわかっていた。もう過去の自分はいない、使えるもの、仲間を使わなければ、点を取ることはできない。

「進道！いったん任せる！」

ほんの少し全力疾走しただけでももう足が痛む。やはり、自分の足はもう使い物にならないのだと嫌でも思い知らされる。

「お、おう！」

「合図したらまた俺にパスしろ！一泡吹かせるぞ！」

・・・菊原の素行はいいとはいえなかった、頭もいいわけではない。他のスポーツではセンスがなかった。しかし、サッカーだけは唯一の取り柄。自分には、サッカーしかなかった。

にも関わらず、サッカーもまともできなくなってしまった。唯一褒められるものを失ってしまった。もちろん最初は悲しんだ。唯一のものを失った自分には、何が残っているのだと苦悩したこともあった。

しかし、いくらへこんでいてもあの頃の足はもう帰ってこない。

「おお？なかなかやるやないか！ワイも負けてられんな！」

「そう来ないとね、こつちも楽しくないよ」

だから逆に開き直ることにした。どうせサッカーができないなら、もう足など必要ない。い。

最後に凡人達に夢ぐらい見させてやろう。これが最後の仕事、役に立ってやろうじゃないかと決めた。

「・・・今だ！こつちに渡せ！」

「ああ！決めてくれっ!!」

上手いも下手も関係無い。やりたいと願っても、できない者がいる。できる者はそのありがたみを噛み締めなければならぬ。

「いい加減・・・目を覚ましたらどうだ？」

迅速な動きでボールに風を纏わせ、自身の足に力を集中させる。そして目に見えるほどの荒風を纏ったボールを全力でシュートする。

「リブートアクセル・・・ッ!!」

だが、打つ直前で足に激痛が走る。上手く力が入らず体制が崩れそうになる。

「ナメンじゃ・・・ねえぞおお!!」

その言葉は相手に対してか、それとも自分自身に対してなのか。強引に立て直して足を振り抜き、ボールに強烈な回転をかけた。



「よっしや、勝負だ!!キラーブレードッ!!」

対して東条は腕に形成した鉈を振るい、真正面からぶつかると。シュートの威力は決して高くない、これなら受け止めきれると確信する。

「・・・おお!?!なんだこりや!?!」

ところが何かおかしい。勢いを失うはずのボールが徐々に加速し、重さも増している。止められそうだと思っていたが、ジリジリと追い詰められていく。

「やっべ・・・それなら、こうだ!!」

このままだと止めきれない。そう判断した東条は、少し刃をずらして逸らす作戦に変更する。ギリギリの判断ではあったが、無事に成功。ボールはゴールポストに当たって跳ね返り得点には至らなかった。

「あつぶねえ・・・でも、俺の勝ちだな!!」

完全に止めきることこそできなかったが、それでも点が入らなかったのは事実。無事に止めきった。

非宋中学の面々は折角のチャンスが活かせず落胆する。やはりダメか・・・と肩を落とした。

「ふん、問題ねえよ。計算通りだ．．．!」

だが、菊原はそこれで決める気はなかった。どうせ自分はこのまま朽ちていくだけ。ここで決めるのはそんなやつではない。

これから、今後を担うやつが決めてくれると信じていた。

「うおりやああああ!!」

「なあ!」

跳ね返ったボールに向かって全力で走る相澤。東条が気づいた頃にはもう遅く、ボールを確保してゴールだけを見ていた。

「プリズムエンディミオン!!」

それはまるで大空を渡る架け橋、虹色で煌めくボールがゴールへと突き刺さった。

「はあ．．．はあ．．．やった? やったああああ!! 見た!? 見たよね!! 初得点だよ!!」

ボールがゴール内に入っているのを確認するやいなや、ピョンピョン跳ねて子供のよう

うに喜ぶ。

「マジかよ．．．やったのか?」

「いや嘘やろ．．．? だって俺らは．．．」

「ひさびさに点が入った．．．」

にわかにチーム内がざわつく。それは先程のようなぼやきではなく、希望によるもの。

たかが一点だ。これで今の状況が劇的に変わるというわけではない。だが、それでもこの一点は・・・忘れていたことを思い出させてくれた。

「みんな見ただろ!!俺達でも、やれるんだ!!諦めなければ、希望はある!!」

皆の気持ちを一つにするにな今しかない、キャプテンの進道がチームに向けて必死に訴えかける。

「そうだよ!これでボクらにもできるってわかったでしょ!」

「みんなで戦いましょう・・・心を一つにして!」

「みんな!!まだ遅くない!!前に進もう!!ここから全力で戦うんだ!!!」

チームから諦めの表情が少しずつ消えていく。皆が諦めるなか、諦めなかった者達によってもたらされた一点。そして皆からの言葉。今の彼らの心を変えるにはこれで充分だった。

「まったく・・・一点ぐらいでうるさいやつらだな」

そんなチームメイトを見て呆れた様子の菊原だったが、その顔は笑っている。

「じゃ、後は頼むわ。凡人の力で逆転してみろよ。無理だと思うけど」

もう限界だったのか、足を引きずりながらベンチに戻る。監督から怒られていたが、

当の本人はどこ吹く風といった調子で気にしていない。

「・・・俺達、忘れてたな」

キーパーの昭米が呟いた。努力して技を完成させた時の興奮。ゴールを守り、点を取った時の嬉しさ。仲間と共に協力し、前に進むことの大切さ。いつの間にか大事なことを忘れてしまっていた。

「おー、ここからおもろなりそうやな・・・上等や!!」

「ここからが本番ってことだね」

諦めムードから一転、止まった風が再び吹き返す。城翔中学のメンバーもその様子を見て笑みを浮かべた。これが本来あるべきサッカーだと。

城翔中学からのボールで試合再開、三日月がお得意のアクロバティックな動きで相手を翻弄し抜き去っていく。

「みんな！全力で守れ！そして全力で攻めるぞ！」

「作戦でもなんでもないやん！」

「まあ難しいこと言ってもわかんないし、これぐらいが俺達らしいさー！」

とにかく全力でぶつかる。諦めなければチャンスは来る。そう信じて相手のボールを必死に追いかける。

「……私が止めます！トレースプレス！」

三日月に相対した鏡野が三日月とまったく同じ動きでブロックを仕掛ける。かなりアクロバットな動きをしているにも関わらず、ピツタリと付いてきてまったく離れない。

「うえっ!?なんか付いてくるんヨ!?!」

「よし、今です！」

三日月が動揺し、バランスを崩した一瞬の隙を鏡野は見逃さずボールをかつさらっていった。

「よっしゃ！ナイスプレー！」

「こつち空いてるぞ！」

「ここは任しとけ！押さえといたるわ！」

一人一人が声を出し、考えて動き、ボールを繋いでいく。先程までとはまるで違う動きだ。

「おっと、そつちから来てるで！カバーいけるか？」

「……ここからではキツイです……！」

城翔中学も負けてはいないが、流れが向こうに來ている。勢いに乗った相手を止めるのはなかなか厳しい。

「ストロベリーパーティ!!」

ゴール前たどり着いた相澤はボールを空中蹴りあげる。するとボールが真つ赤ないちごの形に変化し、それをオーバーヘッドで撃ち出した。

「東条! お前だけにええかつこさせたらへんぞ!」

そこに淀屋が割り込んでくる。技を出す余裕運んだなかつたため足で蹴り返そうと試みるが、さすがに技を使わずに守りきることはできなかった。

「やっぱ締めは俺がやんねえとなつ! キラーブレード!!」

それでも威力は下がったこともあり、東条の技でボールを切り裂くことに成功する。流れは向こうにあつたが、無事に凌いだ。

「ごめーん、ダメだった!」

「オツケーオツケー! 切り替えていこうぜ!」

「まだ時間あるぞ! もう一点ぐらいとろうぜ!」

さつきまでの状況ならみんな落胆していただろう。だが、現在の彼らはもうそんなこととは思わない。まだまだこれからだと気合いを入れる。

「なんかイチゴが食べたくなってきちゃった・・・」

「たしかに……良い匂いがするのよね……?」

ちなみにさっきの相澤の技は撃つといちごの香りが辺りに広がり副次効果でお腹が空く。これが何の役に立つかは不明だが。

「……………」

菊原は盛り上がる試合をベンチから見ると、医者からはもう自分の足は役に立たない言われた。別の道を探して生きていけと告げられた。サッカー部に残っていても、何もできずに終わるだけだと。

「……あのやぶ医者め、どこに目え付けてんだ。充分役に立つてるだろうが。」  
だが、自分は間違いなく役に立った。胸を張ってそう言える。

一方的な試合から一転、非宋が意地を見せてからは膠着状態となる。試合時間も残り僅か、それでも手は抜かない、持てる力を出しきるのみだ。

「エンジェル・レイ!!」

華咲がボールを奪いに来た相手にすかさず柔らかな笑みを見せると、後ろから眩い光が発生。相手を目を瞑らざるを得ず、その間に突破して斧街にボールを渡した。

「あなたの姿、借りますね!!ミラーリングエネミー!!」

「おっと、まずいねえ・・・!!」

ここに来てまだ見たことない技。突如現れた巨大な鏡に飛び込んだ鏡野の姿が斧街と寸分違わない姿になる。

これにより相手を動揺させ、ボールを奪い取る・・・というのが本来の使い方である。「ああ!?なんでこんなにもボサボサなんですか!!ちゃんと左右で綺麗になるように揃えな」と!!」

しかし相手が悪かった。斧街は髪の手入れをろくにしない。そのため結構ボサボサになっている。それを彼女が見逃せるはずもなく、相手を動揺させるはずが自分が動揺してしまっている。

「あー・・・悪いけど、失礼するよ」

直すまで付き合っていない。その癖は早いところ直さないと色々不便そうだと思いつつ、それは口には出さず気づかれぬようにこつそりとドリブルしていく。

「じゃっ、気を取り直して・・・マリンショット!!」

「プレッシャーパンチ!!」

咳払いをしてしつかり切り替えてからシュート。昭米は先程のように途中で諦めることなく対抗する。



「うぐぐ．．．みんな、すまん!!」

決して諦めはしなかったが、残念ながら止めるにはいたらなかった。それでも全力でやってダメだったのだ。攻める者はいない。

『ここで試合終了!!結果は城翔中学の勝利ですが、両者負けず劣らずの素晴らしいプレーを見せてくれました!!』

これが最後の得点となり、試合終了。結果でいえば大差がついているが、終盤は両チーム退けを取らない激戦となった。

「負けちまったか!でも、悪くない気分だな!」

「よし俺達の間も頑張れよ!!後輩!!」

「任せてください!ボクたちがこのチームを日本一にします!」

「おお?デカい口叩くなあ。冗談じゃないって信じとるぞ!」

「はい!頑張ります!．．．先輩紐がほどけてますう!!」

落ちたと散々言われたこのチームだが、これから少しずつ変わっていくかもしれない。今度は落ちていくのではなく、上へと登っていく。いつかはまた名門として帰り咲く時が来るかもしれない。

「勝ててよかったのう!この調子で勝ち進むぞ!!」

「当然なんヨ!目指すは優勝!日本一!!」

「そしてワイは女の子にモテモテや！」

「日本一のチーム、そのゴールを守った男！良い肩書きじゃないか！これはモテる」

「前半はいいけど後半組欲望が漏れてるぞ？思うのは勝手だけどあんまり大声で——」

「へえー、お前がキャプテンか」

「えっ、はい？あなたは……」

一方赤城達は雑談しながら帰る準備をしていた。するとそこへ相手チームキャプテンの進道、加えて途中から出場してきた菊原の二人がやってきた。

「……自信なさそうなツラしてんな。本調子じゃないとはいえ俺とこいつらに勝ったんだ。自信持てよ」

「……ええつと？」

何か用事でもあったのかと思ったら、菊原はこれだけ言っただけで帰ってしまった。

「いやー、すまん！あいつ口悪いんだよ」

「は、はあ……そうなんですか？」

よくわからないが、特に気にしないでおくことにした。深く追求しても仕方ないだろう。

「それにしても俺達はここまでかあ……俺達の方も頑張ってくれよ！」

「……っ！はい、頑張りますっ！」

非宋中学には先がない。もちろん特別枠もあるが、点差を考えると厳しいだろう。つまり三年は引退、彼らの物語はここで終わった。

これからは彼らの分を背負って戦わなければならない。勝ったチームは振り返らず、前に進んでいくしかない。赤城達は非栄中学の分も戦うと決め、会場を後にした。

今日の試合が始まってから赤城達が会場を後にするまでずっと、観客席から様子を伺う男と女がいた。

「キャプテン、試合結果ですけど予想通り城翔の勝利ですねー。データも撮れたのでそっち戻ります」

『ご苦労様。こっちも終わったところだよ。それじゃあデータは明日にでも渡してくれるかな？ひとまず今日は休むとしようか』

「了解ですよ、成平キャプテン」

「……やれやれ、めんどくせえ。俺達も試合に出たかったよなあ？こんな熱い中外でデータ収集なんてやってられねえよ。なあ、クズちゃんよ？」

「口動かすから余計に熱いんじゃない？お口にチャックでもしたらいいんじゃないのー？」

「へいへい、手厳しいことで」

「それに、私達が出るまでもないってことでしょー。試合したところでつまんないと思うよ？」

「なるほど、それもそっか」

二人は連絡を終えるとすぐにビデオカメラを止め、しばし会話。その後すぐに帰り支度を手早く済ませ、会場を後にした。

## 情報を制する者は・・・

「いやあ、昨日は盛り上がったな！」

「反響もエグいことなつてたで！やっぱサッカーつて人気なんやなあ」

「ウチのクラスでも話題だったんヨ！」

非宋中学戦の翌日、あの試合は少しだけ話題になつていたらしく、教室に入るとすぐに話しかけられた。まだ長い道のりの第一歩を踏み出しただけなのだが、それでも反響はそこそこあった。実際赤城も普段話したことないクラスメイトから話しかけられた。

こうして応援されるとやはり嬉しい。この調子でみんなの期待に応えたい。とはいえその分プレッシャーもかかるのだが。

「それで次の試合はどことやるのかしら？」

「えーつと、すまん。それはまだ確認してない。たしか輪成中学ともう一校：どこだったかな？」

「おつ、輪成か！今度こそ俺の技で止めてやるぜ！」

「練習試合だと同点だったわね！次で決着をつけてやるわ！」

まだ輪成と決まつてわけではないが、皆はずでに輪成とやる気である。しかし以前の

試合は引き分けだったため、決着を着けるという意味でも輪成中学と戦いたい、という思いは赤城にもある。

「ふっふっふっ、私見参！」

「俺もいるぜー！」

次の試合への意気込みを話しているとマネージャーの入江と太智の元気そうな声が聞こえてくる。

「あつ、二人も来てくれたってどこに……どこから入ってきてんの!？」

最初は普通に挨拶しようとしたが、地面から顔を出す二人を見て思わず叫んだ。よくみると床の一部分だけ色が違っており、そこが隠しドアのなっている。いつの間にこんな仕掛けを作っていたのだろうか？

「いやー、こういう抜け道ってロマンじゃない? だから作ってみたのよねー。あつ、もちろんあなた達も使つていいわよ?」

「おおっ! マジか! 秘密の抜け道つてやつだな! テンションが高まるなあ!!」

「だろー? 俺が掘つて、入江が整備したんだぜー!」

「いや怒られるの俺なんだけど!? そもそもいつ掘つたの!? もぐらかなんかなの!？」

盛り上がっているところ悪いが、校内に穴を空けて道を作るなど常識外れもいいところだ。当然許可などおとつているはずがないし、これでバレても怒られるのは自分であ

る。それにこんな穴をいつ掘ったのか？前まではなかったはずだ。

「ええっと、たしかフットボールフロンティアが開幕する前日からへんから？」

「あの日か！そういうえはいなかった!!あの時からなの!？」

言われてみるとたしかにその日は二人の姿が見えなかった。それでも数日程度のはずだ。本当にどうやってこんな穴を掘ったのか。謎は深まるばかりである。

「まあそう言わないの。次の試合の情報を持ってきてあげたんだから！」

「輪成中学が負けて次の相手が鉢美中学に決まったぜ！」

「いや人の部室に穴を開けといてその程度って・・・輪成中学が負けたのか!？」

「反応と顔がうるさくない？もうちよつと落ち着いたら？天才たる私は常に冷静沈着――」

「自分の態度を省みたことある？まあないんだらうね、その様子だと」

前述のとおり、彼らは練習試合で戦ったチーム。そして、城翔中学初めて試合をした相手でもある。できることならばもう一度戦って白黒はつきり着けたかったが・・・

「ワタシも話は聞いたよ。前半は二点差で勝っていたが後半序盤に一点返される。続けて終盤に二点目、そして延長戦になるかの瀬戸際で追加点。二対三で負けてしまった、とのことらしいよ」

そこへ諸事情で遅れてやってきた三年生組と合流。前半は勝っていたが、後半に巻き

返されてそのまま敗北。前半は勝っていただけに悔しい思いをしただろう。

「・・・惜しかったですね。もう少しで勝てるどころでしたが・・・」

たとえ優位な状況でも流れによつてはひっくり返される。それは昨日の試合でも同じことが言える。油断は禁物、最後の最後まで気を抜いてはいくけない。

「・・・すぐに練習しよう！輪成の分も非栄の分も背負つていくんだ！」

また一つ負けられない理由が増えた。夢破れた二校の思いを胸に、自分達が勝ち上がつていかなければならない。

「まっ、私達にできることはそれしかないしね。今日もやろうか」

「もちろんじゃ！気合いを入れ直さんといかんのう!!」

皆もその気持ちに込めるべく、各自で基本技術の底上げ、今ある技の強化、新しい技や連携技の練習をそれぞれ進めていく。

「黒鉄、どうした？お前さんはDFじゃろ？」

「・・・時には前にも出ることも必要かと」

「なるほどのう。実はワシも同じことを思つてドリブル技の練習をしてたんじゃ。一緒にやるか？」

「・・・ええ、お願いします」

「攻撃に参加することも大事だ。驕らず練習に励め」



「業君は手厳しいなあ。もーちよつと褒めてもええんちゃう？なー、消一君もそう思うやろ？」

「・・・そうです、ね？」

最も練習中の空気は結局いつもの感じだったが。

赤城達が練習を始めていた頃、鉢美中学では一人の男がパソコンの画面を凝視していた。彼が鉢美中学のキャプテン、成平正也だ。

「さーつすがキャプテン、昨日の試合は計画通りってどこか？」

「単純な相手だと作戦が面白いように決まるねー」

さらにそこへやってきたのは同じく鉢美中学サッカー部の選手、MFの箱庭演路とD Fの立伏葛音だ。

「まっ、バカは全力で戦うって方法しか知らないからね。やりやすくして助かるよ」

昨日の試合、それは赤城達も話していた輪成中学との試合のことである。

「輪成中学との試合において気を付けねばならないこと。諦めの悪さとそこからくる爆発力だ」

輪成中学戦前日の会議、成平は輪成中学の警戒すべきポイントを纏め、チームメイトに伝えていた。

「荒央との試合、一見すると何もできずに倒されたようにも見える。だが彼らは終盤に相手の守りを突破していた。どれだけ突き放されても諦めず、逆境である時に真の力を発揮し、勢いに乗って襲いかかってくる」

画面に映し出されたのは輪成と荒央の試合の終盤戦。前半後半と終始圧倒されていったものの、後半の途中で相手の守りを突破した瞬間があった。

これこそが警戒すべき点。相手との実力差がありすぎたためわかりにくいだが、普段の彼らなら突破することすらできずに終わっていただろう。しかしその差を一瞬だけとはいえ埋めてきた。逆境下においては普段よりも力を発揮する。それが輪成中学だ。

「だがね、このチームは逆のパターンもあるんだ」

そう言つて今度は去年のフットボールフロンティアの映像を映す。はつきり言つて先程のチームとは思えないような有り様だった。

「うっわ、目に見えて調子乗つてやがんな。ちよつとムカつくな」

「油断しきつてるね・・・ほらー今のプレーも雑だし」

負けている時の爆発力はなかなかのものだが、勝っていると油断して本来の力すらまったく出てこない。正直これなら負ける気はしない。

「そこで提案する作戦なんだけど、前半あえて点を取らせようじゃないか。多分一点から二点ほどで充分だ。後は油断してる後半に軽く捻る。簡単だろう？」

たしかにそれならば輪成中学最大の長所を潰せる。後半に少しずつ点を取り、同点で止めて最後の最後に小突けばそれで倒れる。それはわかるのだが・・・

「それはリスク高いんじゃない？やり方を間違えたらそのまま負けて赤っ恥もいいところじゃん」

「そうっすよ。素の実力はだいたい互角ですし、普通に勝負しても問題ないんじゃないっすか？」

前半に二点取らせて折り返したとして、本当に油断してくれるのか？それに二点で止められるのだろうか？終盤で決められたらキツくなるのは自分達。一回負けたら終わりのトーナメント制の大会ではあまりいい作戦ではないのではないだろうか？

しかしその反応は想定内とばかりに続けて具体的なデータを示していく。

「そういうと思って、具体的に数値化してみたよ。荒央との試合、逆境化では通常より25%ほど動きの質が高い。他の試合でもそれは同じで、同点になってからでも20%前後高い水準をキープしていた

対して勝っている時は油断しているのか30%も動きが悪くなる。同点に持ち込まれても、先制点を取っていた場合は20%近くは悪い」

相手の素の実力、先制した場合、試合の状況なども細かく分析、徹底したデータ主義。それらを元に一番の最適解を導きだす。これが鉢美中学の特徴の一つだ。

「ハイリスクハイリターン。大きいリスクを背負った時ほどその見返りは大きい。まあ実際にはわざと点を取らせて弱体化させるわけだからリスクとは言えないかもしれないけど」

加えてもし作戦通り逆転勝ちできればエンターテインメントとしても最高だ。観客も満足し、こちらの味方についてくれる可能性もある。意外と応援の力もバカにはできない。早い内に観客を味方しておくのも戦術の一つだ。

「それに・・・」

「それに？」

「こちら作戦にハマって、勝てそうな試合に負けて絶望する。そんな滑稽な相手を見るのは楽しいじゃないか」

どっちかといえばこっちが本心なのかもしれない。

「わかりました。そこまで言うならその作戦でいきましょう。それは俺達もみたいです  
し」

「助かるよ、じゃあ具体的な作戦を立てていくけど——」

結果、無事に作戦は見事にハマリ勝利。少ないながらも観客も華麗な逆転劇を見て満足と言わんばかりの反応で、試合終了後こちらに応援の言葉を投げかけており、万全の体制で二回戦へと進出することができた。

「後で確認したけどあいづら無様だったなあ。前半に二点取れたから勝てるって思ったのか？」

「まっ、相手は前半に二点取ってこっちは無得点だったからね。余裕って感じだったんじゃないの。後半序盤に一点取られた時におかしいって思わなかったのが最大の敗因だね」

「まったくバカなやつらだな。まっ、雑魚の反応は楽しかったけどな！できりや試合会場で直接見たいもんだったけど。・・・で、城翔はどんな感じよ」

対戦相手に散々な言い様。これが鉢美のもう一つの特徴。周りには良いように見せるが、実際は腹黒い連中がほとんどである。

「双輝との試合はすでに見たけど、多分輪成と似たようなチームだろうね。良く言えば諦めが悪くて逆境に強い、悪く言えば現実を見れないバカってところかな？」

「ふーん、じゃあこいつらも同点に持ち込んで最後に決めるのがいいのか？」

「いや、それはもう通用しないだろう。さすがに二度使えるような戦術じゃない。それに城翔は輪成ほど油断してくれないし、なおさら無理だね」

前半にあえて決めさせ、油断しきった後半から決めていく、いつてしまえば奇襲のようなもの。次の試合ではさすがに相手も警戒してくるだろう。多少期間を開ければまたやつてもいいかもしれないが、さすがに二戦連続でできる戦術ではない。

「だから別の作戦がいるんだ。前のデータはあるよね？」

「あいよ、こつちが昨日の試合動画。こつちはそれぞれの選手の資料」

まずは名前や性別、ポジションなどがまとめられている資料に目を通す。とはいえ中学生で当然調べられる情報は限られている。

そのため重要になるのはどちらかといえば試合動画である。それでも選手のことをあらかじめ把握しておく資料も役には立つ。

「ご苦労様。それじゃ、見せてもらおうかな？」

大まかに選手情報を確認した後、城翔対非宋の試合を見始める。画面に先日の試合が映し出される。

「ほう、素人も結構いるって話だったけどそのわりには動きがいいね。これはなかなか興味深い……」

以前の双輝中学との試合の時よりも動きが仕上がっており、この短期間で習得したのか普通に必殺技も使っている。明らかに前よりも成長していた。

「何人かは聞いたことある名前だ。その辺りがコーチングしつつ自分の練習でもしていたのか・・・それにしては成長スピードが早い・・・ぜひ話を聞いてみたいね」

相手に教えるということは、自分の動きの確認にも繋がる。素人と経験者が混ざることで自然と効率的な練習になっているのかもしれない。

とはいえここまで成長しているのは想定外だった。輪成中学も以前より成長していたが、予想の範囲内の成長にしか過ぎない。

だが、こちらはその上を行く成長度合いだ。なぜこの短期間でここまで飛躍的な成長ができたのか？非常に興味はある。

とはいえ聞きに行つたところで教えてはくれないだろう。こつそり探る手もあるが、知つてどうにかする時間はないためこのまま情報を整理していく。

「三日月、裁野、獅子神、星見、華咲、支倉。この名前は過去に聞いたことがある。地元クラブチームに所属していたか、あとは転校してきたとかかな？」

「あー、全員じゃないけど私も聞いたことあるかな？昔戦つたのかもしれないね」「なるほど、じゃあほぼ確定と見ていいかもね。ただ・・・」

そこまで話したところで突然動画を止め、一枚の資料を取り出す。

「麻宮って選手はこの辺りでは聞いたことがない。でも動きはこのチーム内でもトップクラスだ。なんならどこかで聞いたことがある・・・たしか・・・」

続けてパソコンを操作、それと同時に持つてきた資料などを使ってさらに細かく調べていく。結果、一本の動画にたどりついた。

「なるほど、やはりそうか。聞いたことあるはずだよ」

「なんかわかったのか？」

「ああ、転校生ってことは資料で知ってたけど・・・その転校前の中学が去年のフットボールフロンティアで全国大会に出ていたよ。しかもちゃんとサッカー部でレギュラーだ」「っ！マジかよ・・・！」

「まつ、結果は初戦で負けたみたいだけどね。ちなみにちよつと非難されてみたいだよ。なんで負けたんだって」

「あー・・・そーいや見たことあるかもな。そういう感じのやつを見て笑ってた記憶あるわ」

いくら初戦で負けたとはいえ、全国大会に出場できる強豪校で一年生の頃からレギュラーを張っていた。となると実力は間違いないものだろう。

「ふーん、そんな選手が・・・最悪だねー。まさかうちの地区に転校してくるなんて」

自チームのキーパーはある程度のシユートには対応できるが、唯一パワーに弱い。た



だ、あのチームでパワー系のFWは斧街という選手以外にはいないと聞いていた。

実際パワー系のシュートを使うのは斧街だけだ。だからFWについては斧街だけをマークすれば問題と判断していた。

しかし、スピード、テクニクには対応できるとは言っても限度がある。今見た限りだと、自分達のキーパーでは麻宮のシュートスピードにはさすがに対応できないだろう。

となるとマークする選手が二人に増える。一人を徹底マークするのと二人を警戒する、当然ながら難易度は変わってくる。ディフェンスを増やしてもいいが、それだと今度は攻めが薄くなってしまふ。

相手キーパーの東条は決して強いとは言いがたいが、ディフェンスはなかなか堅い。それを考えるとできれば攻めの人数は減らしたくはないところだ。

「こんな偶然がなあ。めんどいことになったな」

「それだよ」

成平が指を立てる。その声に反応し、箱庭と立伏は一度思考を中断する。

「普通に考えたら親の都合で引越した、とかだろう。まあ中学生が独断で転校なんてまずできないし実際そうなんだろうけどね。それで偶然こうなったならたしかに運が悪いか？・・・おかしくないかな？」

「何がだ？ 転校自体は珍しいことでもないだろ」

「そこはたしかにそうだね。でも強豪校で一年レギュラー、普通なら多少家から遠くても強豪のチームに入るはず。それなのに弱小・・・いや、サッカー部すらないところに入るなんておかしい話じゃないか」

言われてみればその通りだ。優秀なサッカー選手、転校するなら多少遠くても強豪・・・少なくともサッカー部がないところには間違つてもいかないはずだ。

あの辺りなら最低でもサッカー部のある輪成などにいけばいいはず。なんなら少し離れてもいいから強豪に入ることを普通なら選ぶだろう。

「ということは・・・少なくとも転校当初はサッカーをやる気がなかった？」

「まっ、そういうことになるよね・・・もう少し調べようか」

さらに資料を漁り、過去のフットボールフロンティアのデータを調べ、一年時と今の麻宮の動きを調べる。

「・・・ビンゴ。見てごらん、動きが随分と違うじゃないか」

そう言つて画面が見えるように少し横に避けた。見てみると、たしかに動きが違う。それはプレースタイルを変えたという意味ではない。以前よりもプレーの質が落ちてくる。

「しばらくサッカーをしていなかったから・・・とかじゃねえの？」

何が原因かはわからないが、転校してからしばらくはサッカーをやっていないかった。仮にそれが本当なら、ブランクがあるということになる。それが原因だろう。

「まあそれもあるだろうね。となると今度はその理由が必要になってくる。・・・ほら、ここだよ」

サッカー部がない中学に行つてしばらく離れていたのだから、ブランクはあつて当然。ではなぜサッカーから離れたのか？

その理由は恐らくこれだろうと、成平は映像を止めて指を差す。差しているところをよくみると、白い何かが巻かれているように見える。

「これは・・・包帯かなー？」

「彼女のゴールパフォーマンスは静かなものだし、試合中の顔は真剣そのもの。まあファッションで着けるようなタイプじゃないだろうね」

それにもしファッションで身に付けているというのならばもつと見えやすく、より目立つ箇所に巻いておくはずだ。

しかしそうではない。むしろ見えにくくなるようにしている。仲間心配をかけたくない、そういうった意思が見えるようにも思えた。

「怪我は確定、そこに加えて責任を感じてやめたつてところかな？もしそうならなんで復歸したのかという疑問と出てくるけど・・・まっ、そんなことはどうでもいい。一番重

要なのは、彼女が怪我持ちってことだ」

これだけ情報が集まれば充分と言わんばかりにパソコンで資料をまとめ始める。

「責任を感じてやめたか、または怪我でもしたのか。あるいは両方か。どっちにせよ非常に良い情報を得たよ」

「怪我持ちってなら・・・やることは一つか。面白いじゃん」

「相手からしたらたまたまったものじゃないだろうけどね。まっ、悪く思わないでほしいよねー。相手の弱点を突くなんて勝つための常套手段だし」

作戦の方向性はだいたい決まった。あとはそれに向けて細かい箇所を訂正していくだけ。

「さあ、いつも通りやろうか。今度は君達も満足の行く仕事内容だと思うよ」

「偵察は飽き飽きしてたからな、次はちゃんとした仕事を頼むぜ?」

「私も試合に出れなくてフラストレーションが溜まってたからねー。ちよつと強めにいこうかな?」

データを集め、弱点を見つけ、弱いところを徹底的に攻める。何も間違ったことはない。戦いとはそういうものだ。

勝敗は戦う前から決する。勝つビジョンを組み立て、確実な手段を持って相手を倒す。手段を問わない者達が、城翔中学に立ち塞がる。

## V S 鉢美中学 前編

「どうも、初めまして。僕らが君達の相手、鉢美中学校だ。よろしく頼むよ?」

「えっ? あつ、よ、よろしくお願いします」

今回の試合会場となる鉢美中学のフィールドに来て早々に待つていた鉢美中学の選手達が城翔中学の選手達に対して一礼。慌てて赤城達も礼を返す。

それが終わると、続けて試合の公平さを保つてくれる審判に一礼、最後に試合を見守る観客に向けて頭を下げる。

今回の試合は鉢美中学で行われているため観客も鉢美中学の選手が多いのだが、それらの対応も丁寧だった。実際赤城達にしつかりと挨拶したり、サッカー場まで案内しようとしてくれた。

「お、おお・・・すっごい丁寧だな・・・」

「・・・ここまで丁寧な人はなかなかないな」

マナーが徹底されているのだろうか。鉢美中学はすごく評判がいい中学校だと聞いてはいたが・・・想像以上に丁寧だった。評判が良いのも頷ける。

「驚いたかい? これがうちのチームのしきたりだね、毎回やるようにしているんだ。相

手から呆れられることもあるんだがね」

驚いているところへ相手チームのキャプテン、成平がやってくる。たしかに挨拶は大  
事なことだが、ここまで徹底されているのは珍しい。

「でも試合じゃ一切の手加減しないから覚悟しておいてくれよ？」

「！もちろんです！俺達も手加減しませんよ！」

「ああ、いい試合にしようじゃないか」

成平が左手を差し出し、赤城もそれに応じてキャプテン同士で握手する。なぜか相手  
チームの選手がクスクス笑っていたが、何かあったのだろうか。

「あいつら……」

「ん？裁野先輩、どうかしましたか？」

「……いや、気にするな。考えすぎだろう」

裁野が何かに気づいたような素振りを見せたが、何も無いと言って試合前の準備を始  
める。ちよつと気になるが、本人が気にするなというので気にしないでおくことにし  
た。

牽制の握手を終え、成平はベンチに戻る。するとチームメイトの一人に話しかけられ

る。

「・・・今日も出してくんないの？暇なんだけど」

「キミのプレイスタイルはうちの評判を下げかねないからね。あんまり出したくはないんだよ」

「あつそ、どうぞご自由に」

「そうさせてもらうよ。それじゃあ作戦の確認だけど・・・」

城翔中学フォーメーション

——三日月——麻宮

——佐原——獅子神

——赤城

——盤上

——淀屋——千景

——黒鉄——支倉

——東条

鉢美中学フオーメーション

—— 須藤 —— 小見

—— 羽賀 —— 出増

—— 成平 —— 箱庭

—— 浦木 —— 銚理

—— 立伏 —— 信馬

—— 関 ——

『前回の試合では終盤に激熱な試合を展開させた城翔中学！そしてこちらは華麗な逆転劇を見せてくれた鉢美中学！注目の二校がいよいよぶつかります!!』

実況の人が場を盛り上げ試合スタート。今回もボールは城翔中学から。まずは後ろにボールを送り、MF達が中心となって相手の守りを突破し、攻め上がっていく。

「対戦、お願いますね！」

「ふふん！負けないわよ！」

獅子神は丁寧な挨拶に返事しつつ、相手ディフェンスを持ち前のスピードで抜き去る。さらに続く相手の守りも駆け抜けていく。

「帝瑠！」



「はいーうちに任せるんヨ!!」

そして獅子神の鋭いパスを三日月が受け取り、そのままシュートを放つ。

「バウンドフレイム!!」

「なるほど。良いシュートですが僕には効きません!セキュリティプロテクト!!」

不規則に動くシュートを見切って止めるのは難しい。だが、ゴール全体を守ればいくらか動き回ろうが意味がない。バウンドフレイムは威力が高い技とはいえないため威力の心配もない。

関の後ろに半透明の長い盾が現れる。それが数を増やして横に広がり、壁となってゴール全体を守る。先制点とはいかなかった。

「ワタシたちへの対策は済んでいるということかな。なら、これはどうだろうか?」

それでもタダではやられない。弾かれたボールを佐原が相手より先に確保。休む暇を与えさせない。

「マツハウインド!!」

先程の見た感じだとゴール全体に防護壁が張られるまでは少し時間がかかる。ギリギリではあるが、これなら決めることができるだろう。

「関!来てるぞ!」

「問題ありません!セキュリティポインター!!」

今度は相手のボールに素早く照準を合わせ、右腕に発生した電気を弾丸のように飛ばす。先程より範囲は大きく劣るが、代わりに発生が早い技で対応してきた。やはり対策は万全のようだ。

「さあーと、今度はこっちの番だよ」

今度は相手がボールをしつかりと確保。立伏はそのまま大きく蹴り出してMFの箱庭がボールを確保する。

「おっとー！こは通さないわー！」

「僕も負けませ．．．あ、ああっ!?!」

「えっ、何よ!?!」

持ち味のスピードですぐに攻撃から防御へと荷担する獅子神。しかし箱庭の声で動きを止める。かと思うと、箱庭は何もない方に向かって指を差す。

「あそこにUFO!?!」

非常にバカらしいと思うだろう。演技力は大したものだが、ものがものだけに小学生だって騙されない。それは箱庭もわかっている。

「ええっ!?!嘘!?!どこー!?!どこにいるの!?!」

だが、ちゃんと計算済みである。獅子神がそういうことに弱いというのはデータに出ている。まさかここまであつさり騙せるとは思わなかったが。

「ありやカモだな。将来詐欺られんだろ」

小声で聞こえないように呟くと、今度はキャプテンの成平へとパスを繋ぐ。

「ワイらは獅子神みたいには騙されへんぞ!」

「・・・止めるっ!」

「まあまあそう気負わず、リラックスした方がいいよ?」

淀屋と黒鉄の二人がここは通さないと言わんばかりに迫るが、まだ動きが大雑把な淀屋には又抜き、動きが遅い黒鉄には素早いフェイントで対応。成す術もなく突破されてしまう。

「さあ須藤君、決めてくれよ?」

「はいはい、ちゃんとお仕事はしますよっと。パーフェクトコース!!」

相手のキーパー技、キラーブレードはエネルギーで形成した鉈を縦に振る。つまり横に揺さぶれば簡単に決められる。狙った場所に打てるパーフェクトコースであれば左右に振ることで簡単に決められるということだ。

「任せとけ!!キラーブレード!!」

だが、数度の試合と練習を繰り返してきた東条はちゃんと成長していた。手のひらが地面と平行になるようにし、チョップをするかのようにしてここを凌ぐ。

「へー、そういうのもあるのか」

「なかなか面白い使い方じゃないか。勉強になるね」

本来とは違う技の使い方を見て鉢美中学の面々は素直に褒める。こういう普通とは違う使い方は勉強になるため良い知識となる。

「そうだろう？ まっ、この俺にかかれれば容易いもんだけどな！」

「めっちゃ苦勞しとったのによあんなこと言えたなあいつ」

淀屋の言うとおり、本当はここまでくるのにかなり苦勞していた。とはいえその苦勞はしつかり実を結び、徒勞には終わらず変わった体勢からでも素早く出せるようになった。

最も新技はまだ完成していないのだが、それは残念なことではない。これからも成長が見込めるということ。今後が楽しみだということになる。

『両チームがシュートを打ちましたがいまだに得点は入らず！ 実力は互角といったところか？ 両チーム一步も引きません!!』

序盤から白熱した展開に試合会場は盛り上がる。強豪校が圧倒的な強さを見せる試合もそれはそれで魅力的だが、やはりスポーツは勝つか負けるかの緊迫した試合が盛り上がる。

「麻宮、任せてもいいかな？」

「はい、わかりました！」

中盤でのボールの奪い合い。城翔中学がなんとかボールを手に入れたものの、佐原の周りには相手選手が目を光らせている。無理はせず、まだ守りが薄い麻宮にパスを出す。

だが、それが相手の作戦。鉢美中学はこのタイミングをずっと待っていた。

「……………」

「……………」

成平が周りには気づかれぬように軽くアイコンタクトを取る。箱庭は意図を察知して頷き、少しずつ距離を詰める。

「……今かな？それじゃ頼んだよ」

「(はいはい、了解ですよ……つと！)」

ターゲットを確認。他の選手も配置に付き、タイミングを見計らって成平の合図で動く。

「よしー！いただき!!」

二回目は確実に怪しまれる。一度しかできないため失敗は許されない。素早く、なおかつ容赦のないスライディングを仕掛ける。

「……させない!」

麻宮は遅れながらも気付き、ボールは取らせまいと避けようとする。だが、ボール目

掛けてきたのはずのスライディングが足に当たる。

「ぐっ!?!」

体勢を崩し、地面に叩きつけられその場に倒れる。様子を見ていた審判は笛を鳴らし、試合は一時中断。ファウルの判定だ。

その様子を見て城翔中学の選手、それに加えて鉢美中学の選手もすぐさま麻宮の元に駆け寄る。

「申し訳ない、うちの選手が・・・ほら、謝罪するんだ」

「すみません・・・つい、ヒートアップしてしまつて・・・」

箱庭は丁寧な謝罪し、立伏は麻宮が立てるように手を貸す。

「ん・・・大丈夫だ。一人で立てる」

「そう、無理しないでね?怪我でもしたら大変だから」

「ええ、わかつています」

「それならいいよ。それなら・・・ね」

立てないというほどのダメージではない。軽く動かしてみるが、何か違和感があるということもない。とりあえずは問題なさそうだ。

「すまないね。少し熱が入ったようなんだ。もちろんこういう行為が許されないのはわかっているが・・・いや、何を言つても言い訳にしかないね。チームメイトを傷つ

けて本当に申し訳ない」

「いえいえ！熱が入るとこういうことはありますし……あの、あんまり気にしすぎないようにしてくださいね？」

成平は麻宮に頭を下げ、続けてキャプテンの赤城にも謝罪。とはいえ試合をしていればこういうこともある。

むしろ相手のチームはすぐに駆け寄ってくれて、丁寧なまで謝罪してくれた上、手も貸してくれた。麻宮も何ともなさそうであり、責める理由などどこにもない。

そして赤城への謝罪を終えると成平は審判の人に対しても深く頭を下げる。

「試合の進行を止めてしまい申し訳ありません。今後はこのようなことが起こらないようにしっかりと注意します」

「いやいや、ヒートアップするとかこういうこともある。故意じゃないしあんまり気に止めることはないよ？」

まったく気にしないのは問題だが、試合が盛り上がると周りが見えなくなつて多少プレーが荒くなることはある。決して悪意はない。それにちゃんと謝るべき相手には謝つてる。わざわざ審判にまで謝罪することはない。

「いえ、熱が入ろうが試合を止めたという事実は変わりません。ご迷惑をおかけしました」

「そ、そうかい・・・あんまり気にしないでね？」

最後にもう一度深く頭を下げ、定位置へ帰っていく。審判はその様子を見届け、心の中で感心していた。

意外と自分がファウルをしたことに気づけないこともある。特に試合が盛り上がっていると尚更だ。それにより判定が不服だと恨み節を言われるケースも少ないながらある。それは子供だけでなく、大人でもあることだ。

しかし彼らは子供にも関わらず、自分の非を認めてなおかつ丁寧な謝罪までしてきた。あまり見ることもない紳士的で丁寧な対応だ。

「・・・で、どうだい？」

「しつかり当ててきた。問題ねえはず」

「それは何より、ご苦勞様」

「まあこっちはいいけどよ、そっちの方はどうなんだ？」

「問題ないよ。ちゃんとくどくならない程度にやってきたさ」

まず二つ手を打った。これで試合の流れがこちらに傾くだろうと成平と箱庭はほくそ笑んだ。



「ダツシユアクセル!!」

「おっと、素早いですね」

中断していた試合が再開。ゴール近くだったこともあり、一人突破した後すぐにパスを繋いでゴール近くまで持ち込むことに成功する。

「麻宮ー!がんばれー!!」

もうそろそろ一点が欲しい。このままギリギリの状態で試合が続くのは心臓に悪い。早いところ決めて安心したい赤城は麻宮を応援する。

「ああ、次は決める!」

「あらー、すつごく早いねー」

ボールを受け取り、持ち前のスピードを活かして残りの相手をかわしていく。先程のようにやられず、キーパーと一対一の勝負となる。

「いくぞ、フリーズ・・・シヨット・・・ッ!」

シュートを打とうとしたその時、足が痛む。なぜこのタイミングなのか? 城翔でしばらくプレーしていたが、怪我したところが痛むということはなかった。今日も今まではなんともなかった。それなのに――

「まさか・・・？」

——先程の相手によるスライディングが原因だろうか？シュートを打つその瞬間、足が痛み上手く力が乗らない。そのせいで威力、スピード共に格段に落ちている。

相手キーパーの関は冷静に麻宮のシュートを分析する。動画で見た時よりも明らかにスピードが落ちたシュート、相手に気づかれないように笑った。

・・・これなら、簡単に止められる。

「セキユリティポインター!!」

先程同様狙いを定め、腕に溜めた電気のを弾丸にして飛ばす。ボールは軽々と弾かれた。

「今のは結構危なかったですね。でも、なんとか止められましたよ」

「よく止めた！あれが決まったらヤバかったかもな！」

「いいよー、ナイスプレー」

声を掛け合い、まるで名勝負かのように演出する。しかし実際はそこまでの力はいれず、余裕で止めていた。それは本人にしかわからないことであり、事情を知らない観客からは歓声が上がった。

「……ドンマイドンマイ！切り替えていこうな！」

「……そうだな、切り替えよう」

「失敗しても気にするな！ワシらが守るからおもいきって攻めてこい!!」

「まだまだ時間はあるんヨ！頑張るんヨー!!」

赤城は気にするなと声をかけていく。本当はここで点取りたかったというのが本心だが、まだ点は取られていないし時間も充分にある。チームと自分を落ち着かせるために声を出していく。

対して麻宮は何かおかしいことに気づいた。だが、チームメイトに心配はかけまいと何事もないように振る舞っている。

「……いやー、そうなるだろうね。きつとそうなると思っていたよ」

責任感が強くストイックな選手、この事態になった際にどう行動するか？恐らくチームに迷惑になると判断して我慢することは予想できた。そうなればこちらが何もしなくてもいい。勝手に足を引つ張ってくれる。

……完璧だ。あの様子なら驚異になることはない。むしろこちらにとつて優位に動く。

「それじゃあそろそろ……かな？」

後はゆっくりと調理していけばいい。プラン通りに事が運ぶとやはり気持ちがいい

ものだ。

「あつ、あそこに隕石が!!」

「嘘お!?!い、今すぐ逃げなきゃ!!」

「さすがにそろそろ気づこうな!?!」

箱庭がまた獅子神を騙して突破し、再び成平がボールを確保。先程のように自身の知識を活かして相手を突破すると、今回は自らシユートを打つ。

「さあ、キミは止められるかい?」

「はっはっはっ!止められないって思ってるやつはここに立たないんじゃないか?」

それもそうだね、と成平は嘲笑うような笑みを一瞬だけ浮かべる。それとほぼ同時に足元を中心に円形の不思議な模様が広がっていく。

「ディレイドステイング!」

浮き上がったボールを突き刺すかのようにシユート。東条に向かってまっすぐ飛んでいった。

「勝負だ!!キラブブレード!!」

このシユートに威力はない。キラブブレードも強い技ではないが、それでもまともにぶつかり合えば簡単に止められるだろう。

だが、この技において期待するのは威力ではない。もうすでに東条は術中にハマって

いた。

「・・・あらっ?」

東条は完璧なタイミングで技を発動したはずだった。ちゃんとシユートに対して完璧に力が加わるところで技を出し始めた。にも関わらず、明らかにタイミングがズレている。

「お、おとおおお!?」

ギリギリ当たりはしたが、刃の根元の方に当たっている。微妙な位置では上手く力が伝わらない。止めきれず、そのまま決められてしまった。

「あれー? おかしいな・・・?」

「気にせんでええよ! 一点ぐらいみんなが返ってきてくれるで! うちらは守ることに集中しよ!」

「了解! よーし、次は止めてやる!」

すぐに切り替える東条。さすがのメンタルである。そして城翔中学の会話を聞いていた成平は自陣に戻りながら人を小バカするような笑みを浮かべていた。

「次は止める・・・か。どうするのか見物だね」

デイレイドステイング。この技を使う時、地面に模様が浮かぶ。この模様内ではボールのスピードを遅くすることができる。そして円の外に出ると本来のスピードに戻る。

つまり本来の想定よりもボールが早く来る。

そうすることで少しタイミングをずらすことができる。些細なズレではあるが、必殺技で一秒二秒のズレというのはものによつて致命的になりえる。上手く使えば相手の技を空振りさせることができる。

そして・・・ここからがこの技の真骨頂だ。

取られたのなら取り返せばいいとはいふものの、簡単な話ではない。相手からすれば最悪この一点さえ守りきれれば勝てるのだ。守りに集中されたら取り返すのはより困難となる。

「ヒートウイング!!」

赤城はいつもの技で突破。飛んで相手の上空を突破、空中にいる相手には何もできないし、後ろから追いかけてくる選手には火柱と一見隙がない。

しかし、飛翔の際のスピードは決して速くなく、長時間飛べるといふわけではない。また使用時と着地時に隙があるというのは双輝戦を見ていればわかること、それさえわかっただけならば何も怖くはない。

「トロいねー、ウエルカムバック」

「あつーしまつー——」

立伏は足を大きく振り、空気を巻き込んでボールが自身の方に来るよう強烈なスピンをかける。ボールはスピしながら立伏の足元へやってきた。

「箱庭くーん、よろしくー」

「はい！須藤さん！シュートを！」

「オツケー、それじゃあシュート・・・と見せかけてパス！」

そこから小刻みなパスで相手をかわし、一気にゴール前まで繋がる。再び成平にボールが渡ってしまった。

「さあて、もう一点決めさせてもらおうかな？」

「いやー！今度こそ止める!!」

「威勢がいいね、それじゃあ遠慮なく・・・ディレイドスティング!!」

成平は先程と同じぐらいの距離から同じ技を繰り出す。しかしさつきとの違いが一つある。今度は模様の範囲がかなり縮小されていた。

「（えーっと、さつきので遅かったからなあ。よし、ちよつと早くするか!）」

先程は対応が遅くなったため、気持ち早くした方がいいと考えた東条はタイミングを遅くして技を発動。そう、ここで早くすればちゃんと正面から・・・

「あ、あらー!?!」

ところが東条の考えとは裏腹に今度は技を出すタイミングが早すぎる。刃先で受けてしまい、またしても力が上手く伝わらない。

「くそー!!どうなってんだよー!!」

それでもなんとかして対抗するが、青い鈍にヒビが入る。力を入れて踏ん張るも、限界が来て粉々に砕け散る。

「やつべ——」

「思い通りにはさせたらへんぞ!!」

しかし、あわやゴールというところで淀屋が強引に割り込みヘディング、ギリギリでボールを逸らした。

「あ、あぶねー・・・サンキュ」

「かまへんかまへん!助け合いの精神ってやつや!」

チーム同士の協力によりなんとか得点されずにすんだ。とはいえ相手のシユートの謎が解けないとやられるばかりだ。

「しつかし今度は早かったのか?でもさつきは遅かったし・・・んん?」

「・・・いい感じに迷ってるね。その調子で思考を崩してくれよ?」

模様の範囲はある程度変えられる。それにより相手の遅い、早い判断を狂わせることが可能。これにより相手を混乱させ、一気に崩す。力に頼らずとも頭を使えば簡単に



勝利できる。実に彼らしい技だ。

「……このままだと……負ける……」

麻宮は今の流れが厳しいものだということを理解していた。このまま翻弄され続けると完全に相手のペースに持ち込まれる。一度そうなると流れをこちらのものにするのは非常に難しい。

それを阻止するにはここで点を取るしかない。だが、今の自分にその力はない。今日はいつもとよりチームに迷惑をかけている。だからこそなんとかしたいのだが、手を伸ばしても勝利には届かない。

「策は……ある」

ただし、リスクを払うことを覚悟すれば話は別だ。非常に大きなリスク、成功しようが失敗しようがただでは済まないだろう。

「やるしかない……っ!!」

だが、その覚悟は……とつくにできている。

「皆！私にボールを渡してくれ!!」

クールな麻宮らしくない必死の訴えに周りは驚いたが、それも数秒のこと。すぐに了

承し、その声に応える。

「わかった！みんな！麻宮にボールを回してくれ！」

「ふふん！そういうことなら任せない!!」

「・・・失敗しても俺達がいる。全力でぶつかってこい!!」

頼れる仲間達の声を受け、麻宮はさらにギアを上げる。その表情からは覚悟が伝わってくる。

「疾風ダツシュ!!」

「っ！速いな・・・！」

「ほーう、おかしいね・・・？」

怪我をさせたはずなのに動きが速い。まさかもう回復したのだろうか？たしかに今後のサッカー人生には影響しない程度には調整させたものの、まさかこんなに早く回復するだろうか・・・？

そんな相手の思考とは裏腹に、痛みを耐えながら走り続ける。チームのため、そして自分自身のために相手を抜き去っていく。

「決める・・・！」

指笛がスタジアムに鳴り響く。すると皇帝の名を冠するペンギンが地面から姿を現す。通常とは違う赤い体躯のペンギンは地面から飛び出すと、彼女の周囲を飛び回り続

け、鋭い嘴を足に突き刺した。

「あ、あの技は……!?!」

「ぐっ、うう……皇帝ペンギン……一号ッ!!」

激痛に耐えて放たれたシユート。赤いペンギンがミサイルのように打ち出され、ボールと共にゴールへと突き進む。

「な、なんだこれは……セキユリティポインター!!」

謎の技に動揺しつつも切り替えて対応。だが、先程までと威力がまるで違う。電気を纏った弾丸は他愛もなく弾かれ、シユートが決まった。

「……驚いたね。まだ隠し玉があったのか」

まさかあんな技を持っているとは思わなかった。以前の試合でもそんな素振りはないかったし、過去の動画にもあんな技は使っていなかった。しかしあの威力。代償なしで打てるとは思えないが……

「やった!同点だ!」

そんな成平をよそに、赤城喜んでいた。試合でも練習でもあんな技は見たことないが、練習して密かに習得していたのだろうか? 何はともあれ前半のうちに同点に持っていったのは大きい。このまま勢いに乗って逆転し、この試合に勝利する。

「うう……ぐつ……」

「……えっ——」

そんな赤城の短絡的な思考は止まる。声のした方を見ると、麻宮が足を抑えており、苦しそうに声をあげている。なぜこうなったのかわからず、その場で呆然と立ち尽くす。

「大丈夫?! しつかりするんヨ!!」

「大丈夫……だ。もう一点、すぐに……!」

そう言つて立ち上がろうとするが、足に力が入っていないのか、すぐに膝をつき、苦悶の表情を浮かべている。誰がどう見ても、大丈夫ではないのは明白だった。

「いや無茶やろ?! せない無理したらアカン!」

「支倉の言うとおりだよ。誰が見ても大丈夫ではないのは明らか……さっきのシユートが原因かな? とにかく今は休息した方が良いと思うよ」

「しかし……私は……!!」

休めと言われてもなかなか引き下がらず、無理やり立ち上がろうとする麻宮。そこへ今までの様子をベンチから見ていた斧街が話しかけにやってくる。

「……キツイことを言うようで悪いけど、そんな状態じゃ出たところで足を引つ張るだ

「けなんじゃないかい？」

「つ、それは……」

厳しい言い方ではあるが、斧街の言うとおりである。こんな状態で試合に出続けても、相手からすれば格好のエサにしかならない。

仮にこのまま出場し続けて勝てたとしても、今度は麻宮の身体が持たない可能性がある。今後のことも考えると無理をさせるわけにはいかない。

「なあに、心配することはないよ。あんたはもう充分にやった、というより頑張りすぎ。後は仲間を信じてゆつくりと休憩しな」

「……はい」

渋々ではあるが、ベンチに下がることを了承する。そしてベンチに向かう際に仲間之間へいかける。

「みんな……私は、役に立てただろうか……？」

本当にチームから必要とされているのか？ そんな不安から出てしまった言葉。普段なら絶対に言わないであろうことを口にしてしまう。

「何を心配しとんねん！ 充分やつとる、だから今は休むんや！」

「私達に任せときなさい！ すぐに勝ち越して来るわ！」

「……この一点、大事にしていこう」

「そうやな、涼華ちゃんが取ってきてくれたこの一点。無駄にはできんで!!」

そんな麻宮を励ますべく、仲間が奮起。仕事を果たした彼女のためにも、この試合に絶対勝つと気合いを入れ直した。

「・・・・・・・・」

「キャプテン、キャプテン?」

決意を新たにした城翔中学だったが、麻宮がベンチに下がるためまずは誰を出すのかを決めなければならない。太智が赤城に誰と交代するのかを問いかける。

「・・・・・・・・」

「?おーい、赤城ー、聞いてるのかよー?」

「えっ? ああ・・・・・・・・どうかしたか・・・・・・・・?」

しかし、さつきから赤城はまったくの上の空。このように話しかけてもすぐには返してくれないような状態だった。

「いや、麻宮がベンチに行くから誰か出さないといけないぜ? で、誰を出すんだ?」

「うん・・・・・・・・そう、だな。じゃあ星見を入れようか。FWだし・・・・・・・・」

やはり変だ。試合前まではいつも通りだったし、試合中も特に変わりはないのに突然こうなってしまった。

「なんかおかしいわねー？もしかしてキャプテンも怪我してんじゃないの？悪いけど天才の私でも人体の怪我を治すのは専門外だからね？」

「・・・いや、なんでもない・・・なんでもないんだ・・・」

「ならいいけど、今は試合に集中だけ？あの麻宮って子のためにも頑張るんだろ？考え事はあとにしようぜ！」

「・・・そうだよな、ごめん」

どうにも切り替えられていないように見える。だが相手を待たせるわけにもいかない。指示通り麻宮をベンチに下げ、代わりに星見が入り試合再開。

前半も残り僅かのため両チームが得点に餓えている。勝ったまま後半を迎えるのと、同点のまま後半を迎えるのでは意味が大きく変わってくる。なんとしても一点が欲しい。

「さあ、もう一点取るよ！」

「協力してこうぜー！」

しかし相手の守りが固い。こちらの動きが読まれているのか、すぐにボールを取られてしまう。なおかつ攻撃では細かいパス回しや丁寧なドリブルでボールをキープしな

がら突破してくる。

相手によつてどう行動するかを見極め、確実に突破してきている。せつかく同点になったというのに相手のペースを崩せずにはいた。

「へへっ、俺達がもう一点取つて前半終了だ！」

「ぬおおおお!! パワーチャージ!!」

「おおつと!？」

危うくパスを出されるところだったが、後ろに下がっていた盤上が強引に止め、窮地を脱した。やはり力によるゴリ押しはいつの時代も強い。

「なら奪えばいいだけっしょ!!」

すぐさま控えていた羽賀がボールを奪おうと仕掛けてくるが、それでも盤上は落ち着いている。

「ガハハ!! そうはいかんぞお!! ヒートタックルじゃあ!!」

「おつと、新技かよ！」

炎を纏いながらドリブルし、相手を寄せ付けない。たしか前の試合では使っていない。単に使う機会がなかったか、この試合までに会得したということだろう。

「・・・盤上先輩！」

「おう! 任せたぞお！」



「盤上とは逆に前に上がっていた黒鉄がボールを確保。現状相手キーパーを破れる手段は乏しいが、黒鉄には作戦がある。上手くいくかは五分五分だが、やってみる価値は充分ある。」

「オイオイ、そんなに攻め込んでいいのカー？守りはどうお考えで？」

「たしかあなたは足は速くないですよ？あんまり前に出すぎると戻れないですよ？」

だが、まずここを突破しないといけない。相手は二人がかり、そして彼らの言うとおり黒鉄は守備の要でありつつ、足は速くなくドリブルが上手いわけでもない。

ここで取られてしまうと相手に大きなチャンスを与えることになる。

「・・・問題ない、ヒートタックル!!」

「なっっっいつもか!?!」

だが無策で突っ込んだわけではない。盤上と練習し、同じ技を会得していた黒鉄。違う人物による二連ヒートタックルは予想できなかつたようで、二人まとめて抜くことに成功した。

「・・・さあ、誰にパスするのかな？」

それでもまだ鉢美中学の選手は焦ることなく観察している。現在黒鉄はそのまま上がってきており、黒鉄自身がシュートする可能性がある。たしかに彼はパワー系のためこちらのキーパーの弱点ではある。それに気づいて賭けてきた可能性もゼロではない。

だがしかし、恐れるに足らずだ。黒鉄はシュート技を持っていない。いくら不意を突いてかつ弱点のパワー型とはいえ、普通のシュートなら技を使えば楽に止められる。

もちろんヒートタックルのように新たに習得したという可能性もないことはないが、必殺技というのはそう易々と会得できるものではない。この短期間で新しい技を二つも修得した、という可能性は少ないだろう。

「そのまま上がってやがるな・・・何を考えてやがる？」

ゴール付近にいる相手のFWは二人。片方は星見、こちらのシュートはまだ映像で見えたことはないが、恐らく止められるだろう。とはいえ念のためにマークはしている。

つまり現在FWでフリーなのは三日月だけが、三日月のシュートは先程完璧に止めている。このままシュートを打たれても特に問題はない。

「さあ、どう来る・・・？」

選択肢は現状三択、このまま意表を突いて黒鉄がシュートする。可能性に賭けて無理やりでも星見に繋ぐ。そして手堅く三日月がもう一度打つ。

正直どれにせよ問題はないが・・・パスを出さずにそのまま突破してくる。

「・・・三日月！」

と、思わせて寸前で三日月にパス、やはりマークしている方に無理してまでボールは

回さない。そのままバウンドフレイムの体勢に移行している。

キーパーはちゃんとボールを見据えている。問題は無い、後はここで止めて前半終了。理想は勝っていることだが、同点なら及第点だろう。

「よし、今なんヨ!!」

「・・・ああ!」

しかし、何か様子がおかしい。パスをした黒鉄がそのままゴール前まで上がってきた  
「ザ・ウォール!!!」

かと思えば、何を血迷ったのかこの場だザ・ウォールを発動。地面が盛り上がり、ちょうどその位置にいた味方の三日月は真上に吹き飛んだ。

「クククツ、なんだあ? 自棄でもおこしたのかよ」

相手の滅茶苦茶な行動に箱庭は思わず笑いが出る。味方に向かって技を打つとは相当メンタルがやられたのだろう。

「・・・これって」

だが、星見をマークし、近くで見えていた立伏はいち早くそれに気づいた。普通なら体勢を崩してしまうような状況だが、三日月は持ち前の身体能力で上手くバランスを取り、空中でも良い体勢をキープしている。

「・・・まさか、そういうことか!!」

そして成平もその意図に気づいた。ザ・ウォールを使ったのは三日月を上空に飛ばすため。三日月の体感ならあの状態でもバランスを崩すことはない。

ではなぜ空中に飛ばす必要があったのか？

飛ばされる前、三日月は地上でバウンドフレイムの体勢に移行していた。ボールは摩擦で炎を纏っており、少しずつ浮き上がっている。しかし三日月自身は空中にいる。これでは三日月は打てない。

だが、地上にはもう一人いる。

バウンドフレイムは本来上空にいる必要はない。地上で打つ技だ。しかし、ボールは高所から落とした方がより高く跳ねる。準備されて燃えているボール、上空にいる三日月、地上にいるもう一人の選手。

実に簡単なことだが……前とは違う組み合わせだったため、それに気づけなかった。「ハイバウンドフレイム!!!」

双輝中学戦で唯一点を奪った高所からのバウンドフレイムが炸裂する。

「自棄じゃなかったのかよ……セーフタイププロテクト!!!」

キーパーは必死に対抗したものの、威力、暴れ具合共に上昇したシュートを止めることはできない。強固な壁は破られ、ボールがゴールネットに突き刺さる。

「やったああああ!!!」

「……よし、決まったか」

一点を追加しここで前半戦が終了。点差は二対一となんとかリードしている。しかし東条は相手の技に翻弄されており、DFも研究されているためか突破されることが多い。油断すればすぐにでもひっくり返されるだろう。

「さて、後半はどうする?」

油断ができない戦況。誰を交代し、誰を残すかは試合に大きく関わってくる。

「得点した黒鉄と三日月は残した方がいいんじゃないかねえ? 相手にプレッシャーかけられるだろうし」

「うーん、スピードと範囲技の対策されとるし……雨海ちゃんが適任やない?」

「では下がりますよ。私は相性良くなさそうですし」

「ああ、それじゃあ代わりにあたいが出ようか。まあ無理しない程度に頑張るよ」

星見の代わりに斧街が入り、盤上と華咲、千景と裁野が交代。後半戦はこのメンバーで戦うことになった。

「そーいやキャプテン、大丈夫かい?」

「は、はい……大丈夫です……」

「あんまり気負ってちゃ最後までもたないよ。もつと楽にいきな」

気負ってはいけません、と赤城は返すがやはり余裕はなさそうだった。

## V S 鉢美中学 後編

後半戦開始前、鉢美中学のベンチはあまり良い空気ではなかった。それもそのはず、作戦は上手くいったのにも関わらず負けているのだから。

「あーあ、やられてんじゃねえか」

「まさかこんなことしてくるなんてねー」

意表を突くのはこちらの得意分野なのだが、まさか相手にしてやられるとは思わなかった。

「ああ、ちよつとまずいね・・・」

「どーすんのこれ？厄介なことになってんじゃん」

自チーム唯一の弱点であるパワー系のシユートを持つ斧街に一点取られ、自分達は相手を翻弄して二点。二対一で折り返すというのが理想的な想定。しかし斧街は出てきてすらいけないというのに二点も取られている。

おまけにこちらの得点は一点と、予定と真逆になっている。少なくとも両者一点の同点というのが本来の予定だったのだが・・・まさか負けたまま後半を迎えるとは思わなかった。

「成長性も相当高かった、ってところかな」

こちらの予想以上に城翔中学は成長していた。前の試合より今の試合の動きの方が格段に良い。非宋戦の時よりも成長度合いが大幅に上がっている。ぜひ聞きたいところだが、今はそんな悠長なことをする余裕はない。

「・・・やれやれ、使いたくはなかったが・・・やむを得ない」

「ちよつとキャプテン、まさかアイツを使うんですか？」

浦木は怪訝そうな顔を隠そうともしない。それもそのはず、自分達はあくまでも品行方正を重視しているという体だ。実際鉢美中学に入学する生徒は良心的な生徒、また良心的な生徒を装っている者が入学する。

望む、望まないに関わらず普段から表面上は良い人を演じている。サッカーでもラフプレーはなるべく仕掛けない。やるとしても基本はわからないようにする。サッカー部に入部する生徒はそれを理解した上で入部、活動する。

ところがなぜかその狂暴性を隠さなのまま鉢美に入学し、サッカー部に入部した生徒がいた。練習でもラフプレーを堂々と仕掛け、挙げ句試合でもそのスタンスを変える気はないと断言した。

当然ながら使えるはずがない。そんなことをすれば鉢美中学のイメージに大きく影響する。たった一人でもそういうことすれば、イメージに深刻なヒビが入る。

「仕方がない、こっちは秘策もないしね。強いて言うなら彼女が秘策つてところかな？ まあ実際はそんなにだいそれたものでもないけど」

とはいえ実力はあった。他を圧倒するというほどではない。天才的な実力があつたというわけではないが、確かな実力は持っていた。

チームメイトと監督で話し合った結果、ここぞという時、負けられないような試合などで彼女を使おうという結論に落ち着いた。

できれば使わない、使うならターニングポイントや勝つべきとき、負けたくないとき。それこそ決勝や準決勝辺りを予定していた。そこでなら本来のイメージが崩れたとしても、フットボールフロンティアで良い成績を残したという良いイメージで上塗りできるからだ。

が・・・使う前に負けたら話にならない。ならば今、使うしかない。

「審判、交代をお願いします」

交代と聞いて、その少女は獰猛な笑みを浮かべる。茶色の短髪に茶色の瞳、そして動く度に鈴がついた髪飾りが静かに鳴る。

「・・・やつと獲物を狩れるのかい？ 待ちくたびれたよ！」

甘水寧、凶悪なハンターが牙を向く。



「相手チームは交代か」

「なんか・・・ちよつと怖いんヨ・・・」

後半からフィールド入りした選手、甘水。その目は爛々と輝いており、優しい印象を感じさせる鉢美中学の選手とは真逆、獲物をみるような目でこちらをジツと見つめている。しかも鉢美中学の知的な部分は残しているようにも見える。

「さあ、やることはわかってるよね？」

「・・・ホント、仕方ねえな」

「あーあ、面倒な仕事が増えたなあ」

相手選手が何かコンタクトを取っているが、やるべきことは変わらない。いつも通り最後まで真剣に戦うだけだ。ただ、めんどくさそうにしているのは気になった。

『さあ、後半戦が始まります！両チーム選手を交代し、後半戦スタートです！』

後半戦開始を告げるホイッスル。ボールを持った甘水が一気に攻め込んでくる。さらに直後、相手が仕掛けてくる。

「ザ・ミスト!!」

原理はわからないが、相手選手二人が同時に霧を発生させ周囲の様子が確認できなくなる。心ここにあらずの状態だった赤城はまんまと技を受けてしまう。

しかし、赤城は技を受けた焦りよりも先に疑問が浮かんだ。

「デیفエンス技……だったよな、これ」

ザ・ミストという技は霧に紛れて相手のボールを奪うというのが本来の使い方。決してドリブル技ではない。ましてや一人技。二人で使う意味はない。

とはいえ別にデیفエンス一辺倒でしか使えない技ではない。霧を発生させている間に突破するなどちよつとやり方を変えればドリブル技としてもなんら問題なく使える。それに二人で使えばちよつと霧が濃くなったり、範囲が広がる……などの効果があるのかもしれない。

そのため赤城は最初こそ少し疑問を抱いたものの、すぐに目眩ましのものなのだと考えを変えた……その時だった。

「ほおらジャツジスルウー!!」

「なあっ!?!」

油断しきつてノーガードだった腹に重たい一撃が放たれる。最初は何が起こったのかわからず、成す術もなく飛ばされた。

「ハッ！油断してんじやないよー!」

『……おっと、赤城選手が倒れてますね？立ち上がりしましたが……霧の中で接触したのでしょうか？まあ見えにくいですからね、気を付けたいところです』

怪我させないようにする配慮か、はたまた大事にならない程度で済ませるためか動けないことはない。とはいえ遠慮しているというわけでもない、強烈な一撃だった。

「……こうなるから使いたくなかったんだけどね」

ジャツジスルーは反則スレスレの技である。世間からもあまり好まれてはいないが、ただ技として一応認められているため程度をわきまえて使う分には問題ない。

とはいえあくまで品行方正がモットーの鉢美中学。迂闊にそういうことはできない。かといって彼女が程度をわきまえるとは思えない。

普段評判の良い人が少しでも悪いことをした時の反動はすさまじい。それゆえに少しの荒々しいプレーも避けたいところだ。ならば答えは一つしかない。

「どーするんだよ？ あれをずっと隠蔽すんのキツいだろ」

「それでもやるしかないよ。放っておくわけにもいかないし」

「まっ、隠蔽なんてこの先いくらでもやることだし社会経験にやなるっしょ」

バレなければどんな悪事もなかったことにできる。それゆえやることは一つ、ひたすら隠す、ただそれだけだ。隠蔽工作が大変だが、それでもやるしかない。学校の体裁を守り、試合にも勝つ。それが自分達のやるべきことだ。

幸い前半で審判に良いところを見せておいたおかげもいって、少し疑問には思っていないもの。まさかファウルプレーをしているとは思っていないようだ。このまま上手く

隠し通して終わらせるしかない。

「ハハツ!!どうした?その程度なのか!!」

そんな彼らの気持ちなど微塵も考えず、甘水はどんどん前に出ていく。時折仕掛ける荒々しいプレーは周りの選手があの手この手で上手くごまかし、ゴール近くまで漕ぎ着けた。

「よっしや!ここはワイに任せえ!」

「関西弁コンビの力を見せたるで!」

「無駄無駄ア!!アクアバンデットオ!!」

ボールを中心に激流が現れる。そして甘水はボールの上に乗る激流を乗り越えながら速度をつけて行き、二人を悠々と突破していく。

「さあ、喰らいなあ!!」

「ちよっ、マジかよ!!」

限界まで上がりきったところで滑るようにボールを射出。ただのドリブル技ではなく、シュートにも応用できる技、それがアクアバンデットだ。

「クソ!間に合わねえか!!」

なんとか技を使おうとするも間に合わない。せめてもの足掻きで拳で対抗するものやはり止められず、同点に戻されてしまった。

「いてて・・・すみません！油断しちゃいました！」

「気にしたらアカンよ！次に切り替えていきや！」

不意を突かれてしまいあっさりと同点に持ち込まれる。かなり手痛い一発をもらってしまった。

とはいえ決められたもののまだ同点、なんとかしてもう一点を取れば勝てる。とはいえ相手の守りも固い、突破するのも一苦労だ。

「ハハッ！・・・次はどうする？もつと攻めて相手をボロボロにする？」

「それができれば苦労しないんだけどね」

鉢美は鉢美で次の一手が決まらない。というのも先ほど交代した星見、前半は途中からの出場でそこまで体力は消費していなかったはず。

「今はカウンターマインで、あんまり出すぎない方がいいかもねー」

「そうは言うけどよ、あの先輩は止まんねえだろ」

にも関わらず斧街に変えてきたということはこちらの弱点がバレた可能性がある。またバレていなくともまだ試していないパワー系のシユートを中心に攻めてくる可能

性が高い。

となると守備はおろそかにできないが、甘水は言うことを聞くとは思えない・・・と、両チームが苦境に立たされていた。

「そーいやキャプテン大丈夫か？なんかうずくまつてへんかったか？」

こちらは城翔中学。次の作戦について軽く話していたが、淀屋が先程のことについて聞いてくる。

「あ、ああ・・・ちよつと技をもらっちゃつてさ」

「えっ？キャプテンも？私も結構強烈なのもらったんだけど」

試合に集中していると、勝ちたいという思いが先走り荒っぽいプレーになることもある。もちろんその意味もあるのだろうが、今回は声色といい顔といい楽しんでいるようにも見えた。

「・・・僕の方からはかなり強引な突破をしているように見えましたね」

つまり偶然ではなくわざとやっている可能性が高い。ベンチから試合の様子を見ていた千景も同意している。

「なんやて!?!そんなんアカンやろ!!抗議や抗議!!」

「いや、でも俺の勘違いかもしれないし・・・」

「・・・仮にわざとだったとしても証拠がないよ。言ったところで何か解決するとも思えないね」

星見の言うとおりである。特に今回は霧のせいで見えていなかったり、選手が壁となっていたりと見にくかった。特に審判のところからは確認できないような位置取りだった。相手がやつてないと言えればそれまでだろう。

それにジャッジスルー自体は技として認められている。これが本当に悪質でファウルかどうかの判断を下すのは審判の役目だ。

とはいえ観客もいる。もしわざとなら見ているところによっては相手の反則も見えそうなものだが・・・

「・・・そういうことか」

ここでずっと話を聞いていた裁野が口を開く。  
「ずっとときな臭いとは思っていたが・・・試合前、試合中の対応、あれは善意だとか親切心からの行動じゃない」

前半の試合の様子をベンチから見えていた裁野は何かを感じ取っていた。純粹な善意とは思えない、どこか裏のある感じがしていた。そして今回のことで確信した。

「何か自分達に不都合なことが起こった際に心象操作できるようにしている。恐らくそ

これは観客も同じ。この中学にはそういう考えのやつらが集まっているんだろな」

「・・・あー、どうということつすか？」

「心にも思っていないこと言つてご機嫌取りしたり、好印象な行動を取るのには全部審判を味方に付けるためつてことさ」

もちろん審判がどちらかのチームを鼻屑するのは禁じられている。私情を持ち込むのは厳禁、平等かつ厳正な判断しなければならぬ。

とはいえ審判も人間だ。ルールは制定されているものの人によって判断基準にはバラつきがあるし、判定が緩くなるということもある。

そして今までの丁寧な行動で無意識の内に鉢美中学はそういうことはしないだろうという先入観が生まれ、鉢美中学への判定がかなり緩くなっているのだ。

元より鉢美は評判のいい学校と言われている。それらの要素とこれまでのプレーが合わさり審判を味方にしている。そのせいで鉢美中学がある程度好きに動けるようになってしまった。厄介なことこの上ない。

「じゃ、じゃあどうすんだよ・・・ラフプレー食らうしかねえつてことか？」

サッカー部だけでなく観客も人を利用したりするような人がほとんど。こうなるとここにいるほとんどの人が敵ということになる。そうなると不正を暴くのは無理である。



「そうなるね。仕返しなんてしようものなら逆にファウルを取られるのがオチだろうしそれこそ相手の思うつぼ。こちらが不利になるだけだよ」

相手が殴ったから自分も殴った。そんな話が許されるわけもない。残念ながら対抗策はない。

「まつ、されたから仕返しなんて柄でもないしな。向こうがラフプレーサッカーならこっちは正面衝突サッカーで勝負してやるぜ！」

ならば正面衝突しかない。向こうが頭が使う悪知恵サッカーなら、こちらは正面衝突サッカーで対抗する。バカっぽいが、その声を否定する者はいなかった。

同点となり城翔中学からのボールで試合再開。すぐに甘水がボールに狙いを定めるが、まずはパスを繋いでかわしていく。

「星見!!」

斧街はマークされている。ここは無理せず星見にパスを出す。

「まあそうするよねー、でもたまには攻めたこともしないとパターン化されちゃうよ?」  
だが、マークされている人にはパスを出さないと踏んでいた立伏がパスカット。さすがにやり方を変えないと厳しいかもしれない。

「はい、後はよろしくねー」

「へいへい、でも点を取るの俺の仕事じゃない・・・な！」

「綺麗にパスが繋がると気持ちがいいね。そして得点できると最高なんだが・・・ディレイドステイング!!」

再び相手のシュート、決められた場合勝ち越される。時間はまだあるが、みんなのためにもこれ以上点を取られるわけにはいかない。

「メガトンヘッドオ!!」

その思いは皆同じ。淀屋がシュート線上に割り込み、頭部に集めたエネルギーを拳の形に具現化させ、拳状のエネルギーをぶつけ、ボールを弾き飛ばした。

「へっ、この程度かいな。そんなもんでワイらからゴールを奪えると思とつたら大間違いや!!」

「わりいな淀屋!助かった!」

「気にせんでええ、それにさつきワイが止めとつたらあの一点はなかったわけやしな!」  
淀屋が弾いたボールを佐原と出増が取り合うが、フィジカルの弱い佐原は押し負け相手にボールを取られてしまう。

「へっ、大したことねえ・・・おっと危ない」

パスを受け取りドリブルしていく箱庭、もう一点取るためになんとかFWへ・・・と、

そこに裁野が立ちふさがる。しかし目の前に来ただけで特に動きがない。

「ん？どうかしました？」

「お前、実力は大了したことないな」

不審に思い話しかけると、こちらを煽ってくる。さらにこれだけでは止まらない。

「技も騙す技ばかり、はつきり言って素の実力は皆無か」

「・・・なんだと？」

「どうした？違うというなら来い。正面からな」

わかりやすい挑発である。わざわざ受けてやる必要はない。誰かにパスを出すなりして避ければ済む話。とはいえ・・・

「挑発のつもりかよ・・・いいぜ、だったらお望み通りやってやるよ!!」

そのまま受け入れるというのも癪だった。煽り慣れていても煽られることには慣れていない。それもあつて裁野挑戦を受けてしまった。

「それでいい・・・ヴォーパルスライド!!」

混じりつけのない正面衝突。裁野は地面を抉るほどの速度で繰り出したスライディングで箱庭からボールを奪う。

「く、クソツ!!」

「悪いが実力勝負なら負けはしない。・・・後は頼んだぞ」

「はい、それじゃあ初御披露目だよ。フェアリーギフト！」

パスを受け取った華咲がボールを蹴り出すと、ボールに妖精のような羽が生える。まるで意志が宿ったのか、ボールは本来ありえないような軌道を描き、FWの元へと送り届けられた。

「さてと、そんじゃ再度勝ち越しといこうかねえ」

このチームにとって一番厄介な相手にボールが渡ったが、まだ慌てるような状況ではない。まずゴール近くまで来ているのなら先に複数人でマークすればいい。そうすればパスの出しようはない。

また自分で持ち込んできた場合は数人がかりで奪えばいい。彼女はドリブル技を持っていない、だから警戒する必要はない……というのが事前に伝えた対策だ。

「いや……待て！下がってシユートブロックする作戦に切り替えるんだ！」

試合の動画を見るとこのチームはバカっぽく、無策で突っ込んでくるだけかと思っていた。しかし戦ってみるとそんなことはなかった。

前半のヒートタックルからのハイバウンドフレイムやキーパーの東条が苦戦していると判断しヘディングで得点を防いだ淀屋、相手を煽りボールを奪った裁野など、ちゃんと頭も使ったり、瞬時の判断で対応できるように鍛えられている。

「残念ながら忠告が少し遅かったねえ！タイダルウェイブ!!」

「な!?!」

「こ、こいつら短期間でどれだけ会得してんだよ!?!」

ドリブルしながら腕を勢い良く横に振ると巨大な波が発生し、相手をまとめて飲み込んでいく。斧街はその隙に突破していった。

「さあ、一対一といこうか!!サブマリンショット!!」

「チイツ!!セキュリティプロテクト!!」

唯一苦手なパワー型、それでもここで点を取られたら勝利は一気に遠くなる。絶対に止めたい場面だったが・・・無情にも防護壁は砕け散った。

「よ、よし・・・勝ち越せた・・・」

「やったあああ!!もう一度勝ち越したんヨ!!」

「よくやった!!今のはナイスシュートじゃ!!」

「・・・やりましたね」

赤城はホツと一息吐き、ベンチで見守っていた皆も声をあげて喜ぶ。この一点を守りきれば勝てる。三回戦への階段が見えてきた。

一方で鉢美中学はすぐに集まり、新たに作戦を立てる。

「・・・相手は素人が多い。長々と試合をすればいずれはボロを出してくれるだろう。だから二点は必要ない、一点をなんとしても取るぞ」

残り時間は少ない、ここから逆転というのは難しいだろうが、相手は素人と多い。同点にすれば充分望みはある。とにかく一点、一点を取ることには今は集中する。

「ハハハッ!! サッカーは楽しいね!! もつともつと戦いたい!! だから・・・あんた達にはここで負けてもらうよ!!」

鉢美中学からのボールで再開し、甘水は即座に攻め上がる。ここで点を取らないと負けるため相手は必死だ。だがそれは城翔中学も同じこと。勝つためにも点を取られるわけにはいかない。

「クズちゃん! さっさと運びな!!」

「はいはい、イリユージョンボール!」

もう試合は終盤、これ以上守っていても仕方がないと判断した立伏は前に上がり攻めに加わる。

「そろそろいいですよね? 戻しますよー」

「ああ! これだけ近づけば問題ない!! アクアバンデッドオオオ!!!」

この技はドリブル技として使いながらシュートまで持っていけるため、ドリブルと

シユートを使い分けながら甘水は使う。その代わり欠威力はノーマルシユートより少し強いくらいという欠点がある。

つまり奇襲で初めて意味をなす技。二度目が上手くいくかと言われると答えはノー。だから次は組み合わせて使う。

「それじゃあお望み通り追加オーダーといこうか。デイレイドステイキング!!」

キーパーに届くかという寸前で成平がシユートチェイン。若干威力を上げつつ、スピードを遅くしてタイミングをずらす。とにかく一点、一点さえ取れば望みがある。

「ぜってえ負けねえ!!! キラーブレードッ!!!」

東条は技を打ったものの、相手の技の仕組みを理解していないため今回も相手の思惑通りタイミングがずれる。刃先で受けるもやはり力が伝わらない。

「く、クソオオオオ!! また・・ずれやがったああああ!!」

このままでは同点にされてしまう。チームメイトを信用していないわけではない。きつと皆なら延長戦になっても決めてきてくれると信じている。それだけ頼れる仲間だ。

だからといってあっさり諦めるわけにはいかない。ここまでの皆の努力を無駄にはできない。怪我してまで一点を取った麻宮、趣向を凝らして完成させた連携技で一点を取った三日月と黒鉄。そして相手の油断を誘って斧街が取ってきた一点。

点を取ってきてくれたみんなだけではない。相手の性質を理解しボールを奪った裁野、カウンターの立役者となった盤上、自分のミスを帳消しにしてくれた淀屋。

みんなの活躍を無駄にするわけにはいかない。

そして何より――

「俺は．．．まだまだやれんだよおおおおお!!!」

――このままやられるのは自分のプライドが許さなかった。

「これでどおだあああああ!!!」

ヒビが割れ、砕けるといふ寸前でのこと。東条の左手から青いエネルギーが溢れ出る。そしてそのエネルギーは右手と同じように鉤状に変化。

「止まりやがれええええ!!!」

土壇場での左手版キラブレードが完成、右の鉤が砕けたのと同時に左手で受け、ボールを完璧に切り裂いた。

「バカな!?!」

「は、はは．．．まさか止めるなんてね．．．!」

「見たかあああ!!!これが俺の実力だあああああ!!!」



もう前半のように相手を褒める余裕はない。驚きを隠せない成平達を他所に、東条は残った力をフル活用しボールをぶん投げる。

「ふむ。下級生がしつかり止めたのに、上級生が決めないという選択肢はないね。マツハウインド!!」

ここで決めないと負け、状況が状況だけにほとんどの選手が前に出ていたため鉢美中学の守備はがら空き。そこにボールを確保した佐原が一気に切り込みシュートを打つ。

しかしこのスピードならキーパーは対応できる。時間的にはここで決められようが止めようが負けは負け。だが、だからといって決めさせるわけにはいかない。

どれだけ汚い手を使おうが、自分はキーパーなのだ。もう負けが決まっているからといってシュートを止めないなどという行動はしない。

「……いいぜー最後の勝負だ!!」

最初の丁寧な口調は消え、素の状態になる。相手のシュートを迎え撃つため力を溜める。

だが、相手の攻撃はまだ終わっていないかった。

「ダツシユアクセル!!」

獅子神が技を使って佐原のシュートに無理やり追い付いてきた。

「ま、まさか!?!」

「ライオン・・・ハート!!」

そのまま強引にシュートチェイン。まさかドリブル技でシュートに追い付き、そのままチェインするなどという強引なやり方は想定していない。いや、できるわけがなかった。

「セーフタイププロテクトツ!!」

壁が連なり巨大な壁となつて立ちほだかる。最後の意地か、かなり拮抗していたが・・・止めることは叶わなかった。

「ぐああああああ!!」

最後の最後にもう一点が入り、試合終了を知らせるホイッスルが鳴り響く。結果は四対二、苦戦を強いられた場面もあつたが、なんとか勝つことができた。

「・・・やれやれ、まさか負けるとはね」

データ上では勝っていた。もちろん毎回こちらの予想通りに事が運ぶということはない。だからいつも想定外の事が起こることも頭に入れておく。ある程度想定外のことが起こつても対応しきれるはずだった。

しかしデータでは図れないようなことを彼らはやつてのけた。悪く言えば無茶苦茶、良いように言えば挑戦的と言つたところだろうか？そのせいでこちらの予定がごとごとく潰された。残念ながら完敗だった。

「いやー、面白い試合だった。両手でのキラード、ダッシュアクセルで追い付いてチエイン、ザ・ウォールを利用して上空へ、か。有意義な時間だったよ」

「おう、スゲーだろ！俺の両手キラードは!!そっちもなかなか強かったけどな！」  
思うところはあがあるが、試合が終われば敵も味方もない。純粹に相手のことを褒め合う。

「・・・あれだけやつといてよく言えるな」

最も全員が納得できるかは別となるが。

「あいにくこれがうちのやり方なんでね。それに怪我はさせたけど選手生命には関わらないように配慮してるよ。まああの技は想定外だったけど」

そう言つて成平はベンチを見やる。

「麻宮ちゃん、大丈夫？」

「ああ・・・痛みはあるが、動けるよ」

「・・・とりあえず大事にならなくて良かったです」

どうやら大事にはならなかったようである。そして成平は少し離れたところで麻宮の様子を見る赤城を見つけると、小走りで近づいていった。

「赤城君、少しいいかな？」

「えっと、あなたは・・・？」

「僕は鉢美中学キャプテンの成平。君がキャプテンの赤城太陽君で合っているよね？ぜひ話がしたいんだ。早速なんだが君はどうやって彼らの力を把握したのかな？次に限界、いやそれ以上の力をどうやって引き出したのか？そして彼らの判断力はどうやって培われたのか？ぜひチームのことを把握しているであろう君に聞いてみたいんだ。ああ後他にも聞きたいことがあつてね、まずあれだけの才のあるメンバーをどうやって見抜いて、なおかつ入部させるまで漕ぎ着けたのか？そして短期間でどうやってここまで実力を伸ばしたのか？あとそれとだね——」

遠慮の欠片もなく矢継ぎ早に質問を浴びせかける成平。本来ならツツコミたいところなのだが、赤城は顔を曇らせ成平に質問する。

「あなたはチームのことを把握してるんですか・・・？」

「もちろん、体調管理や各々の性格、それらを把握した上での作戦。チームの事情を把握することはキャプテンとして当然のことさ」

それを聞いた赤城は顔を下に向けた。成平はそんなこと気にせず質問しようとするが、チームメイトに呼ばれた。

「おや？もう時間か。仕方ない、聞くのはまた次の機会としよう。それじゃあね」

そう言つてフィールドから出ていく。赤城は少しの間そこに立ち尽くし、しばらくしてからその場から逃げるように去った。

## 主将のあるべき姿

鉢美中学との試合、危ないところもあつたがなんとか勝つことができた。試合中にハプニングが起こったものの、麻宮の怪我は軽いわけではないが、シユートを打つとき上手く力が入らなかつたこともあつて重症にはならなかつたらしい。

まだ違和感が残っているものの、今後様子を見て問題がなければ次の試合も出てもいいだろうとのこと。それを聞いた皆は肩を撫で下ろし、本当に良かったと喜んでいた。

・・・しかし、赤城だけは違つた。

「なんで・・・気づけなかつたんだろ・・・」

疲れているにも関わらず、夜はずつと眠れず寝不足。そのまま朝になって一人呟く。当然顔色はよくない。もちろん麻宮の怪我が大したことなかつたことについては赤城も喜んでゐる。

だが、本当はああなる前に対応しなくてはならないのだと自分を責めていた。チームの主将である自分が真つ先に異変に気づき、先手先手の対応をしなければならぬ。

ちやんと気づいていればそもそも怪我が起こらずに済むはずだ。

「そうだよなあ．．．あつたよなあ．．．」

今思い返してみるとたしかに麻宮の様子がおかしかったところもあつた。にも関わらず、自分はその時に特に問題ではないと判断してしまった。あの段階で話を聞くなり交代するなりしていればあの怪我は未然に防げたこと。なのに自分はそれを気に止めず、勝つことを優先した。

今回は何もなかったから良かったものの、万が一今後に関わる大怪我でもしていたらどう責任を取るのか。自分はあの時勝ちを優先した。負けたら自分の責任になる。それが怖くて、麻宮の異変に薄々気づいていたにも関わらず無視し、あの状況を引き起こした。

「ああ．．．どうしようもないなあ．．．」

試合でも活躍できず、すぐに諦め、仲間のことも知らず、挙げ句味方の異変にまで気づけないとはなんたる不甲斐なき。よくもまあキャプテンができるものだとうつぶく。

一回戦、非宋中学のキャプテンはチームを鼓舞し続けた。上つ面ではなく、心の底から諦めるなど言い続け、チーム全体がそれに感化されて一点をもぎ取った。

二回戦、鉢美中学のキャプテンは仲間のことを完璧に把握していた。状態や長所、短所を理解し、どのタイミングで出すか、どう動かすのが最適かわかっていた。

・・・自分は何ができる？上っ面だけの鼓舞、チームのことを何も理解してない。作戦も立てられない。実力もない。仲間の異変にも気づけない。

「・・・謝ろう」

ともかくにもまずは謝らなければならない。赤城は重い気持ちで荷物をまとめ、学校へと向かった。いつもの用意と変わらないはずなのに、いつもより重く感じた。

「えっと・・・麻宮、話があるんだけど・・・いいか？」

「・・・？」

学校に着くなりいきなり話しかける赤城。当然麻宮は困惑の表情を浮かべている。

とはいえそれも一瞬、ちゃんと心当たりがあった。

「ああ、課題を写させてほしいのか？・・・しかし課題は自分でやるべき、人を頼つてばかりではダメだ」

「えっ、今日課題あつたの・・・？あ、いや、それじゃない、それじゃなくて・・・」

残酷な事実を告げられ一時的に絶望するが、本来の目的を忘れてはいけけない。後で怒られることを覚悟しつつ持ち直す。

「では淀屋と東条と太智が暇だからキャプテンを落とし穴に落とそうという作戦を聞いておきながら伝えなかったことか？しかし話す時間がなかったんだ。すまない」

「えっ、なにそれ俺知らない。あれ作戦だったのか。・・・たしかに野生の落とし穴なんてあるわけないかってそれでもなくて・・・」

それじゃないならもうないぞ、と言わんばかりに首を傾げる。なので赤城自ら切り出す。

「いや、前の試合で無理してた・・・よな？だから・・・無理させてごめん・・・」

本当にもう心当たりがなかった麻宮だったが、赤城の言葉でようやく合点がいった。

「あれは自分の判断でやったことだ。キャプテンが無理をさせたわけじゃない」

もし止められていたとしても自分は打っていた。だから謝らなくてもいい。それでも赤城は首を振って否定する。

「無理せずやれる範囲でいいんだ。チームを勝たせたいからといって身を削るのはやめよう。・・・その分は俺が頑張るから」

麻宮に限らず、みんなは充分やってくれている。自分よりもずっと頑張っている。本来無理をすべきはキャプテンであり、何も貢献できていない自分だけでいい。

次はきつと役に立って見せる、多少無理をする必要はあるだろうが、自分だって仲間のためにできることがあるはずなのだ。



「みんな……ありがとう」

誰にも気づかれないよう静かに呟く。こんなにも情けない、キャプテンの自分を支えてくれて……と。

今日は修練場ではなく学校のグラウンドで練習。個々の能力を修練場であげ、連携を学校で鍛える。予定通り着実に力をつけていく。

「すまん、ちよつと来てくれへんか？二人ぐらいおつたらええわ」

淀屋が守備陣を集める。呼ばれて集まったのは裁野と黒鉄。淀屋は女の子が良かったんやけどなあと軽口を叩きつつ本題に入る。

「んで、早速本題に入るんやけど……連携技したないか？」

連携技、二人以上が協力して一つの強力な技を発動する。二人以上起用する必要があるためミスするとかかなり面倒なことになるが、その分威力は高い。まだ全然ないもの、このチームにもある。

「……たしかに、挑戦してみたい気持ちはある」

「やるのは構わない。だが、何か宛はあるのか？」

二人も連携技に承諾、まずは内容を決めようと考えてる。  
「おおもちろん！二人には悪いけどテーマはもう決めてんねん！」

ズバリ!!大阪城や!!」

黒鉄は現段階での思考を整理し、裁野は眉をしかめる。

「まあ別に大阪城である必要はないんやけどな。ようは城をモチーフにしたディフェンス技や！どや？強そうやろ！」

あまりにも漠然としたイメージではあるものの、必殺技とはそういうもの。あまりにも固定したイメージというのもやりにくい。本人的にはある程度固まっているようなので、あとはそこを理解すればできなくはないだろう。

「不安要素はあるがやる気はあるようだな。やるからには投げ出すな、その条件を呑めるなら協力しても構わない」

「・・・俺も手伝おう。きつと損するものじゃない」

「おおっ！話が早くて助かるわあ！」

そんなわけで男三人衆が連携技に着手する。城をモチーフにした連携技、形にするためにまずは具体的な案を出していく。

「おっ？みんな青春してる、わっかいなあ。ウチも見習わなアカンな」

支倉よ、お前もだいたい同じぐらいだろ。というツツコミが欲しいものの皆練習に励んでおり誰もつつこんでくれない。ちよつと寂しさを覚えつつすぐに切り替える。

というのと同じDFの黒鉄と裁野は新しい技を会得し、さらに上を目指している。自身もこのままではいけない、さらなる成長が必要だと考える。

「やっぱさらの技でも考えなアカンか」

確実に相手は強くなってきている。今のままでは限界が来るのも遠くはない。対応できるように何かしらの新しい技が必要だろう。

「よし、いいアイデアを出すためにちよつとばかし誰かの胸に手を当ててきますか  
！」

普通は自分の胸に手を当てて考える。しかし彼女の場合は文字通り他の誰かの胸に手を当てて考える。無論相手は自分と同じ女子である。

「うーん、もう少し高さがあった方が・・・煌？どうしたの？」

「・・・嫌な予感がする」

こちららも連携技を習得するため一緒に練習していた獅子神と星見。その途中、星見は何かを察していつでも逃げられるように体力を温存しつつ練習を再開する。

事実それは当たっており、このあと支倉に追いかけて回されることになる。ただ足の速

話が。さが獅子神の方が上だったため、犠牲になったのは結局星見だったというのはまた別の話。

「・・・じゃあ今日はこのぐらいにしようか。お疲れさまー」

それから数日が経ち、あつという間に試合まで一日を切った。

「おっしやー!!最後のやつめっちゃええやんか!!」

「思っていたより形になったな。あとは本番で修正するぞ」

「あつ、前言つてたやつできたのね。でも私達も負けてないわよ!ねー!!」

「・・・」

「ちよつとー!?!なんで無視するのよー!?!」

「はははっ、知らんうちに何か気に触ることもしたんちゃう?」

この数日でなかなか満足のいく成果を得られた。三回戦に向けての準備は万全。最高の調子で試合を迎えられそうだ。

「よーしそれじゃあ、帰って休むぞー!!借りてきた映画も見ねえとな!」

「あつ、その映画今度貸してくれない？前から気になってたんだよね」

「映画といえれば今日は地上波でその前作が流れるんヨ」

「・・・その映画、面白いんですか？」

「ええ！すつごく面白いわよ！特に最後がよくてね！私泣いちゃったもん！」

「しかしキミは何を見ても泣いてそうに思えるのはワタシだけかな？」

「映画・・・ワシは肉体派が活躍する映画が好きじゃのう」

「映画もええけど今日は野球中継やねん。伝統の一戦は見逃せんわ！」

今日は試合前日、練習は早めに切り上げて雑談した後家に帰る。そして明日に備えてしっかりと食べ、ゆつくりと風呂に浸かり、深い睡眠についた。

だが赤城だけは違った。皆が家に帰った頃、彼は誰にも気づかれないよう別の場所に移動し、一人で練習していた。

「はあ、もう少し・・・もう少しなんだ・・・！」

ヒートウイングだけではもう通用しない。もっと素早く、隙がなく、より強力な技が必要だ。

それを完成させようとひたすら練習しているが・・・どうにも完成させるためのピースが埋まらない。あと何をすればいいのかがまったくわからない。

「どうしたらいいんだ・・・?」

何回やつても成功せず地面に寝転がる。先がまったく思い付かない。もつと飛びイメージを具体的にしなければならぬが・・・人間が飛ぶことなんてできない。具体的なイメージを持つとうにも、やりようがない。

「うーん・・・うわっ!? な、なんだ!？」

寝転がっていてもどうしようもない。何かいい案はないのかと考え事をしながら歩いていると、急に激しい音が鳴る。思わず身構えた。

「と、鳥か・・・ビックリした・・・」

一匹の鳥がバサバサと音を立てて飛び立っていく。考え事をしていたので気がつかなかったが、どうやら歩いた先に鳥がいたらしい。

暗いのに加えてそもそも種類について詳しくはないため、何の鳥だったのかはわからない。とにかく不審者などではなかったことに安堵する。

「ああ、鳥みたいになれたらなあ・・・」

やはり空を飛ぶといえど鳥だ。翼を広げて大空を飛び回る。紛い物ではない翼を生やして自由に飛べたらきつと・・・

「鳥……鳥かあ……いや、もしかして？」

その時、赤城が閃く。正直強引な感じは否めない、上手くいくかもわからない。それでもやってみる価値はある。試合までの時間は残り少ないが、とりあえず試してみる。ボールを手に取り、イメージを固めてその通りに動いていく。一度やってみると、思っていたより形になった。俄然やる気が湧いてくる。

「……やるしかないな！」

この時は今までの辛いことや悩みを忘れ、練習に没頭する。その日は技を完成させるために、ただひたすら走り続けた。

「みんな!! 気合い入れていくぞ!!」

「おおっ!!」

そして、いよいよ三回戦の幕が上がる。

## V S 杜来中学 前編

試合当日、いよいよ三回戦の試合が行われる。今回の相手は杜来中学。サッカー部が創設されたのは五年前、比較的新しいチームだ。

初出場、二度目の出場時は一回戦敗退と決して好調なスタートを切ったわけではない。創設してすぐに勝てるほど甘い世界ではなかった。

それでも年を重ねるに連れて着実に成長し、三年目で初めて一回戦を突破、その翌年は二回戦を勝利し、三回戦まで勝ち進めるほどになった。

「この試合に勝てば準決勝ですね」

「おー、もうそんなところまで来てたのか。なんか早く感じるな！」

しかし、成長という点に関してはこちらにも負けていない。最初は動きもバラバラで、連携も万全とはいえず、技を使えない選手も多くなかなか勝てなかった。

それでも諦めず、誰一人欠けることなく努力を続けた結果ここまで勝ち残ることができた。頼りになる仲間、あとはキャプテンである自分ちやんとすれば怖いものはないはずだと赤城は信じている。

「・・・よし、みんなあ!!いくぞお!!」



「なんや、えらい気合い入ったんなあ」

「ここまで来たし、勝ちたいよね！うちも気合い入れるんヨ！」

今回の赤城はいつもと違う。珍しく普段より自信を付け、フィールドに立つ。みんなを勝たせるべく、気合いをいれて今日の試合に挑む。

「うふふ、あちらの皆さんは元気がよろしいですね？」

「なにおう元気なら負けてないぞ!!うおおおおお!!」

「魚沼君、気合いを入れるのはいいですけどどうさいます」

「ハッハー！うるさいぐらいが俺達らしいだろお！」

対して杜来中学の選手も程度は違えど張り切っている。今日の試合に勝てば準決勝、いよいよ全国大会が見えてくる。ここまで来て負けたくはない。それはここに立っている者、全員が思っている。

両チームいつもより気合いを入れ、勝ちに向かってぶつかり合う。

城翔中学フォーメーション

— 斧街 —

— 星見 —

— 三日月 —

— 赤城 —

— 獅子神 —

— 盤上 —

— 淀屋 —

— 千景 —

— 裁野 —

— 支倉 —

— 東条 —

杜来中学フオーメーション

— 路津宮 —

— 魚沼 —

— 池田 —

— 叶 —

— 久志羅 —

— 夢見 —

— 岩山 —

— 比願 —

— 射池 —

— 石切 —

— 山道 —

フオーメーションにつき、いつものように実況が会場を盛り上げたところで試合スタート。今回は相手からのボールで試合が始まった。

「しゃあ！攻撃あるのみい!!」

「・・・結構飛ばすね」

ボールを持った池田が全力でドリブル。次々に守りを突破していくが、まだ試合は始まったばかり。序盤から勢いよく飛ばして大丈夫なのだろうか？

「よしワシとお前さん、どっちが強いか勝負じゃ!!」

「上等だあ!!!波乗りピエロオ!!」

技でも勢いはそのままに、しかし荒っぽい口調とは裏腹にパワーではなく丁寧なバランス感覚で抜き去っていく。あれだけのバランス感覚ならサーカスなどで働いたら即戦力になりそうなものだ。

「魚沼先輩！任せますんでよろしくう！」

「おうとも！って言いたいとこだがこっちは守りがキツい！てなわけで路津宮に任せるぞ!!」

「りょーかい!!せいじゃ任せるから決めてこいよお!!」

先程のドリブルから一点、今度は声をかけあつて守りが薄い方へとパスを繋ぎ、ゴール前まで持ち込んでいく。

「やれやれ、もうちよつと周りを見てから行動しましょうよ」

繋がったから良かったものの、あまりにも行き当たりばったりで雑すぎる。今回は運

が良かったが、ここからの戦いは考えなしで突破できるほど甘くはない。

とまあ文句は言いつつもそれはそれ、今は決める時だと切り替える。

「よーしかかってこい！俺の新技でバツチり止めてやるよ!!」

「あなたもあつちのタイプっぽいですね・・・まあいいですけど」

路津宮はボールを真上に打ち上げる。ボールが頂点に達したタイミングで地面が泥が飛来、泥がボールに纏わりつき、少し大きくなったボールを路津宮が蹴り落とす。

「マッドシヨット!!」

泥玉とでもいうべきか、大きさ、重さが上がったボールが蹴り落とされ、重力に身を任せて加速しながら落ちてくる。

「来たな!!それじゃあ見せてやる!!これが俺の新技・・・デスブリーダーだっ!!」

左手と右手、両手でキラードを発動。大事なのは一点集中。ボールの動きを見切り、両腕を交差させて切り裂いた。

「これが俺だけの！オリジナルの技だ!!これなら負ける気がしねえな!!」

前回の鉢美中学との試合で完成させた左手でのキラード。それにより完成した今回の新技。調子は上々、本人も納得の出来だ。過信して油断しているのはいただけないが、ここで舞い上がってしまうのは仕方がないだろう。

「つとお、ずっと持ってちゃダメだな。キャプテン！頼んだぜ！」

とはいえ今は試合中。いつまでも余韻に浸っているわけにはいかない。東条はボールを大きく蹴り出し、赤城がそれをしっかりと受け止める。

「ああ、任せてくれ!!」

最初は攻められたものの、東条が新しい技で止めて流れがこちらに来つつある。ここで奪われるわけにはいかない。

「しゃっ!止めてくぜ!!」

「みんなー、行くよー」

相手は三人がかりでボールを狙っている。人数では圧倒的に不利。普通ならいったんボールを戻し、体勢を立て直したいところ

だがしかし、逆に考えるとここさえ突破してしまえば相手の守りを突破したも同然。シユートまで持ち込めるだろう。

さらにこの世界のサッカーには数的有利をひっくり返せる方法がある。

「……みんな成長してる。でも、俺だって……俺だって、負けない!!」

「……ん?なんだあれ?」

「いや何って鳥……いや焼けてる!?あれじゃ焼き鳥だ!!」

ドリブルをする赤城の元へ、炎を纏った鳥が一直線に飛来。そのまま溶け込むかのごとく赤城の身体の中に入り込んだ。

「ブレイズファルコン!!」

それとほぼ同時の出来事、赤城の背から鳥のような翼が生え、さらにその翼が炎に包まれた。そして、ヒートウイングとは比べ物にならないスピードで飛行し相手をまとめて抜き去った。

「・・・やった!!成功した!!成功したぞ!!」

前から構想はあったものの、なかなか完成には至らなかった。しかし昨日の夜に新たな策を思い付き、失敗を重ね、その日の内に改良案を考えギリギリ仕上がった技。

ヒートウイングは炎を翼に見立て、飛行というよりは滑空する技だったがこの技は違う。今回は鳥の力そのものを身に宿し、完璧な飛行をする。

練習の段階では一応完成したものの、やはり通用するのかわからない不安もあった。だが、実践でも成功し、なおかつ通用した。

これなら自分も戦える、ようやく役に立てる、思わず声に出して喜んだ。「せめてパスしてから喜んでくれるかな?奪われたらシャレにならないよ」

「あつ、ああ!ごめん!」

嬉しくなっただけで油断してしまっていたが、星見の声で我に返りFWにセンターング。

「いやあ、ノッてるねえ。あたかもこの流れにノッていこうか。サブマリンスョット!!」

ボールを受け取った斧街がシュートを放つ。だが、キーパーと対峙する直前にまだ残っていたDFの射池が横から割り込んでくる。

「いっくぜえ!!キラーホエール!!」

地面から黒色の尾びれが姿を魅せる。そして射池のキックと同時にその正体、シャチが姿を現し、噛みついてボールを食い止める。

本来はシュートブロックとしての使用を想定されていないためか、あまり威力は出ていない。とはいえそれでも充分だった。

「ロックシールド!!」

地面に手をつ突っ込み、盾とは言いがたい歪な岩を引っ張りだして力強く構える。

「……よし」

「ありや、残念」

斧街のシュートを止めきり、今度は相手がキーパーの山道から射池、久志羅、叶と丁寧にはボールを繋いでいく。

「ガハハハ!!次こそはワシに任せとけい!!」

「ヤケにガバガバな守備ですな……」

パワーは高いが粗がある。隙だらけで対応は難しくない。フェイントをかけて相手を揺さぶり、バランスを崩した隙に突破する。

「おっと、しまった！やられてしまったわい！」

「もつと静かに、あと丁寧にした方がいいですよ。細かい技術はこれから先必要になりますし、下手に口にすると同様が伝わりますよ」

もう三回戦、勝った方は準決勝。さすがに雑なプレーで勝ち上がっていけるほど甘くはない。ここからは精度を上げたプレーが必要になってくる。

あとはやられたとか失敗したということをあえて言わないことで相手に動揺を悟らせない、本当に作戦が失敗したのかを敵に知らせない。こう言った細かいところも見直さなければならぬ。

「なるほど、勉強になる！・・・じゃが、それぐらいわかっておるぞ？」

「・・・っ!？」

だが、すべては作戦の内である。

「・・・はい、盤上先輩のおかげで上手いききました」

まずは存在感のある盤上がボールを奪いにいく。ここで無理に奪う必要はない。いわば盤上は囷である。

「ワシもバカではないぞ！ちゃんと自分なりに考えておる！」

この段階では奪えなくてもいい。とにかくここで目立ったプレーをしておけば、後は存在感のない千景がボールを奪うことができる、という算段だ。



彼らもここまで勝ち上がってきたのだ。そんなに甘い考えはしていない。

「おおっ！やるじゃん！ならドリブルの方はどうだ？」

もちろんそれは相手も同じ。奪われたと見るやすぐに守りへと切り替え、久志羅が千景のボールを奪わんと迫る。

「・・・スニークウオーク」

瞬間、久志羅が千景を見失う。しかし実際のところ千景は何もしていない。ただドリブルをしているだけである。にも関わらず久志羅は千景の姿を認識できない。普段からの存在感をなさをいかした、これまた千景らしい技である。

「・・・キャプテン」

「ああ！まだまだいける！プレイズファルコン!!」

上手く突破した千景からのパスを受け、赤城も続けて相手を抜き去る。スピードがあり、発動が早く、低空飛行のため着地後すぐ流れるようにドリブルへと移行できるため隙がほとんどない。我ながら良い技を覚えた満足している。

「星見！任せた！」

「はいはい、ちゃんと期待には応えるよ」

「ふふん、今回は私達が決めるわ!!」

星見がいつものようにボールを上空へと打ち上げる。ボールは星の形に変化し輝き

を放つが、今回はそれと同時に獅子座の輝きが空に浮かびあがり、獅子神がそこへ飛び付いた。

「・・・協力したんだから決めなよ」

「ふん、任せなさい!・・・レオ・シャウトオオオ!!」

獅子座を形成する星がボールに集まり、輝きがいつそう増す。そして獅子神は雄叫びをあげながら、煌々と輝くシユートを放つ。

「ロックシール——ぐああああ!!」

先程と同じように地面に手を突っ込み、盾とは言いがたい岩を構える。だが、すぐにヒビが入り砕け散った。

「・・・まつ、連携も悪くな——」

「やったああああ!!煌!やったわよおおお!!」

「聞こえてる。聞こえてるから耳元で叫ばないでくれるかな?」

「ごめん!一言謝り今度は星見を抱き上げる。抵抗しても無駄だと察したう星見はされるがままに持ち上げられる。周りはその様子を微笑ましそうに見ていた。

「この試合はこちらが先制というわけだね。幸先のいいスタートで安心したよ」

「やっぱり先制点を取ると気持ち的に楽だよ。まあ取られてもすぐに取り返せばいいんだけど」

ベンチのみんなも先制できたことに喜んでいる。まず一点。一応ここから一点も取られなければ勝てる。しかし優勝を目指しているチームが一点で満足してはいられない。

相手には一切点を取らせず、こちらはガンガン追加点を取る。それぐらいの気持ちでいかなければこれからの試合には勝っていけない。

「みんな！この調子でいくぞお!!」

「「おおー!!」」

赤城が声をあげ、周りもそれに応える。今回は最初から流れが良い。それでも油断はできない。相手からのボールで再開し、試合は白熱する。

「心配せんでええ！守りにはワイらがおるんやからなあ!!」

「支倉！そこだ！」

「あいよー！まかしとき！」

お互いに声を掛け合い、隙を作らないように尽力する。

「おーい！こつち空いてるぞ!!」

「逆サイドが薄いです！すぐに向かうのです！」

杜来中学も互いに声を掛け合って相手の守りを崩そうと画策する。

「……ステルスステール」

「おっしや！ナイススライディングや！」

千景が再びボールを奪い取り、攻めていく。ドリブル技を手に入れたことよって守りから攻めへの流れがスムーズになった。

「よーし！今度はうちがいくんヨ！！バウンドフレイム！！」

二点目を取るために全力でシュート、燃え盛る炎を纏ったボールは右へ左へとバウンドしながらゴールへ近づいていく。

「うわっ！めんどくさっ!?!」

DF達は右左と不規則に動くボールに食らいつこうとするものの、動きが読めず対応できない。それでもキーパーの山道は落ち向いて跳ね回るボールを見る。

「・・・スプレッドサンド!!!」

拳を地面に叩きつけると、砂が広がり壁が形成される。砂の壁がゴール全体をカバー。ゴールには至らなかった。

「むううう、決まらないんヨ・・・!」

バウンドフレイムはなかなか使い勝手がいい技ではあるが、威力自体は高くないため相手がゴール全体を守る技を持つているとどうしようもない。仮に相手がそういう技を持つていなかっただとしてもそろそろ見切られる可能性もある。

もちろん連携技を使うのもありだが、毎回それでは片方をマークされて終わりだ。や

はりそろそろ新しい技が必要かもしれない。

「帝瑠ちゃん！切り替えていくわよ！」

「！ごめんね、すぐ行くんヨ!!」

それでも今は試合中、反省会は終わってから。相手の反撃に備えて獅子神と共に後ろへ下がる。

「クツソ！あいつら結構早いなあ！」

「まだまだ止まらないぜえ!!波乗りピエロ!!」

「おっと乱発は禁物やで！コールドカッター!!」

「おおっ!?水が凍って制御がああああ!!?」

「うわあ、顔面からいった・・・痛そう」

一進一退の攻防が続き、試合は膠着状態へ。奪い、奪われ、奪い返し、攻める。その均衡が崩れたのは前半終わりがけだった。

「今度こそは決めたいねえ！タイダルウェイブ!!」

ボールを奪おうとしたDF達がまとめて波に呑み込まれる。これはチャンス、波を潜り抜け、斧街と共に現れたのは・・・

「なっ、お前は!!?」

「ガハハハッ！たまにはワシのパワーを別の角度から見せてやろう!!」

いつの間にか上がってきていた盤上。技なしとはいえチームのパワー系の二人のシュートが打ち込まれる。

しかも斧街が事前にDF達を突破してかなり接近していたため、技を出す時間もなくシュートブロックもできない。

「……クッ！止める!!」

両腕でガツチリとボールを抑えこむ。しかし二対一の勝負、不利な戦いで健闘したものの最後には押し込まれボールが手から離れる。

「ゴール!! ナイスシュート!!」

「いいねえ! あんなん見たらウチもシュートとか打ちたくなってきたわ!」

そしてこのタイミングで前半終了のホイッスルが鳴り響く。お互いを褒め合いながら全員ベンチに戻り、後半戦へと備える。

とりあえず二点差。あとは油断せず……いや、このチームならその心配はない。慢心して倒されることはないだろう。

「みんな! この調子でいこうな!!」

仲間を信じ、声を出してチームを鼓舞。そして赤城は誰よりも先にフィールドへと戻っていった。

## V S 杜来中学 後編

後半戦、前半である程度得点できたため守りを固めるのも考えた。とはいえ今後のことを考えると受け身になることはできない。

—— 星見

—— 麻宮

—— 獅子神

—— 赤城

—— 佐原

—— 盤上

—— 支倉

—— 黒鉄

—— 淀屋

—— 裁野

—— 東条

チームで相談し、後半からのフォーメーションが決まる。まだまだ余力がある盤上を交代せず、前半のFW三人体制からいつものツートップスタイルに変更する。多少攻めの姿勢を崩しつつも、守り一辺倒というわけではなく隙があれば得点を狙う。

「ふう……」

試合の半分を終え、赤城は大きく深呼吸をする。負けたくない。試合に勝ちたい。み

んなともっと一緒に戦いたい。そして、共に優勝したい。

一緒に試合で戦い、練習していくうちにそんな思いが日に日に強くなっていた。

「なかなか手強いです。このままだと負けてしまうのです」

一方負けている杜来中学。点差は二点、決して近くはない。加えて相手の守りは堅いということもあり、崩すのは容易ではない。

とはいえ後半戦がまるまる残っている。近くはなあが、決して追い付けない点差というわけでもない。

「すみません、もっと止められていたら・・・」

「そんな顔すんなって！それ言い出したら俺らもボール取れなかったし！ここからは守ってガシガシ点取ってこーぜ！」

それに実力の面で見ても、極端に大きな差があるわけではなさそうだ。たしかに相手の方が強いが、ちゃんと的確な行動を取り、相手の隙をついて綻びが出たところをしっかりと叩けば勝機はある。

もちろん相手の隙を見逃さず、ちゃんとそこを叩けるようにするのは簡単なことではない。基本をしつかりするというのは意外と難しい。



「まったく、楽ではありませんね」

「はっはっはっ！それぐらいがいいだろ？」

それでも簡単にできるならやっていても面白くない。難しいから達成感があり、達成するために考えることがまた面白い。

「あつたり前じゃないっすか！強いやつに勝ってこそっしょ!!」

「うふふ、その通りですねぇ」

「当然です。みんな、絶対に勝利するです」

まだまだ諦めていない。むしろここからだと思気込んでいる。それならば応えよう。自分のため、チームのためにも。

ハーフタイムが終わり、後半戦が開始。城翔中学からのボールで始まり、前半の勢いのままに攻め上がっていく。

「ふふん！今度は私一人で決めてやるわ!!」

ボールを持った獅子神が相手をかまし、ゴールまで一直線で突き進む。さきほどは連携で決めてきたが、自分はそれだけではないぞと、今度は一人で決めようと果敢に攻

める。

「甘いです。前半のようにいくと思うのは大きな間違いです。ストーンレイン!!」

そんな獅子神の前に立ち塞がる石切。小さな石が雨のようにパラパラと降り注ぎ、地味な痛みで道行くものの動きが鈍る。

「ちよつ、痛い! 地味に痛い!?!」

「それではボールはいただくのです」

「ちよつと待つて! ああもう痛いわね! 地味だけどー」

鈍った動きの間を突かれ、簡単にボールを奪われてしまった。やはり前半である程度動きを読まれているのか、なかなか思うようにいかない。

「ナイスキャプテン! こつからは俺達のターンだな!」

「ええ、今度は僕らの番です」

杜来中学の選手はボールに奪われないようまずはDF達が確実性を重視したパス回し。次にMF達にパスが繋がりが、そこからドリブルで運んでいく。

「皆さん頑張ってますねえ。では私も・・・やりましょうか」

ボールは中盤で待機していた夢見まで届く。格別速いわけではなく、力強いわけでもない。それでも不思議と止められないテクニカルな攻めを見せる。

「おーし! ワイが相手や!!」

他の選手が突破される中、真正面から対峙した淀屋。すると夢見は突破しようという素振りを一切見せず、淀屋をジーっと見つめる。

そして今度は何かに気づいたような素振りを見せ、淀屋に話しかけた。

「・・・おやあ？あなた疲れていませんか？」

「ん？そりやまあ練習しとるからな、疲れも溜まるわ」

「それはいいけませんねえ。無理は身体に毒ですから、ちゃんと休んだ方がいいですよ。なんならお手伝いしましょうか？・・・グッドスマイル、おやすみなさい」

夢見が腕を振るい、淀屋は桃色の煙に包まれる。煙に包まれるやいなや、急激な眠気に襲われる。

「な、なんやこれ・・・？クソツ、これしきのことであええええおやすみ・・・」

目をこれでもかと開き、気合いで耐えようとすると、どんどん瞼が重くなる。力が入らず膝をつき、やがて目を閉じて完全な眠りへと誘われた。

なお耐えた秒数、五秒。

「うへへえ・・・これでワイもモテモテやでえ・・・」

「淀屋貴様？！俺を差し置いてなんて良い夢を見てるんだっ！！俺にも共有しろ！！」

どんな夢を見ているのかが知らないが、幸せそうなのはたしかだ。なぜキーパーである東条に聞こえているのか、それは考えてはいけない。

「今です、マッドショット!!」

「おおよつべ!?!クロスブリーダー!!」

試合中と運転中はよそ見をしてはいけない。どこから何がでてくるのかわからない。注意しておかないと取り返しのとつかないことになりかねないのだ。

「ふーつ、あぶねえ。我ながらナイス!」

「モテ期やあ・・・夢にまで見たモテ期が遂に来たんやあ・・・」

「あんたはいつまで寝てんのよ!?!起きなさい!!」

「へぶし!?!」

スパンツ!?!という音が響き、淀屋が目を覚ます。まったく忙しいチームである。

「わ、ワイは何を・・・めっちゃええ夢を見てた気がするんやが・・・」

「淀屋ー!?!思い出せ!!思い出して俺に共有するんだっ!!」

「おーい!?!試合中だから集中してー!!」

「俺も気になるからちやんと後で思い出すんだぜー!」

フィールドからベンチまでもうてんやわんや。うるさいことこの上ない。

「もうやかましいんヨ!!」

「・・・試合に集中できないです」

・・・忙しいチームである。

ちよつとした騒動はあつたが試合は真逆。互いに進展がない状況。

「残り何分だ？」

「もう半分過ぎてるで！このまま守りきろな！」

「そうはいくか！」

「試合はここからだ・・・！」

最初の二点差から試合は動かない。お互いの守りが堅く、なかなかシュートを打つ機会が来ない。時間だけが過ぎていくばかりだ。

「ああクソ！罅があかねえな！こうなりや一か八か・・・フライングフイーーツシュ!!」

膠着状態となった試合に風穴を開けるべく放った魚沼のロングシュート。ボールがトビウオの群れと共にゴールへと一直線に突き進む。

「だったら刺身にしてやるぜ！キラーブレード!!」

「ナイスキープアー！」

とはいえ元々強い技とはいえないフライングフイーーツシュ、加えてロングシュートというところもあり、今回はキラーブレードで苦もなく止めることができた。

「オツケーオツケー！良いシュート!!」

「何もできないよりずっといい。悪くない判断でしたよ」

それでも何も起こらないよりはマシ。残り時間も決して多くはない。とにかく隙あらばシュートし、得点を狙う。明確なチャンスがない限りはそれでいいだろう。

「なんの！すぐ奪い返して攻撃するのみ！」

「それやったら奪い返し返しやで!!」

守りきりボールを運ぶも相手の守備に阻まれる。ならばもう一度奪い返さんと今度は支倉が仕掛ける。

「ゴールドカッター!!」

「おおっと、何回も見りやさすがに見切れるぜえ!!」

前半、後半で止められ続けたこともあり、ここは無理やりいかずおとなしくパス。やはり相手も対応できるようになってきていた。

「路津宮！そつからシュートだ！」

「ここから、ですか・・・」

ややゴールからは遠いため、ここから打てば威力は下がる。とはいえここから正面突破する場合、三人を相手しなければならぬ。自分のドリブル技術では少々厳しい。

その間にボールを奪われる可能性もある。それに今から逆転するとなれば三点取ら

なければならぬ。あまりもたもたしている時間もない。

「わかりました」

総合的に見ても合理的な判断。路津宮は了承し、ロングシュートを敢行しようとする。

「今だ!! さつき考えた合体技を食らいな!! フライングマッドフィッシュ!!」

「なっ!?!」

が、シュート態勢に入ったところで魚沼が割り込む。地面から大量のトビウオが飛び出し、泥を受けて一匹一匹が若干大きくなる。僅かながらサイズの上がったトビウオの群れがゴールに襲いかかる。

「きよったな!! 黒鉄! 裁野先輩! いきまっせ!!」

一方城翔中学のDF陣、唐突な相手の連携技には驚くことはなく、ディフェンスからシュートブロックに移行する。

淀屋が中心となり、裁野、黒鉄の二人が脇を固める。そして淀屋が数回回転しながらバク宙を決め、どこからか現れた城の頂上に立つ。

「その目に焼き付けえや!! 一夜城!!」

月の光を浴びた和風の城がシュートを阻む。昼間なのになぜ月が出ているかは考えではない。強いて言うなら超次元だからであろうか。

「どうや！この城は崩されへんやろ!!」

「やれやれ、さつき寝とつたのにようゆうたな。でもナイスディフェンスやったで！マサキ君！」

言葉通り相手のシュートでは城を崩すことができずここで止まる。悪くないやり方ではあったが、城翔中学の方が一枚上手だった。

「クツソ！俺もいいところ見せたかったのになー!!」

「ぶつつけ本番でよくやりましたね。失敗したらどうするんです？」

「そのときやそんなときだろ！」

一夜でもぶつつけでもなんでもいい。使えるものを使い、やれることはすべてやる。考えられる限りのベストプレーでぶつかりあう。

「さあワイらは決めてやったで!! 一気に決めてこんかい!!」

「だからお前はさつき寝てたろーが!!」

仕事をしたとはいえ、ぐつつり寝ていたやつが何を言っているのかという呆れ一割、自分だけ良い夢を見てズルいぞという嫉妬九割の言葉を受けつつ淀屋はパスを出す。

「みんな！もう一点取ろう！」

「おう！当然じゃ！」

みんなで作ったこの勢いを途切れさせてはいけない。今ならもつと先へいける。



もつともつと先、ずっと先の景色を見たい。

「キャプテン！」

「ああ！ブレイズファルコン!!」

まだまだ余力はある。出し惜しみはせず中盤の守りを突破し、上がってきていた獅子神と佐原に向けてパスを繋ぐ。

だが相手もこれ以上の失点は許さない。ここでも石切が道を阻む。

「させないです！ストーンレイン!!」

発動が早く、範囲も広い技。一応我慢すれば抜けられるのかもしれないが、地味に痛いのが続いたためあまりそうしたくはないし、そもそもそれで抜けられるという保証はない。

他にパスを出せる選手も周りにいない。一度後ろに戻すのも悪い考えではないが、今の勢いのある状況を止めたくはない。

ならば考えられる方法の一つ、降り出す前に一気に駆け抜ける。

「ダツシユアクセル!!」

「疾風ダツシユ!!」

普通に走っても間に合わない。ドリブル技を使用し加速しながら抜き去る。さらに獅子神と佐原は勢いを落とすことなくそのまま突っ切る。

「合わせてくれるかな？ マツハウインドッ!!」

「ふふん、もちろんです!! ライオンハートッ!!」

前半とは違い技でのツインシュート、しかも今回は別の技の勢いをそのまま利用している。スピードとパワー両方を内包したシュートが見事に炸裂した。

「あ、あんなことが・・・!」

予想を超えてくる一撃、キーパーは驚きを隠せなかった。

「みんなー！ ナイスなんヨー!!」

「あれ、結構難しいと思うけどよく合わせたねー」

「そうでしょう！ もつと褒めていいわよ!!」

これにより三点差。さらに点差が広がった。残り時間も考えれば、間違いなく安全圏に入った。

「クツソオ、こりやきちいな」

「はい、時間は残り僅かです。いくらなんでも厳しいです」

「残念ですねえ。私達はここまでですか・・・」

相手もそれを理解している。残念ながら勝てないだろう。ここから四点、最低でも三点。一応試合開始0分で一点を取るという頭のおかしい実例はあるものの、このチームのメンバーでそれをできる人などいない。あまりにも現実的ではない。

はつきり言つて勝ち目はない。

それでも試合を捨てて適当に、ということとはしない。最後まで戦い抜くのが礼儀というもの。相手を気持ちよく次戦に送り出すため、試合が終わるその時まで全力のプレーで激励する。

「城翔中学!!今回は俺達の負けだ!だがなあ、ただではやられねえ!!最後にデツカい火花を打ち上げてやる!!受け止められるもんなら、受け止めてみやがれ!!」

試合再開後すぐにバックパス。パスを受け取った叶が場所を調整しつつ少し待機。味方が配置についたところでシュートを放つ。

「みんなー、いっくよおー!!」

「ただのシュート・・・じゃない?」

「これが僕らの切り札・・・」

ただのロングシュートかと思つたが、そうではない。続けて直線上にいた路津宮もシュートを重ねる。それによりさらに威力が上がる。そして――

「――トリプルブーストオ!!!最後の勝負といこうぜえ!!!」

「うおっ！ヤバそうなのが来やがった！」

最後の最後に魚沼が放った一発で威力が激増。今まで受けてきた技より遥かに強力なシュートが襲いかかる。

「おもしろいやんけ！そんならこつちも三人技や!! いくで!!」

「・・・ああ！」

「いくぞ、一夜城!!」

こちらも持てる力を使ってシュートブロック。三対三の勝負だったが、相手の力が上だったのか。はたまた相手の思いが威力を底上げしたのか、破られてしまった。

「クツソ、アカンか!」

「・・・あとは任せた・・・っ!!」

「任せとけて!! デスブリーダー!!」

三人が威力を削ってくれた。自分が無駄にするわけにはいかない。腰と腕に力を入れ、真正面からシュートを受け、踏ん張る。

味方のシュートブロックもあつたはずなのだが、まだ重い。相手の思い、底力をひしひしと感じる。

「た、たしかにやるな・・・! 驚いたぜ——

——でもなあ、俺だって負けてねえんだよ!!!」

ゆっくりとボールの回転数が減っていき、やがて完全に止まった。ゴールラインは割れていない。この最後の勝負は・・・

「俺達の、勝ちだな!!」

・・・東条達の勝ちだ。

その声と共に試合終了のホイッスルがフィールドに鳴り響いた。城翔中学と杜来中学の試合は3対0で城翔中学の勝利が決定する。準決勝への切符を手に入れ、グラウンドを後にした。

## まだ見ぬ仲間達

杜来中学との試合の翌日。この日から城翔中学では授業でサッカーを取り扱う。フィールドはグラウンドの半分ずつ。経験者と素人がある程度混ぜて行う。

それゆえ本来のフィールドよりかなり狭くなるが、全員が全員運動できるわけではない。初心者の人のことを考えればこのぐらいの方がいいだろう。

「やっぱ必殺技ってカッケーな！」

「俺にも教えてくれよー、頼むよー」

「はっはっはっ、教えてやりたいところだがそんな甘い話じゃないんだな！これが！」

快進撃を続けているだけあって、サッカー部に所属している人の元に生徒が集まる。

特に必殺技はロマン。使えるものなら使いたいとサッカー部の面々に教えを乞うが、さすがに断る。そもそも教えてすぐにできるようなものではない。教えを乞われて悪い気分ではないのだが。

なおこの試合に関しては必殺技は使つてはいけない。使つてしまうと素人どころか経験者でもついていけないなくなる人が出てくるため当然といえば当然である。

「来たで来たで!!ようやくワイの時代が来たみたいやな!!お前らついてくるんやぞ!!」

「どんなシュートでも俺が止めてやるからバンバン攻めてけよ!!」

今授業を受けているのは二年三組と二年四組。三組には淀屋と華咲、四組には東条、あとサッカー部とは言い難いが一応入江が在籍している。

ここがモテどころ、今こそサッカー部で培った技術を見せる時だといわんばかりに気合を入れるおバカ二人。

「On Your Marks. Set………」

「それ陸上やろ!!てかなんでそんな発音ええねん!」

簡単な練習を終え、ツツコミと共に試合が始まる。いつもより数段緩い試合。経験者、および運動神経の高い人が中心に試合を組み立てていき、初心者にもボールを渡してみんながプレーできるように計らう。

「うおっ!このボール、生きてる!」

「俺のシュートをくらえ!…あ、あれ?」

とはいえ初心者はやはり慣れないのか、動き跳ねるボールの動きについていけず、空振りしたりパスを受けとれずと悪戦苦闘する。

「じゃあ!俺のドリブル見せたる!!」

「はいハンドね」

「な、ナニイ!」

中にはバスケットボールのドリブルと間違えおもしろい手を使っている者もいた。今日はサッカーだという話を聞いていなかったのだろうか。さすがにサッカーのルールを知らない人はいないと信じたい。

「いただきー！」

「いけるで!!そのまま点取ってこいー！」

そんな中、淀屋チームの一人が相手のディフェンスを突破し駆け上がっていく。当然サッカー部と比べればぎこちないドリブルだが、決して下手ではない。

「よっしー俺の出番だなー！」

GKとしてチームの壁を担っている東条、遂に來た活躍のとき。相手のシュートを完璧に受け止め、女子からキヤーキヤー言われる自分の姿を想像し笑みを浮かべる。

そう、元はといえばこのために入部したのだ。女子にモテる、ただそれだけ。ただそれだけである。今この瞬間をもってして、彼の悲願は達成される。

「見せてやろうじゃないか。城翔中学最後にして最高の壁と言われている東条斬の圧倒的実りよ——」

「はい、いただきますよ」

「——あつっ？」

・・・と妄想に耽っていたのも束の間、DFの女子選手が先にボールを奪い、そのま



まサイドから駆け上がる。おまけに誰も止められないと来た。

「あ、あれ?」

「あの子めつちや早いぞ!」

ドリブルを止めようとするも見事に避けられる。そこで立ち塞がるのはこの男、淀屋マサキだ。

「まったくしゃあないわなあ、ほんなら見せたるか。男淀屋マサキ、期待の一発かましたるわ!!」

・・・ほんでどこいった?」

「バカ! もう抜かれてる!!」

「ホンマかいな!」

喋りに夢中で突破されたことに気づいていなかった淀屋。普通にスルーされ、最後はフリーになったFWにパスされ逆サイドからのシュートで一点、東条チームに入る。

「・・・マジで?」

もちろん初心者が多いということもある。しかしそれでもあのドリブルのスピード、

そしてディフェンステクニックは目を見張るものがある。

「さあ、もつと攻めていきましようか！」

「お、おー！」

予想だにしない展開に敵味方全員困惑していた。

それからあれよあれよと試合は進み、あのあと三組側の経験者組がなんとか一点をもち取り同点で終了。初心者もなんだかんた楽しめたらしく無事に終わって今は片付けをしている。

「すまん、ちよつとええか。ええと・・・」

「たしか伊喜・・・だよな？」

「ええ、そうですよ」

東条と同じクラスの伊喜 厘羽。授業では積極的に発言し、休憩中も輪の中心となつた会話をしているので印象に残らない、という人ではない。

ただ何か特別目立ったことをしているわけでもない。そのため会話することはあつても気に止めていたわけではなかった。ちよつと胸が大きいなどは思っていたが。

「・・・おっぱいデカ・・・じゃなくてサッカー上手くね？」

しかし今は事情が違う。気を抜いていたこともあるが、あのプレーは普通に上手かった。それとおっぱいが若干揺れていた。

「ええ、経験者ですから」

たしかに最初のチーム分けの時に経験者とは言ってた。ただ経験者といっても具体的な程度は聞いていなかった。それこそ昔チームでやってたとか、少しかじっていたとか、その辺りはまったくわからない。

「それは聞いてんねん。具体的にどんくらい大きい・・・やなくてできんのや?」

「そうですね、たしか三年の頃に入ってから卒業までなので・・・四年間ですね。あつ、大会の予選にはなりますが一応準優勝まではいったんですよ。あとで写真見ます?」

何となく察してはいたが、ガツツリ経験者だった。

「じゃあなんでサッカー部に入っていないんだよ!」

それならば入ってくれたも良かったはずだ。サッカー部の宣伝もしていた。しかし伊喜は困った表情を浮かべ、その理由を答えた。

「そう言われましても元々小学生までと決めていましたし。何より屋上で大声出して勧誘する人と同類に思われたくないじゃないですか」

「・・・せやな!」

「・・・ぐうの音も出ないぜ!」

納得しできない回答に肯定せざるを得なかった。

「へつくし！．．．こんな時期に風邪？やめてくれよ．．．」

その頃の赤城はというと、くしやみをしていた。次は準決勝。こんな大切な時期に風邪など勘弁してほしい。体調管理は万全にしておかないといけない。

「でも熱はないし身体も怠くない。たまたまかな．．．？でももし風邪だったらまずいよなあ。一応後で熱計って——」

「おい赤城イ!!聞いているのか!!」

「あつはい!えつと．．．なんでしたっけ?」

この後怒られたの言うまでもない。

「今日はナニワ修練所の日!取り組む内容はみんなに任せるから、自分に必要だと思う

ことをやる！以上！」

放課後、熱がないことを確認した赤城は無事部活に参加する。今日は修練所での特訓のため、それぞれが考えて自由に鍛える。

長所を伸ばすか短所を補うか、はたまた新しいことに取り組むか、今の自分に必要なものを考えて練習する。

「・・・あれ？星見と千景はどこ？」

「ああ、たしか一年は集会だったろ？」

「ワシらの頃もあったのう。たしかたるんどる！と言われたか」

「恐らく毎年言うことが決まってるよ。多少内容は変わるとは思うが、だいたい一緒のことを言っていると聞いているよ」

「あー、そういえばあったかも・・・じゃあもうちよつと待とうか！」

今日取り組む内容を確認したあとで星見と千景がいないことに気がつく。どうやら一年生は集会があったため遅れているらしい。

もうすぐ夏休みなので、それに向けての注意などがされているとのこと。赤城もそんなことあったなと思いだし、とりあえず雑談でもしながら平和に待つことにした。

「淀屋ア!!」

と、平和な時間はけたたましい声とともに終わった。

「んあ?・・・柳生やんけ。どうしたんや?」

「ホントだ、柳生じゃない。淀屋と知り合いなの?」

「あれ、知り合いなの?」

名前を呼ばれた淀屋と現在彼とクラスメイトである獅子神が反応する。

「こいつは柳生牛尾。一年の頃のクラスメイトや。こいつも野球が好きでな、まあチームは違うんやがなんやかんやそれで話してたんや」

どうやら淀屋と柳生は一年の頃、同じクラスで共に野球好きだったらしい。そういえば休憩時間の時にちよこちよこ淀屋と一緒にいたような気もする。

「そんなことはどうでもいい!!俺と共にモテない男の道を歩もうって約束はどうしちまったんだ!」

「はあ?何言うとんねん!!全然モテとらんやろが!!」

まずそんな悲しい約束をするのはどうなのだろう。そして淀屋も悲しい反論をしている。モテる方法を模索する道はなかったのだろうか。

「ふざけんじゃねえ!!影で女子がこそこそ言ってるんだよ!!淀屋についての話をな!!」

「ほーん、そーなんか・・・何イ!? そいつはホンマか!!」

柳生の言っていることは事実である。順調に勝ち上がっていることもあり、サッカー部は現在話題の中心にある。そうなるとう然サッカー部員の話になるのは必然である。

もつとも恋愛対象としては数に入れられてないのだが・・・その情報は遮断されていた。

「へっへっへっ、そうかあ、ワイにも春が来たんかあ。まつ、今はもう夏やけどな!!」

そんなことを知らない淀屋は完全に調子に乗っており、頬が緩んでニヤニヤしている。

「淀屋、お前変わっちゃまったな!! お前は友情を裏切るようなやつじゃなかっただろ・・・!!」

「俺は!? なあ俺はどうなんだ!? サッカー部最後の砦の東条斬君の噂話はないのか!!??」

「ええい、ならば俺もサッカー部に入る!! それで俺もモテる!!」

「はあ? もう大会始まつとるし無茶言うなや」

「俺はどうなんだよオオオオオ!!! 女の子の話題に俺の名前はないのかアアアア!!!」

「うっさいわ! あーもうキャプテンからもなんとか言うたつてくれ!」

もうすでにメンバー登録は済ませている。今さら入れるというのも無理な話だ。

「ん? できるけど?」

「はっ?」

・・・が、できないという返答とは真逆の言葉が返ってくる。困惑する淀屋に対し、麻宮が補足で説明する。

「ああ、可能だ。過去にも途中から登録された事例はある」

かつて帝国学園の選手が全国大会の途中で雷門中学に編入し、そのままサッカー部に加入して優勝した事例がある。ちゃんと手続きを踏めば途中からでも参加は可能である。

「マジかよ・・・ありなんか、それ」

「そうは言っても公式が良いって言ってるし・・・じゃあ登録しようか!俺は新しい仲間が来てくれるのは歓迎だ!」

「はっはっはっ!これで俺もモテるぞ!これからよろしくな!キャプテン!」

赤城からすれば仲間が増えることは全然問題ないので特に気にすることなく入部を許可する。しかしここで裁野が待ったかける。

「おい、入るのは構わない。だが形だけ入っておいて適当にするつもりじゃないだろうな?」

「せやせや!!お前モテるためだけに入るとか恥ずかしくないんか!!恥を知れ!!」

「・・・マサキくん、ブーメラン刺さってるでー」



お前が言うな、の典型的な例である。まあ淀屋はともかく裁野が言っていることは決しておかなければならない。すると柳生はまったく怯むことなく即答してみた。

「おっと心配は無用！やるからには全力だ！ちゃんとやらねーと女の子にモテないしよ！」

「・・・わかった。形はどうあれやる気があるならいい」

一応やる気は充分なようなので無事許可された。よく怖いと言われる裁野だがやる気さえあればちゃんと見てくれるいい先輩である。

「なんか解せんわなあ・・・」

「まあまあいいじゃないですか、細かいことを考えても仕方ありませんよ」

「せやろか・・・待てや、なんでおんねん？」

何の淀みもなく会話に入ってきたため一瞬気がつかなかったが、今日の授業でサッカー部伊喜ががいつのまにか隣にいた。しかも缶ジュースを持っており、そこそこ飲んでる。それなりに前から観戦していたらしい。

「ええ、最初はてつきり変人集団かと思っていました。しかしあなたがたの話聞いてるとそうでもなく、なんなら面白そうだったのでぜひ入れてもらえたらと思ひましてね」

まさかの二人目である。今日はそういう日なのだろうか？ともあれ伊喜の場合実力

があることは保証されているため戦力として申し分ない。

そのため加入するのは何も問題ないはず。しかし赤城は先程と違って何か引っかかっている様子。もちろん実力に関しては赤城は知らないが、そこではないらしい。

「あー、うん、もちろん歓迎するんだけど・・・変人集団って何の話？なんで変人扱いされてるの？」

赤城が引っかかっていたのは変人集団の部分だ。たしかに変わった人がいるのも事実だが、そこまで大々的に変なことをした記憶はない。

「キャプテンのせいだぞ変人筆頭」

「え？」

「よーし、これで俺も正式加入ってことだな!!これから頼むぞ!!」

「では私も便乗させてもらいましょう。ポジションはDFです」

「待ってなんで変人扱いされてるの？むしろまともな方だと思っただけど？」

「俺の噂は!!俺の話題はないのか!!?!」

「・・・どうしたものか」

「考えたって仕方ないんじゃないかなー。黒鉄君も諦めておかし食べたら？」

「・・・いただこう」

「ちよつと諦めないで!!なんとかするんヨ!!」

多少の騒ぎならどうかかなるのだが、明確なストツパーがない城翔の場合ここまで状況になると収拾がつかない。今までの中でもトップクラスの力オスな状態。

この騒動をどう沈めるべきか、渦中外のメンバーがどうしたものかと悩んでいると部屋のドアが開いた。どうやら一年組が来たらしい。

「……すみません、集会で遅れました」

「ねえ、うるさいんだけど……まあいいや。それよりキャプテン、入部届け来てるけどどうする？ああ、なんならもう来てるよ」

「転校生でサッカー部入部希望の寺國 古康です！先輩の皆さん！ビシバシしごいてくださいっす!!」

「今!?今なの!?!」

「こんなにもタイミングが悪いことがあるだろうか。」

「えっ、たしかにワーツ!ってなってますけど何かまずかったですか?」

「うーん、大丈夫やで。マズくはないねん。ただちよーつとばかり騒がしいことになっててな、それでもええか?」

「二年生の麻宮涼華だ。ポジションはFW。よろしく頼む」

「なんでこの状態で普通に自己紹介できるんヨ!?!」

ただでさえややこしいことになっているこのタイミングで入部希望者が増えた。し

かも三人。事態が収拾に向かうどころかつかない方へアクセル全開で行ってしまった。もちろんメンバーが増えることは喜ばしいことなのだが・・・ちよつとだけタイミン  
グをズラしてほしかった。

「うるせえぞサッカー部!!ちよつと黙れ!!」

「す、すみませんでした!!」

結局他の部からうるさいという苦情が来るまでこの騒動は続いた。

## ナニワ修練所 ver 3. 0

加わった三人の正式な手続きについてはとりあえず後にすることにして、まずは練習をするために城翔中学サッカー部はナニワ修練所まで移動することになった。

「みんな準備できたか？それじゃあいくぞー！」

「おー！」

いつものメンバーに加え、新たに加入した三人も早速参加する。ただユニフォームはあったもののスパイクまでは用意できなかったので、今日はひとまず運動靴で参加する。

「そういえばキャプテンいつもより元気そうじゃない？」

道中、話は赤城の様子についての話になる。特にやましいことではないが、一応本人には聞こえないように話す。

「・・・新しい技を覚えて、試合でも上手くいったから・・・でしょうか」

「はあー、単純なやつぢやなあ。中学生にもなれば大人の余裕というやつをやな・・・」  
「キミは言う権利ないよ」

程度に差はあれど、全員赤城の機嫌がいつもより良いことに気づいていた。ただ騒動

に巻き込まれただけのようにも思えるが、恐らく技ができたことにはしゃいでいるのだろうと結論付けた。

しかし実際は少し違う。もちろん技ができたことに対しての喜びを感じているが、それ以上に相手と対等に、そして仲間と遜色ないレベルで戦えたからである。

そもそも覚えようと思ったのは役に立ちたかつたから。周りに追いつきたかつたからである。

なので間違いとまではいえないが、技ができようができまいが関係なく、ただチームメイトの実力に追いつき役に立てれば本人は満足していた。

そして前回の試合、結果的に新たに完成させた技は上手く機能し、チームメイトと同じように戦えた。自分も成長し、ようやくみんなと同じ位置に立てたと実感している。そのため今日は目に見えて元気なのだ。

「よーし、折角だから走るか！」

「おもしれえ！早速俺の実力を見せてやるよ！」

「やるのはいいんですが、練習前にバテませんか？」

自分は肩書きだけのキャプテンではないかという気持ちはずつとのしかかっていた。その気持ちは完全に消えたわけではないが、ひとまず落ち着いている。

まだまだ足りないことは多いものの、今の自分ならみんなと共に歩いていける。そう

信じている。

無事にナニワランドに到着し、いつも通り入場。そのままアトラクションには乗らずホラーハウスの裏側に入る。例によつてナニワ修練所へ入場する。秘密の場所なので誰もいない。

「やつと来たのね！」

「遅すぎて遊びに行くところだったぜ」

かと思いきや、入江と太智が来ていたらしい。この場所にいるのはチームのメンバーを除けばこの二人以外にはいないので、声だけで誰がいるのかは予想はできていた。

「どうせそろそろ物足りなくなってきたとか言う頃でしょう？ まっ、なつてないとは言わせないけどー！」

「だから施設をアツプデートしといたんだぜ！」

「ここ結構広くてねー、改造も捗るわ！ まだ開拓できてないところもあるみたいだし」

どうやら新しい施設が追加されたらしい。ここでの練習はかなりキツかったものの、最近では周回し慣れてきたのでこの改造はありがたい。

・・・変なことをされていなければの話だが。

「で、早速データ取りたいんだけど誰かやってくれるかしら？今日は天才である私がこの目で見て確かめるけど？」

「うーん、やってみたいけど・・・今日は三人の実力が見たいから今日はパスかな。また次来るときにやるよ」

赤城は三人の実力を見るために今回はスルー。やってみたい気持ちはあるが、さすがに新入り三人をいきなり知らない場所に連れてきて後はご自由に、とはできない。

「はい、じゃあウチがやるんヨ!!麻宮ちゃんも一緒にやろー!」

「ここで三日月が志願。さらに麻宮にも一緒にやろうと誘いかけた。

「私もか?しかし私は・・・」

「ダメ?」

「・・・わかった、付き合おう」

「ありがとう!」

麻宮は少し渋ったが、折角誘ってくれたのに断るのは少し気が引けたので一緒に練習することにした。

「他おらんのか?しゃーない、じゃあワイが行ったるわ」

「つとお、冗談はやめろよ?俺が行くしかねえだろ」



「いやいや、ここは先輩のウチに任しとき」

「えっ？やるの？じゃあ私も・・・」

「「どうぞどうぞ」」

「なんなのよあんたらーっ!!!」

ぐだぐたなやり取りもありながら、最終的には赤城と新入り三名を除いたメンバー全員が新しい施設を試すことになった。

「よし、だいたいデータ取れたから次行くわね。それじゃあ続けて頑張ってるねー」

しばらく入江がいる状況で練習。そして満足の行くデータが取れたのか、彼女は軽く手を振って出ていった。ちょうどいい区切りだったので、三日月はゴロンと寝転ぶ。

「これ、結構キツイんヨ・・・!」

そこまで長時間やっていたわけではないが、相当キツイ。

三日月は寝転んだまま顔だけ上げ、自分をこのようにした相手を見る。その視線の先にはそびえ立つ壁。それは何も無い綺麗な壁ではなく、足場のようなものが設置されている。

そう、ボルダリングの壁である。

「これ・・・ボルダリング?」

遡ること数十分前、三日月は目の前の壁を見てポツリと呟く。そびえ立つ壁に複数の出っぱり。ボルダリングのものである。テレビなどで見たことあるため知っていた。

「そうーほら、あそこに足場があるでしょ?後はまあ・・・見たらわかるわよね?とにかく光つてるところのボタンを押す。時間内に全部押せたらクリアよ」

初めて来た時にあつたものがかなりとんでもない物ばかりだったため、思っていたよりも普通なものがか来ていると感じてしまう。感覚が麻痺しているからのだろう。

その証拠にこれではサッカーではなく完全に別競技になっている。やつぱりおかしい。

最もこの世界のサッカーは選手をバットにしたり玉乗りしたりかめ〇め波を打つため、はなから常識など通用していないが。

「でも面白そうー早速やってみるんヨ!!」

正直どこまで役に立つのかは疑問ではあるものの、ボルダリング自体全身の筋肉を使

うためまあ無駄にはならないだろう。

それに元からボルダリングは面白そうと思っていたためやる気自体はある。幸いにも初心者用なのか足場は普通のものよりかなり広く感じる。

そんなわけで早速取り組もうと手を伸ばす。

「あつ、サッカーだから使つていいのは足だけよ。もちろんボールも使つてね」

「・・・えっ?」

そんなわけで片足でボールをキープしつつ、次の足場に移り、なおかつボタンがあるところを目指さなくてはならない。いくらバランス感覚のある三日月でも厳しい。

広く感じた足場だが、手を使わないとなれば話は別。初心者どころが上級者も苦戦するステージに早変わりだ。

「ううん・・・ちよつときゅーけーするんヨ・・・」

一瞬でも普通だと思つた自分自身に後悔した。飛び移るのに失敗すると落ちる。それにボールをキープしながらなので、実質片足しか使えない。もれなく足場はどんどん狭くなる。難しいことこの上なし。数回でかなり疲れてしまった。

「なら次は私でいいか?」

「うん！次はどうぞ、なんヨ！」

三日月が休憩している間、今度は麻宮が挑む。

「もう始めてもいいのか？」

「うん、大丈夫なんヨ。頑張れー！」

練習開始。初トライでも順調に進めていく、さすがのセンスと言えよう。しかし上にいけばいくほど、足場も小さく、より精密な動きが要求される。

あともう少しで半分というところまではなんとか対応したものの、次の足場でボールをキープできず落としてしまう。残念ながら失敗である。

「わあ！初めてなのにあそこまでいけるなんてすごいんヨ！」

「ありがとう」

褒められるのは嬉しいが、少し気恥ずかしたため少し顔を逸らしながら返事をする。

「・・・三日月、一つ聞いてもいいか？」

「もー！他人行儀なんヨ！三日月ちゃんとか帝瑠でいいんヨ！」

「ん、わかった。みかづ・・・帝瑠」

三日月と呼びかけ、ちゃんとされたとおり帝瑠と訂正する。三日月はそれでよしと言わんばかりのにはーっという効果音が似合いそうな可愛らしい笑みを浮かべてみせる。

「改めて帝瑠、同じポジションだからこそ聞きたい。自分のシュートが止められると悔し〜。」

「んん？んー・・・やっぱ悔しいんヨ」

三日月自身、ここ最近は自分のシュートが止められることに気にしてはいる。彼女の自慢の技であるバウンドフレイム、厄介な技ではあるが対策さえしていればそこまで怖い技ではない。

初めて覚えた技、折角磨いてきた技が通用しない。思い入れのある技が通じないのだから悔しくないはずがない。だが、それでも・・・

「でも・・・今の実力でダメなら、もーっつと上手くなればいいんヨ！みんなと一緒に頑張れるし！」

今の技が通用しないということは、同時に高い目標ができるということ。今の自分がダメならさらに上手くなればいい。彼女はそのことにやりがいを見出だしていた。

「そうか・・・もつと上手く、か」

「あつ、そうだ。うちからも一ついい？」

「ああ、構わない」

質問に答えてくれたのに、こちらは答ええないというわけにはいかない。そもそもダメな理由がないためもちろん断らなかつた。

そして麻宮の許可を得た三日月は、先程と違い少し神妙な面持ちで口を開いた。

「麻宮ちゃん、自分がパワー不足なこと気にしてるでしょ？」

「！それは……」

不意に凶星を突かれる質問をされ、返すことが出来ない。三日月はさらに続ける。

「だからシュート力を鍛える練習をさ、返すことが出来ない。三日月はさらに続ける。」

麻宮は修練所で特訓する際、いつもパワーを鍛える練習をしていた。実際今日もシュート力を上げる練習をする予定だった。

「きつとお節介だとは思っただけ……いつも必死で苦しそうだったから今日は誘ったんヨ」

「……そう、だったのか」

なるべく悩みなどは見せないように気を付けていたつもりだったのだが、もう周りが見えていないほど今の自分は必死だった、ということだろうか。

「努力することは素敵だし、大事なことだけど……あのままだといつか潰れちゃうんヨ」  
「潰れる、か……それでも私は……」

「それはダメだって、皆に言われたでしょ？」

「……」

サッカーはチームスポーツ。得意なところを伸ばして苦手なところはお互いにカ

バーすればいい。無論そんなことはわかってる。彼女は決して個人プレーに走ったりはせず、自分で無理だと判断すればパスを出す。

それでも・・・一年前のあの時、自分に力がないから負けた。自分だけが責められるなら耐えられた。だが、悪くないはずの仲間・監督までもが責められた。

今でも夢に出てくる。あの時の自分に力があれば、結果は違っていたはず。同じ後悔はしたくない。

だから自分一人で打開できる必死で力を求めた。仲間が信じられないからではない。仲間を傷つけないための力が欲しかった。

「私は・・・もう、どうしたらいいかわからない」

だが、その力は手にできない。上を目指したいのに、過去にすら追いつけない今の現状を惨めに感じる。

足りない力を求め、そのせいで怪我をし、チームに迷惑をかけ、離れた。そしてもう一度新たな場所でスタートを切ったにも関わらず、またチームに迷惑をかけてしまった。

「・・・私は、弱い」

もう過去の自分になれないことはわかっていた。努力しても届かないことは覚悟していたはずなのに、改めて己の無力さにうちひしがれる。

自分はもう、何もできないのだと。

「・・・弱くなんかないんヨ」

そんな麻宮の言葉を三日月はゆっくりを首を振って否定した。

「だって、辛い思いを背負いながらも、逃げずに今日まで頑張ってきたんヨ」

過去にどのようなことがあったのか、三日月はぼんやりとしか知らない。それでも辛  
い道を進んできたことは知っている。

逃げ出したくなるような時もあっただろう。一度は怪我をして離れたが、こうして  
戻ってきて、自分の弱さと向き合いながらここまでやってこれた。

そんな彼女が弱いわけがないのだ。

「でも、一人で背負うのはよくないんヨ。キャプテンにも言われたんだよね？無理しな  
いで、みんなと協力しようって」

「それは・・・」

「大丈夫。焦らなくていいんヨ。これからはみんなを考えて、力を合わせて、少しずつ強  
くなるんヨ」

「・・・」

自分ではずつと協力しているつもりだった。たしかにチームプレーはしているし、メ  
ンバーとも話しあえている。していないとは言いがたい。



だが、内面ではずっと過去の因果を一人で背負い、無意識に焦り、一人で戦況を変えられる力を求めたばかりに周りが見えていなかった。

「少し、外に出てきてもいいか？」

すぐには考えがまとまらない。一度頭を冷やすためにも外に出たいと話す。

「うん、大丈夫なんヨ。ゆっくりして来てね」

「ああ・・・それと、ありがとう・・・」

感謝の言葉を口にした麻宮に、三日月は笑みを浮かべて返す。麻宮も少しだけ笑みを見せ、一度修練所から出ていった。

これ以上できることはない。後は本人次第だが、三日月は心配していない。それに他人の心配をしている場合でもない。まずは自分がやるべきことに意識を向ける。

「・・・これ絶対難易度間違ってるんヨ!!!」

しばらく目の前の壁に挑戦したが、半分程度までは安定するようになったものの、そこから先はどうしようもなかった。半分より先になるともう足場がほとんどない。そんなところでボールをキープしながら進むのはどう考えても無理。

そもそもボルダリング初心者がいきなりボールキープしながら足だけで攻略しなければならず、オマケに時間制限まで用意されているというのはおかしな話だ。

さつきまでの母親のような慈悲的姿はなく、ぶんすかといった擬音が似合いそうな怒り方をしていた。

「うう……何か良い方法……あつ」

三日月は一度壁から距離を取り、バウンドフレームを使うときの要領でボールに回転をかける。するとボールが上手く跳ね、ボタンを二つ押すことに成功する。

「……思いついちゃったんヨ」

それを見た彼女は先程見せた笑みとは違う、ちよつぷり悪い顔を浮かべ、落ちてきたボールを拾い上げると練習を再開した。

眼前にはかなり傾斜のきつい坂道、その先には人の身長を優に超える巨大な玉が見える。それがゆつくりと押し出され、坂で勢いを増して転がってくる。

「ぬおおおお!!」

全身を使って受け止める淀屋。しばし耐久し、持ちこたえるものの耐えきれずに弾き飛ばされた。

「シンプルだが、単純な力の強化にはいいかもしれない」

「・・・俺もそう思います」

「ちよ待てえ!! 話す前にこれ止めてくれへんか!? また来とる・・・なんか横回転してんねんけど!」

「横回転、これはパワーだけでなく技術も駆使しないと厳しいだろうな」

「・・・力が横に逃げる。それも頭に入れて守らなければならぬ・・・」

「解析しとる場合かぁーッ!! 今度はジャイロ回転かかつとるう!」

冷静に分析する裁野と黒鉄、そしてその間も対応する淀屋。先の話だが、淀屋は翌日筋肉痛になったとのこと。逆に筋肉痛だけで済むのはさすがだと言える。

「うわっ! 滑る! ここすごい滑るわね!」

「なんじゃ!? 地震か!? 避難せんといかん!」

「いや、地面が揺れているのだろう。お陰で思うように動けないね」

「こつちは綱渡りだよー。しかも風が吹いてるからやりにくいねー」

滑る床に揺れる床、さらに強風が吹く最中で綱渡りと常軌を逸した練習が行われる。もちろんボールをキープしながらである。

「・・・これ、本当に意味あるんですか・・・?」

「・・・あつたとしても認めたくないよ」

以前の練習は効果があったため今回も効果があるのだろう。そうだったとしても認めたくはない。なんならそんなトンチキ練習法など今すぐやめたい。サッカー部に入ったことをほんの少しだけ後悔する星見だった。

仲間が新しい練習に色んな意味で苦戦している頃、赤城は既存の練習で新たに入部したメンバーの動きを見ていた。

「なるほど、これはなかなか過酷・・・ですね！」

まずは伊喜厘羽。経験者というだけあって動きは充分。ブランクがあるためまだ完全というわけではないものの、それでも申し分ない。すでに一週間を切っているため時間は多くないが、今の調子なら試合までには問題なく調整できそうだ。

「スゲーっす！これならバリバリ強くなれそうっす！」

次に一年生の寺國古康。転校前からサッカー部だったためブランクはなく、動きもいい。ナニワ修練所の練習に完璧ではないものの、ついていけているため次の試合からでもまだ戦えそうだ。

「おっしや!!一発かましてやる!!」

「ただ蹴るだけじゃダメだぞー。もっとボールを見て、頭を使って——」

「なるほど、こうかああああ!!」

「いや頭使うってそういうことじゃないぞ?」

最後に柳生牛尾。初心者ということもありまだ戦力になりそうな感じではない。ボールにスピードがなく、回転をかけたり、ボールを曲げるといった技術も当然ない。なんなら頭を使うと聞いてヘディングするという古典的なことをやっている。

とはいえ最初から技術を持っているという選手は希有、最初は誰だつてできない。それよりも注目すべきはナニワ修練所の特訓に耐えるスタミナ、そしてパワーに関しては目を見張るものがある。元の力、これから伸び代という点に置いては一番あるかもしれない。

「んだよ、テレビだとこういうことやってんぞ!!」

「いやたしかにダメではないけど・・・うーん、まあいつか」

「はははっ!サンキューな!」

難ありではあるが、ひとまず本人のやりたいようにやらせてみる。実際ヘディングはいい感じに決まっているので、無理に止める必要もないだろう。

とりあえず現状の能力はおおよそ把握できた。ただこれから連携の練習もしなければならぬ。期間は短いですが、ポジションの適正なども考えつつできることをやらなければ

ばならない。

「それはそれとして必殺技はいつ覚えんだ!!早く使いてえええ!!」

「必殺技はまた今度にしような?」

結局この日は赤城が付きつきりで練習をすることになった。

「皆このチラシ見てー。あそこのラーメン屋、新しいメニニューに醤油ラーメンうどん付属お蕎麦、そうめんを添えてつてメニニューを追加したんだつて。今度皆で食べに行こうよー」

「う、ウチはパスするわ・・・」

「それ本当に美味しいんすか!?!なんだかヤバイ心配がピンピンただよつてますよ!?!」

「ふっふっふっ。皆が行かないというなら、この東条斬がエスコートしてみせましょう」

「何言うとんねん。ここは大阪を知り尽くした男、淀屋マサキと共に行こうやないか」

「バカ野郎が!!こういうのは新入りに譲るもんだろ!そんなわけで慣れないサッカー部に苦戦する柳生牛尾にどうか恵みをお与えください!」

「・・・あの、それ去年のチラシでは？」

「あー、ホントだ。これ去年のやつだねー。やっぱりさっきのなしで」

「「チクシヨウ!!」」

色々あったが無事に練習を終え、各自世間話をしながら解散して帰る準備をしている。

そんな中、麻宮は今までのことを振り返っていた。

「・・・・・・・・」

頼りになる仲間を信じ、協力して苦難を乗り越える。やっていたつもりで、できていなかった。

「・・・獅子神、佐原先輩」

できていなかったのなら、これからやればいい。麻宮はさらに一歩進むため、二人を呼び止める。

「試したいことがあるのですが・・・付き合ってくださいませんか？」

連携を鍛える時以外は一人で集中し、黙々と練習している麻宮から誘われた。しかも誘われたのは頼られたいと思っている二人。

「しよーがないわねえー!!私に任せなさい!!大船に乗った気分でいいわよ!!」

「後輩の頼みとあつては断れないね。もちろん協力させてもらうよ。それで何をすれば

いいのかな？」

そのままの勢いでぐいぐい詰め寄る二人。さすがにこれは想定外だった。

「あ、ああ。話すから落ち着いてください……」

珍しくたじたじになる麻宮だったが、それでも心地よく協力してくれる仲間に感謝した。



## 決起集会

部室の方から賑やかな声が聞こえる。サッカー部は大抵外で練習しているため、部室は基本的に静か。加えて今の時間、いつもならまだ練習しているはずなのだが、この日は人の声がしていた。

「なあ、こんなんでいいのか？」

「いや、もうちよいキャベツ切つといた方がええんちゃうか」

「ウチも同意見や。これやと生地が広がりすぎて上手く返されへん」

いよいよ明日は準決勝、双輝中学に勝つことができれば次は決勝戦。そうなれば息つく暇はない。加えて新しい仲間も加入した。

タイミングを考えても今しかないとの結論になり、チームの結束を強めることと休息を兼ねて練習後に決起集会を行うことが二日前に決定した。

「そろそろ電源入れておけ。温かくなるまで少し時間がかかる」

「オツケーっす！スイッチオン!!」

そして今日、試合前日ということと練習は軽めの調整にとどめ、全員揃っていることを確認し、決起集会が始まった。最も中身はただのパーティーみたいなもののだが、

それでも問題ないだろう。

「これ、チーズとか入れたら美味しそうなんヨ!!」

「ワシはしつかり肉を食うぞ! 良質な筋肉には肉がかかせん!」

「私は野菜多めで」

「たこ焼き器もあるからそつちも作りたいたいねー」

全員がまったく同じものを作るわけではない。自分の食べたいお好み焼きを作るべく生地の用意を進めていく。特に淀屋と支倉の手際が良かったため、この二人が中心となりお好み焼きの準備を進める。

「んー、誰かタコ持つてる?」

「はい! 今日買ってきたっす! ピッチピチのやつがあるっすよ!」

「おおつ、いいですね。でもタコでしたら私も持つてきました。新鮮さなら負けていないですよ」

「いいねー。たこ焼き食べたーい」

折角のパーティーで料理が種類しかないのは味気ない。みんなで持ちよつた材料を使い、お好み焼き以外の準備も進める。まだ始まったばかりだが、楽しくなつてきたのか盛り上がっている。

「あれ? ソースつてどこにあつたっけ?」

「私は見てないねー」

「あー、やつぱりない?」

「・・・すみません」

探してみるが見当たらない。どうやら用意を忘れていたらしい。さすがにこのライオンナップでソースがないのはあまりにも致命的。今から買ってくるしかない。

「じゃあ買ってくるか。あと他に足りないものってある? ついでに買ってくるけど」

「あつ、焼きそば作りたいんヨ。だから・・・」

「焼きそば! いいじゃねえかよ!」

「・・・あの、すみません」

追加で焼きそばも作りたいという声があがる。たしかにみんなで食べることできる焼きそばもあった方がいいかもしれない。

「わかった、じゃあ麺も買ってきたらいいのか。他にも欲しいものある?」

反応を見たが、他には特にないらしい。必要なものを確認した赤城は買い物に出掛けようと最低限のものだけ準備する。

「ふーん、買い物ならあたしも行くよ」

「ソースと麺を買うだけですし一人でいいですよ。斧街先輩はちゃんと皆の準備を手伝ってください」

「ちえー、サボれると思っただのに」

「そんなことだと思いました・・・」

しつかり役割分担し、全員が何かしらの作業を進める。巧みな連携で平和に準備が進む。意外とこういった経験は試合でも役に立つかもしれないと赤城は呑気なことを考えながら買い物に出掛けた。

それからおよそ三分後。

「なんで生きてるタコなのよ!?普通に市販のやつでいいでしょ!!そもそもどっから持ってきたのよこれ!」

このわずか三分の間で何が起こったのか、獅子神の顔面にタコが貼りついていて。正直ギャグ漫画の光景にしか見えない。

「あー、それは私ですね。父が釣ってきたんですよ。折角なので思い持ってきたんですが・・・よく考えれば誰も捌けないですよ。これは失礼しました。後でちゃんと持ち帰ります」

「ちよっ!そんなこといいから!顔に来てるから!!誰かなんとかしてえ!!」

冷静に解説する伊喜とパニックになっている獅子神。その様子を見ていた星見が呆れてため息をつく。

「獅子神、遊んでないで用意しなよ」

「遊んでないんだけど!! 助けてよお!!」

「ちよつ、こつち来んな!」

「・・・なら、俺が引き剥がそう・・・」

「あー、助かる・・・いだだだだ!! もつと優しくして!!」

「・・・すまん」

パワー自慢の黒鉄がタコを強引に剥がそうとするが、思いの外しつかりくつついておりなかなか剥がれない。予想外の難敵にしばらく時間がかかりそうだった。

「つてそつちは何してるんヨ!」

タコ騒動が起こるなか、盤上はどこから取り出したのかダンベルを持って腕を鍛えていた。まあ生きたタコよりは納得できるが。

「ん? ああ、最近こつちのトレーニングをできてなかったからのう! 大方の準備が終わったから鍛えとるんじゃ!!」

「そ、そう・・・まあ準備ができてるならいいんじゃないかい・・・」

準備ができていながらこちらから言うことはないのだが、どこから持ってきたのだろ

うか。学校にあるものだと思いたいが、校内であの形のダンベルを見たことがない。

「……まさかわざわざ持ってきたのだろうか。」

「……すみません、そろそろ気づいてください」

「わあああ!!」

一方誰にも気づいてもらえなかった千景がようやく補足された。一応最初の点呼時にはちゃんと確認した。しかし準備が始まった際には皆自分の作業に集中し、加えてこの騒動が起こったため、持ち前の存在感のなさどマッチして誰からも気づかれなくなっていた。

「ビックリした……そ、それでどうしたんヨ?」

「あの、ソースと麺を持ってきました」

「あつ……」

どうやら赤城の買い物物は完全な無駄足となったらしい。もっと早く気づいていれば回避できただろう。とはいえこの人数でなおかつ運動部で練習終わり、足りなくなる可能性もあるので無駄ではないと思いたい。

「ふいー、疲れたあ。そうだ、誰かパソコン点けてくんねえか?今日は青鉄ブルーズの試合なんだよ。ネット中継あるから繋いでくれ」

「はあ?何言うとんねん。京坂トラーズの試合があるからそっち優先やろが」

「・・・キラードブレードって野菜切れんのかな?」

こっちはこっちで別の火種ができており、東条も何かやらかしそうだった。三日月はもう対応するのがめんどくさくなったので、考えるのをやめた。

「みんなーただいまー。ソースと麺買ってきた・・・ん?」

場所が遠いので少し時間がかかってしまった。こういう時に必殺技を使えば便利なのかもしれないと行と同じく呑気なことを考えながら帰ってきた赤城の目の前に広がっていた光景は・・・

「なんでもう一匹いるのかな?」

「いえ一匹とは言ってませんし。ちなみにタコは死んでる場合は杯と数えるらしいですよ」

「そんなことどうでもいいからなんとかして!! こういう変な役回りは獅子神でしょうが!!」

「ちよつと煌!?!」

「あのタコ、ようわかつとるなあ。これはうちも参戦せなあかんか!」

やたら活きのいい二匹のタコに振り回される女子二人組とここぞとばかりに参戦しようとする支倉。

「アー、ハイ。スキニシテクダサイ」

「帝瑠、いいのか？あのままだと面倒なことになると思うんだが・・・」

「ウチ、モウカンガエタクナイ」

考えることを放棄し、もはや悟りを開きそうな勢いの三日月。

「トラーズは交流戦で無双しとったわ!!これからやるがい!!」

「初っぱなボツコボコにされてたじゃねえか!!」

理由はわからないが、恐らく野球のことで喧嘩をしている淀屋と柳生。

「よし、次はベンチプレスじゃ!ぬうおおおおお!!」

「すげえ!!これ結構硬いのも切れるぞ!!よっしゃア○キバーvsキラーブレードだ!!」

「・・・何があつた!?!」

そしてどこから持ち込まれたのか、そもそもどうやって部室内に入れたのかわからない謎のベンチプレス。技を使って無謀な勝負を挑もうとしている東条。変わり果てた部室内の光景に赤城は困惑するしかなかった。



「・・・よし、なんだか色々あったみたいだけど、気を取り直して始めよう」  
「お、おー・・・」

あの惨状をなんとか解決し、疲れはてた状態でパーティーが始まる。まずは好み焼きを作るためにボウルの中にある具材を混ぜ、生地を完成させる。

「これは・・・なるほど。どうやら焼けてきたようだね。いい香りがするよ」  
「よっしゃ！できたやつからどんどん焼いてけ！」

「スペースはあるから遠慮したらアカンで!!」

生地を鉄板に乗せ、広がらないかつ小さくなりすぎないように形を整えて待つ。いざ始まると疲れを忘れ、楽しく和やかに進んだ。

「・・・そろそろ見てみるか」

「おつ、もういけそうやな！」

合間合間に様子を見つつ、充分焼き上がったのを確認し、いよいよ裏返す時が来た。  
「よし、私もひっくり返すわよ!!」

少しミスをしてしまう人もいたが、順調に裏返す。そんな中で次は獅子神の番。なぜだかものすごく嫌な予感がした。

「・・・ねえ、お願いだからひっくり返すの失敗して惨事になるなんて古典的なことしないでよ？キミ結構不器用なんだから気をつけて——」

「もー！私がそんなことするわけギャアアアア!?」

「言わんこつちやない・・・!つて私のとこに乗ったんだけど!」

「あいつが一番不器用やな」

「・・・よし、お好み焼きは俺のキラードブレードで切るか」

「大事な試合前に余計なことしないでいいから!!」

星見のお好み焼きが二段重ねになる、東条が今度はお好み焼きを切ろうとするなどプチトラブルが発生したものの、この後無事に焼き上げて事なきを得て無事に調理は終了した。

「それじゃあいただきます!」

他にも料理はあるがまずはみんなでお好み焼きを食べる。ソースとマヨネーズ、青のりにかつおぶしをお好みでかけて食べ進める。

「おおつ、美味しいじゃねえか!」

「思ってたよりしつかりとできてるっす!」

中までしつかり焼けており、肉と野菜の旨味、そしてふんわりした生地が良い食感を生み出し箸が止まらない。

「華ちゃんすごい食べるね・・・」

「だって美味しいもん」

「・・・こういうのも悪くない」

「おつ、たこ焼きも良い感じに仕上がってるな！」

「みんなお好み焼き食べ終わったら避けてや。焼きそばも作るから場所開けてー」

お好み焼き以外の料理もみんなで協力して作り、持ってきたものは全部調理して平らげた。非常に満足のいく決起集会となった。

「・・・楽しい時間だった。ありがとう」

「いやー、ええ休息やったな！ほな明日頼むで！」

「ああ、お疲れさま！それじゃあ明日、遅れないようになー！」

「二人とも、明日の試合は・・・」

「まっかせなさいって！」

「明日はワタシ達の力を見せることにしよう」

「あれは麻宮と獅子神・・・で、佐原先輩か。あの三人だと佐原先輩・・・いや、麻宮もほどほどにはあるな。獅子神は・・・ないな！」

すっかり後片付けも終え、いつものように雑談をしながら明日の試合に備えて帰宅する。準決勝というのに緊張感がないが、それがこのチームのいいところなのかもしれない。

深夜一時。街の明かりはもうほとんど点いていない。恐らくほとんどの人は寝ている頃だろう。城翔中学サッカー部員も明日の試合に向けてこの日はいつもより早く就寝していた。

「・・・双輝中学・・・かあ」

そんな中、赤城だけはまだ寝ていなかった。いや、正確には眠れないというのが正しいだろう。

大阪府大会の一回戦で戦うことになった相手。あの時は経験も実力も不足しており、正直負けても仕方ないと思いつつながら戦っていた。

しかしそれは負けても次があったから。言ってしまうえば逃げることもできた。今回は負けたら本当におしまい。三年生は引退してしまう。何も言い訳はできない。

「負けてもいいって、そんなわけないよな・・・」

結果として負けた試合はあってもいいが、最初から負けて良い試合なんてないだろう。負けても仕方ないというのは現実から逃げるための言い訳に過ぎない。全力で挑み、勝つか負けるかだ。

チームメイトは優しい。たとえ負けたとしても責めることはしないだろう。それが余計に心苦しい。本来周りを励まさなくてはならない人間が一番怖がっており、チームメイトはそれを知らずに優しくしてくれている。

「……………」

こちらの実力は以前よりも遥かに高い。ブランクのある経験者と素人に毛が生えたレベルのメンバーばかり。それでも努力して比べ物にならないぐらい上達した。これなら勝てると思いがついた。

だが、ここにきて本当に差は埋められたのだろうかとうと不安になってきた。相手だつてこの期間のんびり過ごしていたわけではない。努力したのは相手も同じ。

本当に追いつけたのか、練習は足りていたのか、わからないことだらけ。だが、少なくとも自分はキャプテンとして未熟だということ。それは自分でもよくわかっているつもりだ。本当ならどうにかしたいところだが、どうすればいいのかもわからない。

「双輝中学……強かったよなあ……」

改めて以前の試合内容を思い返す。思い返すと酷い内容だった。時間が経っていないか、ということも考慮しても酷い。それでも意外となんとかなるのではないかと現実を甘く見ていた。

その結果半ばヤケクソで打ったハイバウンドフレイムの一点が唯一の得点。ヤケク

ソで偶然成功した技が唯一だった。加えて今回は対策をしているだろう。

ならばどうやって点を取ればいい？点を取らなければ勝つことはできない。残念ながら、頭の悪い自分では思いつかない。また皆に任せてしまふ。皆に頼ってしまふ。

「・・・頑張らないと」

それならプレーでカバーするしかない。たしかに以前は酷いものだったが、今は違う。自分も皆もあの時よりも遥かに成長した。成長したのだから、その力で戦えばきつと・・・

「・・・・・・・・・・」

これ以上考えても自分を追い込むだけだ。一度不安になると払拭できない、もつと早く気づければ良かった自分の悪いところ。いったん心を落ち着ける。

とにかくここまで来たからにはまずは地区大会優勝を狙う。そして全国大会に出場し、優勝を目指す。自分達の力を信じるしかない。

みんなと一緒にならきつとできる。頼れる仲間達と一緒になら、きつと・・・  
「勝てる、よな」

ようやく眠りににつき身体を休める。不安な心は残ったままだが、身体は回復した。かつての敗北にけりをつける。準決勝の朝、双輝中学とのリベンジマッチの時が訪れた。

## V S 準決勝 双輝中学 前編

天気は雲一つない晴天。夏の暑い日差しが容赦なく照りつける。観客は手で扇いだり、ハンドファンを使ったりと様々な方法で暑さを凌いでいる。

対してグラウンドの選手達は暑さに負けず最後の調整を入念に行っている。特に城翔中学の選手達はいつも以上に気合が入っていた。

「いよいよだな・・・」

「リベンジの時、というわけだね」

ここまで順風満帆というわけではなかった。特に今日の相手、双輝中学との初めての試合では圧倒的強さで現実というものを思い知らされた。数日で集めたメンバーと数カ月の練習。それだけで勝てるほど今の中学サッカー界は甘くない。

本当の強さに圧倒された。だが、誰一人諦めずに努力し続けた。壁にぶつかり、悩み、苦悩した。それら乗り越え、遂に準決勝という高みへたどり着き、リベンジする時が来たのだ。

「・・・今回は勝ちます」

「あつたりまえよ!!今回は勝つわ!!」

準決勝ともなると盛り上がりが違う。これまで応援する人は少数だったが、今回は多くの人が駆けつけてくれている。応援してくれる人のためにも負けられない戦いだ。

「おつ、久しぶり！府大会以来だな！」

と、そこへ双輝中学のメンバーが試合前の挨拶にやってくる。顔ぶれに変わりはない。打ち負かされた時と全く変わっていなかった。

「おおつと、府大会の俺達だと思ってんじゃねえぞ！」

「いや誰？前いなかったよな？」

「・・・僕らは強くなりました。以前のようにはいきません」

「当然だ。準決勝に相応しい試合をするぞ」

「まつ、せいぜい俺達を楽ませて・・・そのマダネキ!!これから戦う相手とバグすんな!!そつちも受け入れるな!!」

「お嬢さん、次は俺とハグしませんか？」

「コラア!!その東条!!」

「ヒデブツ!!」

相変わらずというか、準決勝前の雰囲気ではない。そこが彼らのいいところなのかもしれないが。

「えつと・・・お互い、頑張りましょう」



「あ、ああ……よし、今日の試合楽しみにしてるからな!!」

これだけ仲良くしていても、試合が始まれば強大な敵となる。気持ちを切り替えて戦う覚悟を決める。今ある力を全てぶつけ、勝利をもぎ取るのは——

「臆したらダメだぞ!大丈夫!みんなならできら!勝って決勝に行こう!!」

「試合に勝利して荒央にリベンジだ!!全国まで突っ走るぞ!!」

両チームに負けられない試合。それぞれのキャプテンがチームを奮い立たせ、気合いを充電し、フォーメーションについた。

城翔中学フォーメーション

——三日月——星見——

——獅子神——佐原——

——赤城——華咲——

——淀屋——柳生——

——支倉——黒鉄——

---

東条

---

双輝中学フオーメーション

— 都丸真 — 千刃 — 飛野 —

— 鏡原 — 天城 —

---

菠羽

---

— 近藤 — 桜葉 —

— リオン — まのん —

---

黒桐

---

「キャプテン、ホンマにこいつ出してええんか？」

城翔中学は前半から新入りの柳生を入れている。現状チームの一番の不安要素ではあるため入れることに不満が出るのは仕方がない。とはいえ決勝戦、先の全国のことを考えると今出さないといいわけにもいかない。

何せここから先は総力戦になる。少し経験を積ませておかないと後々泣きを見るかもしれない。そうならないためにもここで出すしかなかった。幸いにも本人は特に緊張していない。

「・・・大丈夫。最低限の動きはできるし、もしそれでもダメなら早い段階で交代しよう」  
「それにシュートされても俺が止めてやるよ！関心って！」

東条の心強い発言を受け、双輝中学のボールで試合開始。合図と共に相手は不敵な笑みを浮かべ、すぐに仕掛けてくる。

「イーグルグライド!!」

「ちよつといきなり!?!」

開幕直後の一発、周りの反応が遅れる。が、距離が距離、さすがにDFは対応できる。しかし今回はあえてブロックせずに通した。

「おもしれえ！キラーブレード！」

誰にも頼らず真正面から来たボールを切り裂く。シュートブロックすらせずに止めてみせる。

「はあー、さすがにナメすぎやで。まっ、タダでボール貰えたり儲けたわ！」

「そうこないとな」

まずは挨拶代わりの一発を止め、城翔中学の攻撃が始まる。

「支倉先輩！」

「あいよ、お次は一華ちゃん！」

「ああ、では私はキャプテンに任せようか」

相手が来ないうちに小刻みパスを繋ぎ、赤城がボールを持つ。後は守りを突破し、シュートを打ちにいっただけだ。

「ふーん、キーパーだけってわけじゃないんだね」

「そうだね。ちゃんと努力したのが目に見えるよ、みんなえらい！」

「敵を褒めてどうするの・・・まあいいや。ワックスフロア！」

前回の試合では対策のしようがなかった技。技の発動、飛翔スピード、着時の隙などヒートウイングの弱点を突かれ相手のペースに吞まれてしまった。

だが今回は違う。あれから努力し、初動から終わりまで隙のない技を覚えた。たとえばどんな技であろうと、使われる前に抜き去ってしまえば怖くない。

「ブレイズファルコン!!!」

空から飛来した燃える隼を自身に憑依させると、自身の背から炎を纏った翼が生える。翼を広げ、低空飛行で空を駆け抜け、地面を滑りやすくされる前に抜き去る。

「なに?！」

「よし、これならいける!!」

以前はまったく歯が立たなかったため不安も残っていたが、今の自分は双輝中学相手でも通用する。そして仲間の成長にも着いていける。

「ムムッ!リオちゃんが突破された!これはお姉ちゃんが頑張るとき!!」

その様子を見ていた榎月まのんが今度は相手となる。だが、彼女が個人で使える技はリオンと同じワックスフロアしかない。

「ワックス——」

「まだまだ！ブレイズファルコン!!!」

すぐにモツプを取り出すが、赤城の技の方が早い。着地点に仕掛けている時間はない。先程同様これなら突破できる。

しかし、抜けているところもあるとはいえ彼女も強豪校でレギュラーとして抜擢されている。こういう時にただやられるだけの選手ではない。

「とおーう!!」

モツプがけするのは無理だと直感で理解した彼女は咄嗟にモツプの持ち方を変え、バットを振るかのようにスイングしてきた。

「えっ!？」

かなり危険なプレーだ。もし身体に当たりでもしたら怪我しかねない。とはいえそこは強豪校、急な策でもボールだけを正確に狙い、見事に打ち返した。

さらに持ち前のパワーも相まって良い感じにライナー性の辺りが飛んでいく。もはや種目は違うが、それでも完璧なカウンターになったのは事実である。

「ナイスバツティング!」

「えへへ、せんばくいナイスウ〜!」

この特大ホームランでチャンスから一転、一気に追い込まれる。

「今の打球・・・京阪タイガースに欲しい逸材や!!」

「いや、うちのバファローズに来てもらう!!」

「・・・そんなこと言ってる場合じゃないと思うぞ」

荒業のカウンターが見事に繋がり、ボールを持った千刃が菠羽とのワンツーパスで守りを突破、そのまま一対一に持ち込む。

「ヴァイススラッシュ!!」

前回何度もゴールを決められた技。守っても無駄、ただ決められるだけ。言い方を悪くするとサンドバッグのようだった。

「クロスブリーダー!!」

だがもう過去の話。相手の方が強く、その時よりも成長していようが関係ない。自分達がそれ以上に成長すればいいだけの話だ。

「へへっ、勝つのは・・・俺達だ!!」

勝って決勝、その先へと羽ばたくのは自分達。ここまでの努力と想いを乗せてボールを蹴り出した。

まだ試合が始まって数分ではあるものの、ギリギリの攻防戦に序盤ながら会場は盛り上がる。そんな中、千刃と天城は城翔中学の成長具合を身をもって感じていた。

「なるほど、かなり鍛えてきたようだな」

「そうだな！でも、それは俺達も同じだろ？じゃあ負けるなんてないよな？」

「当たり前だ。負けるつもりは毛頭ない」

ボールをすぐに奪い返し、今度は天城が仕掛ける。弓を引くように足を後ろに下げ、力を溜めた後に狙い済ませた場所に勢いよくシュートを打つ。

「ステイングアロー!!」

この技は溜めればある程度パワーは上がるが、溜めてる間は隙だらけのためフルパワーでは使いにくい。実際今回もフルパワーではない。

しかし、一人で勝ちにくい必要はないことを双輝中学はわかっている。

「さっすがキャプテン！わかってんねえ！イエニチエリバスター!!」

前回の試合でも使ってきた技だが、威力は前よりも上がっている。加えて今回もシュートチェイン、見事な連携で仕掛ける。

「・・・ザ・ウォール!!」

「まだまだや！メガトンヘッド!!」

「うちもいくで！コールドカッター!!」

対して城翔中学、相手にシユートチェインされたのなら、それ以上にシユートブロックすればいいと言わんばかりに仲間と協力し、威力を下げてシユートを止める。

「よし、みんなナイスブロックやで！」

「おいおい、俺にも仕事くれよ！」

「キーパーの仕事はない方がええんやで！」

東条の軽口に返し、ボールを確保した支倉が前にパスを出す。

「甘いですよ！シャイニングカット！」

「ありや!？」

そこへ鏡原が割り込む。光の壁を作りだし、強引にパスを遮断。そのままボールを自分のものにした。

「ワイらが守ったボールがあ!!おいコラ返さんかい!!」

「それも無駄です！」

淀屋がスライディングで強襲すると同時に空高くに鏡が出現。それに向かってボールと共に飛び上がり、淀屋をかわしつつその勢いで鏡を突き破る。そしてボールを挟み込み、捻るようにして打ち出す。



「フラグメントスピアー!!」

ボールは回転し、その勢いで散らばった鏡の破片が集まりきらびやかな槍となる。このチャンスを逃すまいと一気シユートまで持つていった。

「つと、言ってるそばから仕事が来たな! クロスブリーダー!!!」

過去の東条なら止められなかっただろう。それでも今は違う。光輝く槍を両腕の鉈で切り裂き相殺する。

「おっしやあ!! 今度こそこっちの番だ!! 決めてこいよお!!」

助走をつけて今度はボールをぶん投げる。これなら万が一相手に取られても猶予がある。

「まったたく、普段からああだったらモテるだろうに」

「おいおいよそ見厳禁だぜ!!」

「そんなことわかってるよ。ムーンサルトアロー!!」

ムーンサルトで相手の守りを避けつつ、最高点に達したところでそのままスターアローに派生する。しかし高さはスターアローを打つよりも低く、体勢も悪いため本来の威力は出ない。

「ブラックチェーン!!」

黒い鎖がボールに絡みつき、ボールの勢いを止めた。それでも以前戦った際に受けた

相手のシュートよりも威力が高いように感じる。

「なるほど、たしかに前よりも強い・・・」

こちらの守りを突破し、奇策で翻弄し、技の精度も上がっている。以前よりも格段に動きが良くなっている。あまりうかうかしてはいられないだろう。

「これがサッカーの試合・・・スゲエな!!心が滾ってきやがった!!俺も活躍してえな・・・!!」

一方柳生は初めての全力の試合に熱くなっていた。まだまだ素人。知識も力もなく、本人は野球派。それでも試合の熱さに魅力されていた。

「・・・っ!そこっ!」

なかなか隙を見せない双輝中学の守り。奇策やカウンターで揺すつてもなかなか動かず、一見綻びは存在しないようにも思える。

しかしどんな相手にも隙はある。冷静に見極め、チャンスを逃さずパスを通す。

「よし!任せるんヨ!」

ゴール前までたどり着いた三日月。数少ない攻撃のチャンスが無駄にするわけにはいかない。

「バウンドフレイム!!」

「来たか・・・」

彼女が打ってくることは予想していた。以前の試合、唯一の失点はこのシュートに一手間加えた技。それだけ応用がしやすい技なのだ。今回もこの技を機転に何かしてやるのではないかと予想していた。

そんな黒桐の予想通り、ボールは前に進まず後ろに戻る。そう、三日月はシュートする際に逆回転をかけたことにより、進行方向が逆転したのだ。

「マツハウインド!!」

後ろに進んだことで背後にいた佐原が技を繋げ、シュートタイミングをずらす。たしかに厄介だが、このやり方では威力はかない落ちる。

具体的にどういう行動を取ってくるのかはわからなかったが、予め何かをしてくるということだけでも把握しておけばある程度は対応はできる。

「・・・フツ!!」

不発になる技を途中で止め、素早くパンチングに切り替える。強烈な一撃で上手くボールを弾くことに成功した。

「ふむ、いい作戦だと思ったのだけどね」

実際悪い作戦ではなかった。これまでの相手なら上手く決まっていただろう。

「悪くはないけど、あと一步届かなかった——」

「俺の力あ!!見せてやるよ!!」

「なっ!!」

「ええっ!!」

会話を割り込む形で上がってきた柳生が弾かれたボールを奪い取る。味方も想定していなかったのか、驚きの声をあげている。

「くらえっ!!俺の必殺技!!バイソンホーン!!」

ボールを高く打ち上げ、腕を角に見立てて暴れる牛のごとく爆走する柳生。落ちてきたボールに頭突きする瞬間に腕を避け、勢いの乗ったヘディングを決める。

「お前いつ覚えたんや!!」

そう、まだ城翔中学の攻撃は終わっていないかったのだ。デイフェンスラインから上がってきた柳生がさらに追撃、奇襲に奇襲をかけた策で強引に突破しにかかる。もつともこれは奇襲というより柳生独断の行動ではあるが。

「チツ!!」

さすがにこれには対応できず、なんとか両手で抑え込もうとするも止めきれない。D Fである柳生のシュートが最初にゴールネットを揺らした。

『ゴオオオル!!因縁の対決となった準決勝、先制点を決めたのは城翔中学だあああああ!!!』

会場が歓声に包まれる。かつて手も足も出さず、辛うじて一点を取るのが精一杯だった

城翔中学。そんなチームが、先に得点を決めたのだ。

「おっしやああああああ!!!」

「なんやねん!やるやないか!」

勝手な行動だが、結果がすべて。決めてきた以上これには淀屋も認めざるを得ない。最もそれはそれもひて無断で走っていったのは後で反省させなければいかな、と支倉は冷静に見ていたが。

「一点……つて、うちのところが?」

「おい、見たか。先に決めやがったぞ……?」

「記念がてらで来たけど、こりやもしかするかもしれないぞ!」

「いぞ城翔!そのまま勝っちゃまえ!!」

得点を決めた柳生が雄叫びをあげ、それに呼応するように応援も盛り上がる。スコアボードには待望の1の文字が刻まれる。

前の試合では試合終了直前でなんとか決めた一点。それに対し、今回は先制という形になった。同じ一点といっても得られたものが違った。

その一方で、一人だけ表情が曇っていた。

「(一点は入った……入ったけど……)」

赤城は一点が入ったことに安堵したものの、同時に自分の技が通用しなかったことに

シヨックを受けていた。

みんなの役に立ちたいと思っっているのに、また足を引つ張つてしまった。それもチームのキャプテンなのに、だ。

「キャプテン見たか！俺の勇姿をよお!!」

「あ、ああ……もちろん……さすが柳生だな」

「だろ？俺よお、FWの方が向いてんじゃねえかな？前に立つてバンバン点を取りたいって気持ちがあんだよ」

「そう、だな……試合が終わつたらまた考えようか……」

「おうよ！任せときな!!まあこんなにならなから疲れちまつたけどよ!!」

柳生が声をかけてきたことで現実に戻り、強引に気持ちを切り替える。そう、今日の深夜に反省したばかり。こういうところがいけないのだ。

「……この試合、勝つぞ!!」

まだ試合は始まつたばかり。自分が暗くなることで、みんなを不安にさせてはいけない。まずは自分がしっかりしなければならぬ。

「……何を今さら、そんなの当たり前だ」

「今の勢いで頑張るんヨ！」

「よし！みんな、気合い入れていくぞ!!」

その言葉は誰でもない自分に向けた言葉。自分を落ち着けるために、大きな声で自身を鼓舞し、試合が再開する。

## V S 準決勝 双輝中学 中盤

まずは先制点を奪い、優位に経った城翔中学。できることならばこのまま逃げきりたところだが、そうはさせてくれない。

試合が再開するやいなや、一点を取り返そうと激しく攻めてくる双輝中学の選手達。城翔中学も守りを固めて応戦する。

「いけー！鏡原ー！！」

「ミラートンネル！！」

ボールを託された鏡原が鏡の中に飛び込み、姿を消す。だがこの技はすでに経験している。おおよそその出てくる場所がわかれば対策は用意だ。

「んー····!?前より伸びてるー！」

華咲はおおよその見当をつけて守りに入ったが、鏡は自分の背後に現れる。目測を誤ったわけではない。以前戦った時より距離が伸びていたのだ。

「····問題ないー！」

それでもカバーが間に合わないわけではない。近くにいた黒鉄が駆け出す。が、鏡の中には二人の姿が映っていた。



「ラブターズステップ!!」

鏡原が鏡に入る瞬間、すかさず同じタイミングで乱入した飛野が先に鏡から出てくる。そしてすぐに並外れたボディバランスとボールコントロールで相手を翻弄し、抜き去る。

「ここだ。イーグルグライド!!」

相手のディフェンスを突破した飛野はそのままゴールを狙う。最初のロングシュートとは違い、充分近づけている。威力は充分だった。

「クロスブレーダー!!」

それでも東条は止める。もうあの頃の弱いキーパーはそこにはいない。城翔中学の守護神となった男が双輝中学のシュートをことごとく止める。

「ふうー、あぶねえ。早くもう一点取って楽させてくれよー!」

とはいえ相手が相手だけに油断できない状況が続く。最初は見せ場が欲しいとも言えたが、さすがにそんな余裕もなくなってきた。東条は笑みこそ見せているが、内心はいつ失点してもおかしくないと思っていた。

「ふふん、任せな——」

「スパイラルドロロー!!」

キーパーに楽させるべくなるべく多く追加点を入れたいところだが、それも難しい。

先制点を取ったことで相手もギアが入ったのか、シュートを打つことすらできなくなっていた。

「ラプターズステップ！からの——」

「——そよかぜステップ!!」

荒々しくも繊細なコントロールからそよ風のように軽やかなステップで相手を翻弄。ドリブルでも緩急をつけ、城翔中学の守りを寄せ付けない。

しかしMFが本職の天城は自分の技では東条を突破することはできないことと理解していた。

「じゃあこれでどうだ!!」

「おっと、技なしかよ!」

技の威力でダメならと技術で勝負だと言わんばかりに際どいコースに普通のシュートを打ち込むが、東条は飛び付いて止める。

「あつぶねー……でもこれでチャンスができたな!」

ピンチはチャンス、シュートを止めたことでボールがこちらのものとなった。東条は少しでも相手のゴールに近づけるようボールを遠くへ蹴りあげる。

「まあ私一人じゃ無理だろうね。とはいえ……か」

「考え事する余裕あんのか？マウンテンスライダー!!」

星見はドリブルしながら相手から点を取る方法を考える。ほぼ同時に山の上から近藤が滑り落ち、超スピードのスライディングでボールを奪おうと仕掛ける。

「余裕があるから考えてるんだよ。早いだけのスライディングならかわすのなんてわけないし」

「んなことわかってんだよ!」

近藤の技で顕現した山からもう一人滑り落ちてきた。不意打ちに加え着地後の隙、これでは避けられない。

「っ!しまっ——」

「さあー、楽しんでいってねっ!ブロックサーカス!!」

超速スライディングでまのんがボールを打ち上げ、リオンが確保。重力を感じさせない身軽な動きはまさにサーカスの名に相応しい。

「随分と余裕そうだったけど、気分はどうかな?あつさりとボールを取られた気分は」  
「言ってくれるね・・・さすがに効いたよ」

他者の技を利用し、相手の隙を突いたり自らの技をより強力なものにする。双輝中学お得意の連携プレーで本領を発揮してきたということだろう。加えて挑発も欠かせない。

「だったら俺が止めてやる!!」

「ワイも行くで!!」

「二人がかり上等! ワックスロード!」

柳生と淀屋の二人が相手だったが、まずは冷静にモップを取りだし、それを滑らせるように投げる。当然前にいた二人はモップを避けるが、避けたことでできた道をリオンは高速で滑り通りすぎていった。

「どう? こつちもよく滑るでしょ」

「ドリブルでも使えんのは聞いてへんぞ?!」

「おいヤベーぞ! これめっちゃ滑る!!」

追いかけてようとする二人だったが、やはりこちらも地面が滑るようになっており追うことはできずボールは菠羽の元に渡った。

「フリップウインド!!」

一度横に蹴って高速回転させ、回し蹴りで強く撃ち出すと強風と羽根を纏い、超スピードでゴールに向かう。

「これじゃ足りねえだろうからもう一発オマケだ!! ウルバンキャノン!!」

左足でボールが円を描くように蹴り、自分に向かってくるボールを右足でもう一度蹴りシュートを決めるとボールは白い光線となり、飛んでいく。

「クロスプレーダーツ!!」

シユートブロックは間に合わず、東条が一人で踏ん張る。ここまでなんとか耐えてきたが、さすがに二人相手では分が悪い。

「・・・クソツ!!」

ブレードは二本とも砕け散る。ここまでよく止めてきたが、遂に決められ同点となる。双輝中学に追いつかれてしまった。

「よし！同点だ！こっから巻き返そうぜ！」

「「おぉー！」」

先制こそ許したものの、一点返しまだまだ余裕のありそうな双輝中学。簡単に勝てる相手ではないことを再認識する。

「わりい！決められちゃった！」

「いや、一点だけで勝てるようなチームじゃない。むしろよくここまで持ちこたえた」

「それもそうだな！もつと褒めてくれる人はいないのか？」

「調子に乗るな。決められたのも事実だ」

調子に乗るなどは言いつつも、実際ここまで頑張っている。まだ試合中のため少し厳しく言うが、終わればしつかりと褒めるべきだろう。

とりあえず今考えるべきは今後の作戦である。今回先制した一点も意表を突いて取ることができた一点。さらに別の方法を考えなければならぬ。

「レオ・ローアなら突破できるかな？」

「可能性はあるね。ただ警戒されてる。打つのは難しいよ」

星見と獅子神、最低でもどちらかにはマークがついている。さらに二人が近い位置にいる時はシュートブロックの準備も入念にされている。ノーガードで打つのは厳しいだろう。

「ならばハイバウンドフレイムを打ちに行くのはどうだろう？」

「あれからだいぶ経っているからな。対策をしていないとは考えにくい。試す価値はないとも言えないが」

しかし方法がない。追加点を取ることができないのか。そもそもシュートを打つことができるのか。チャンスが多いなら色々試してもいいが、チャンスは少ない。無駄にできないため慎重に考える。

「・・・私に任せてくれ」

あまり長く話すことはできないが、なかなか作戦が決まらない。そんな中で名乗りを上げたのは麻宮だった。

「おっ？交代か？いやー、さっき全力疾走したから疲れてんだよな！助かる！」

最近加入したばかりで内情を知らない柳生は交代することにノリ気だ。たしかに仕事は果たした。まだスタミナも足りないため彼を交代することに異論はない。

だが、麻宮のことは少し気がかりだった。鉢美中学戦のこと、まさかまた無茶をして得点をする気ではないかと心配だった。

「その、無理にいくことはないからな？他に安全な作戦があるならそつちでやるべきだと思う」

「大丈夫だ。信じてくれ」

赤城の考えを見透かしたかのように真剣な眼差しで伝える。自分のことも含めて少しナーバスになっている赤城だが、信頼できる仲間の言葉とあれば信じざるを得ない。

「わかった・・・でも、前みたいに自分を傷つけるのだけは——」

「ああ、もうそんなことはしない」

DFの柳生が抜け、代わりにFWの麻宮へ交代する。いわゆるスリートップ。

守りが薄くなるのは不安だが、このまま守りだけ固めてもじり貧になるだけ。先に一点を取り、流れを掴むことを優先した。

それに決してノープランというわけではない。これまでのことから相手は明確に東条を突破できる技を持っていない。チェインこそ怖いものの、シュートブロックも視野

にあれば簡単には点を奪えない、と判断した。

「交代してきたか・・・」

「結構へばつてたし妥当かな？」

「何かしてくるかもしれない。警戒はしときなよ」

「最悪なんかされても点取ってくればいいんだろ？」

柳生が本当に疲れていたこともあり、相手はこちらの作戦には気づいていない。疲労から交代しただけと判断していた。ただし警戒を怠っているわけではないため易々と突破することはできないだろう。

「・・・」

「おつ、結構速いな」

試合再開。麻宮は自慢のスピードでフィールドを駆け回る。かつては全国大会でも通用した力。これには双輝中学も苦戦を強いられる。

「わあ、いいスピードだね！」

「だけど、これでも同じように走れる？ワックスフロア！」

しかしリオンの技が自慢のスピードを縛る。速さが自慢の選手にとってスピードを縛る技は天敵。麻宮はテクニックも充分あるものの、安定しない地面でキープし続けることは難しくボールを取られてしまった。



「気にすんな！後ろは俺達に任せろ!!」

「策があるんやろ？守りはウチらが担当するから攻めることだけ考えときー!」

とはいったものの、すぐ取り返して再攻撃とはいかない。相手の攻めも守りも一級品。ボールを取るのも一苦勞、奪い返してもすぐに取り返されてしまう。

「バルバリアタックル!!」

「ザ・ウオール!!」

海賊船と岩壁が激突、前回はサイクロンとコールドカッターによる二つの障壁に阻まれ沈没してしまった。

「海賊ナメンじゃねえぞ!!」

しかし前回のようにはいかない。しっかり周りを警戒し、他に誰か来ていないことを確認するとフルパワーで岩壁をぶち壊した。

「・・・いつから海賊になったんだよ」

「さながらキャプテンってどこか？まっ、俺はキャプテンよりエース狙いだけどな!!」

軽口を叩きつつガラ空きとなったゴールを狙う。もちろん東条はそれを阻む。

「ウルバンチェイン!!」

「クロスブレードアーツ!!」

休む暇もなく連続で攻撃されては技を出すのも辛い。気合いだけではどうにもなら

ず、入りこそしなかつたもののゴールポストに弾かれて相手の方へ転がる。

「ザ・ウォール!!」

「それはナイスすぎる!!」

その前に体勢を立て直しゴール付近まで戻ってきた黒鉄が再度壁を作る。今度は動きを阻害する壁で相手が立ち往生している隙に東条がボールを確保する。

「つとは言ったもののなあ。これどこに出しゃいいんだ?」

下手な場所にボールを出せばすぐに取られてまた攻撃される。じゃあどこに出すのが正解かと言われてもわからない。

「まっ、考えてもしゃーねえよな。なるべく遠くに蹴つとくか」

遠くになら最悪取り返されても猶予ができるという安直な考えのもとなるべく遠くの方に蹴った。

「うーん、東条君・・・正解だね」

蹴った先にいた華咲。東条があまり考えずに蹴ったとは露しらず、いい判断だと褒める。

「フェアリーギフト、いつてらっしや〜い」

妖精のような羽がはえ、対象へ送り届けられる。ただでさえ長距離のパスは少し時間がかかる。それも二回となると相手にも猶予を与えてしまう。

しかし麻宮は受け取ってすぐに持ち前のスピードで相手の守りを崩しにかかる。

「獅子神！佐原先輩！」

加えて今度は短いパスと交えて翻弄し、相手に守ることすらさせない。チームでも足の速さに自信のある三人だからこそ振りきれた。

ゴール前まで来た三人はそれぞれ位置につく。獅子神と佐原は前へ、そして麻宮は二人の動きを確認すると、後ろで指笛を吹いた。

「麻宮?!それは——」

「いや!あれは違う!!」

響く指笛、悪い記憶がよみがえり慌てて制止しようとする声が出る。だが制止する声は遮られた。

赤ではなく黒、見た目は愛くるしくもあるが実際には強力な技。あの技はこの世界のサッカー好きなら絶対に見たことがある。それほどに有名で強力な必殺技。

「皇帝ペンギン——」

「二号ツ!!」

地面から生えた五匹のペンギンが、麻宮のシュートを合図とし、隊列を形成して空を飛ぶ。さらに獅子神と佐原二人によるツインシュートでさらに威力を増し、ゴールにめがけて突撃する。

「ペンギン技とはまためんどくさいやつを・・・ブラックチェーン!!」

黒い鎖がシュートを遮断しようと迫る。しかし五匹の空を舞うペンギン達は鋭い嘴で鎖を砕き、ゴールへの道を作った。

「おっしやあ!!二点目入ったな!!」

『なつ、なんとということでしょうツ!!前半残り僅かというこのタイミングで城翔中学が勝ち越しましたツツツ!!』

「やべーぞ!今の見たか?」

「皇帝ペンギンって帝国学園が使ってるやつだろ!？」

「それは知らんけど・・・んなことより二点目や!!三強から二点目取りよったぞー!」

「ペンギンさんかわいい・・・」

実況や観客が様々な反応を見せ、チームメイトも麻宮に駆け寄る。しかし当の本人は今のシュートを冷静に分析していた。

「ふふん!!これが私達の努力の成果よ!!やったわね!!」

「・・・いや、まだ修正する箇所も多い」

「そうだね。改善するべきところはあまりにも多い。しかし、今ぐらいは喜んでもいいと思うんだがね」

まだまだ足りないことだらけ。以前の輝きに比べればあまりにも小さい。ほんの僅

かに照らされた灯火でしかない。

それでも進む道は見えた。なら、進むだけだ。

「ありがとう」

もう一度進むきつかけをくれたこのチームに小さな声で感謝を述べた。

もうすぐ前半が終わる。城翔中学からすればこのまま勝ち越したまま終えたいところ。残り僅かな時間、相手の動きに集中する。

「天城、どうする」

双輝中学は全力で走り出す。前半の時間は少ない、無駄に走って終わるだけにもなりかねない。それならば相手の出方を見て、後半に備えるのも悪くはない。

「いやー、ここで様子見するようなチームが頂点に立てると思うか？」

「そうだな。前半が終わるまでに決めるぞ」

だが、ここで様子見をするようなチームが格上の荒央、ましてや全国で勝てるわけがない。自分達が格下である以上、半端なことをしては勝てない。常に挑戦し、進化する。それが格上を倒すために必要なものだ。彼らは止まることをせず、突き進むこと

を選んだ。

「だいぶ荒くいくから覚悟しろよ!! スティングアロー!!」

開幕シュートという荒業。しかしこれは今日の試合の一番最初にやってきたこと。さすがに二回も同じ事をやるとは思えない。

「・・・なるほど、これはシュートではないねっ!」

案の定ゴールに向かうことはなかった。ボールは途中で威力が落ち、地面にぶつかる。そうなることがわかっていた双輝中学はぶつかって威力が失くなったボールをすぐに確保する。

「ミラートンネル!!」

「ラプターズステップ!!」

シュートが来ると思っただブロックしようと身構えていた城翔中学。僅かな隙から強引に突破され、都丸真と千刃の二人がゴール前まで来てしまった。

「ははっ!俺は将来エースになる男! エースたるもの状況判断は完璧にしなければならぬ! だから今は二人で決めてやろう! 一年後には俺一人で決められるようになってるだろうけどな!」

エースになれなかった男、都丸真。一年だから仕方ない? そんなもの言い訳だ。それに諦めた訳じゃない。今はまだ二番手だが、いつかチームで一番の男になるという野

心・闘争心を己の力に変え、足を振るう。

「去年の雪辱を晴らすためにここまで来た・・・その邪魔は誰にもさせない!!」

去年のフットボールフロンティア。決勝戦で負けてしまった。惜しかった？大差だろうが僅差だろうが負けは負け。ただ力が足りなかった。もうあんな思いはしたくない。最高のチームで、最高の舞台に立つと誓い、鋭く足を振るった。

「アンビシヤス・グレイブツツツ!!」

頂点に立ちたい・エースになりたい。二人の野心が合わさった強烈な一撃が前半終了間際にゴールを襲う。

「クロスプレーダーツツ!!」

決着はすぐについた。二人の強い思いを乗せた一撃は、東条の刃はいとも簡単に破き、散らせた。

「勝つのは俺達だ」

勝ち越したのも束の間、一瞬にして振り出しに戻されてしまった。

## V S 準決勝 双輝中学 終盤

前半終了ギリギリで同点にされてしまった。できれば点差をつけ、余裕をもって折り返したいところだったがやはり思い通りにはいかない。

皇帝ペンギン2号でもう一点を取りたいところだが、三人技という性質上隙は大きく手間がかかる。もう通用するとは思えない。威力は充分のため隙があれば話は別なのだが。

加えて守りを振りきるため全力疾走したこともあり疲労が溜まっている。途中から出場した麻宮はまだ余裕があるものの、獅子神と佐原は厳しい。特に最初から隙を見てシュートを打ち、初心者スタートの佐原はもう限界だった。

「いよいよ私達の出番というわけですね」

そうなると交代するしかない。今回が初出場の二人。相手のデータに一切かからないこの二人なら、相手のミスや隙を作ることが可能かもしれない。

問題があるとするなら、この二人にシュート技はない。つまりできるのはゴール前で運ぶこと。そこからは自力で点を取らなければならない。皇帝ペンギンが使えない今、残された勝ち筋は少ない。



仮に取れたとしても一点が限界。すなわちもう一失点すら許されない。勝たなければならぬ。もつと自分に力があれば、皆に迷惑をかけずに――

「――テン……キャプテン！」

自分を呼ぶ声で意識を戻す。また悪いところが出てしまっていたようだ。

「さつきから元気ないなあ？」

「あ、あー……ごめん。ちよつと疲れてさ……」

半分は嘘ではないが、半分は嘘である。たしかに疲れているが、体力的な疲れではない。あくまで精神的な疲弊である。

「おいおい、まだ後半もあるのにへばってんのか？」

「……無理そうなら交代した方がいいかもしれないね」

「いやそれは大丈夫だから!!」

ただでさえ迷惑をかけているのに、このまま交代といくわけにはいかない。チームに貢献するべく無理やり元気な姿を見せ、そのまま交代せずに残った。

――三日月――麻宮――

――赤城――寺國――

――盤上――

— 淀屋 — 伊喜 —

— 支倉 — 黒鉄 — 裁野 —

— 東条 —

後半戦のフォーメーション。最終的にかなり大幅なメンバー入れ換えを行った。五人のDF、そして中盤にもディフェンス技の使える盤上と堅い守りを有したフォーメーションでまとまる。いくら双輝中学といえど、この守りを突破するのは容易ではないだろう。

「キャプテン、これ・・・ホントに点取れる？」

「隙をつけば大丈夫・・・だと思う・・・」

同時にかなり受け身ともとれる姿勢。点を取られれば厳しい展開になるとはいえ、同点なのだからこちらも点を取らなければ勝てない。

加えて相手の守りを突破できる手段が乏しい。レオロアーを使える二人はベンチ。折角の皇帝ペンギンも使えない。たしかに激戦ということもあつて疲れは溜まつていた。交代自体は致し方ないのかもしれない。

だが守備寄りにした上で何か点を取れる策があるのかというところというわけでもない。恐れたのだ。二得点などできない。もし一点でも取られたら勝つことはできなくな

る。だから守りを固めた。

ただこちらはまだ新入りの二人という最後の策が残っている。これが不発に終わればもう何も無いが、逆にこの二人の不意打ちなら一点は取れる可能性はある。もうそこに賭けるしかなかった。

「みんなー！後半も頑張ろうな!!」

双輝のキャプテン、天城はチームを鼓舞していく。この後半戦で決勝にいけるかどうか決まるのだから気合は一層入る。

とにかく今は相手に攻められるのは絶対に避けなければならない。いくら守りを固めたとはいえ一点でも与えたら致命傷のこの状況。赤城はかなり緊張していた。

「全員！一回下がれ！」

「オツケー、ちよつと待ちやろ。．．．よし！ゴー！」

「寺國！後ろは任せい！気合い入れてくるんじやぞ！」

細かくパスを繋ぎ、隙を見て寺國へボールを出す。切り札をこんなにすぐ使ってしまったのはもつたないが、だからといって温存する余裕はもうない。

「ジグザクスパーク!!」

まずはジグザグにドリブルし、電撃をチャージ。ある程度進んだところで溜まった電気を解放し、相手を痺れさせ、早速相手を突破する。

「新入りのやつか！」

「なかなかやるじゃん！」

人が密集すればするほど動きが制限される。そんな混戦状態になっているところを細かいプレーで捌いていくのはさすがのテクニクといったところだろう。

「三日月先輩！あとは頼むっす！」

「アクロバットキープ!!」

残っている相手のDFも技を使って軽やかにかわし、FWへパス。三日月も勢いのままに突破し、残るは榊月の二人。

「こんな状況だし、もう出し惜しみしないでいいよねー!!」

「まっ、決勝戦のために温存……なんていつてる場合じゃなさそうだし、覚悟しなよ！」

二人は例によってモツプを取り出した。そう、一人ではなく二人が同時に取り出したのだ。

「ザ・スリーパー!!」

「うわわっ!?!」

取り出したモツプで相手を挟み込むようにフィールドを叩き割る。足場が崩れ、相手を吹き飛ばしボールを奪取した。

「まだあんなヤベー技を隠してたっすか!?!」

こちらが二人を温存していたように、相手も見せていない技があった。それを使ってくるということは向こうも余裕がないということなのだ、状況は最悪だった。

「イーグルグライド!!」

双輝中学は相手が崩れたのを見逃さない。ボールを奪い取るやいなや完璧な連携を見せつつ、ロングシュートで一気に畳み掛ける。

「思いどおりにはさせたらへんわ!!メガトンヘッド!!」

ここは淀屋のシュートブロックのみで止める。ロングシュートなら一人でも対応できる。

「今度こそ！ブレイズファルコン!!」

「シャイニングカット!!」

光壁の上をギリギリ越すことには成功。しかし完璧に避けられたわけではなく、少し当たってしまったバランスを崩してしまう。そんな隙を見逃す相手ではない。

「もーらいつ!」

「あっ!?!」

着地に少し手間取った間に距離を詰めてボールを奪う。見ての通り守りには余裕があるものの、攻めの方は上手くない。攻めの人数はもう少し多くすべきだったかもしれない。

「いくよ！マツハウインド！」

「コールドカッター！！」

「まだまだあ！！ウルバンキャノン！！」

「・・・ザ・ウォール！！」

「クロスブリーダー！！あ、あぶねえ・・・」

攻めが上手くいかないと、相手の攻めが苛烈になる。結局守りの方に負荷がかかってしまう。実際前半からずっとシユートを受け続けている東条の疲労はかなりのもの。

にも関わらず、後半戦はまだ一発もシユートを打てていない。早く一点を取り、余裕をもって対応できるようにしたい。

「さあ、ドンドンいくつすよ！！」

「さっきのやつか！油断すんなよ！」

それでもチャンスは訪れた。寺國の先程のプレーで警戒したのか、意識がそちらに向いた。これなら連携技を打つ余裕がある。

「へへっ、甘いっす！三日月先輩！」

「しまっ、そつちか！」

対策されている可能性は高いが、どうせ他にはない。今ある最大火力を出すしかなかった。

「キャプテン！久々にいくんヨ！」

「・・・ハイバウンドフレイム!!」

高所からの落とすことで大きく動かすことに成功したバウンドフレイム。前回の試合で唯一得点を奪うことができたこの技に賭ける。

対して黒桐は右へ左へ大きく動くボールを確認するように少しの間だけ目で追うと、ゆっくり拳を後ろに動かした。

「チエーンボルテックス!!」

後ろに下げた拳を突き出すと、黒い鎖が拳を中心に出現。鎖は渦のように広がり、ボールを包み込み込みシュートの勢いを止めた。

「そ、そんな・・・」

「悪いな。二回目なら対策の一つや二つは用意できる」

ボールが止められたこの瞬間をもって、今のチームの火力では双輝中学のゴールを突破できないことが確定してしまった。

シュートチエインをすれば希望はあるかもしれない。しかしそんな余裕があるだろうか。今回のシュートは不意を突いてようやく打てた一本。それを止められた。

こうなったらもう・・・勝ち目は無い。

「ザ・スイーパー!!」

「ダメっす! どうやっても突破できないっすー!」

悪い流れは止まらない。シュートどころか相手の守りを崩すことすらできなくなっていた。どれだけ頑張っても最後には榊月達の手によって防がれてしまう。仮にこの二人を突破できたとしてもキーパーの技を破る手段がない。

「えへへ、何回来てもここは通さないよ!」

「コラー! こっちは頑張ってるんだからさっさと点取ってこーい!」

幸いなのはまだ点を取られていないということ。しかしこのまま耐久したところで延長になったら疲弊しているこちらが不利なだけ。となると後半で点を取るしかないのだが、後は知つての通りである。

「やべえぞどうすんだこれ!?!」

いつもは楽観的な考え方の選手も多い城翔中学だが、さすがに今回ばかりは焦っていた。

「隙ありっ!」

「しまっ——」



たかが一点、されど一点。たった一点あれば希望が出てくるが、その一点がひたすらに遠い。

「どうしました？かなり疲れているみたいですが」

「そう、見えるかのう？いつもの筋トレよりはマシじゃ・・・！」

後半から入った選手も息があがっている。前半からの選手はもう走るのもキツそうだった。いくら止めても希望が見えてこないこともあり、身体も心も苦しい。

「・・・わりい、ミスった・・・！」

「大丈夫、まだ点を取られたわけやないで・・・！」

それでも諦めずに戦ってきたが、相手のシュートを止めきれなかった。コースは逸れてゴールは避けたものの、ラインを越えたため相手のボール。何も解決していない。

特に守りに重視しているメンバーは全員肩で息をしている。これ以上は耐えきれないだろう。

「へへっ、可愛いDFにああ言われたんじゃ、決めないわけにはいかねえよな！俺達が決めてやるよ!!」

「懐かしい。リオンのことを女の子と勘違いして玉碎していたな」

「エースストライカーさん、それまだ言います？」

相手は軽口を叩く余裕を見せるが、シュートはまったく軽くない。重厚な一発が放た



出せない者も己の肉体を使って応戦する。

だが止まらない。試合開始直後ならまだしも、ずっと戦い消耗した選手達の全力では大した力にはならなかった。

「レスブリーダーアアアアアッ!!」

それでも成果がないわけではない。仲間からの支援を受け、最後の壁である東条も残った力をフルに使い真つ向から対峙。

「負けるかアアアアアアアアアア!!」

雄叫びを上げて必死に踏ん張る。少しずつ刃にヒビが入るが、ボールの勢いも緩やかになっていき、止まりかける。これならいけると笑みを浮かべた。

「あつ——」

その油断がよくなかった。

割れた。刃が割れてしまった。二本の鉞の破片が宙を舞った。

それでも弾くことには成功した。気合いを入れて全力で守ったおかげでゴールは免れた。東条達は打ち勝ったのだ。

だが、D F達は先程のシュートブロックで力を使い果たした。東条も同じだった。それが何を意味するのか。

「あのシュートを止めるなんて、さすがだな——

——でも……この勝負は俺達の勝ちだ！」

弾いたボールを取るものが、誰もいなかった。

「クッソ、こんなところで……負けてたまるかよ……！」



をあげ、その身体を割り込ませた。

「なっ!?! キャプテン!?!」

「いつの間に!?!」

まさかこんな強引なやり方。そもそもここまで下がっていたことに気づいていなかったため、誰しもが驚いた。

「うわあっ!?!」

ギリギリだったこともあり、身体を使って止めにかかった赤城。反動でその場に倒れるが、そのおかげでボールは止まった。

「おい、キャプテン!! 大丈夫か!?!」

近くにいた東条が駆け寄る。強いシユートではなかったが、必殺技を直に受けているためダメージがないことはないだろう。

「俺はいいから・・・」

「モロにくらって大丈夫ってことはねえだろ。誰かと交代した方が——」

「それはダメだ!! 俺はまだ、何も・・・!!」

交代を拒む赤城。彼は自分のせいで負けそうになっていると強く思っていた。自分の粗末な考えのせいでチームがピンチに陥っている。

またチームに迷惑をかけてしまったと酷く後悔していた。だから自分はもうなっ

もいいと言わんばかりに身体を張って止めた。

これでもまだ迷惑をかけた分を返せていない。ここで交代して、またチームメイトに迷惑をかけるわけにはいかない・・・と、交代することを拒んだのだ。

「・・・よくわかんねえけど、わかった！おいみんな！キャプテンにばっかいい格好させんな！俺達も派手にいこうぜ!!」

心配ではあるが、これはチャンスでもある。相手の疲労もあつて攻め込んでいた双輝中学はラインを大きく上げてきている。この隙を逃すまいと東条はもう一度力を込めてボールを前に飛ばした。

「止めたとはいえ疲れは抜けてないな！甘いぜっ!」

「おやおや、もう一仕事ですか。仕方ない、ですな！ワンダートラップ!!」

疲労からか上手く投げられずボールを奪われるが、カバーに入った伊喜がボールを奪う。なんとか止める。彼女は後半から参戦。比較的疲れがない。

「さあ、最後に笑うのは私達ですよ!」

もうこうなつたらややくそだと言わんばかりにDFも前に出て攻め込む。キャプテンのガッツを見せられ、疲れている場合ではないと言わんばかりに走り出す。

「体力も残つてないのにそんなに飛ばしたら、延長戦もできずに不戦勝ですよ!!」

「たしかにそうやわ。でも、後輩があんな頑張つとるのにウチら先輩が気合い見せんで

どうすんねん!!」

後輩にだけ苦労は背負わせない。支倉は先輩の意地を見せるべく、冷気を纏わせたボールを空中に蹴り上げ、巨大な氷塊に閉じ込める。

「フロストクラッシュ!!」

氷塊を相手に向かって投げつけると、衝撃による揺れで相手の動きを阻害し、そこへ砕けた破片が飛び散り相手を吹き飛ばした。

「あー、もう今度こそ無理やわ。頼んだで!!」

「任されたんで、バリバリいくつす!ジグザクスパーク!!」

繋いで繋いで掴んだラストチャンス。ここを逃せば今度こそ勝ち目はなくなる。なんと少しでも突破しなければならぬ。

「本当にしつこいね!」

「頑張ったけどどこでおしまいだよ〜!」

「ザ・スィーパー!!」

立ちほだかるのは榎月姉弟。モップでグラウンドを叩き割り、地面を崩れる。

「・・・何事も経験してみるものだな」

「うそ〜!避けてる〜!?!」

しかしボルダリングの練習をしてきた麻宮。崩れる足場を上手く渡っていく。まさ



か役に立つとは思わなかった。

「帝瑠!!」

それでも突破しきれない。バランスを崩しながらも取られるより前に三日月へとパスを出す。受け取った三日月はキーパーとのリベンジマッチに臨む。

「おっしや!一発派手にぶちかましたれ!!」

「うん!任せて!!」

あの時は連携技でなんとか一点取った。しかしそう易々と連携技をさせてもらえずがない。ましてや止められた時のリスクもある。自分が決めるしかない。

だが、プレッシャーはない。むしろ楽しいと感じている。ギリギリの戦いでしか感じることのできないこの感覚、それを望んでいるのだ。

「・・・絶対に、決めるんヨ!!」

しかしバウンツフレイムでは決めることはできないだろう。だが策がないわけではなかった。

ヒントはあの練習。そう、麻宮も行ったボルダリング。正攻法で攻略することを諦めた彼女は、別の抜け道を見つけた。

「思いついちゃったんヨ」

どう考えてもこれは人間の成せるわざではない。しかし入江は言った。使っているのは足だけ、ボールを使い、光っている箇所のボタンを時間内に押す。

そう、足場があるとは言ったものの絶対に使えとは言っていない。何もボタンを押すのに自分が登る必要はないのだ。

彼女はバウンドフレイムの跳ねる性質を利用し、ボタンを押す作戦を決行した。

「よし、いっけー！！・・・あれ？」

ただし実際にやるのは簡単ではない。少し蹴り方を変えるだけで跳ね方は大きく変わる。自由にコントロールするのは簡単なことではない。

「うーん、おつかしいな・・・でも諦めないんヨ！」

そこから足場登るのはやめ、ボールをコントロールする練習に切り替えた。自分の思うようにボールを誘導する、完璧なコントロール技術。

なんとなくビジョンはでき、少しずつ完成に近づいている。少しずつの進歩ではあるものの、動かせるようになってきた。

「試合まであと少し・・・ちよつと間に合わないかも・・・？」

ただコントロールを意識するあまり、威力がない。バウンドフレイムの炎にすら届か

ない火。威力を補う方法がなければ簡単に取られてしまうだろう。

威力とボールを動かす方法、彼女は試行錯誤を続けた。

結局のところ練習でも完成はしなかった。それだけ難しいことに挑戦し、ぶつつけ本番を迎えた。成功する確率は低い。それでもやるしかない。だって他に方法はないのだから。

不安な感情もないわけではなかったが、上等だと言わんばかりに笑みを浮かべた。こんな楽しいことは他にない。できるとわかっていることをやったって仕方がない。

「ナハハハ・やつぱりこうじゃなくっちゃー!」

いたずらっぽい笑みを浮かべ、手の平を合わせるとパンツと乾いた音が響く。すると周りに青白く光る火の玉が無数に現れ、その場でメラメラと燃え続ける。

その内の一つに向けてシュート。するとボールは火を吸収し、進行方向を別の火の玉の方へ変えていく。まるでボールが生きているかのような自由な動き、三日月は完全コントロールしていた。

「これが、うちの新しい技——

——狐火バレットツツ!!」

全ての火の玉を吸収した後したボールは大きな炎を揺らす。小さな火でも一つ一つが合わさることで強力な炎となり、ゴールへと向かっていく。

「チエーンボルテックス!!」

前とは圧倒的に火力が違う。直接対峙せずとも外からでも差がわかった。鎖がギリギリと音を立て、ヒビ割れていく。

「ぐ……ぐぐ……っ!」

双輝中学の思いは一つ。負けたくない。何か手はないか考える。考えても出てこない。負けたくはないが、認めなければならない。どうやらこの試合の勝敗は……決したようだ。

「……なあ、千刃」

天城は千刃に語りかける。千刃は何も言わず下を向いている。だが、思いは同じだった。

「勝ちたかったな……」

「・・・ああ」

静かに目を閉じる。そのすぐあとに均衡は破れ、ボールはゴールに吸い込まれる。城翔中学の得点、そしてホイッスルが鳴り響く。

城翔中学が決勝進出を決めた瞬間だった。